岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第111集

広沖遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県文化振興事業団
埋蔵文化財センター

広沖遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

序

本県は縄文時代の遺跡を中心として、県内各地に数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しており、昭和60年度末の岩手県教育委員会のまとめでは7,000箇所を越えております。これら先人たちの残した文化財を保護し、保存していくことは我々県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本県は広大な面積を有し、その大部分が山地であります。現代生活を豊かにし、快適な生活をおくるための地域開発、特にもその基幹となる道路など交通網整備もまた県民の切実な願いであります。このように、保護・保存と開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策が今日的課題となってきております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は、東北縦貫自動車道八戸線建設に関連して、昭和60年度に発掘調査した二戸郡浄法寺町広沖遺跡の調査結果をまとめたものであります。平安時代の大集落である飛鳥台地Ⅰ遺跡と同一段丘上にあり、沢によって開析された北側に対峙しており、平安時代の住居跡や縄文時代の住居跡・陥し穴状遺構などが発見されました。平安時代の住居跡には鍛冶などの工房跡と思われるものがあり、当地方の歴史解明の貴重な資料となるものと考えられます。

この報告書が研究者のみならず広く活用され、埋蔵文化財に対する理解や保護の一助となれば幸いです。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にあたって御援助・御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局一戸工事事務所、浄法寺町、浄法寺町教育委員会をはじめ関係各位に感謝申しあげるとともに、今後の御指導、御協力をお願いいたします。

昭和61年７月

財団法人　岩手県文化振興事業団

理事長　中村　　直

例　　言

1．本報告書は、岩手県二戸郡浄法寺町大字御山字広沖43－2に所在する広沖遺跡の発掘調査結果を収録したものである。

2．本遺跡の調査は、東北縦貫自動車道八戸線建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は、日本道路公団仙台建設局と岩手県教育委員会事務局文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査は、昭和60年4月15日に開始され、同年6月19日に終了した。室内の整理作業は、昭和60年11月1日から昭和61年3月31日まで行った。

4．発掘調査と報告書の作成は、文化財専門調査員の岩渕久と田村壮一が担当した。

5．鑑定は、次の方々・機関に依頼した。

石質鑑定　　佐藤地質工学研究所佐藤二郎氏

炭化材樹種鑑定　岩手県木炭協会早坂松次郎氏

鉄製遺物の分析　岩手県立博物館、岩手県医薬品衛生検査センター

6．本報告書の執筆分担は、次のとおりである。

Ⅰ．調査に至る経過……近藤宗光

Ⅱ．調査方法と整理方法……岩渕　久

Ⅲ．遺跡の立地と環境……岩渕　久

Ⅳ．検出遺構と遺物　1－〔2〕－(1)　2－〔2〕－(1)……田村壮一

その他……岩渕　久

Ⅴ．まとめ　2－(1)……田村壮一

その他……岩渕　久

7．発掘調査は、佐藤道治氏をはじめとする地元の方々の御協力を得た。また、室内整理作業には、臨時職員の協力を得た。

8．本報告書の編集、校正は岩渕久と田村壮一が行った。

9．調査によって得られた資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

本　文　目　次

序
例言
Ⅰ．調査に至る経過 …… 3
Ⅱ．調査方法と整理方法 …… 4
Ⅲ．遺跡の立地と環境 …… 7
Ⅳ．検出遺構と遺物 …… 14
1．縄文時代
〔1〕遺構と遺構内出土遺物 …… 14
(1)　住居址 …… 15
(2)　ピット …… 17
(3)　陥し穴状遺構 …… 41
〔2〕出土遺物 …… 47
(1)　土器 …… 47
(2)　土製品 …… 54
(3)　石器 …… 55
2．平安時代
〔1〕遺構と遺構内出土遺物 …… 57
(1)　住居址 …… 57
(2)　ピット …… 66
〔2〕出土遺物 …… 69
(1)　土器 …… 69
(2)　石器 …… 71
(3)　鉄製品・鉄滓等 …… 71
(4)　その他 …… 71
3．近世・近現代
〔1〕遺構と遺構内出土遺物 …… 72
(1)　土取穴 …… 72
(2)　炭窯 …… 74
〔2〕遺構外出土遺物 …… 75
出土遺物観察一覧表 ……103
Ⅴ．まとめ ……112
1．遺構 ……112
2．遺物 ……114

図　版　目　次

第1図　岩手県全図 …… 1
第2図　遺跡位置図 …… 2
第3図　グリット配置図 …… 6
第4図　地形図 …… 8
第5図　土層断面図 …… 11
第6図　遺構配置図 …… 13
第7図　AⅢ－1住居址平面 …… 15
第8図　AⅢ－1住居址断面 …… 16
第9図　AⅣ－2住居址 …… 17
第10図　AⅡ－1ピット …… 17
第11図　AⅢ－1ピット …… 18
第12図　AⅢ－2ピット …… 18
第13図　AⅢ－3ピット …… 19
第14図　AⅢ－4ピット …… 19
第15図　AⅢ－5ピット …… 20
第16図　AⅢ－6ピット …… 20
第17図　AⅢ－7ピット …… 21
第18図　AⅢ－8ピット …… 21

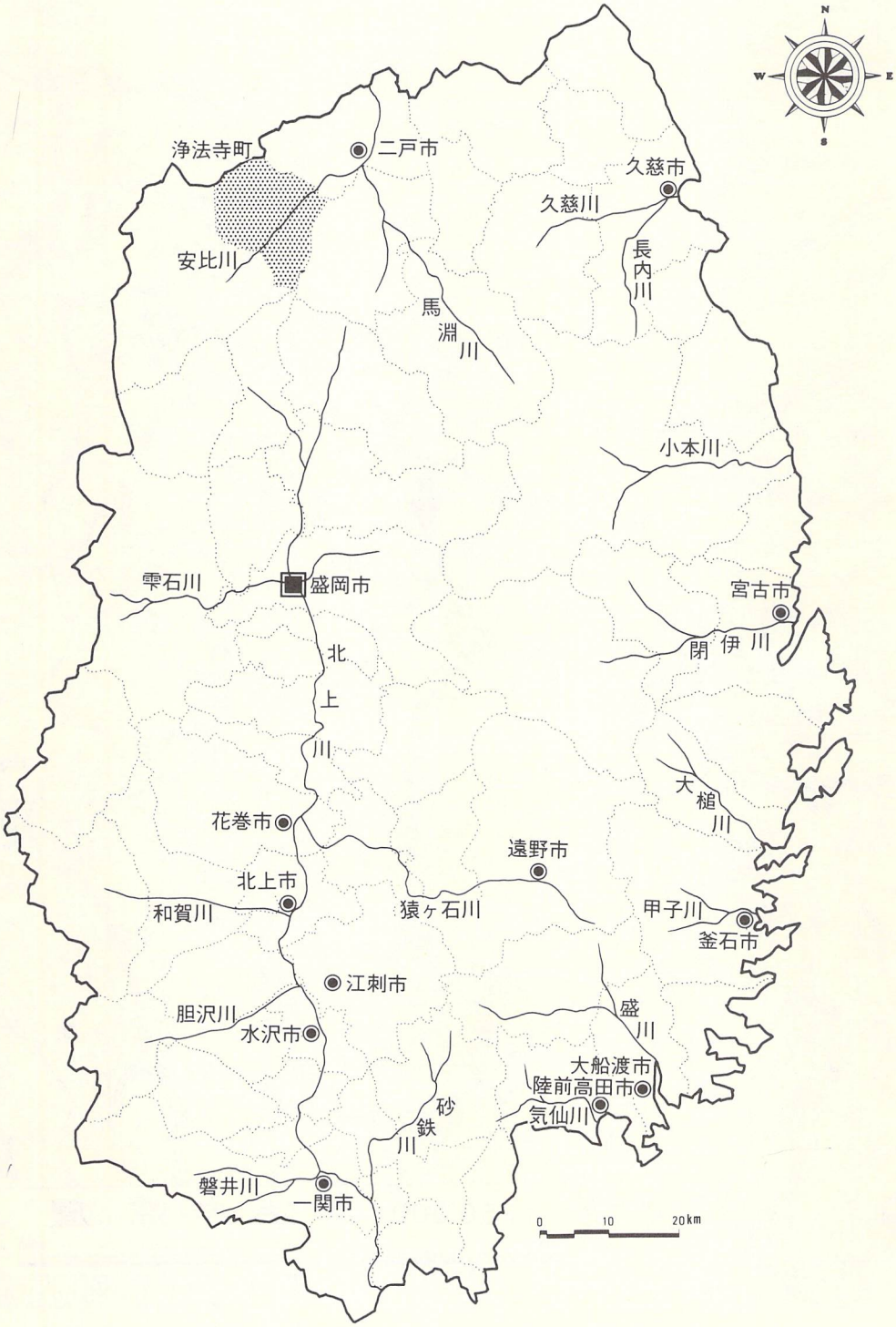
第19図　AIII－9ピット …… 22
第20図　AIII－10ピット …… 22
第21図　AIII－11ピット …… 23
第22図　AIII－12ピット …… 24
第23図　AIII－13ピット …… 24
第24図　AIII－14ピット …… 25
第25図　AIII－15ピット …… 25
第26図　AIII－16ピット …… 26
第27図　AIII－17ピット …… 26
第28図　AIV－1ピット …… 27
第29図　AIV－2ピット …… 27
第30図　AIV－3ピット …… 28
第31図　AIV－4ピット …… 28
第32図　AIV－7ピット …… 29
第33図　AIV－8ピット …… 29
第34図　BII－1ピット …… 30
第35図　BII－2ピット …… 30
第36図　BII－3ピット …… 31
第37図　BII－4ピット …… 31
第38図　BII－5ピット …… 32
第39図　BIII－1ピット …… 32
第40図　BIII－2ピット …… 33
第41図　BIII－3ピット …… 33
第42図　BIII－4ピット …… 34
第43図　BIV－4ピット …… 34
第44図　BIV－5ピット …… 35
第45図　BIV－6ピット …… 35
第46図　BIV－7ピット …… 36
第47図　BIV－8ピット …… 36
第48図　BIV－9ピット …… 37
第49図　BIV－10ピット …… 37
第50図　BIV－11ピット …… 38
第51図　BIV－12ピット …… 38
第52図　BIV－13ピット …… 39
第53図　BIV－14ピット …… 39
第54図　BIV－15ピット …… 40
第55図　BIV－16ピット …… 40
第56図　BV－1ピット …… 41
第57図　AII－1陥し穴状遺構 …… 41
第58図　AII－2陥し穴状遺構 …… 42
第59図　AIII－1陥し穴状遺構 …… 43
第60図　BII－1陥し穴状遺構 …… 44
第61図　BII－2陥し穴状遺構 …… 45
第62図　BII－3陥し穴状遺構 …… 46
第63図　BIII－1陥し穴状遺構平面 …… 46
第64図　BIII－1陥し穴状遺構断面 …… 47
第65図　AIV－1住居址平面 …… 57
第66図　AIV－1住居址断面 …… 58
第67図　BIII－1住居址 …… 60
第68図　BIII－2住居址平面 …… 61
第69図　BIII－2住居址断面 …… 62
第70図　BIV－1住居址 …… 64
第71図　BIV－1住居址断面 …… 65
第72図　BIV－1住居址断面 …… 66
第73図　AIV－5ピット …… 66
第74図　AIV－6ピット …… 67
第75図　BIV－1ピット …… 67
第76図　BIV－3ピット …… 68
第77図　AIV－1土取穴 …… 72
第78図　AV－1・AV－2土取穴 …… 73
第79図　炭窯 …… 74
第80図　縄文土器(1) …… 76
第81図　縄文土器(2) …… 77
第82図　縄文土器(3) …… 78

第83図　縄文土器(4) …… 79
第84図　縄文土器(5) …… 80
第85図　縄文土器(6) …… 81
第86図　縄文土器(7) …… 82
第87図　縄文土器(8) …… 83
第88図　縄文土器(9) …… 84
第89図　縄文土器(10) …… 85
第90図　縄文土器(11) …… 86
第91図　縄文土器(12) …… 87
第92図　縄文土器(13) …… 88
第93図　縄文土器(14) …… 89
第94図　石器(1) …… 90
第95図　石器(2) …… 91
第96図　石器(3) …… 92
第97図　石器(4) …… 93
第98図　石器(5) …… 94
第99図　石器(6) …… 95
第100図　石器(7) …… 96
第101図　石器(8) …… 97
第102図　平安時代の土器(1) …… 98
第103図　平安時代の土器(2) …… 99
第104図　平安時代の土器(3) ……100
第105図　平安時代の土器(4) ……101
第106図　土製品・金属製品 ……102

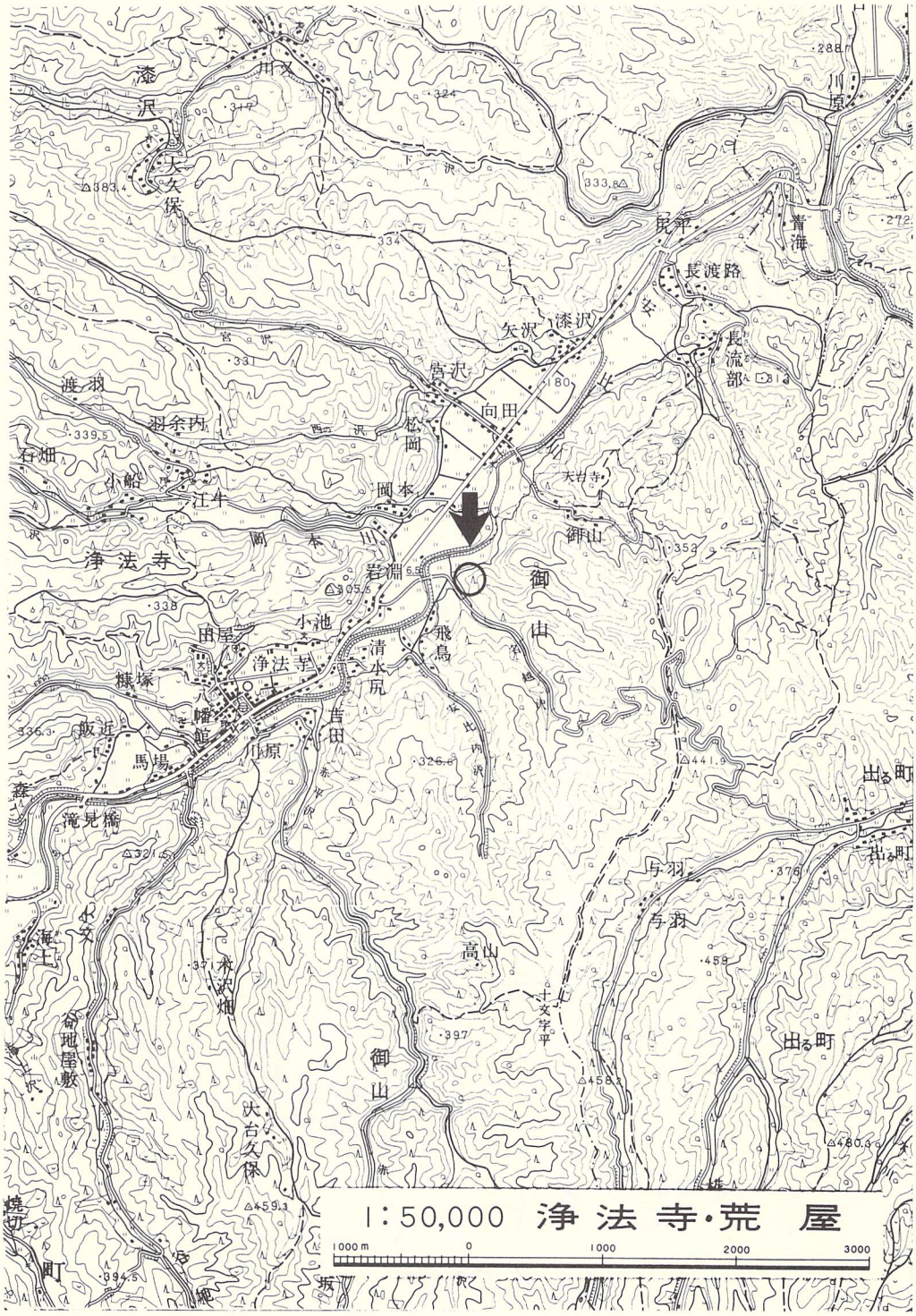
写真図版目次

写真図版 1　遺跡空中写真 ……121
写真図版 2　調査状況 ……122
写真図版 3　土層断面 ……123
写真図版 4　AIII－1住居址 ……124
写真図版 5　AIV－2住居址・ピット(1) ……125
写真図版 6　ピット(2) ……126
写真図版 7　ピット(3) ……127
写真図版 8　ピット(4) ……128
写真図版 9　ピット(5) ……129
写真図版10　ピット(6) ……130
写真図版11　ピット(7) ……131
写真図版12　ピット(8) ……132
写真図版13　ピット(9) ……133
写真図版14　ピット(10) ……134
写真図版15　ピット(11) ……135
写真図版16　ピット(12) ……136
写真図版17　ピット(13) ……137
写真図版18　ピット(14) ……138
写真図版19　ピット(15) ……139
写真図版20　ピット(16) ……140
写真図版21　陥し穴状遺構(1) ……141
写真図版22　陥し穴状遺構(2) ……142
写真図版23　陥し穴状遺構(3) ……143
写真図版24　AIV－1住居址(1) ……144
写真図版25　AIV－1住居址(2) ……145
写真図版26　BIII－1住居址・BIII－2住居址(1) ……146
写真図版27　BIII－2住居址(2) ……147
写真図版28　BIV－1住居址(1) ……148
写真図版29　BIV－1住居址(2) ……149
写真図版30　平安時代ピット(1) ……150
写真図版31　平安時代ピット(2)土取穴(1) ……151
写真図版32　土取穴(2)・炭窯 ……152
写真図版33　縄文土器(1) ……153

写真図版34　縄文土器(2) ……154
写真図版35　縄文土器(3) ……155
写真図版36　縄文土器(4) ……156
写真図版37　縄文土器(5) ……157
写真図版38　縄文土器(6) ……158
写真図版39　縄文土器(7) ……159
写真図版40　縄文土器(8) ……160
写真図版41　縄文土器(9) ……161
写真図版42　縄文土器(10) ……162
写真図版43　縄文土器(11) ……163
写真図版44　縄文土器(12) ……164
写真図版45　縄文土器(13) ……165
写真図版46　縄文土器(14) ……166
写真図版47　石器(1) ……167
写真図版48　石器(2) ……168
写真図版49　石器(3) ……169
写真図版50　石器(4) ……170
写真図版51　石器(5) ……171
写真図版52　平安時代の土器(1) ……172
写真図版53　平安時代の土器(2) ……173
写真図版54　平安時代の土器(3) ……174
写真図版55　平安時代の土器(4) ……175
写真図版56　土製品・金属製品 ……176


N
W
E
S
浄法寺町
二戸市
久慈市
久慈川
長内川
安比川
馬淵川
小本川
雫石川
盛岡市
宮古市
閉伊川
北上川
大槌川
花巻市
遠野市
北上市
和賀川
猿ヶ石川
甲子川
釜石市
江刺市
胆沢川
水沢市
盛川
大船渡市
陸前高田市
砂鉄川
気仙川
磐井川
一関市
0
10
20km

第１図　岩手県全図


漆沢
大久保
川原
民部
青海
長渡路
安
長流部
矢沢
漆沢
宮沢
向田
松岡
渡羽
羽余内
石畑
小船
江牛
岡本
天台寺
御山
浄法寺
岩淵
御山
小池
飛鳥
田屋
浄法寺
清水尻
棟塚
八幡館
吉田
飯近
馬場
川原
滝見橋
出る町
出る町
与羽
与羽
高山
小文字平
御山
出る町
奇瑠屋敷
大台久保
焼切
町
1:50,000 浄法寺・荒屋
1000m 0 1000 2000 3000

第2図　遺跡位置図

I　調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、二戸郡安代町で青森線と分岐し、青森県八戸市に至る約68kmの高速自動車道であり、本県にかかるのは第7次施行命令区間約27.6kmと第8次施行命令区間約26.7kmである。このうち第7次施行命令区間に所在する遺跡の発掘調査は昭和58年で終了している。

昭和53年11月第8次施行命令が出された。二戸郡安代町、浄法寺町、二戸市、一戸町を通る路線である。岩手県教育委員会はその区間の埋蔵文化財包蔵地について日本道路公団と協議を重ねた。そのなかで、浄法寺町には天台宗の古刹である天台寺が所在し、天台寺緑地保全区域となっていることから、路線はこの地を避けて設定されることとなった。

県教育委員会事務局文化課は、昭和54年10月に日本道路公団の協力を得て、実施計画路線沿い500m幅で埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行い、その結果をもとに更に両者で協議を重ねた。昭和56年5月には路線発表があり、文化課は路線敷地内における埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施し、約30遺跡を確認した。昭和57年には安代町内の5遺跡について発掘調査範囲確認調査を行っている。

昭和58年度事業として、安代町内4遺跡の発掘調査が当センターに委託され、湯の沢III遺跡、繋沢II遺跡、石神II遺跡の発掘調査と関沢口遺跡の粗掘遺構確認調査を行った。文化課はこの年度に浄法寺町内12遺跡の発掘調査範囲確認調査を行っている。

昭和59年度には、安代町の2遺跡、関沢口遺跡、水神遺跡、浄法寺町の9遺跡、柿ノ木平III遺跡、五庵I遺跡、五庵II遺跡、海上I遺跡、海上II遺跡、大久保I遺跡、沼久保遺跡、桂平遺跡、飛鳥台地I遺跡の発掘調査が委託された。このうち、関沢口遺跡は58年度の継続調査であり、沼久保、桂平、飛鳥台地I遺跡は工事用道路分の調査である。文化課はこの年度に二戸市、一戸町所在それぞれ6遺跡の発掘調査範囲確認調査を行っている。また、その際新たに発見された浄法寺町内2遺跡、五庵III遺跡、広沖遺跡の確認も行っている。その結果縦貫道関連の浄法寺町内の遺跡は14箇所となった。

昭和60年度には、浄法寺町の8遺跡、田余内I遺跡、田余内II遺跡、五庵III遺跡、沼久保遺跡、桂平遺跡、安比内I遺跡、飛鳥台地I遺跡、広沖遺跡及び二戸市の2遺跡、西久保遺跡、大久保遺跡、一戸町の3遺跡、堀切遺跡、竹林遺跡、親久保III遺跡の発掘調査が委託された。このうち沼久保、桂平、飛鳥台地I遺跡は59年度の継続調査であり、親久保III遺跡は粗掘遺構確認調査である。また広沖遺跡は本報告遺跡である。

II　調査方法と整理方法

1．調査方法

〈グリット設定〉

調査区は道路本線部分と浄法寺インターチェンジの下り引込み線部分にあたる。基準点は引込み線の中心杭２点を使用した。基準点の成果は次のとおりである。

基準点１、Ｄ３＋60（Ｘ＝21002．8675　Ｙ＝29279．5503）

基準点２、Ｄ３＋40（Ｘ＝21022．1091　Ｙ＝29285．0058）

基準点１と基準点２とを結んだ直線と平行する東側５ｍを通る直線を東西の基線とし、これに直交し基準点１を通る直線を南北の基線として設定した。

この基線から四方に20ｍ×20ｍ単位で調査区を大区画した。区画の名称は、東西方向に西からＡ～Ｃを、南北方向に北からⅠ～Ⅴを付してＡⅡ区、ＢⅡ区のように表した。また遺物取り上げのため、大区画に５ｍ×５ｍの小区画を設け、北西隅からａ～ｐを付してＡⅢｇ、ＢⅢｍのように表した。

〈粗掘・遺構検出〉

２本の基線沿いに土層観察用ベルトを残しながら、手掘りで層位ごとに土層を除去し遺構の検出に努めた。遺物はそのつど層位を確認しグリッド名を付して取り上げた。検出された遺構の名称は、検出大区画名と遺構の種類、検出順にＡⅣ－１ピット、ＡⅣ－２ピットのように表した。

〈精　　査〉

住居址は４分法、その他は２分法を原則として精査した。遺物は必要に応じて写真撮影や実測をした後取り上げた。

〈実　　測〉

平面形は５ｍグリッドによる簡易遣り方を設定し実測した。実測図の縮尺は20分の１で統一した。

〈写真撮影〉

６×７㎝判カメラ（白黒用）１台、35㎜判カメラ（白黒用、カラースライド用）２台を使用した。遺跡全景撮影は空中写真によった。

2．整理方法

整理作業は遺構図面のトレースと遺物の仕分け・復元を並行して進め、その後に遺物の実測、拓本、トレース、図版作成を順次行った。これらの作業は、調査員の指示・点検のもとに室内

整理協力員が担当した。

〈図　　面〉

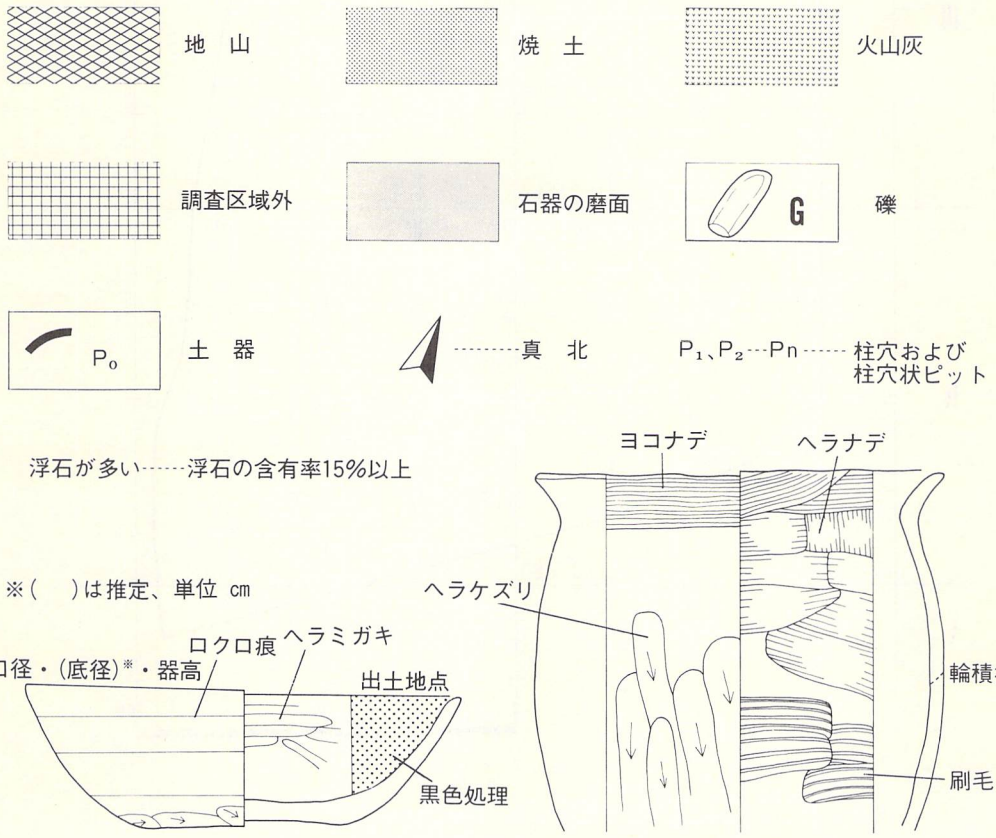
野外調査で作成した遺構図面は、遺構別に合成・分離した後、種類別に分類し番号を付して収納した。

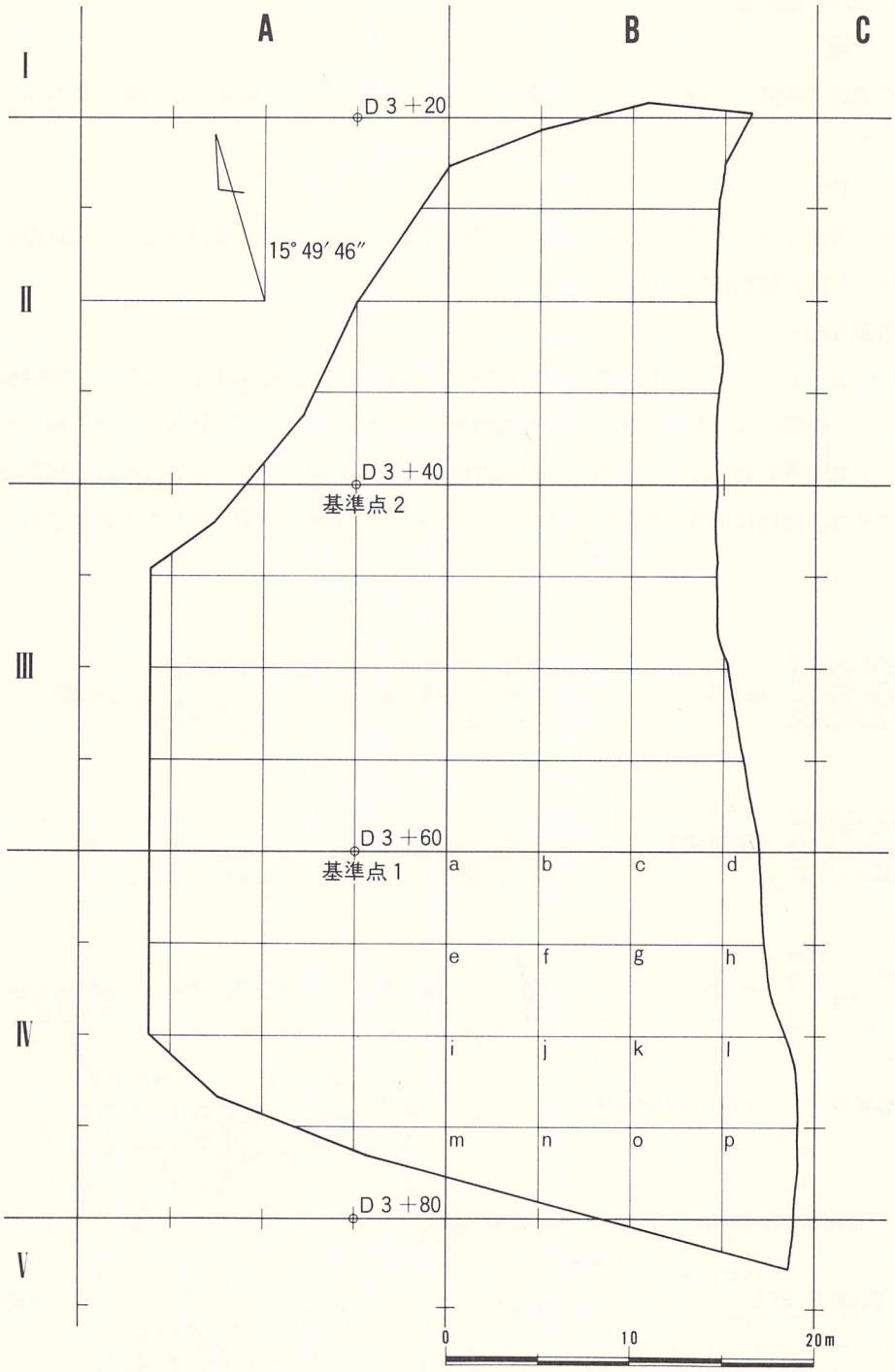
〈遺　　物〉

現地で水洗とラベル記入をほぼ終了し、室内では仕分け、登録、接合・復元、写真撮影、実測を行った後、種類別に収納箱に整理した。

〈報告書作成〉

遺構図面のトレース、遺物実測図のトレース、拓本作成、図版作成を順次行い、原稿執筆を併行した。遺構図版の縮尺は40分の１を原則とし、遺物図版についてはそれぞれに縮尺を掲載した。写真図版の縮尺は不定である。遺物の番号は通し番号を使用し、実測図版と写真図版を一致させた。図版に使用した記号・スクリーントーン等は次の用例に示したとおりである。




A
B
C
Ⅰ
Ⅱ
Ⅲ
Ⅳ
Ⅴ
D 3 ＋20
15° 49′ 46″
D 3 ＋40
基準点 2
D 3 ＋60
基準点 1
D 3 ＋80
a
b
c
d
e
f
g
h
i
j
k
l
m
n
o
p
0
10
20m

第 3 図　グリッド配置図

III　遺跡の立地と環境

1．位　置

遺跡は、浄法寺町の東端部にあたり、町役場から東北東1.8km、県道一戸・浄法寺線を安比川から250mほど東進した地点の北東側に位置する。

遺跡が所在する浄法寺町は、岩手県北部に位置し、北東に向かって流れる安比川沿いの低地と安比川を挟んで西部の山地および東部の山地性丘陵一帯に広がる面積183.24km²の町である。その北縁は青森県田子町に接し、北東縁は二戸市、南東縁は一戸町、西縁は安代町と接している。

2．地　形

浄法寺町は西部の山地と東部の丘陵地とに大別され、その間に低地があるものの町域のほとんどはこの山地と丘陵によって占められている。

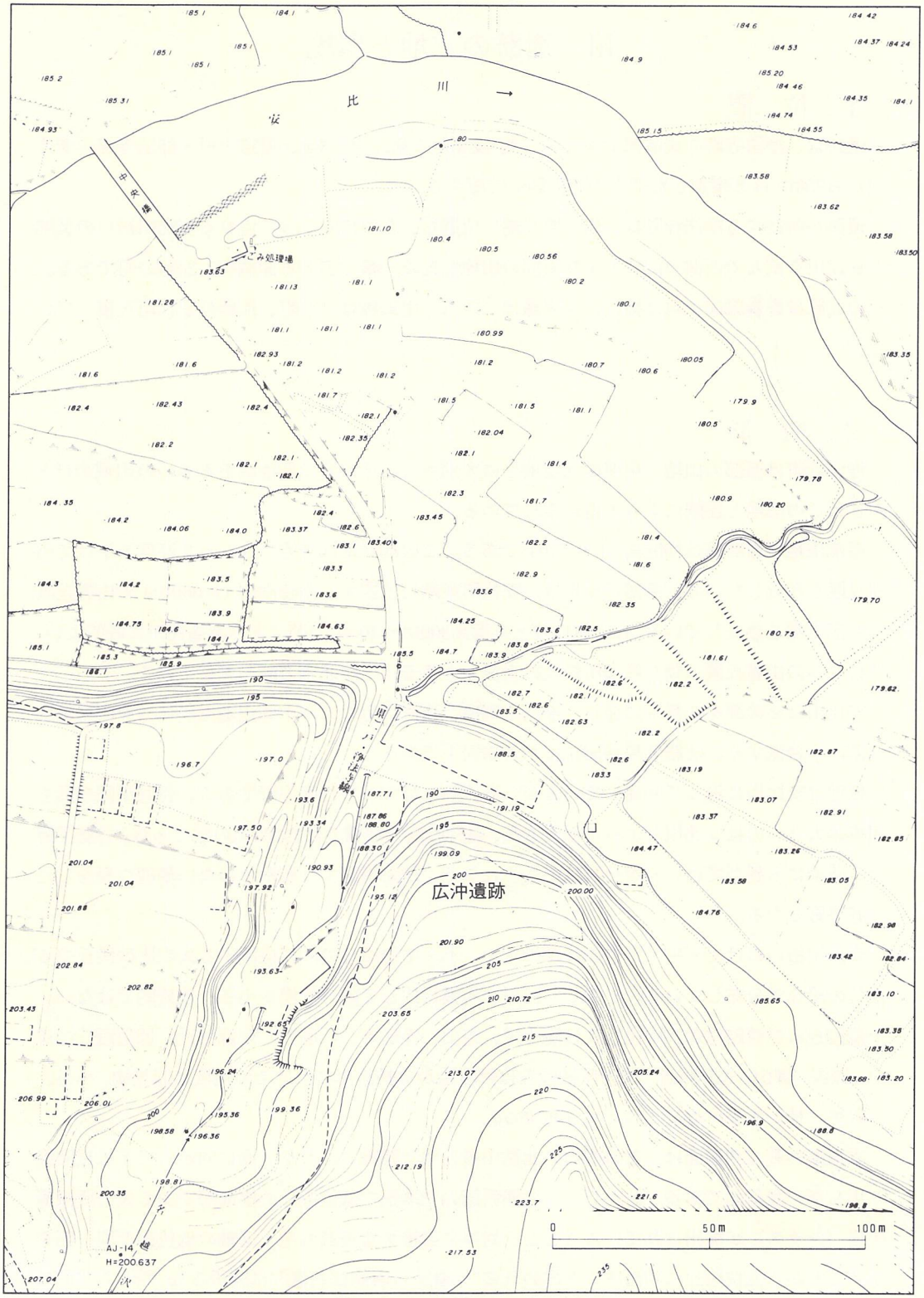
西部山地の最高峰は稲庭岳（1,078m）である。この稲庭岳は東方に向かって高度を下げて山麓丘陵を形成している。東部丘陵地は、安代町東端に位置する七時雨山（1,060m）の山麓丘陵の北部末端を形成している。両山麓丘陵とも標高300m～400mの間にあり定高性が比較的よい。この二つの山麓丘陵の間を馬淵川最大の支流である安比川が北東方向へ流れている。

安比川はその源を八幡平に発し、安代町荒屋、浄法寺町、二戸市御辺地を経て一戸町鳥越で馬淵川と合流する。流路延長約58kmにおよぶ河川である。

低地は安比川に沿って発達しているが、形態的にはすべて谷底平野である。谷底平野で最も規模の大きいのは安比川によって形成され、遺跡の西方地域では約700mの幅である。谷底平野は丘陵地にも延びてはいるがそれほど長くはなく、遺跡周辺では枝別れのない単純な形をした谷底平野となる。

安比川沿いには上・中・下位の砂礫段丘と、上・中位段丘の間に位置する火山灰砂段丘の4段位の段丘が分布している。しかし、河川の規模に比して段丘規模が小さく連続的ではない。上位段丘は長渡路付近、中位段丘は清水尻、吉田、浄法寺、八幡館、大森付近、低位段丘は尻平、漆沢、御山、飛鳥付近、火山灰砂段丘は長渡路から長流部にかけての地域と滝見橋、小泉、下谷地、柿ノ木平付近にそれぞれ分布する。

本遺跡の載る地形面は、七時雨山の北側山麓丘陵北西縁にあたり、西に向かって下る丘陵張り出し部の緩斜面である。しかし、この緩斜面の先端部で低位段丘の構成層である火山灰流凝灰岩（シラス）が検出されていることと、対岸に隣接する飛鳥台地Ⅰ遺跡の低位面と同一面を示すことから低位段丘に相当すると思われる[注1]。遺跡の南側は名越沢に開析され、西から北側に



第４図　遺跡周辺地形図

かけて沖積低地が広がる。遺跡周囲には崖錐が分布する。遺跡の標高は198m～204mで沖積面との比高は約20mである。遺跡の現状は山林となっているが、それ以前は北東端を除き畑地として利用されている。そのため東端山際と西端部が削平を受けている。

3．地　質

遺跡中央部に縦横に残した土層観察用ベルトと小規模の深掘りとによる表層地質はおよそ以下のとおりである。

遺構の時期決定に有力な灰白色火山灰（十和田ａ降下火山灰）、細粒の黄褐色火山灰（苫小牧火山灰）が遺構あるいは凹地等に観察される。遺構検出面は、削平の影響もあって一様ではないが、中掫浮石層上面（平安時代・縄文時代後期）と黒褐色土～黄褐色土層面（縄文時代前期）とに区分される。

遺構に関る基本土層は次の６層に区分される。

Ⅰ層　黒褐色土（10ＹＲ2/2）　層厚20cm～30cm、最大45cm。表土（耕作土）で植生根が多い。粘性なくやわらかい。Ⅰ´は層厚20cm～30cmの流れて堆積したものであり灰色に近い。遺跡北端部の表土はすべてこれにあたる。

Ⅱ層　黒色土（10ＹＲ 1.7/1）　最大層厚35cm。粘性なくやわらかい。遺跡北端と中央部にのみ堆積する。

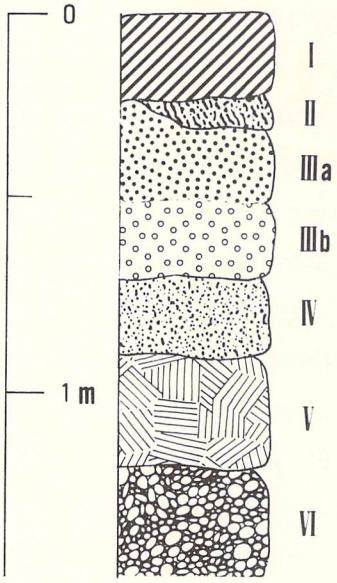
Ⅲ$_a$層　暗褐色土（10ＹＲ3/4）　層厚20cm。粘性なく柔かいところとか固い部分がある。中掫浮石（アワ砂）をまばらに含む。

Ⅲ$_b$層　にぶい黄橙色（10ＹＲ6/4）～浅黄色（2.5Ｙ7/4）層厚20cm～30cm。中掫浮石層。全体にかたく、固結している部分もある。上位に暗褐色土が混入するが区分せず同一層とした。遺跡北端にはみられない。

Ⅳ層　黒褐色土（10ＹＲ2/2）　層厚20cm～30cm。白色化した浮石を多く含む。粘性がありかたい。遺跡全域にみられる。

Ⅴ層　暗褐色土（10ＹＲ3/3）～黒褐色土（10ＹＲ2/3）層厚20cm～30cm。粘性がありかたい。下位のⅥ層の腐植土。ａはやや明るく、ｂは黒味が強い。ａ、ｂ同時に分布するのは斜面上方側

土層模式図



に限られる。ほとんどの地区はaであるが褐色土として表れている。

VI層　明褐色土（7.5Y R5/8）～黄褐色土（10Y R5/8）　粘性がありかたい。八戸火山灰層相当。この層の上部に赤褐色浮石の薄層が分布する部分がある。下位には黄灰色～灰白色の粘土質土、さらに下位には砂質土が分布する。南北崖寄りには礫が混じる灰白色土が分布する。

遺跡を覆う層としては認められないが、II層とIII層の間に位置して遺構の上面ないしは埋土中、遺跡北端部に灰白色火山灰が分布する。

なお、道路公団のボーリング調査による基盤地質では、上位にローム、下位に砂岩が分布している。

4．周辺の遺跡

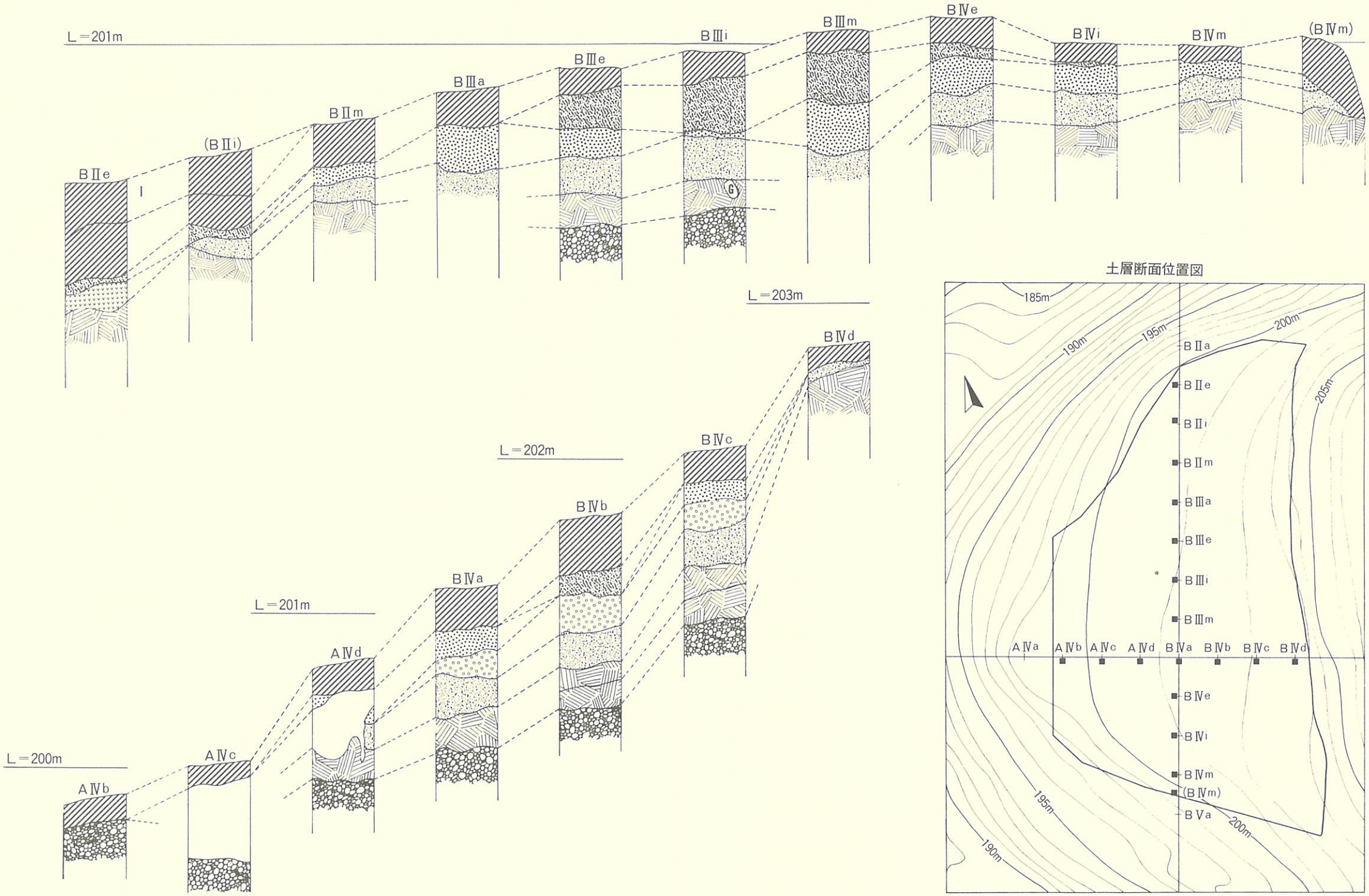
浄法寺町内における遺跡は、岩手県教育委員会文化課の遺跡台帳によれば72箇所であり、これに本遺跡と五庵III遺跡を加えて74箇所となる。時期は縄文時代・晩期と平安時代が半数以上を占め、しかも、複合する遺跡が多い。遺跡の立地をみると、大部分は安比川右岸の段丘上に分布している。これは主として自動車道関連の遺跡分布調査が実施されたことによるものである。

59年～60年度にわたる発掘調査の結果、多くの遺構や遺物が検出されている。縄文時代早期の遺物は田余内Ｉ遺跡など７遺跡で出土し、特に飛鳥台地Ｉ遺跡では住居址が確認された。縄文時代前期では飛鳥台地Ｉ遺跡など４遺跡で合わせて９棟の住居址が確認された。縄文時代中期の遺物は出土しているが住居址はない。縄文後期の遺物はほとんどの遺跡で出土し、住居址は沼久保遺跡など５遺跡で確認された。縄文時代晩期では、住居址が五庵Ｉなど３遺跡で合わせて４棟と少ない。弥生時代の遺物も少ないが７遺跡で出土し、住居址は沼久保遺跡の１棟のみである。

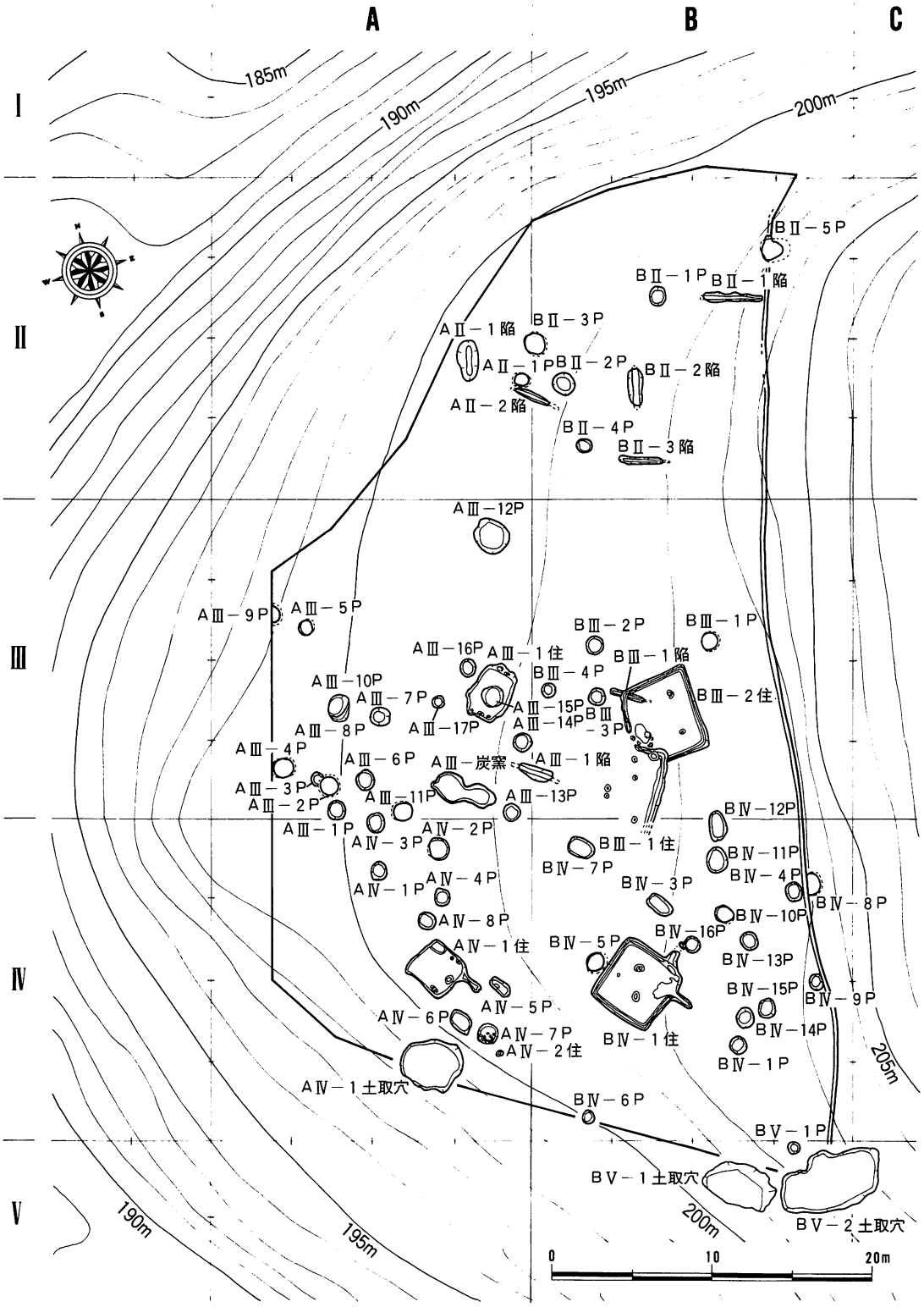
縄文時代に関ると見られる陥し穴状遺構は、柿ノ木平III、五庵Ｉ、安比内Ｉ、沼久保などの遺跡で多く検出された。また縄文時代から平安時代にまでわたると見られる土坑も確認され、中でも飛鳥台地Ｉ、五庵II、桂平などの遺跡に多い。

平安時代の遺構や遺物は、各遺跡で検出され、特に飛鳥台地Ｉ、五庵Ｉ、桂平などの遺跡で多く確認された。住居址の構造や占地、工房址、土坑、土器の編年など、当地方における平安時代の集落のあり方を知る良好な資料となっている。

中近世の遺構には、五庵IIや飛鳥台地Ｉ遺跡で掘立柱建物や竪穴住居址が、また五庵Ｉ、五庵III、飛鳥台地Ｉ遺跡では墓壙が検出されている。浄法寺町の漆器生産に関わる遺物が飛鳥台地Ｉ、五庵II遺跡で出土し、注目される。以上の自動車道関連遺跡以外にも、天台寺などの発掘調査が町教育委員会によって進められている。


L＝201m
BⅡe
(BⅡi)
BⅡm
BⅢa
BⅢe
BⅢi
BⅢm
BⅣe
BⅣi
BⅣm
(BⅣm)
L＝203m
BⅣd
BⅣc
L＝202m
BⅣb
BⅣa
L＝201m
AⅣd
AⅣc
L＝200m
AⅣb
土層断面位置図
185m
190m
195m
200m
205m
BⅡa
BⅡe
BⅡi
BⅡm
BⅢa
BⅢe
BⅢi
BⅢm
AⅣa
AⅣb
AⅣc
AⅣd
BⅣa
BⅣb
BⅣc
BⅣd
BⅣe
BⅣi
BⅣm
(BⅣm)
BⅤa

第５図　土層断面図


A
B
C
I
II
III
IV
V
185m
190m
195m
200m
205m
BⅡ－5P
BⅡ－1P
BⅡ－1陥
AⅡ－1陥
BⅡ－3P
AⅡ－1P
BⅡ－2P
BⅡ－2陥
AⅡ－2陥
BⅡ－4P
BⅡ－3陥
AⅢ－12P
AⅢ－9P
AⅢ－5P
BⅢ－2P
BⅢ－1P
AⅢ－16P
AⅢ－1住
BⅢ－1陥
BⅢ－4P
AⅢ－10P
AⅢ－7P
AⅢ－15P
BⅢ－2住
AⅢ－8P
AⅢ－17P
AⅢ－14P
BⅢ－3P
AⅢ－4P
AⅢ－6P
AⅢ－炭窯
AⅢ－1陥
AⅢ－3P
AⅢ－2P
AⅢ－11P
AⅢ－13P
AⅢ－1P
AⅣ－2P
BⅣ－12P
AⅣ－3P
BⅢ－1住
BⅣ－11P
BⅣ－7P
BⅣ－4P
AⅣ－1P
AⅣ－4P
BⅣ－3P
BⅣ－8P
AⅣ－8P
BⅣ－10P
BⅣ－16P
AⅣ－1住
BⅣ－5P
BⅣ－13P
BⅣ－15P
BⅣ－9P
AⅣ－5P
AⅣ－6P
AⅣ－7P
BⅣ－14P
AⅣ－2住
BⅣ－1住
BⅣ－1P
AⅣ－1土取穴
BⅣ－6P
BⅤ－1P
BⅤ－1土取穴
BⅤ－2土取穴
0
10
20m

第6図　遺構配置図

Ⅳ　検出遺構と遺物

調査によって検出された遺構は

縄文時代……住居址２棟、ピット46基、陥し穴状遺構５基

平安時代……住居址４棟、ピット４基

近世～現代……土取穴３基、炭窯１基

時期不明……ピット１基、陥し穴状遺構２基

の計68である。全体の配置状況をみると、Ⅲ区の北半で途切れるほかは、ほぼ全域にほとんど重複なく検出されている。

出土した遺物は、遺構内出土遺物を除いてほとんどが縄文時代のものであり、総数3,750余点である。遺跡の中央部であり、出土量が多く、土器破片数の最も多い地区はＡⅢＰ区の320点余である。遺物を種類別にあげると、

土器・土製品……縄文土器、土師器、土玉、円盤状土製品、スプーン状土製品

石器……石鏃、スクレイパー、石匙、箆状石器、石錐、石棒、磨石、敲石、凹石、石錘、砥石、剝片

鉄・銅製品……紡錘車、古銭、鉤

その他……砂鉄、フイゴの羽口、鉄滓、陶磁器などである。

１．縄文時代

〔１〕遺構と遺構内出土遺物

住居址２棟のうち１棟は炉をもたず、他の１棟は石囲い炉をもつものである。検出状況と形状から前期と後期の２時期である。

ピット46基の半数以上は、検出面が下層のⅤ～Ⅵ層である。埋土の中掫浮石との関連から前期のほか、後・晩期のものである、

陥し穴状遺構は、溝状が５基、小判形ないし長方形状が２基で、遺跡の北端に５基集中する。

遺物はほとんど出土していないので、ここでは概要のみ記し、遺構外出土遺物と合わせてまとめて記述することとする。出土状況で特徴的なのは、１基のピットから石錘が７個もまとまって出土した点である。

なお、時期不明のピット・陥し穴状遺構については、他の遺構との関連から記述する。

(1) 住居址

AⅢ－1住居址

遺構（第7・8図，写真図版4）

（検出状況）AⅢ1区中央の検出面を褐色土層（Ⅴ層）面まで下げた段階で、中掫浮石混入土による長方形のプランとして検出された。

（形状）平面形は西南西隅が丸くなるが、長軸を北東―南西にもつ長方形を呈する。断面形は皿形を呈する。

（規模）上端が3.4m×2.5m、下端が3.1m×2.2mである。壁高は北東30cm、北西20cm、南西20cm、南東30cmである。

（埋土）11層に細分される。2は木根などよる攪乱部でやや柔らかいが、他はすべて固くしまっている。壁寄りに中掫浮石が混入する。

（壁）褐色土層で、南西壁と南東壁は直立ぎみであるが、他は崩落のため外傾する。

（床面）褐色土層で、ほぼ平坦である。全体に固くしまっている。

（柱穴）南西壁に3個検出された。径15cm～20cm、深さ30cm～40cm、暗褐色の埋土で壁に沿ってならんでいる。北西壁や北東壁に柱穴状の凹みがあるが、南西壁の柱穴のように深くはない。また南東壁には柱穴も凹みも全く検出されていない。

（炉）検出されなかった。

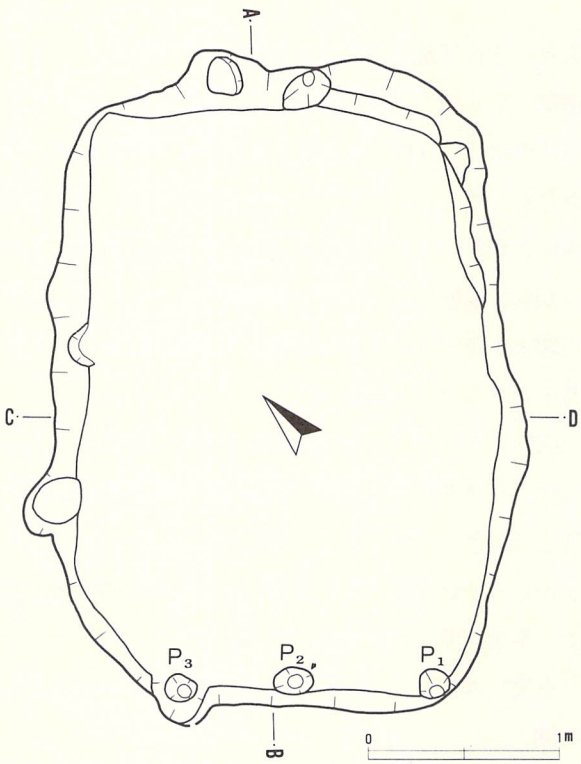
（重複）住居址中央部にAⅢ―15ピットがあり、当住居址がピットの上部を切っている。

遺物（第80図；写真図版33）

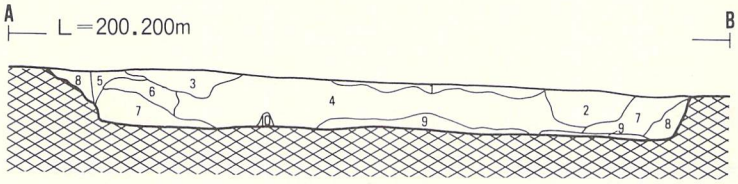
（土器）北西壁の凹みとピットの上面とから縄文時代早期の破片（15、16）が出土している。また、埋土の中位から6と同一個体と思われる貝殻条痕のある破片が出土している。

時期

時期決定資料が十分でないが、検

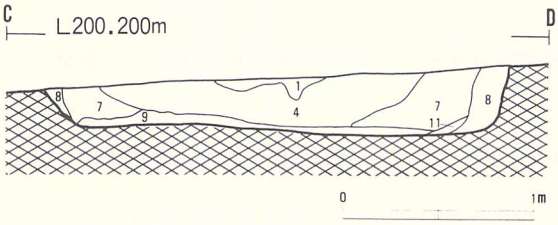


第7図　AⅢ－1住居址　平面



単位：cm

柱穴	上端径	下端径	深さ
P_1	16×16	7×6	27
P_2	21×15	8×8	40
P_3	16×15	8×7	30



1．黒 色 土 10YR 2/1 Ⅳ層に似ている　かたい　浮石が多い
2．黒褐色土 10YR 2/2 粘性なくかたい　6に似ているが浮石が少ない
3．にぶい黄褐色土 10YR 5/4 Ⅴ層のブロック土
4．暗褐色土 10YR 3/3 粘性あり　かたい　浮石が多い　Ⅴ層に似ているがやや暗い色である
5．黒褐色土 10YR 2/3 中振浮石を含む　粘性なくかたい
6．黒褐色土 10YR 2/2 粘性なくかたい
7．黒褐色土 10YR 2/3 中振浮石を含む
8．黒褐色土 10YR 2/2 やや粘性あり　かたい　浮石が多い　Ⅴ層が多い　Ⅴ層が混じる
9．黒褐色土 10YR 2/2 かたい　8に似る
10．黄褐色土 10YR 5/6 Ⅵ層のブロック土
11．黒褐色土 10YR 2/3 中振浮石を含む

第8図　AⅢ－1住居址　断面

出状況と埋土の状況、住居址の形態等から縄文時代前期以前と考えられる。

AⅣ－2住居址

遺構（第9図，写真図版5）

（検出状況）AⅣ1区、表土を除去した黒褐色土～褐色土層（Ⅳ～Ⅴ層）面で石囲い炉が検出された。炉のレベルまでプランの確認を行ったが、斜面上方部側には住居址と認定する痕跡は検出されなかった。斜面下方には床面の一部と柱穴が検出された。

（形状、規模）いずれも不明である。

（埋土）確認されたのは炉の上部や周囲にわずかに残る埋土と床面上の埋土のみで、炭化物を若干含む黒色土である。

（床面）ガリガリにかたい褐色土層からなりほぼ平坦である。

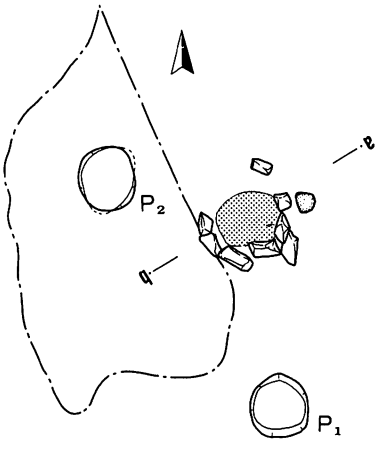
（柱穴）2個検出された。径30cm～35cm、深さ24cm～38cm、炉から40cm～50cmの位置にある。埋土は黒色土である。

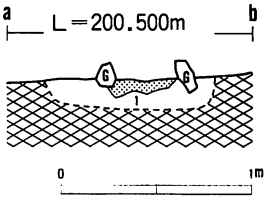
（炉）一部破壊されているが、ほぼ円形に亜角礫が配列された石囲い炉である。規模は径50cmで、焼土の厚さは最大10cmである。

（重複）AⅣ－7ピットの上部を切り、ピット上に炉がつくられている。

時期

時期決定資料を欠き不詳であるが、炉の形態、周囲の遺物の出土状況等から縄文時代後・晩期と考えられる。





単位：cm

柱穴	上端径	下端径	深さ	底標高(m)
P_1	33×32	27×25	38	199.955
P_2	33×30	32×28	24	200.066

第９図　AⅣ－２住居址

(2)　ピット

AⅡ－１ピット

遺構（第10図，写真図版５）

（検出状況）AⅡ１区東辺の褐色土層（Ⅴ層）面に、黒褐色～黒色土の楕円形プランとして検出された。AⅡ－２陥し穴状遺構の北端に接する。

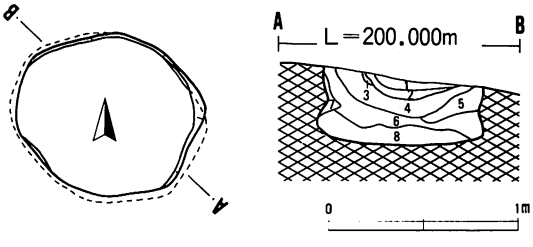
（形状）平面形は開口部、頸部、底部とも楕円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

（規模）開口部径0.95m×0.86m、頸部径0.93m×0.84m、底部径1.03m×0.88m、深さ0.36mである。

（埋土）８層に細分されるが、全体的にしまっており、黄褐色浮石がわずかに混入する。４～６はさらに赤褐色浮石が混入する。３は粘土である。５、７を除いては混土状態である。

（壁）褐色～黄褐色土層で上部は崩落のため外傾するが下部は内傾する。

（底面）黄褐色土層で凹凸がある。木根穴と思われるものが壁寄りに多くある。



1．黒色土 7.5YR 2/1 黄褐色土がわずかに混入
2．明褐色土～褐色土 7.5YR 5/6～4/6 浮石が多い
3．明黄褐色土 10YR 7/6
4．黒色土～黒褐色土 7.5YR 2/1～2/2 黄褐色土も混入
5．黒褐色土 7.5YR 3/2
6．黒褐色土 7.5YR 3/1 上位は暗褐色土その混土 と
7．暗褐色土 7.5YR 3/3
8．黒褐色土 黒色土 明褐色土 7.5YR 2/2、2/1、5/6

第10図　AⅡ－１ピット

AⅢ－1ピット

遺構（第11図，写真図版6）

（検出状況）AⅢn区南辺、赤褐色浮石を含む明褐色土層（Ⅵ層）面で、黒褐色土の円形プランとして検出された。

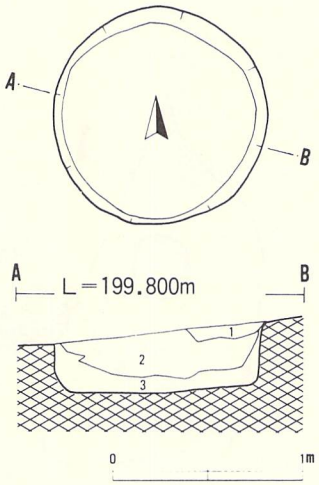
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.15m×1.12m、底部径1.02m、深さ0.31mである。

（埋土）2層に大別される。上位が黒褐色土、下位が褐色土でいずれも赤褐色浮石が混入する。

（壁）赤褐色浮石を含む明褐色～黄褐色土層で、ほぼ垂直に立ち上がる。

（底面）黄褐色土層からなり、平坦でしまっている。



1．暗褐色土 10YR 3/3
2．黒褐色土 10YR 2/3
3．褐 色 土 10YR 4/4

第11図　AⅢ－1ピット

AⅢ－2ピット

遺構（第12図，写真図版6）

（検出状況）AⅢn区中央、AⅢ－1ピットの北側、赤褐色浮石を含む黄褐色土層（Ⅵ層）面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。北西側に赤褐色浮石混入の暗褐色埋土の遺構があり、その南東半分を切るものである。

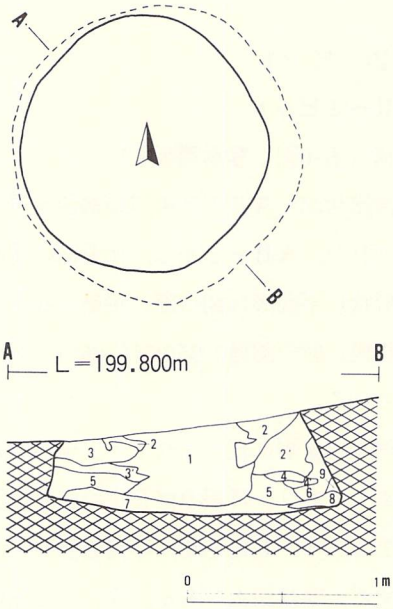
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する、断面形はフラスコ状である。

（規模）開口部径1.30m×1.26m、底部径1.48m深さ0.48mである。

（埋土）中央が褐色土（Ⅴ層）起源の埋土、壁寄りが同じく褐色土（Ⅴ層）起源の汚れの強い土と黒褐色土との互層、底面に黒褐色～黒色土が堆積している。

（壁）黄褐色土層で、全面内傾する。下部のためか崩落がなく内傾している。

（底面）礫が表出するため南半に凹凸があるが、北半は明黄褐色土の平坦面を示す。全体に中央に向かって



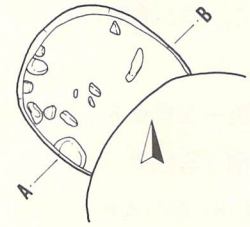
1．黄褐色土～暗褐色土 10YR 5/6～3/3
2．黒褐色土 10YR 2/2　2′はやや明るい
3．暗褐色土～褐色土 10YR 3/4～4/4
4．黒褐色土 10YR 2/3
5．黒褐色土 10YR 3/2
6．暗褐色土 10YR 3/4 褐色土が混入
7．黒褐色土 10YR 2/3
8．黒 色 土 10YR 2/1 浮石が混入しない
9．明黄褐色土 10YR 6/6

第12図　AⅢ－2ピット

やや傾斜する。

遺物（第82図，写真図版35）

（土器）埋土上位から縄文時代前期の破片(47)が出土している。



AⅢ－3ピット

遺構（第13図，写真図版6）

（検出状況）AⅢ－2ピットに切られ、その北西に位置する。黄褐色土層（Ⅵ層）面で暗褐色土の不整長方形プランとして検出された。

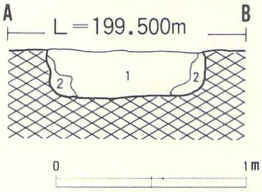
（形状）平面形は開口部、底部とも楕円形状を示す。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径0.85m、底部径0.80m、深さ0.24mである。

（埋土）赤褐色、黄褐色浮石が混入する暗褐色土が大半を占める。

（壁）黄褐色土層で、全面がほぼ直立する。

（底面）北西半に掘り過ぎがあって詳細は不明であるが、ほぼ平坦で礫が表出するものと思われる。



1．暗褐色土 10YR 3/3
2．黄褐色土 10YR 5/6と暗褐色土 10YR 3/4との混土

第13図　AⅢ－3ピット

AⅢ－4ピット

遺構（第14図，写真図版7）

（検出状況）AⅢm区調査区境界線際の赤褐色浮石を含む黄褐色土層（Ⅵ層）面に黒褐色土の円形プランとして検出された。

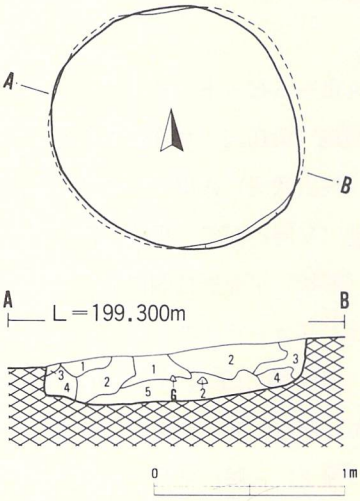
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状を示す。

（規模）開口部径1.38m×1.26m、底部径1.36m×1.31m、深さ0.27mである。

（埋土）5層に細分される。全層とも微量ながら赤褐色浮石が混入する。3、4は壁の崩落土である。

（壁）赤褐色浮石を含む黄褐色土層で柔らかく礫が出ているところもある。一部直立する部分もあるがほぼ内湾する。

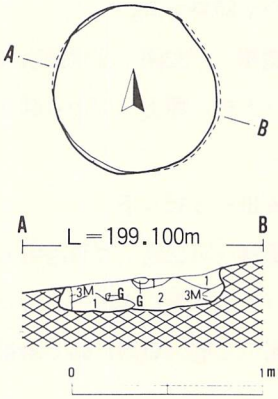
（底面）明黄褐色～灰白色土層で、斜面なりにやや傾斜



1．黒褐色土 7.5YR 3/2 灰オリーブ色の浮石を含む
2．黒 色 土 7.5YR 2/1 炭化物を含む
3．褐色土～明褐色土 7.5YR 4/6～5/6
4．褐色土～暗褐色土 7.5YR 4/3～3/4
5．暗褐色土 7.5YR 3/4

第14図　AⅢ－4ピット

する。礫が多数表出し、他のピットにくらべて凹凸が激しい。



1．黒 色 土 10YR 2/1
2．黒褐色土 10YR 2/2
3．黒褐色土 10YR 2/3と褐色土 7.5YR 4/4との混土

第15図　AⅢ－5ピット

AⅢ－5ピット

遺構（第15図，写真図版7）

（検出状況）AⅢf区、赤褐色浮石を含む褐色～黄褐色土層（V～VI層）面で、黒色～黒褐色土の円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状であるが、下部のみのためその形状が表れない部分が多い。

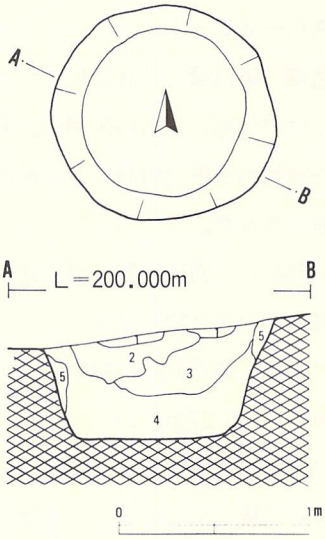
（規模）開口部径0.88m×0.86m、底部径0.88m×0.87m、深さ0.17mである。

（埋土）3層に細分されるが、2に赤褐色浮石がわずかに混入する。

（壁）褐色～黄褐色土層で内湾する。

（底面）礫を含む黄褐色土層で、細かい凹凸をもつがほぼ平坦といえる。壁寄りは中央に向かってやや傾斜する。

遺物　底面から70と同一の土器破片が出土している。



1．暗褐色土 10YR 3/3
2．黒褐色土 10YR 2/2
3．暗褐色土 10YR 3/3 浮石が多い
4．にぶい黄褐色土 10YR 5/4と暗褐色土 10YR 3/3との混土
5．褐 色 土 10YR 4/4

第16図　AⅢ－6ピット

AⅢ－6ピット

遺構（第16図，写真図版7）

（検出状況）AⅢn～o区中間、赤褐色浮石を含む褐色土層（V層）面で、黒色土の円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.21m×1.16m、底部径0.90m×0.84m、深さ0.56mである。

（埋土）5層に細分されるが、色調の相違だけで組成はほぼ同じである。全体にやや粘性がありしまりのある埋土である。

（壁）褐色～黄褐色土層で、全体に外傾する。

（底面）黄褐色土層で柔らかい。礫が表出し凹凸がある部分（南半）もあるが、全体として平坦である。

AⅢ－7ピット

遺構（第17図，写真図版8）

（検出状況）AⅢk区、黒褐色～暗褐色土層（V層）面で、黒色土の円形プランとして検出された。

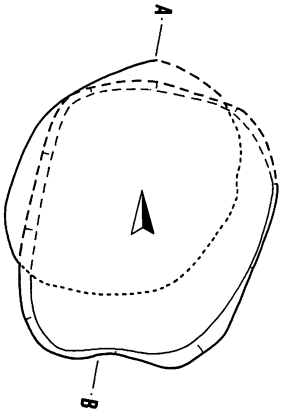
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状を示す。

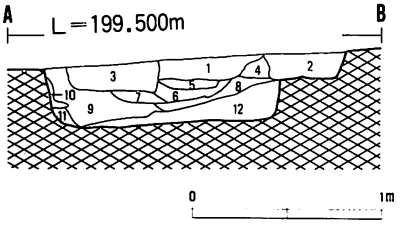
（規模）開口部径1.21m×1.10m、底部径0.87m×0.81m、深さ0.73mである。

（埋土）8層に細分される上位が黒色～黒褐色土、中位に黒色土をはさみ、下位が黄褐色土となる。いずれも赤褐色浮石が混入する。底面に炭化物が出土する。

（壁）黒褐色土層、黄褐色土層、最下部が明黄褐色土層（礫混じり）で、下部はほぼ直立する。

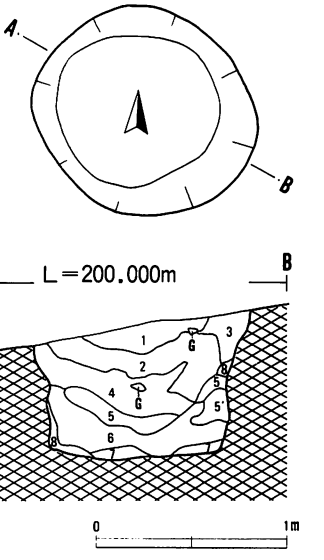
（底面）明黄褐色砂質土層で、礫が表出し凹凸がある。





1．暗褐色土 10YR 3/4 浮石が多い
2．暗褐色土 10YR 3/4 黄褐色土が混入
3．黒褐色土 10YR 2/2
4．黒褐色土 10YR 2/2
5．黒 色 土 10YR 2/1
6．暗褐色土 10YR 3/4
7．褐 色 土 10YR 4/4 赤色浮石が多い
8．黒褐色土 10YR 2/3
9．褐 色 土 10YR 4/4と黒褐色土 10YR 2/2との混土
10．黄褐色土 10YR 5/6
11．黒褐色土 10YR 2/3
12．黄褐色土 10YR 5/6 黒褐色土が混入

第18図　AⅢ－8ピット



1．黒 色 土 10YR 2/1
2．黒褐色土 10YR 3/2 浮石が多い
3．暗褐色土 10YR 3/4
4．褐 色 土 10YR 4/4 礫が混入
5．黒褐色土 10YR 2/2 5′は黄褐色土が混入
6．黄褐色土 10YR 5/6と暗褐色土 10YR 3/4との混土
7．黄褐色土 10YR 5/6
8．黄褐色土 10YR 5/8

第17図　AⅢ－7ピット

AⅢ－8ピット

遺構（第18図，写真図版8）

（検出状況）AⅢj区、赤褐色浮石を含む黄褐色土層（VI層）面で、暗褐色～黒褐色土の不整楕円形プランとして検出された。

（形状）周辺に現代の小ピットが数基あり、当遺構も一部同様のピットに切られているため、原形は推定である。平面形が隅丸長方形状、断面形がビーカーないしⅢ形である。

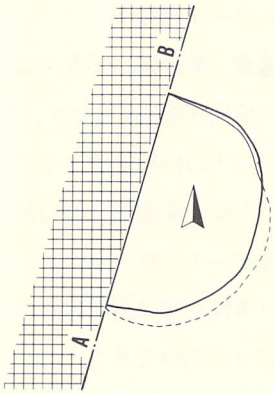
（規模）開口部径推定1.50m×1.30m、底部径推定

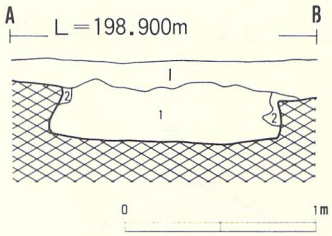
1.40m×1.20m、深さ0.13mである。

（埋土）１～５が当遺構の埋土である。このうち２、３は小ピット等による攪乱部である。

（壁）黄褐色土層で北東壁に掘り過ぎがある。浅く、やや外傾する部分もあるが全体的に直立する。

（底面）黄褐色土層、AⅢ―10ピットの埋土で、地山面は平坦であるが、斜面に沿ってやや傾斜する。





1．黒色土 10YR 1.7/1と褐色土 10YR 4/6との混土
2．明褐色土 7.5YR 5/6

第19図　AⅢ－９ピット

AⅢ－９ピット

遺構（第19図，写真図版８）

（検出状況）AⅢｅ区調査区境の、赤褐色浮石を含む黄褐色～赤褐色土層（Ⅵ層）面に、柔らかい黒色土の半円形プランとして検出された。

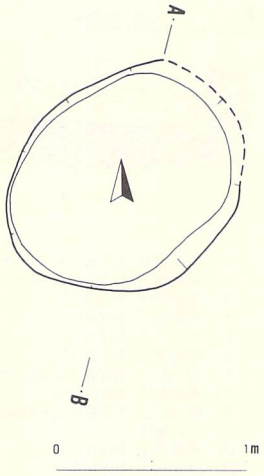
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状である。

（規模）開口部径1.14m、底部径1.20m、深さ0.30mである。

（埋土）壁寄りに明褐色土が入るがほぼ単層である。褐色土と黒色土が混じり、色調の違いは認められるが線引き不能である。

（壁）黄褐色土層、明黄褐色土層で内傾する。全体に良好な残存状況である。

（底面）明黄褐色土層で、礫が表出するため凹凸が感じられるが、全体としては平坦である。



第20図　AⅢ－10ピット

AⅢ－10ピット

遺構（第18図，写真図版８）

（検出状況）AⅢ－８ピットを掘り下げた段階で、さらに下位に暗褐色土等があったことからピットと認定したものである。

（形状）不注意によって掘り過ぎたが、平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形はビーカー状を呈している。

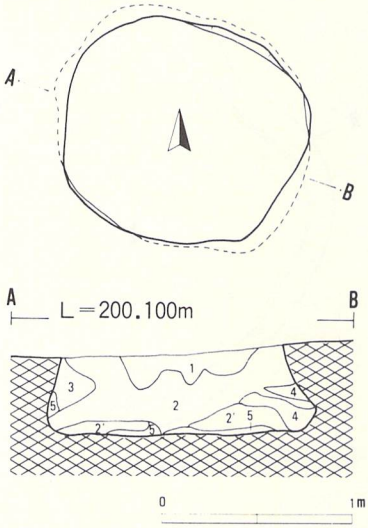
（規模）開口部径は推定1.36m×1.10m、底部径1.22m×0.93m、

深さ0.34mである。

（埋土）第20図６～12が当遺構の埋土である。黒褐色土と褐色～黄褐色との互層ないし混土状態である。

（壁）黄褐色～明黄褐色土層で、ほぼ直立する。

（底面）明黄褐色砂質土層、礫混じりで、中央に向かってやや傾斜する。



1．黒色土 7.5YR 2/1
2．黒色土 7.5YR 2/1 浮石がやや多い2′は褐色土が混入
3．暗褐色土 10YR 3/3 褐色土が混入
4．褐 色 土 10YR 4/4 黄褐色土が混入
5．明褐色土 7.5YR 6/6 黒褐色土が混入

第21図　AⅢ－11ピット

AⅢ－11ピット

遺構（第21図，写真図版９）

（検出状況）AⅢｏ区のⅣ区際、褐色土層（Ｖ層）面で、黒色土の楕円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形はフラスコ状を示している。

（規模）開口部径1.28m×1.16m、底部径1.40m×1.23m、深さ0.42mである。

（埋土）５層に細分されるが、主体は黒色土である。壁際と下位の埋土は地山黄褐色土との混土状態である。

（壁）褐色～黄褐色土層で、全体として内傾するが、崩落があって凹凸が激しい。直立する部分がある。

（底面）黄褐色土層からなり、ほぼ平坦である。

遺物（第97図，写真図版49）

（石器）埋土下位から幅の狭い側面に磨面をもつ棒状の磨石（43）が出土している。

AⅢ－12ピット

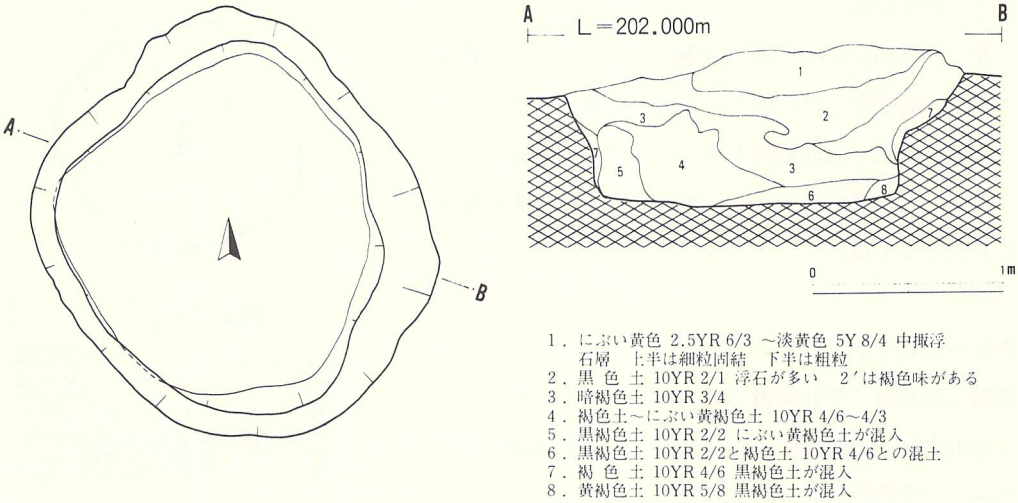
遺構（第22図，写真図版９）

（検出状況）AⅢｄ区中央、中掫浮石層（Ⅲ層）を除去している際に硬くなった中掫浮石細粒部分が確認された。さらにその下位に粗粒部分があり、凹地であると判断された。精査の結果ピットとなったものである。

（形状）平面形は五角形状の不整方形、断面形はビーカー状を示している。

（規模）開口部径2.07m×1.88m、中端径1.77m×1.64m、底部径1.65m×1.58m、深さ0.80mである。

（埋土）上位が中掫浮石、中位が黒色土から暗褐色土、下位は褐色土となるが、底面上と壁寄



第22図　AⅢ－12ピット

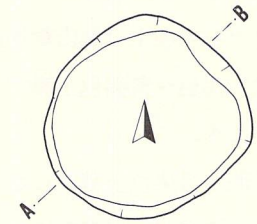
りに黒褐色土が堆積する。下位と壁際は混土状態である。

（壁）上部から黒褐色土層、褐色～黄褐色土層で、下部は直立するが、上部は外傾する。

（底面）明黄褐色土層で、中央部がやや盛り上がるが全体としては平坦である。

遺物（第81図，写真図版34）

（土器）縄文時代前期の破片（35）が埋土中位から出土している。



AⅢ－13ピット

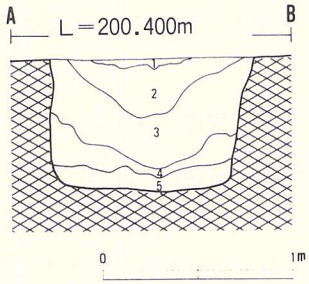
遺構（第23図，写真図版９）

（検出状況）AⅢP区南東隅の観察用ベルト断面に中掫浮石層の下垂する部分があり、遺構の予想をしてV層面まで下げたところ、黒色土の楕円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.08m×1.00m、底部径0.94m×0.89m、深さ0.71mである。

（埋土）５層に細分される。１は中掫浮石が上面を被い、または混入する黒褐色土である。２は白色化した浮石を多く含



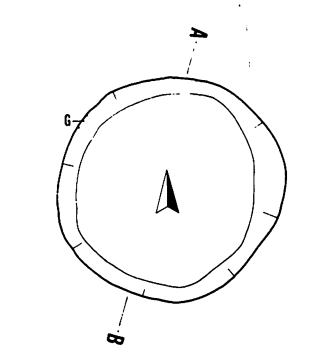
1．黒褐色土 10YR 2/2 中掫浮石が混入
2．黒 色 土 10YR 2/1 浮石が多い
3．暗褐色土 10YR 3/3 浮石がとくに多い
4．褐 色 土 10YR 4/4
5．にぶい黄褐色土 10YR 4/3

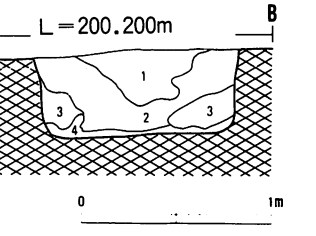
第23図　AⅢ－13ピット

む層でⅣ層に似る埋土である。

（壁）上部から暗褐色～黒褐色土層、褐色～黄褐色土層、明黄褐色土層で、ほぼ直立する。

（底面）明黄褐色土層からなり、全体として平坦であるが、北東部分がなだらかに壁に続き境界が明瞭でない。





1．黒色土 10YR 1.7/1 白色浮石が多い
2．黒色土～黒褐色土 10YR 2/1～2/2 赤色浮石が多い
3．暗褐色土 10YR 3/4
4．褐 色 土 10YR 4/6

第24図　AⅢ－14ピット

AⅢ－14ピット

遺構（第24図，写真図版10）

（検出状況）AⅢ1～P区東端の褐色土層（V層）上面で、黒色土の楕円形プランとして検出された。

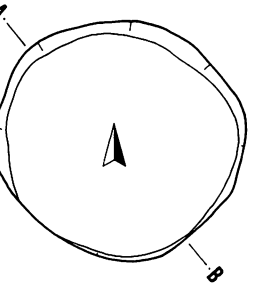
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

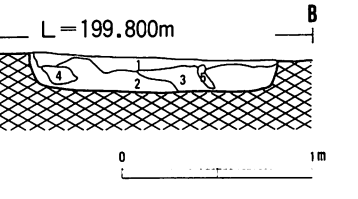
（規模）開口部径1.20m×1.15m、底部径1.04m×0.96m、深さ0.45mである。

（埋土）4層に細分される。1～3はかたくしまり、4は柔らかい。

（壁）暗褐色土～黄褐色土層で、全体としてやや外傾するか南壁のみ直立する。

（底面）黄褐色土層からなり、ほぼ平坦である。





1．黒褐色土 10YR 2/2とにぶい黄褐色土 10YR 4/3との混土　浮石がとくに多い（赤色・白色半々）
2．褐 色 土 10YR 4/6 赤色浮石が多い
3．暗褐色土 10YR 3/3
4．黒 色 土 10YR 2/1
5．黒褐色土 10YR 2/2

第25図　AⅢ－15ピット

AⅢ－15ピット

遺構（第25図，写真図版10）

（検出状況）AⅢ1区中央部に位置するAⅢ－1住居址の床面の汚れからピットとして検出された。

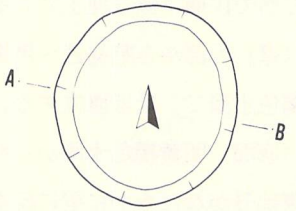
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状ないし皿状を呈する。

（規模）開口部径1.30m×1.23m、底部径1.21m×1.16m、深さ0.18mである。

（埋土）5層に細分される。1は住居址の床面にあたり、ガリガリにかたくなっているものである。2、3は比較的柔らかい。5は木根の痕跡である。

（壁）明褐色土層で、やや外傾する。

（底面）明褐色土層で、平坦である。



AⅢ－16ピット

遺構（第26図，写真図版10）

（検出状況）AⅢ1区北東隅の褐色土層（Ⅴ層）面に黒褐色土の楕円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

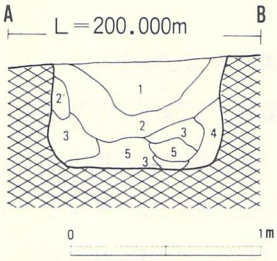
（規模）開口部径1.05m×0.96m、底部径0.88m×0.80m、深さ0.57mである。

（埋土）5層に細分される。1は基本土層のⅣ層に、2はⅤ層に似ている。3～5には浮石が混入しない。

（壁）上部から褐色土層、明褐色土層、灰白色土層となり、直立する。

（底面）灰白色砂質土層で、礫が表出する点をのぞけばほぼ平坦である。

遺物　埋土上位から、15と同一土器の無文部破片が出土している。



1．黒褐色土 10YR 2/2～2/3 浮石が多い
2．暗褐色土 10YR 3/3
3．黄褐色土～にぶい黄褐色土 10YR 5/8～4/3
4．褐 色 土 10YR 4/4
5．褐 色 土 10YR 4/4とにぶい黄褐色土 10YR 5/4との混土

第26図　AⅢ－16ピット

AⅢ－17ピット

遺構（第27図，写真図版11）

（検出状況）AⅢk区東辺中央、褐色土層（Ⅵ層）面で、黒褐色土の円形プランとして検出された。

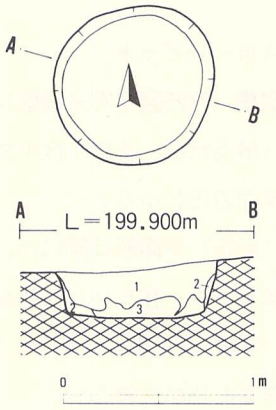
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状を示している。

（規模）開口部径0.88m×0.83m、底部径0.76m×0.72m、深さ0.25mである。

（埋土）3層に細分される。1は基本土層のⅣ～Ⅴ層に似ている。

（壁）褐色～明褐色土層で、北東部のみ外傾するが他は直立する。

（底面）明褐色土層からなり、平坦である。



1．黒褐色土 10YR 2/2～2/3 白色・赤色浮石が多い
2．褐色土 7.5YR 4/6
3．褐色土 7.5YR 4/4

第27図　AⅢ－17ピット

AⅣ－1ピット

遺構（第28図，写真図版11）

（検出状況）AⅣc区、赤褐色浮石を含む暗褐色土層（V層）面で、黒褐色～黒色土の円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部が円形、底部が楕円形を呈する。断面形はビーカー状である。

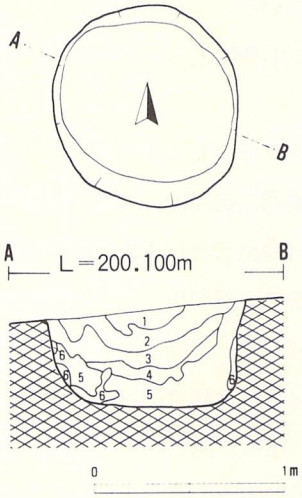
（規模）開口部径1.06m×0.98m、底部径0.98m×0.84m、深さ0.53mである。

（埋土）6層に細分されるが、ほぼ同質の埋土で、全てに赤褐色浮石が混入する。埋土全体がかたくしまっている。

（壁）上部から暗褐色土層、褐色土層、黄褐色土層であり、東側は中央部まで直立する。本来はビーカー状に直立すると思われるが、南側はやや外傾する。

（底面）黄褐色土層で柔らかい。ほぼ平坦である。

遺物　埋土中位から7と同様の土器破片が出土している。



1．黒 色 土 10YR 2/1
2．黒褐色土 10YR 2/3 浮石がとくに多い
3．暗褐色土 10YR 3/4
4．黒褐色土 10YR 2/3
5．暗褐色土 10YR 3/4 黄褐色土が混入
6．黄褐色土 10YR 5/6

第28図　AⅣ－1ピット

AⅣ－2ピット

遺構（第29図，写真図版11）

（検出状況）AⅣP区東辺の黒褐色土層（Ⅳ層）～褐色土層（V層）面に、中撹浮石が載る黒褐色土の円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.28m×1.24m、底部径1.19m×1.16m、深さ0.70mである。

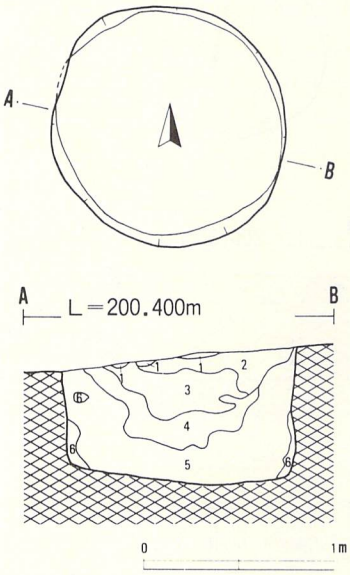
（埋土）最上位に中撹浮石層が載り、上位が黒褐色～黒色土、中下位が暗褐色～褐色土となる。

（壁）褐色土層、黄褐色土層で、ほとんど直立する。

（底面）明黄褐色土層で、西半は東に向かって傾斜するが、東半はほぼ平坦である。

遺物（第80・101図，写真図版33・51）

（土器）埋土上位から、表裏縄文の土器片（22）が出土し



1．浅 黄 色 2.5Y 7/4 中撹浮石層
2．黒褐色土 10YR 2/2 浮石がとくに多い
3．黒 色 土 10YR 2/1
4．暗褐色土 10YR 3/4
5．褐 色 土 10YR 4/4
6．明褐色土 7.5YR 5/8

第29図　AⅣ－2ピット

ている。

（石器）石核（71）が出土している。

AⅣ－3ピット

遺構（第30図，写真図版12）

（検出状況）AⅣc杭、黄褐色土層（Ⅵ層）面を除去した段階で、黒褐色土の半円形プランとして検出された。

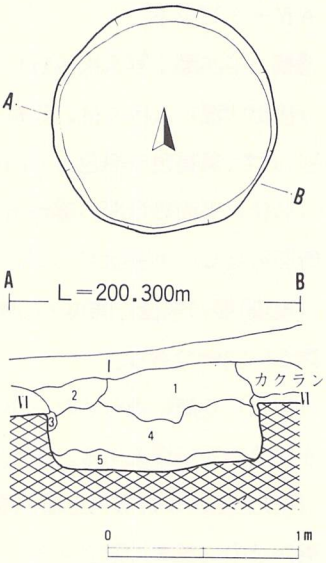
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状である。

（規模）開口部径1.20m、底部径1.13m×1.10m、深さ0.55mである。

（埋土）5層に細分されるが、2は攪乱部分であり、3は壁の一部とも考えられる。したがって、上位が黒褐色土、中位が暗褐色土、下位が混土となり、いずれも柔らかい。

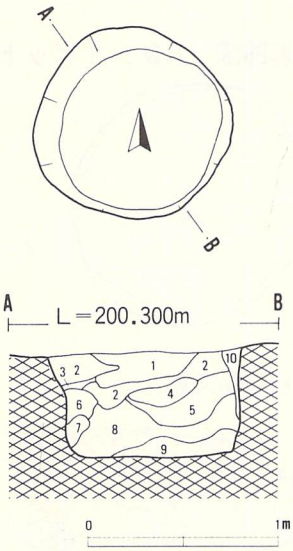
（壁）黄褐色土層で、北壁のみ崩落したのか直立状態を示すが、他は内湾している。

（底面）黄褐色色土層からなるが、北側は壁との境界が不明瞭である。全体として平坦であり、中央に向かってやや傾斜する。



1．黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
2．黒褐色土と褐色塊土　攪乱
3．褐 色 土 10YR 4/6
4．暗褐色土 10YR 3/3
5．暗褐色土 10YR 3/3と黄褐色土 10YR 5/8との斑状混土

第30図　AⅣ－3ピット



1．黒 色 土 10YR 2/1
2．黒褐色土 10YR 2/3
3．黒褐色土 10YR 2/2 浮石が混入しない
4．黒褐色土 10YR 2/2
5．暗褐色土 10YR 3/3
6．黒褐色土 10YR 3/2
7．黒 色 土 10YR 2/1 浮石が混入しない
8．黒褐色土 10YR 3/2
9．褐 色 土 10YR 4/4
10黄褐色土 10YR 5/6

第31図　AⅣ－4ピット

AⅣ－4ピット

遺構（第31図，写真図版12）

（検出状況）AⅣc区南東隅の褐色～黄褐色土層（Ⅴ～Ⅵ層）面に黒色～黒褐色土の不整円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.03m×1.00m、底部径0.90m×0.83m、深さ0.56mである。

（埋土）10層に細分されるが、3、7、9、10を除き土性は同様である。いずれも赤褐色浮石が混入し上位がしまっている。

（壁）上部から褐色土層、黄褐色土層、明黄褐色土層で、ほぼ

直立する。

（床面）明黄褐色土層からなり、ほぼ平坦である。

遺物（第82図，写真図版35）

（土器）縄文時代前期の破片（45）が埋土上位から、出土している。

AⅣ－7ピット

遺構（第32図，写真図版12）

（検出状況）AⅣ1区の黄褐色土層（Ⅵ層）面にAⅣ－2住居址の炉と重複し、黒色土の楕円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形はビーカーないし皿形を呈する。

（規模）開口部径1.42m×1.17m、底部径1.31m×0.96m、深さ0.16mである。

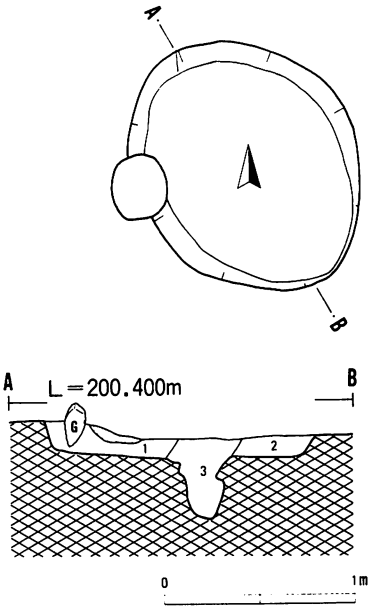
（埋土）3層に細分されるが、3は後世の柱穴である。

（壁）黄褐色土層で、外傾する。

（底面）黄褐色土層からなり、ほぼ平坦である。

遺物（第91図，写真図版44）

（土器）沈線文の細片と縄文の施文される（196）破片が出土している。



1．黒褐色土 10YR 2/2
2．黒 色 土 10YR 2/1 浮石が多い
3．黒褐色土とにぶい黄褐色土との混土

第32図　AⅣ－7ピット

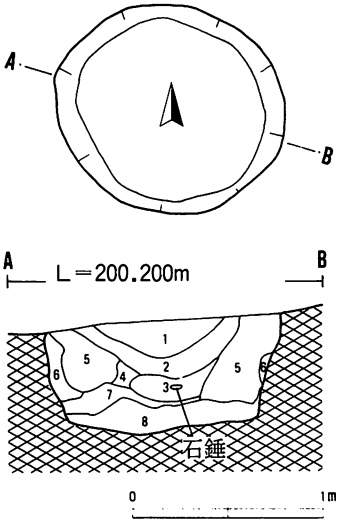
AⅣ－8ピット

遺構（第33図，写真図版13）

（検出状況）AⅣg区、黄褐色土層（Ⅵ層）面で、黒褐色～黒色土の円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部が楕円形、底部が円形を呈する。断面形はビーカー状を示している。

（規模）開口部径1.24m×1.10m、底部径1.01m×0.95m、深さ0.58mである。



1．黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
2．褐 色 土 10YR 4/4 黄褐色土が混入
3．暗褐色土 10YR 3/3
4．にぶい黄褐色土 10YR 5/4
5．黒色土 10YR 1.7/1 黄褐色土が混入
6．明褐色土 7.5YR 5/6～5/8)
7．褐 色 土 10YR 4/6
8．黄褐色土 10YR 5/6～5/8

第33図　AⅣ－8ピット

（埋土）８層に細分される。１、２のみかたく他は柔らかい。３には石錘が含まれる。

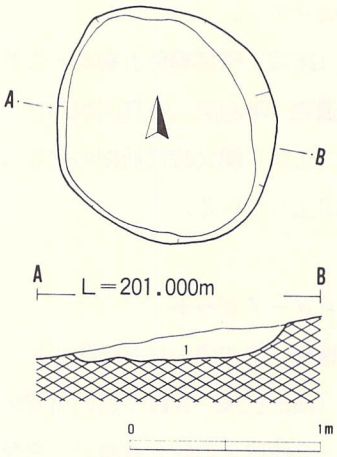
（壁）黄褐色～明褐色土層で、外傾する。

（底面）明褐色土層で、中央に向かって傾斜する。

遺物（第81・100図，写真図版34・51）

（土器）縄文時代前期の破片（36）が出土している。

（石器）埋土の３層から７個の石錘が出土している。いずれも楕円形の礫の両端を打ち欠いてつくられている。



１．黒褐色土 10YR 2/2 黄褐色塊土が混入

第34図　ＢⅡ－１ピット

ＢⅡ－１ピット

遺構（第34図，写真図版13）

（検出状況）ＢⅡf 区中央の赤褐色浮石を含む褐色土層（Ⅵ層）面に黒褐色土の不整円形プランとして検出された。

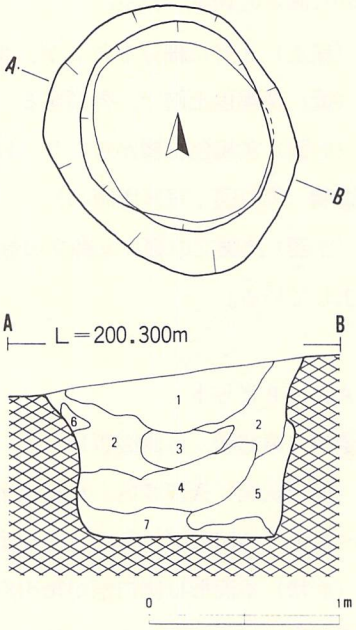
（形状）平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形は皿状を呈する。

（規模）開口部径1.33m×1.20m、底部径1.24m×1.02m、深さ0.15mである。

（埋土）柔らかい黒褐色土の単層であり。

（壁）褐色土層で、凹凸が激しい。垂直に立つ部分や外傾する部分がある。

（底面）褐色土層からなり、凹凸がみられる。



１．黒褐色土 10YR 2/2
２．暗褐色土 10YR 3/4 黒褐色土が混入
３．黒褐色土 10YR 3/1
４．黒褐色土 10YR 3/2
５．暗褐色土 10YR 3/4 黒褐色土が混入
６．褐 色 土 10YR 4/6
７．にぶい褐色土 7.5YR 5/4 灰白色粘土質土が混入

第35図　ＢⅡ－２ピット

ＢⅡ－２ピット

遺構（第35図，写真図版13）

（検出状況）ＢⅡｉ区中央の褐色土層（Ⅴ層）面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。

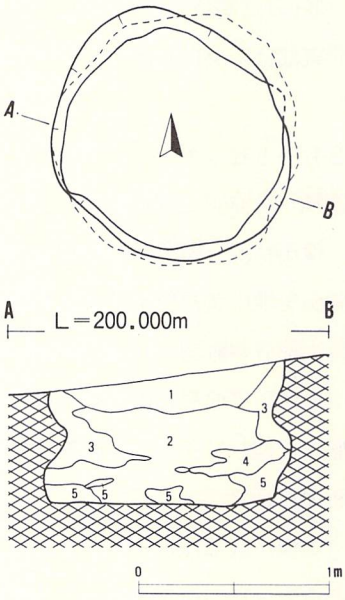
（形状）平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.46m×1.24m、中央部径1.12m×0.98m、底部径1.04m×0.91m、深さ0.86mである。

（埋土）７層に細分されるが、中位の２～５層は同様の土性である。最下位は粘土質土である。

（壁）上部から褐色～黄褐色土層となり、その間に赤褐色浮石層をはさみ黄褐色土層、最下部が明黄褐色土層で、上部は外傾するが下部は直立する。

（底面）明黄褐色粘土質土層で、平坦である。



1．黒褐色土 10YR 2/3
2．黒褐色土 10YR 2/2
3．暗褐色土 10YR 3/4
4．暗褐色土 10YR 3/3
5．褐 色 土 10YR 4/4

第36図　ＢⅡ－３ピット

ＢⅡ－３ピット

遺構（第36図，写真図版14）

（検出状況）ＢⅡｉ区北西の褐色土層（Ｖ層）面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。

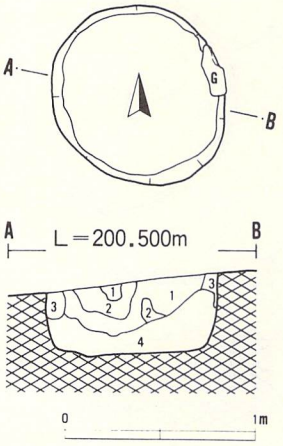
（形状）平面形は開口部が楕円形、頸部、底部が円形を呈する。断面形はフラスコを呈する。

（規模）開口部径1.36m×1.22m、頸部径1.20m×1.18m、底部径1.34m×1.28m、深さ0.70mである。

（埋土）５層に細分されるが、中央部の黒褐色土と壁寄りの暗褐色土に大別される。

（壁）上部から褐色土～黄褐色土層、赤褐色浮石層、明褐色土層となり、上部は不整に崩落してきる。下部は内傾するが、赤褐色浮石層部分が崩落し抉れている。

（底面）明褐色土層からなり、平坦である。



1．黒褐色土 7.5YR 3/1
2．黒 色 土 7.5YR 1.7/1
3．黒褐色土 7.5YR 3/2
4．極暗褐色土 7.5YR 2/3と
　褐色土 7.5YR 4/6との混土

第37図　ＢⅡ－４ピット

ＢⅡ－４ピット

遺構（第37図，写真図版14）

（検出状況）ＢⅡｍ区北東寄りの黒褐色～褐色土層(Ⅳ～Ｖ層)面に、黒色～黒褐色土の円形プランとして検出された。

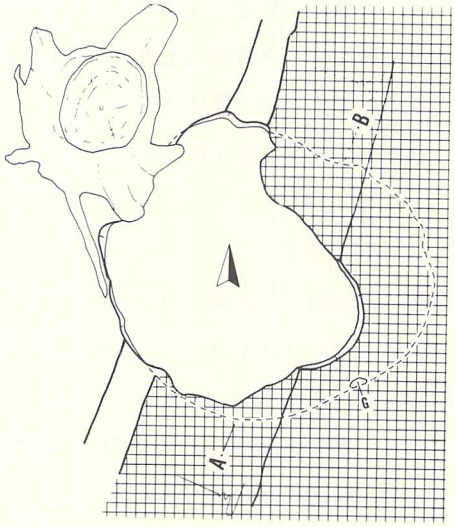
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

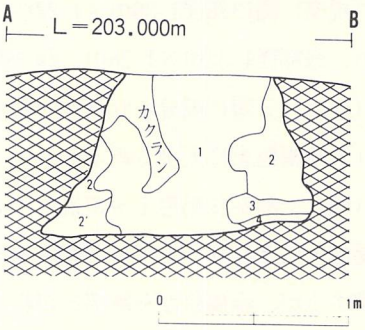
（規模）開口部径0.99m×0.90m、底部径0.88m×0.82m、深さ0.39mである。

（埋土）４層に細分されるが、上位が同質の黒色～黒褐色土、下位が混土となる２層に大別される。

（壁）黒褐色～褐色土層、黄褐色土層でほぼ直立するが、北西部と南東部がやや外傾する。北東部に礫が突出している。

（底面）黄褐色土層からなり、凹凸がある。南西部、北東部は中央に向かってやや傾斜する。





1．黒褐色土、暗褐色土、黄褐色土 10YR 2/2、3/4、5/8の混土　浮石が多い
2．黄褐色土 10YR 5/6 暗褐色土が混入
　　2′がより多く混入
3．暗褐色土 10YR 3/4 黄褐色土が混入
4．黄褐色土 10YR 5/8

第38図　BⅡ－5ピット

BⅡ－5ピット

遺構（第38図，写真図版14）

（検出状況）BⅡc区南東隅の調査区域外にかかる。斜面を地山黄褐色土上面まで掘り下げた段階で黒褐色土部分が確認され、精査の結果ピットと判明した。

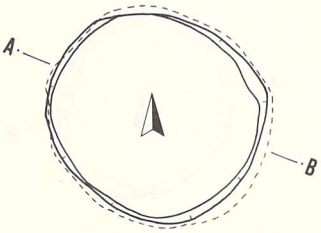
（形状）平面形は削平や木根による攪乱によって原形を把握しにくいが、底部は楕円形を呈している。断面形はフラスコ状である。

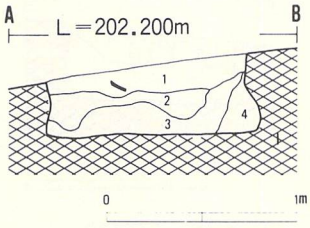
（規模）底部径1.74m×1.48m、深さ0.85m（斜面上位では1.25mを測る）である。

（埋土）4層に細分されるが、1～3層は混土である。壁寄りは地山の崩落土が多い。

（壁）黄褐色土層で、内傾する。東壁下部が崩落のため抉り込みが深くなっている。

（底面）黄褐色土層からなり、凹凸がある。





1．黒褐色土 7.5YR 3/1
2．黒 色 土 7.5YR 1.7/1
3．黒褐色土 7.5YR 2/2
4．極暗褐色土 7.5YR 2/3との褐色土 7.5YR 4/4との混土

第39図　BⅢ－1ピット

BⅢ－1ピット

遺構（第39図，写真図版15）

（検出状況）BⅢg区南西部の表土を除去した暗褐色土層（Ⅲ層）面で、黒色土の円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、頸部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状である。

（規模）開口部径1.15m×1.04m、頸部径1.08m×1.00m、底部径1.20m×1.12m、深さ0.37mである。

（埋土）4層に細分される。1層は中掫浮石層を起源とすると思われるが上面に地山の褐色土のみられる部分もあ

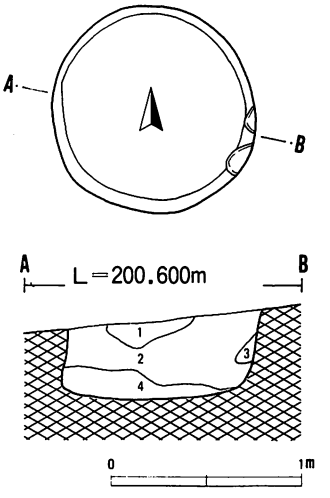
る。この層から土器が出土している。

（壁）上部から暗褐色土層、黒褐色土層、褐色土層となり、内湾する。斜面上方は崩落のためやや外反する。

（底面）褐色土層からなり、ほぼ平坦である。

遺物（第92図，写真図版45）

（土器）深鉢の口縁部～体部下半の破片（201）で、縄文のみが施文されている。



1．黒 色 土 10YR 1.7/1
2．黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
3．褐 色 土 10YR 4/4
4．暗褐色土 7.5YR 3/4 浮石が多い

第40図　BⅢ－2ピット

BⅢ－2ピット

遺構（第40図，写真図版15）

（検出状況）BⅢe区南東隅の暗褐色土～褐色土層（V～VI層）面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。

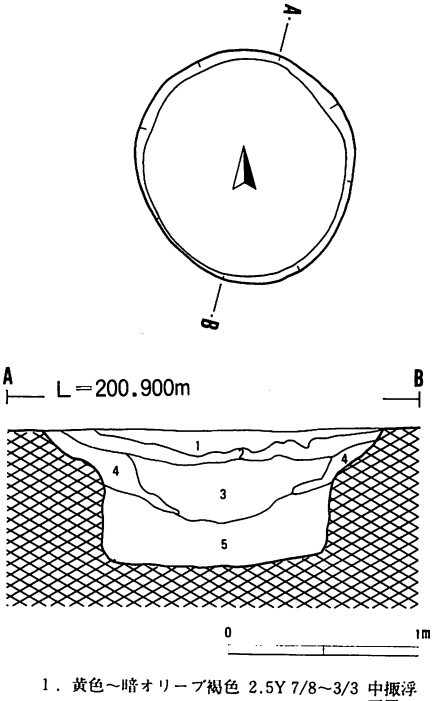
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.09m×1.07m、底部径0.98m×0.96m、深さ0.42mである。

（埋土）4層に細分される。上位はやわらかく下位はかたい。

（壁）暗褐色土層、褐色土層で、ほぼ直立する。

（底面）黄褐色土層からなり、ほぼ平坦である。



1．黄色～暗オリーブ褐色 2.5Y 7/8～3/3 中掫浮石層
2．黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
3．黒 色 土 10YR 2/1 浮石が多い
4．黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
5．暗褐色土 10YR 3/4 浮石が多い

第41図　BⅢ－3ピット

BⅢ－3ピット

遺構（第41図，写真図版15）

（検出状況）BⅢi区東辺のBⅢ－2住居址の周辺を掘り下げたところ、その断面に中掫浮石層の落ち込み、さらにその下位に黒色土が検出された。これによりピットと判明したものである。

（形状）平面形は中端、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

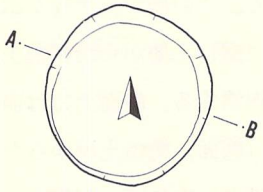
（規模）中端径1.25m×1.15m、底部径1.14m×1.07m、深さ0.73mである。

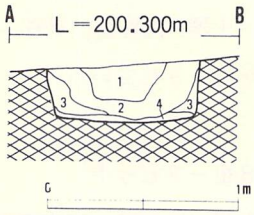
（埋土）5層に細分される。1層は中掫浮石層、

2層以下は白色浮石の多い埋土である。

（壁）上部から黒褐色土層、暗褐色土層、黄褐色土層であり、下部は直立する。

（底面）黄褐色土層からなり、平坦である。





1．黒 色 土 10YR 1.7/1 白色浮石が多い
2．黒褐色土 10YR 2/2 白色浮石が多い
3．黒褐色土 10YR 2/3 白色浮石が多い
4．褐 色 土 10YR 4/4

第42図　BⅢ－4ピット

BⅢ－4ピット

遺構（第42図，写真図版16）

（検出状況）BⅢi区西辺の暗褐色土層（Ⅴ層）面に、黒色～黒褐色土の円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径0.91m×0.86m、底部径0.81m×0.77m、深さ0.30mである。

（埋土）4層に細分される。1、2層は柔らかく、他はかたい。

（壁）暗褐色～褐色土層で、北壁のみやや外傾し、他は直立する。

（底面）明褐色土層からなり、ほぼ平坦である。

BⅣ－4ピット

遺構（第43図，写真図版16）

（検出状況）BⅣd区南西辺の調査区境界線際に位置する。緩斜面上位のため表土、耕作土を除去したのみで黄褐色土層（Ⅵ層）となり、その面で黒褐色土の円形プランとして検出された。

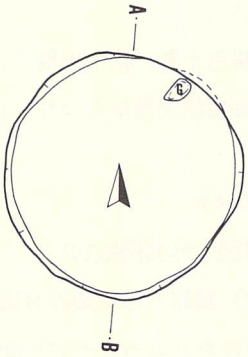
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状である。

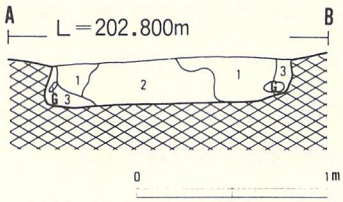
（規模）開口部径1.32m×1.26m、底部径1.23m×1.18m、深さ0.25mである。

（埋土）3層に細分される。いずれも地山の黄褐色土がまばらに混入する。

（壁）黄褐色土層で、内湾する。東側上部を溝に切られている。

（底面）黄褐色土層で、中央は平坦であるが壁寄りは椀状になる。





1．黒褐色土 10YR 2/2
2．暗褐色土 10YR 3/4
3．暗褐色土 10YR 3/3

第43図　BⅣ－4ピット

ＢⅣ－５ピット

遺構（第44図，写真図版16）

（検出状況）ＢⅣｅ区南東隅、表土を除去した段階で乾きが遅いことから遺構の予想をした。中掫浮石層まで掘り下げた段階で黒色土の円形プランとして検出された。

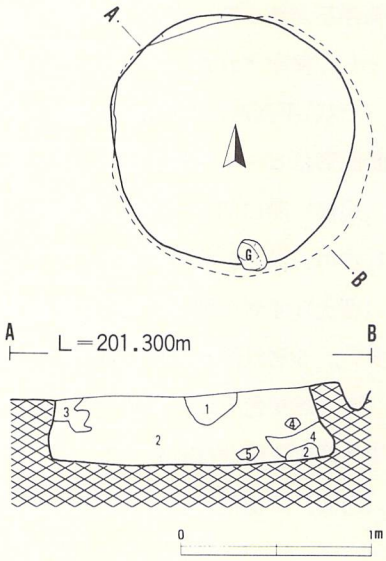
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はフラスコ状である。

（規模）開口部径1.30m、底部径1.45m×1.37m、深さ0.36mである。

（埋土）５層に細分されるが、主体は黒褐色土である。

（壁）上部から中掫浮石層、黒褐色土層で、一部直立状になる部分もあるがほぼ内傾する。

（底面）暗褐色土層からなり、ほぼ平坦である。



1．黒 色 土 10YR 2/1
2．黒褐色土 10YR 2/2
3．浅黄色～にぶい黄色 2.5Y 7/3～6/4 中掫浮石主体
4．暗褐色土 10YR 3/4 浮石が多い
5．明褐色土 7.5YR 5/8 浮石が多い

第44図　ＢⅣ－５ピット

ＢⅣ－６ピット

遺構（第45図，写真図版17）

（検出状況）ＢⅣｍ区南東部、黒褐色土を除去した褐色土層（Ⅴ層）面で、黒褐色土の円形プランとして検出された。

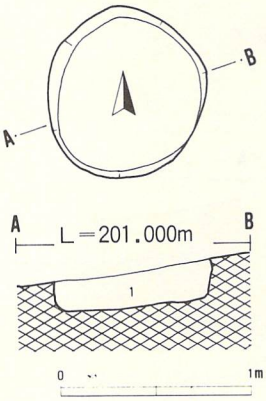
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状を呈するがフラスコ状の可能性もある。

（規模）開口部径0.89m×0.83m、底部径0.82m×0.74m、深さ0.18mである。

（埋土）地山のブロック土が混入する黒褐色土の単層である。

（壁）褐色土層で、斜面上位（東壁）がやや内湾するが他は直立する。

（底面）褐色土層で、ほぼ平坦であるが斜面に沿ってやや傾斜する。



1．黒褐色土 10YR 2/2

第45図　ＢⅣ－６ピット

ＢⅣ－７ピット

遺構（第46図，写真図版17）

（検出状況）ＢⅣａ区、Ⅳ層の黒褐色土を除去した段階で、中

撹浮石が数か所のブロック状をなす黒い円形プランとして検出された。

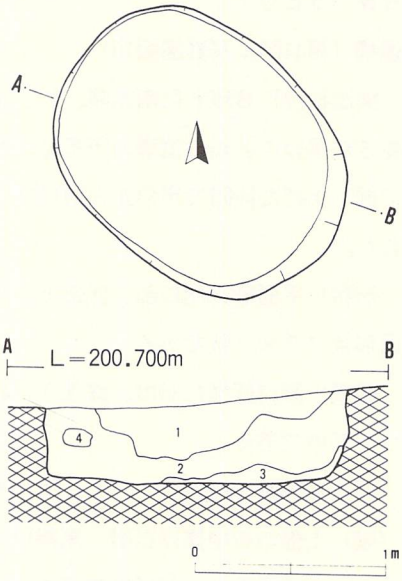
（形状）平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.65m×1.25m、底部径1.50m×1.18m、深さ0.41mである。

（埋土）４層に細分される。１層は柔らかく浮石が多い。３層は汚れた地山黄褐色土である。

（壁）黒褐色土層、褐色～黄褐色土層で、東壁がやや外傾するほかは直立する。

（底面）黄褐色土層からなり、平坦である。



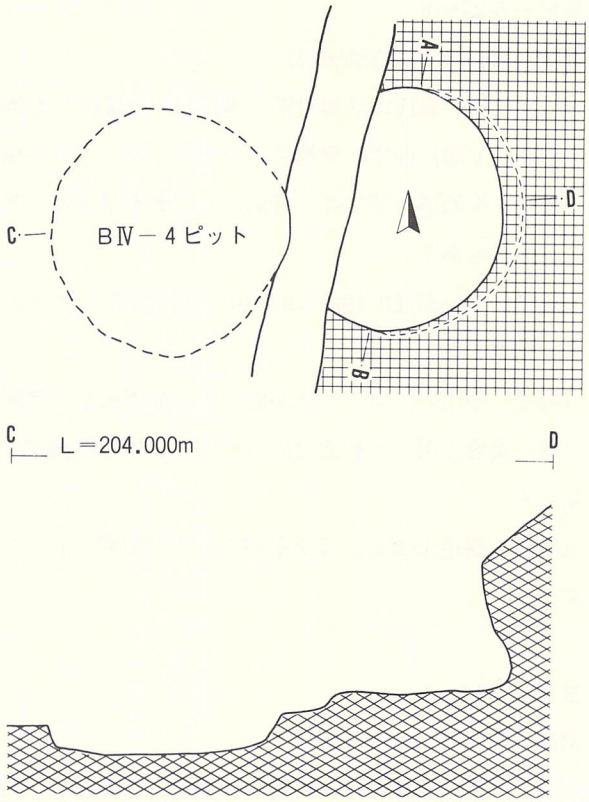
1．黒 色 土 10YR 2/1 赤色・白色浮石が多い
2．暗褐色土 7.5YR 3/4
3．褐 色 土 7.5YR 4/6
4．黄褐色土 10YR 5/6

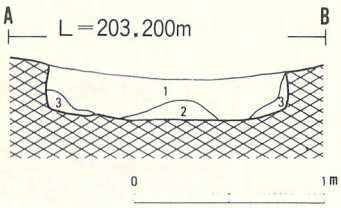
第46図　BⅣ－７ピット

BⅣ－８ピット

遺構（第47図，写真図版17）

（検出状況）BⅣd区の調査区境を走る溝を完掘したところ地山の黄褐色土が黒褐色土で切られていたことからピットと認定し、斜面の表土を除去してプランが検出された。BⅣ－４ピットと切り合う位置であるが、その間の溝により詳細は不明である。





1．黒褐色土 10YR 2/2
2．褐 色 土 10YR 4/4
3．暗褐色土 10YR 3/4

第47図　BⅣ－８ピット

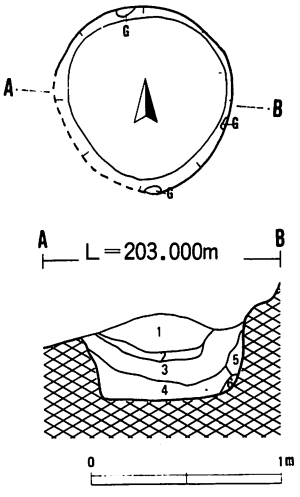
（形状）平面形は半分が消滅しているが、円形を呈するであろう。断面形はフラスコ状である。

（規模）開口部径1.28m、底部径1.30m、深さは山側で最大0.70mを測る。

（埋土）3層に細分される。1、3層は柔らかく、2層は赤色浮石が混入する。

（壁）黄褐色土層で、内傾する。地山の礫が表出する部分もある。

（底面）黄褐色土層からなり、山側の礫により凹凸があるが全体として平坦である。



1．黒褐色土 10YR 2/3 浮石が多い
2．黒 色 土 10YR 1.7/1 浮石が多い
3．黒褐色土～暗褐色土 10YR 2/3～3/3
4．黒褐色土 10YR 2/2
5．黒褐色土 10YR 2/3
6．褐 色 土 10YR 4/6

第48図　BⅣ－9ピット

BⅣ－9ピット

遺構（第48図，写真図版18）

（検出状況）BⅣh～l区調査区境の暗褐色土層（V層）面に黒褐色土の不整円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。

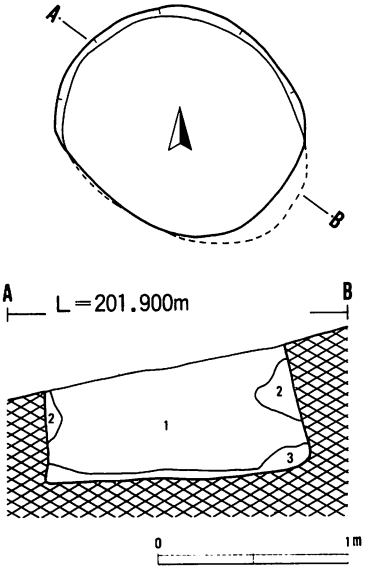
断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径0.98m×0.94m、底部径0.85m×0.83m、深さ0.45mである。

（埋土）6層に細分される。2層が黒色で柔らかい。6層は地山のブロック土で、他は黒褐色土である。

（壁）暗褐色～黒褐色土層、下部の一部が赤褐色浮石層で、南西壁に掘り過ぎがあるがほぼ直立する。

（底面）黒褐色土層からなり、ほぼ平坦である。



1．黒 色 土 10YR 2/1 浮石が多い
2．暗褐色土 10YR 3/3
3．黄褐色土 10YR 5/8

第49図　BⅣ－10ピット

BⅣ－10ピット

遺構（第49図，写真図版18）

（検出状況）BⅣg区北辺の黒褐色土層（Ⅳ層）中に、より黒い楕円形プランとして検出された。

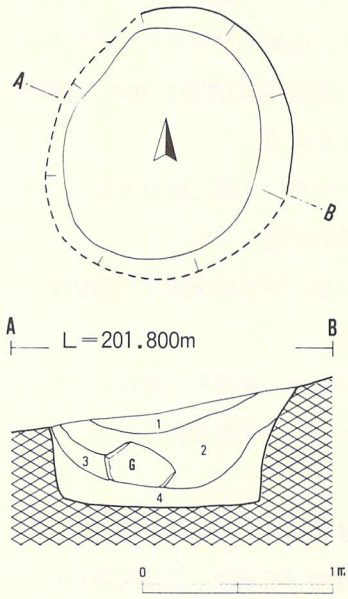
（形状）平面形は開口部底部とも楕円形を呈する。断面形はビーカー状であるが、一部フラスコ状を示す。

（規模）開口部径1.29m×1.14m、底部径1.34m×1.09m、深さ0.60mである。

（埋土）３層に細分されるが主体は浮石の多い黒色土である。いずれもかたくしまっている。

（壁）黒褐色～暗褐色土層、褐色土層で、南東壁が内傾するほかは直立する。

（底面）褐色土層からなり、平坦である。



1．黒 色 土 7.5YR 2/1 浮石が多い
2．黒褐色土 7.5YR 3/1 浮石が多い
3．黒 色 土 7.5YR 2/1 浮石が多い
4．黒褐色土 7.5YR 2/2 浮石が多い

第50図　BⅣ－11ピット

ＢⅣ－11ピット

遺構（第50図，写真図版18）

（検出状況）ＢⅣｃ区の暗褐色土層（Ｖ層）面に、黒色土の円形プランとして検出された。

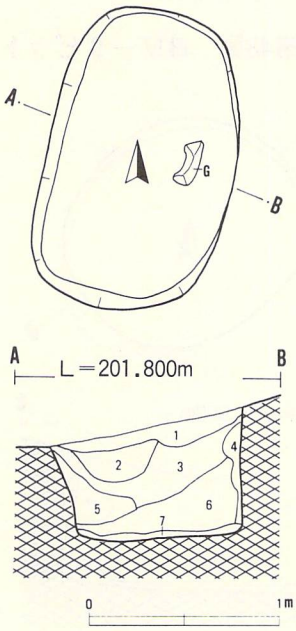
（形状）平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.46m×1.28m、底部径1.24m×1.04m、深さ0.52mである。

（埋土）4層に細分される。いずれも赤褐色、黄褐色浮石が15～20％程度混入し、固くしまっている。

（壁）暗褐色～黒褐色土層、褐色～明褐色土層で、掘り過ぎのため詳細は不明であるがほぼ直立する。

（底面）明褐色土層からなり、平坦である。



1．黒 色 土 10YR 2/1 赤色と白色の浮石が多い
2．黒 色 土 10YR 1.7/1 赤色と白色の浮石が多い
3．黒褐色土 10YR 2/2 赤色と白色の浮浮石が多い
4．黒褐色土 10YR 3/2
5．暗褐色土 10YR 3/4
6．黒褐色土 10YR 2/2
7．黄褐色土 10YR 5/6

第51図　BⅣ－12ピット

ＢⅣ－12ピット

遺構（第51図，写真図版19）

（検出状況）ＢⅣｃ～ＢⅢｏ区の暗褐色土層（Ｖ層）上面に、黒色土の楕円形プランとして検出された。

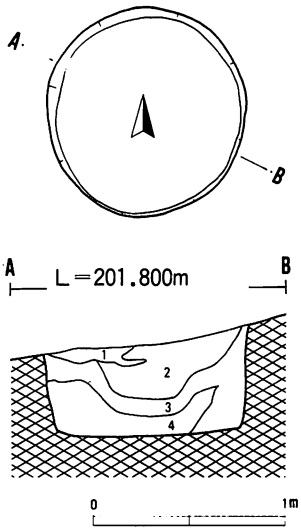
（形状）平面形は開口部、底部とも隅丸長方形状を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.59m×0.99m、底部径1.48m×0.92m、深さ0.59mである。

（埋土）７層に細分される。２層を除きかたくしまっている。上位は浮石が多く混入している。

（壁）暗褐色～黒褐色土層で、ほぼ直立する。

（底面）明褐色土層からなり、平坦である。



1．暗褐色土 10YR 3/3 浮石が多い　黒色土が混入
2．黒 色 土 10YR 2/1 浮石が多い
3．黒褐色土 10YR 2/3
4．暗褐色土 10YR 3/3

第52図　BⅣ－13ピット

ＢⅣ－13ピット

遺構（第52図，写真図版19）

（検出状況）ＢⅣｇ区の黒褐色土層（Ｖ層）面に、黒色土の円形プランとして検出された。

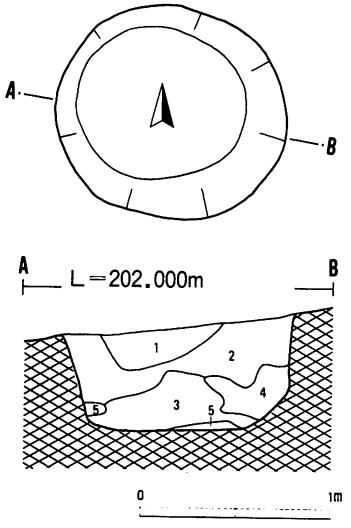
（形状）　平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.11m×1.06m、底部径1.05m×0.97m、深さ0.49mである。

（埋土）４層に細分されるが、３、４層の境界は明瞭でない。上位は浮石が多い。

（壁）黒褐色土層、褐色～明褐色土層で、ほぼ直立する。

（底面）明褐色土層で、平坦である。



1．黒 色 土 10YR 1.7/1 浮石が多い
2．黒褐色土 10YR 3/2　浮石が多い
3．暗褐色土 10YR 3/3
4．褐 色 土 10YR 4/4
5．黄褐色土 10YR 5/6

第53図　BⅣ－14ピット

ＢⅣ－14ピット

遺構（第53図，写真図版19）

（検出状況）ＢⅣｋ区中央、黒褐色土層（Ｖ層）面で、黒色～黒褐色土の円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部が楕円形、底部が円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.22m×1.10m、底部径0.89m×0.82m深さ0.54mである。

（埋土）５層に細分される。上位に浮石が多く、３層のみやわらかい。

（壁）黒褐色土層、一部赤褐色浮石層をはさむ明褐色土層で、ほぼ直立する。東半は立ちあがりが明確でない。

（底面）明褐色土層からなり、中央は平坦であるが壁寄りは傾斜する。

ＢⅣ－15ピット

遺構（第54図，写真図版20）

（検出状況）ＢⅣｋ～１区の黒褐色土層（Ｖ層）面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。

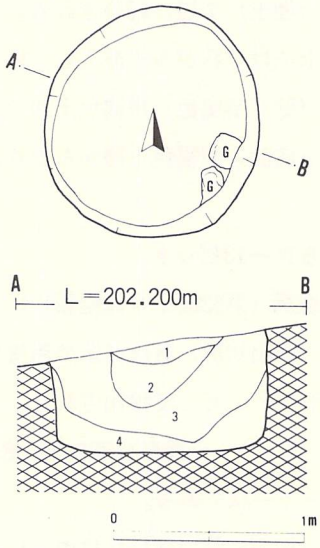
（形状）平面形は開口部が円形、底部が楕円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.22m×1.15m、底部径1.12m×0.98m、深さ0.58mである。

（埋土）4層に細分される。3層まで浮石が多く混入している。

（壁）黒褐色土層、明褐色土層で、ほぼ直立する。

（底面）明褐色土層からなり、平坦である。



1．黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
2．黒褐色土 10YR 2/1 浮石が多い
3．黒褐色土 10YR 3/2 浮石が多い
4．暗褐色土 10YR 3/3

第54図　ＢⅣ－15ピット

ＢⅣ－16ピット

遺構（第55図，写真図版20）

（検出状況）ＢⅣｆ～ｇ区中央の黒褐色土層（Ｖ層）面に、黒色～黒褐色土の円形プランとして検出された。一部はＢⅣ－１住居址煙出し部に切られている。

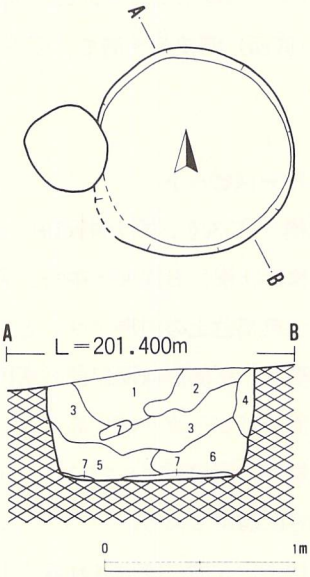
（形状）平面形は開口部、底部とも円形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部径1.11m×1.08m、底部径1.00m、深さ0.58mである。

（埋土）７層に細分される。上位は浮石が多い。

（壁）黒褐色土層、褐色～明褐色土層で、ほぼ直立する。

（底面）明褐色土層からなり、平坦である。



1．黒 色 土 10YR 2/1 浮石が多い
2．黒褐色土 10YR 3/2 浮石が多い
3．黒褐色土 10YR 2/3 浮石が多い
4．黒褐色土 10YR 3/2
5．暗褐色土 10YR 3/4
6．黒褐色土 10YR 2/3
7．黄褐色土 10YR 5/6

第55図　ＢⅣ－16ピット

ＢⅤ－１ピット

遺構（第56図，写真図版20）

（検出状況）ＢＶｄ区北辺の暗褐色土層（Ｖ層）面に、黒褐色土の円形プランとして検出された。

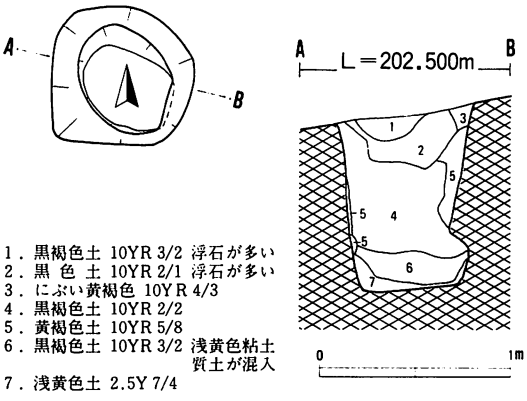
（形状）平面形は開口部が不整円形、底部が楕円形を呈する。断面形は円筒形である。

（規模）開口部径0.82m×0.80m、底部径0.50m×0.83m、深さ0.92mである。

（埋土）７層に細分される。壁際と底面は黄褐色土、その他は黒褐色土が大半を占める。

（壁）暗褐色土層、明褐色土層で、下部に抉り込みが一部あるほかはほぼ直立する。

（底面）明褐色土層からなり、ほぼ平坦である。



第56図　ＢＶ－１ピット

(3) 陥し穴状遺構

ＡⅡ－１陥し穴状遺構

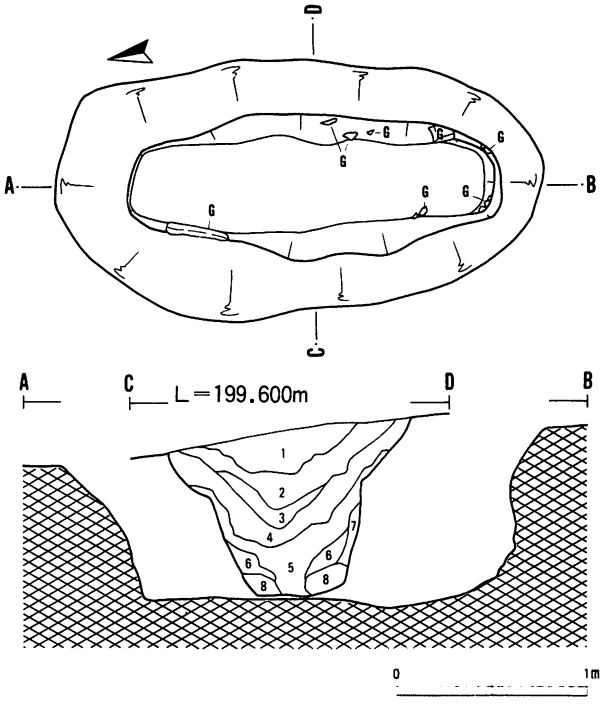
遺構（第57図，写真図版23）

（検出状況）ＡⅡ１区北西隅に位置する。崖に向かって傾斜する変換点の褐色土層（Ｖ層）面で、長楕円形に入る灰白色火山灰が分布していることから確認された。

（形状）平面形は南北方向に長軸をもち、開口部が楕円形、中端、底部が隅丸長方形を呈する。断面形は長軸・短軸方向ともバケツ状ないしビーカー状を呈する。

（規模）開口部径2.60m×1.30m、中部の径1.96m×0.77m、底部径1.86m×0.44m、深さ0.88mである。

（埋土）８層に細分される。最上位に灰白色火山灰、中位に暗褐色



第57図　ＡⅡ－１陥し穴状遺構

土、下位壁寄りに崩落土が埋積する。3・8層は礫が混入する。

（壁）上部から褐色～暗褐色土層、黄褐色土層、礫混じりの灰黄色粘土質土層で、崩落が多く上部が大きく外傾する。

（底面）灰黄色粘土質土層からなり、礫が表出して凹凸が激しい。

遺物（第82図，写真図版35）

（土器）縄文時代後期の破片（58）が1点出土している。

ＡII－2陥し穴状遺構

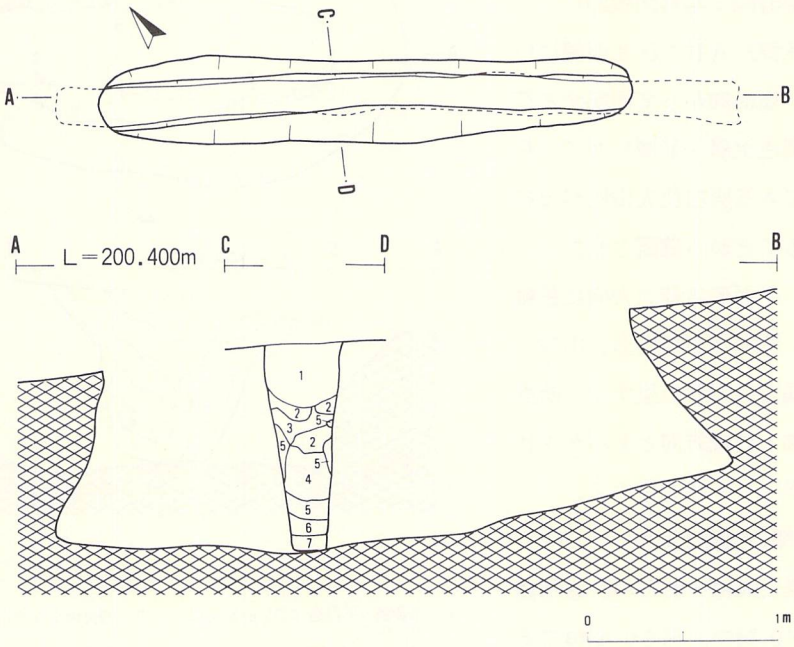
遺構（第58図，写真図版21）

（検出状況）ＡII１～ＢIIｉ区、褐色～黒褐色土層（Ｖ層）面で黒褐色土の筋状プランとして検出された。

（形状）平面形は北西－南東方向に長軸をもち、開口部が長楕円形、底部が帯状を呈する。短軸方向の断面形はＵ字状を呈する。

（規模）開口部径2.80m ×0.43m 、底部径3.58m ×0.17m 、深さ1.08m である。

（埋土）７層に細分される。黒褐色土と褐色土との互層ないし混土状態である。最下位に灰白



1．黒褐色土 10YR 2/2
2．褐 色 土 10YR 4/4
3．黒褐色土 10YR 2/3 黄褐色土が混入
4．黒褐色土 10YR 2/3と褐色土 10YR 4/4との混土
5．明褐色土 10YR 5/8
6．黒褐色土 10YR 2/2 灰白色粘土質土が混入
7．灰白色粘土質土 5Y 7/2 砂粒が混入

第58図　ＡⅡ－２陥し穴状遺構

色粘土質が推積する。

（壁）上部から褐色～黒褐色土層、黄褐色土層、灰白色粘土質土層で、短軸方向は直立し、長軸方向は強く内傾する。

（底面）オリーブ灰色砂質土層で、やや凹凸をなしている。中央部から斜面上位は斜面と同様に傾斜する。

ＡⅢ－１陥し穴状遺構

遺構（第59図，写真図版21）

（検出状況）ＡⅢｐ～ＢⅢｍ区の中掫浮石層面に、長楕円形に入いる黒褐色土のプランとして検出された。

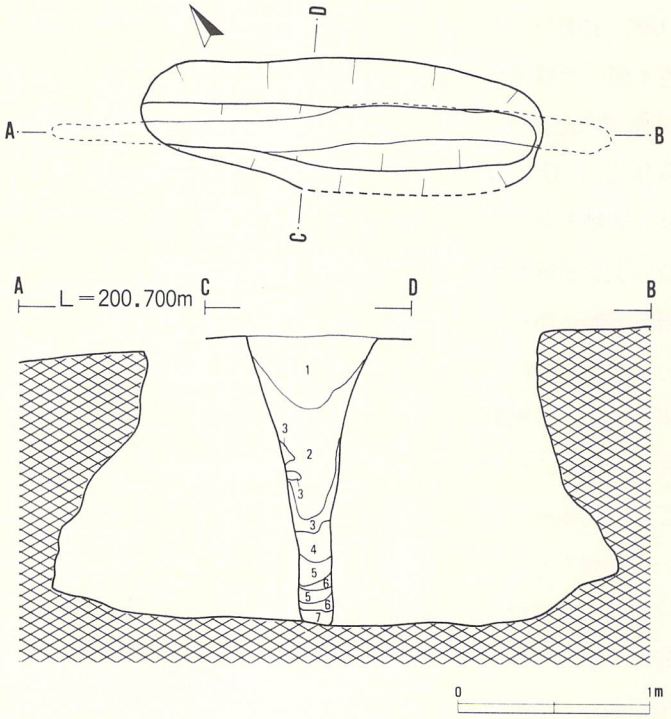
（形状）平面形は北西一南東方向に長軸をもち、開口部に掘り過ぎがあるが長楕円形、底部が中央で屈曲した筋状を呈する。短軸方向の断面形はロート状を呈する。

（規模）開口部径2.12ｍ×0.57ｍ、中央部の径2.10ｍ×0.34ｍ、底部径2.93ｍ×0.22ｍ（最小８cmを測る）、深さ1.54ｍである。

（埋土）7層に細分される。中位に黄褐色土をはさむ黒褐色土主体の埋土である。2層には中掫浮石が混入する。最下位には灰白色粘土質土が堆積する。

（壁）上部から中掫浮石層、褐色土層、明黄褐色粘土質土層、オリーブ灰白砂質土層で、短軸方向の下部が直立し、上部が外傾する。長軸方向は両壁とも内傾する。

（底面）明黄褐色砂質土層で



1．黒褐色土 10YR 2/2
2．黒 色 土 10YR 2/1 中掫浮石が混入
3．黄褐色土 10YR 5/6
4．黒褐色土 10YR 3/2
5．黒褐色土 10YR 2/2 灰白色粘土質土が混入
6．灰白色粘土質土 2.5Y 8/2
7．灰白色粘土質土 2.5Y 8/1

第59図　ＡⅢ－１陥し穴状遺構

長軸方向壁寄りが登り勾配になる。

ＢⅡ－１陥し穴状遺構

遺構（第60図，写真図版21）

（検出状況）ＢⅡｇ区の中央調査区境界山際にかかった地点であり、赤褐色浮石を含む褐色土層（Ｖ層）面に、斜面と平行な黒褐色土の筋状プランとして検出された。

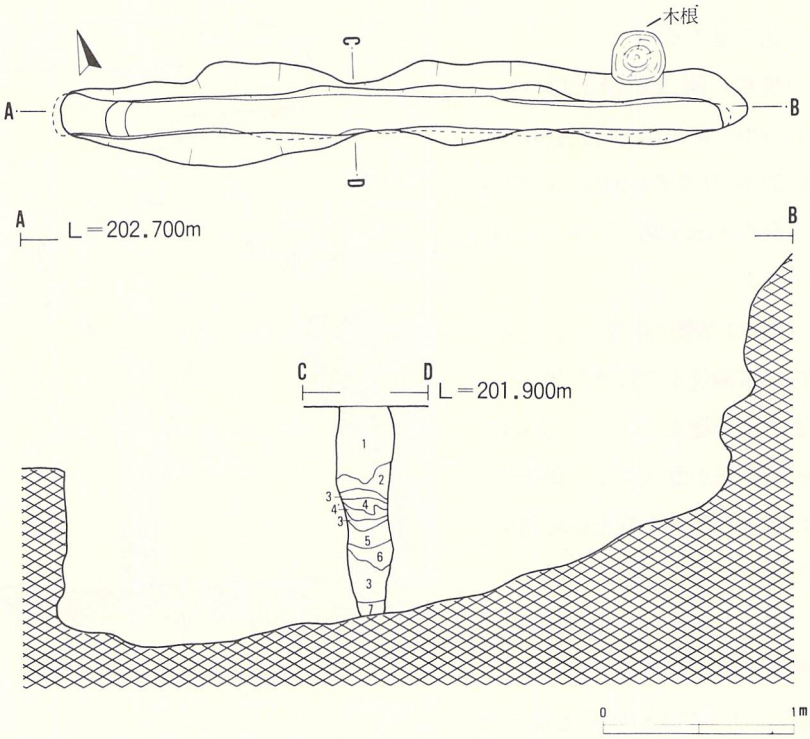
（形状）平面形は西北西－東南東に長軸をもち、開口部が崩落して不整な長楕円形、底部は帯状を呈する。短軸方向の断面形はＵ字状を呈する。

（規模）開口部径3.62m×0.26m（最大0.56m）、中端径3.48m×0.22m、底部径3.56m×0.18m、深さ1.10mである。

（埋土）７層に細分される。黒褐色土と暗褐色土との互層となる。黒褐色土以外は壁の崩落土である。最下層は粘土質土である。

（壁）上部から褐色土層、赤褐色浮石層、黄褐色土層、黄灰色土層となり、短軸方向の中位以上は崩落や木根等で形が崩れているが下部でほぼ直立する。長軸方向は下部が内傾し、上部が直立ないし外傾する。

（底面）黄灰色土層で、斜面下方に段があり、上方は階段状を示しながら斜面と同じく傾斜する。



1．黒褐色土 10YR 2/2 浮石が多い
2．褐 色 土 10YR 4/4
3．黒褐色土 10YR 2/2 3′は浮石が混入しない
4．暗褐色土 10YR 3/3 4′はやや明るい
5．暗褐色土 10YR 3/4
6．黄褐色土 10YR 5/8
7．浅黄橙色粘土質土 10YR 8/4

第60図　ＢⅡ－１陥し穴状遺構

ＢⅡ－２陥し穴状遺構

遺構（第61図，写真図版23）

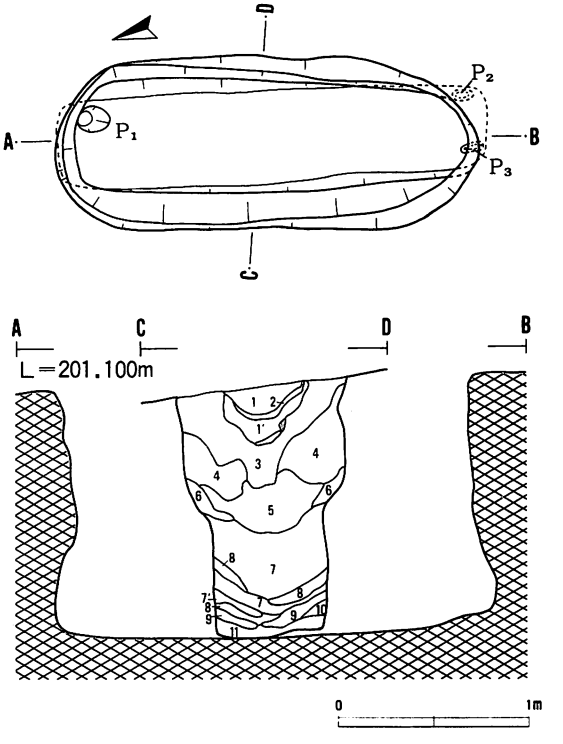
（検出状況）ＢⅡｊ区西寄りの黒褐色土層（Ⅳ層）面に、黄褐色土や灰白色土を混入する暗褐色土の楕円形プランとして検出された。

（形状）平面形は南北方向に長軸をもち、開口部が楕円形、底部が長方形を呈する。短軸方向の断面形は中段のあるコップ状を呈する。

（規模）開口部径2.22m×0.91m、中端径2.10m×0.58m、底部径2.26m×0.48m、深さ1.32mである。

（埋土）11層に細分される。上位は灰白色土ないし褐色土が混入する暗褐色土～黒褐色土で、下位は褐色土ないし赤褐色土と黒褐色土との互層である。２層は炭化物層で、一部焼土がみられる。３層は灰白色土が主体で、７層は黒褐色土と褐色～赤褐色土の互層であるが不鮮明である。

（壁）上部から黒褐色土層、暗褐色～褐色土層、赤褐色浮石層、黄褐色ないし赤褐色土層、黄灰白土層である。短軸方向の上部は段をもち、さらに外傾するが、下部は直立する。長軸方向の下部は内傾し上部はほぼ直立する。



1．暗褐色土 10YR 3/3　黄褐色土が混入　1′はより多く混入
2．黒 色 土 10YR 2/1　炭化物層　一部に焼土が混入
3．灰白色土 2.5Y 7/1と暗褐色土 10YR 3/3との混土
4．黒褐色土 10YR 2/2
5．黒褐色土 10YR 3/1　灰白色土が混入
6．黒褐色土 10YR 3/2と黄褐色土 10YR 5/6との混土
7．黒褐色土 10YR 2/2と明褐色土 7.5YR 5/6との互層ないし混合層　灰白色土も混入
8．明褐色土 7.5YR 5/8
9．黒褐色土 10YR 2/2と明褐色土 7.5YR 5/8との混土
10．灰白色粘土質土 10YR 8/2
11．灰白色粘土質土 10YR 8/2と黒褐色土 10YR 2/2との混土

第61図　ＢⅡ－２陥し穴状遺構

（底面）黄灰白土層で、ほとんど平坦である。三隅に抗穴がある。P_1は10cm、P_2、P_3は５cmの深さである。

ＢⅡ－３陥し穴状遺構

遺構（第62図，写真図版22）

（検出状況）ＢⅡｎ区中央の黒褐色土層（Ⅳ層）面に、斜面と平行に走る黒色土の筋状プラン

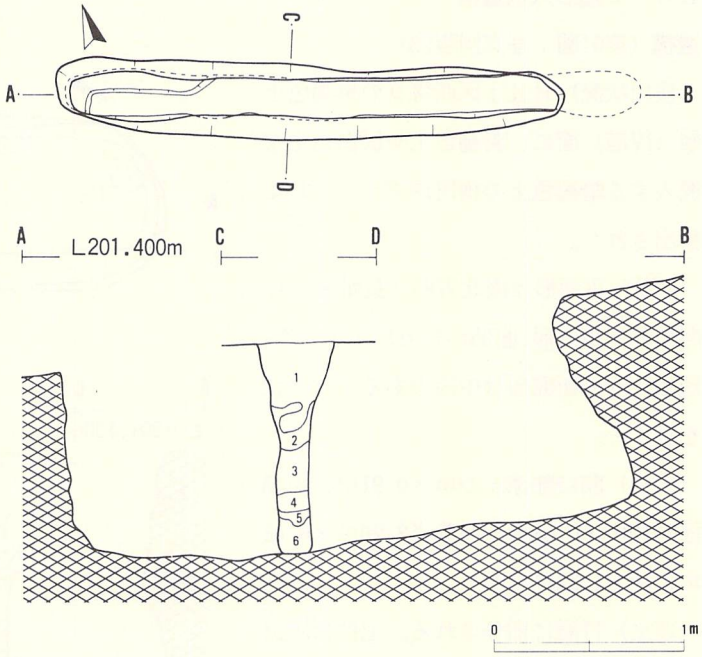
として検出された。

（形状）平面形は西北西―東南東方向に長軸をもち、開口部、底部とも帯状を呈する。短軸方向の断面形はロート状を呈する。

（規模）開口部径2.68m×0.39m、中端径2.58m×0.19m、底部径3.04m×0.21m、深さ1.03mである。

（埋土）6層に細分される。上位が黒色土、中位が黒褐色土で、下位の5、6層は粘土質土である。

（壁）上部から黒褐色土層、褐色土層、黄褐色土層、灰白色土層である。短軸方向は上部が外傾するが下部は直立する。長軸方向は斜面上方側のみ内傾し、下方は直立する。



1．黒 色 土 10YR 2/1 浮石が多い
2．暗褐色土 10YR 3/3
3．黒褐色土 10YR 2/2
4．褐 色 土 10YR 4/4
5．にぶい褐色粘土質土 7.5YR 5/3
6．灰褐色粘土質土 7.5YR 5/2

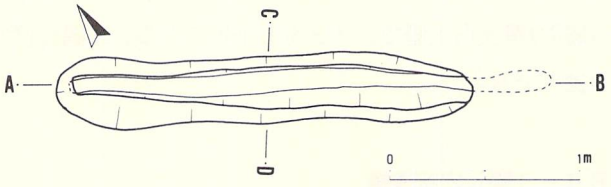
第62図　BⅡ－3陥し穴状遺構

（底面）灰白色土層からなり、斜面下方に段状の部分があるが他は平坦で、斜面に沿って傾斜する。

BⅢ－1陥し穴状遺構

遺構（第63・64図，写真図版22）

（検出状況）BⅡj区西辺、BⅢ－2住居址の床面精査の際に黒色土の筋として発見された。検出作業の結果中掫浮石層を切っていることが判明し、陥し穴状遺構と認定した。

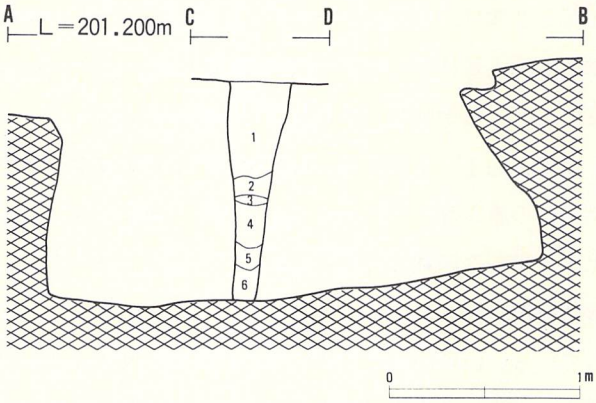


第63図　BⅢ－1陥し穴状遺構平面

（形状）平面形は北西一南東方向に長軸をもち、開口部が幅のせまい楕円形、底部が細く中央部でやや屈曲した筋状を呈する。短軸方向の断面形はU字状を呈する。

（規模）開口部径2.20m×0.34m、底部径2.50m×0.10m、深さ1.16mである。

（埋土）6層に細分される。上位はやや固めの黒色土、中位は黒褐色土が主体であり、下位に柔らかい黒褐色土が堆積する。



1．黒 色 土 10YR 2/1
2．黒褐色土 10YR 2/2
3．黒褐色土 10YR 3/1
4．褐 色 土 10YR 4/4
5．黒褐色土 10YR 2/2
6．暗褐色土 10YR 3/4

第64図　BⅢ－1陥し穴状遺構断面

（壁）上部から中掘浮石層、黒褐色～褐色土層、黄褐色土層、灰白色土層であり、短軸方向はほぼ直立するが、南壁は全体として外傾ぎみである。長軸方向は斜面下方は直立状であるが、上方は深く内傾する。

（底面）灰白色土層で凹凸をもちながら中央部がやや凹む。全体としては斜面に沿って傾斜する。

〔2〕出土遺物

縄文時代の遺物は遺構内及び遺構外出土も合わせて土器約3,500点、土製品3点、石器74点である。時期は早期から晩期にわたる。

(1) **土　器**（第80図～第93図，写真図版33～46）

遺構に関わって出土したものは少なく、ほとんどは遺構外のものである。破片が多く、復元できた個体数は少ない。施文法や胎土、器形などの違いにより、第Ⅰ群～Ⅴ群に大別した。第Ⅰ群土器は早期中葉、第Ⅱ群土器は早期末～前期初頭、第Ⅲ群土器は後期前葉、第Ⅳ群土器は晩期、第Ⅴ群土器は粗製のもの及び底部一括(主に後期前葉)であり、各群をさらに細別した。本遺跡で最も出土量の豊富なものは第Ⅲ群である。

第Ⅰ群土器（第80図1～20，写真図版33）

縄文時代早期中葉に位置づけられている貝殻文系の土器である。施文の手法が異なり、1～3類に細分した。1類は貝殻条痕文を地文としているもの、2類は貝殻腹縁圧痕文を地文としているもの、3類は平行沈線と貝殻腹縁圧痕文を併用しているものである。土器の編年上では

1類と2類は、白浜式、寺の沢式、吹切沢式などに類似し、3類は物見台式に比定される。各類とも出土量は多くない。本群土器の出土する層位は基本土層第V～VI層のものを少量含むが、ほとんどは粗掘段階（I～II層）の出土である。

1類は図1～7である。貝殻腹縁による条痕文（撫で調整痕）を地文としているが、爪形の刺突文の施されているもの（1～5）と地文のみのみのもの(6)がある。形状は口縁部がほぼ直上する単純な深鉢形と推定されるが、底部は全く不明である。1は2列の爪形刺突文が連続山形状（波状か？）に斜めに並び、さらにその上部に並列する、爪形刺突文が口縁部文様帯をなしている。口唇部には貝殻腹縁の圧痕文が施されている。内面にも条痕の撫で調整痕が残る。胎土に繊維は含まず、焼成は良い。2も同様の爪形刺突文をもち、口唇部に貝殻腹縁圧痕文を施している。焼成は不良である。3～5は同一個体である。施文や胎土焼成は1に近似している。6は条痕文のみの深鉢である。口縁部上端には凹凸があり、不整な小波状口縁様となっている。胎土に砂粒を多く含んで分厚く、1～5とはやや異質である。7は1～6とは異なる種類の貝殻による条痕とみられる。条痕の間隔がせまく、明瞭である。

2類は図8～14である。貝殻腹縁圧痕文を地文としたもので、口縁部(8、9)と体部5点(10～14)がある。破片のため、器形の判明するものはない。貝殻腹縁圧痕文には縦位に並列するものとやや斜めに傾いているものがある。焼成の良いものが多い。胎土中に繊維はほとんど見られないが、12で微量含まれている。8は口唇部にも圧痕文が施されている。9は口唇部につまみ状の小突起がついている。13には斜めの圧痕文に直交した貝殻条痕文（調整痕）が残っている。

3類は図15～20である。半截竹管によると思われる幅の狭い平行沈線と貝殻腹縁圧痕文を併用している類である。出土点数は少ない。薄手で焼成も良く、胎土に繊維は含まれない。器形は不明である。15～18は同一個体である。平行沈線の直線文に沿って貝殻腹縁圧痕文が施され、特殊な効果を表わしている。文様の屈曲点や端部には円形の刺突文がつけられる。内面には貝殻条痕による調整痕が残っている。17では貝殻腹縁圧痕文が、沈線から離れて地文様に並列している部分がある。18には貝殻頂部の圧痕文がついている。19と20は同一個体の体部片である。施文や胎土は15などに酷似している。

第II群土器（第80図21～第82図52，写真図版33～34）

縄文時代早期末～前期初頭に位置づけられる土器群である。出土層位は基本土層第III～V層が多い。縄文を地文とした土器が主体である。施文の相違により1～6類に細分した。1類は表裏両面に縄文を施文するもので編年上では赤御堂式や早稲田IV類などに相当する。2類は表面のみ縄文を施文するもので、早期末の早稲田V類相当である。3類は無文のもので早期末であろうか。4類は特殊な縄文をもつもので、時期は早期末～前期初頭と思われる。5類はルー

プ文などが見られ、前期初頭の大木１式などに類似し、６類は不整な撚系文を用いており大木２式に似る。

１類は図21～30である。表裏両面に施す縄文には単節斜行縄文、０段多条縄文、右撚りと左撚り合わせて撚りもどしの見られるものなどの種類がある。口縁部はなく体部と底部のみで器形は不明である。厚手で、胎土に繊維を含まない。

21～23は単節斜行縄文の体部である。21には沈線文が見られる。24～26、28は０段多条縄文の体部である。27と29は、右撚りと左撚りを合わせて撚りもどしの見られる原体の縄文をもつ。30は０段多条縄文の底部である。底部の末端は欠けており、形状は不明だが尖底となるらしい。

２類は図31～40である。表面にのみ縄文を施するもので、胎土に繊維を多く含む。縄文には単節斜行縄文と０段多条縄文がある。分厚い器厚で焼成も軟質なものがほとんどである。31～33は単節斜行縄文を施すものである。31は補修孔のある口縁部片である。器壁に凹凸がある。口唇部は丸味をもち、不整な波状を呈している。32、33は底部であるが、先端を欠いている。尖底と見られる。34～40は０段多条縄文をもつものである。口縁部は丸味をもつもの(34、35)と平らに撫でられているもの（36、37）がある。前者は軟質の焼成であるが、後者は比較的硬質である。36には補修孔がある。38～40は０段多条縄文の体部である。

３類は図41の１点のみである。AIVの土取穴から出土している。体部と底部は接合しない。無文で平縁の小型尖底深鉢である。薄手で、胎土に若干繊維を含む。尖底部は傾斜が緩い形状である。内面には煤が多く付着している。

４類は図42～46である。特殊な縄文を施文するものを一括している。２類土器と併行するものとみられる。42と44は単節斜行縄文を重ねて施文している。43は多軸絡条体の回転施文である。45は０段条縄文、46は極太の単節斜行縄文と思われる。

５類は図47～48の２点である。口縁部片で、口唇部が撫でられ平坦とされている。胎土には繊維を含んでいる。47は単節斜行縄文を地文とするが、原体の末端部によるループ文が見られる。48は０段多条縄文を地文とし、角棒状工具の先端によって押し引き文が横方向に３条見られる。

６類は図49～52の４点である。不整な横位の撚糸文を施すもので胎土に繊維を多く含む。49は焼成不良の体部片で、補修孔が見られる。50と51は口縁部の上部に不整撚糸文帯をもち、２個１対の小突起がつく。口唇部は丸味を帯びた断面形である。52は不整撚糸文のみの体部片である。

第Ⅲ群土器（第82図53～第90図184，写真図版35～43）

縄文時代後期前葉の土器群である。編年上では十腰内Ⅰ式の前半期のものに比定される。本遺跡で最も多く出土している。施文法の相違から１～６類に分類し、その中でさらに細分した

類がある。なおIII群の中で分類の不確定な口縁部を７類として一括している。

１類は隆線文を用いているもので図53～65などがある。これらの中で隆線のみのもの１ａ類隆線文と沈線文を併用しているものを１ｂ類とした。

１ａ類は図53～55の３点である。同一個体とみられる深鉢の口縁部である。隆線による区画文やボタン状の貼付文が施されている。焼成は良くない。

１ｂ類は図56～65などである。隆線文による楕円形や曲線状の区画に沿って、沈線文を施している。器形の判明するものには、口縁部が外反する深鉢や体部が大きく脹らむ壺形土器などがある。56～59は隅丸長方形の区画をもつ口縁部片である。58は表裏両面に朱塗りが施されている。60は口縁部～体部にかけて器形の推定できた壺形土器であるが、残存部位は少ない。三角形の区画文や楕円状の曲線文で表現され、区画の節目にあたる隆線文上には円形の刺突文が２個～３個つく。口縁部上位にも等間隔で円形の穿孔が並んでいる。

61～63は同一個体の口縁部～体部破片である。大波状口縁の深鉢で、隆線や沈線文による長円や曲線の区画文をもつ。煤が多く付着する。64も大波状口縁の深鉢である。突起部には「８」字状の隆線文が貼付けられ、沈線の曲線文がみられる。他の１ｂ類とは若干異なるようである。65は壺形土器の体部片で、表面は朱塗りである。60と同様に隆線の節目に円形の刺突がある。

２類は無文の地に沈線で区画文や曲線文を施す図66～101などである。III群土器の中でも本類がもっとも出土量が多い。これらのうち、平行沈線による入組文や曲線文をもつものを２ａ類、長楕円などの区画文や円文をもつものを２ｂ類と細分した。

２ａ類は図66～87などである。平行沈線による曲線文には、渦巻文、弧状文、入組文などが表現されている。器形の判明するものでは壺形土器が多い。これらのうち69・80～87は比較的間隔のせまい平行線を用いているものである。66は壺形土器の体部で、口縁部を欠く。体部上半に文様帯をもち、底部の周縁にも平行線の弧状文が見られる。外面に煤が多く付着する。67は大波状口縁の小型深鉢で底部は不明である。口縁部の突起部は６個と推定される。文様は口縁部で突起毎に隅丸の三角形状のモチーフが連結し、体部で渦巻文を配した区画文を施す。68～70は壺形土器の口縁部である。68の頸部は特に細く、徳利形となるものであろう。71は大波状口縁の深鉢の口縁部である。沈線が複雑に入り組んだ文様である。煤が多く付着する。73～78は既述の66～71などと同類の体部片である。

79は浅い沈線を用いており、他のものとは異なるが胎土・焼成は似ている。80～82は前述のように細い平行線を用いている口縁部片である。大波状口縁の小型深鉢形と思われる。83～87はその体部片である。

２ｂ類は図88～101である。沈線による長楕円文や円文などをモチーフとしている。88は体部上半に長楕円形と円文、平行線文を用いた単純な文様帯をもつ壺形土器である。口縁部はやや

肥厚している。残存部位は少ない。89は同様の文様帯をもつ口縁部片である。口縁部には貼り付けられた隆帯があり肥厚している。90は波状口縁の深鉢の破片である。長楕円の切れ目には縦の弧状文がみられる。91は大型の壺形土器の口縁部である。幅の狭まい長楕円文が多数重層して施され、区画に1本の隆線が横走する。口縁部上端は隆帯が貼り付けられ肥厚する。

92～101は長楕円形の区画文をより簡略化したものである。平行線を縦に区切り、長方形状のモチーフをもつ口縁部片である。波状口縁と平口縁の両者がある、隆帯の貼り付け（折り返し口縁）は92～95、98の5点に見られる。95には竹管円文の刺突列が施されている。96、97、100は同一個体である。99は内外朱塗りのものである。

3類は地文に縄文が用いられ、沈線で区画文や曲線文を施すもので、図102～119などがある。施文やモチーフに相違があり、a～cの3種に細分した。3a類は隆線による区画文を口縁部にもつもの、3b類は波状口縁を呈し、短い棒状の貼付文を突起部にもつもの、3c類は沈線の区画内を磨消し、磨消縄文による表現のものである。3類の中では3b、3c類が比較的多く出土している。

3a類は図102と103の2点である。2～3本の平行沈線の区画文や渦巻文、円文が施文されている。102は口縁部に低い突起を4個もつ大型深鉢である。残存部位は少ない。口縁部文様帯は突起部を中心に展開している。突起の中央には円弧文が重なり、その左右に長楕円形の区画文と、それに沿って隆線文の貼り付けがなされている。隆線文上には刺突列が施される。体部の文様は突起部から懸垂した渦巻文が続き、体部中位でも渦巻文が横に並ぶ。地文の縄文は間隔をおいて縦に施され、一部に磨消されて消えている部分がある。地文は重視されていない印象である。

3b類は図104～108である。口縁部に短い棒状の貼付文をもち、それを中心に文様が展開する。やや外反した口縁部は波状を呈し、体部の脹らんだ深鉢形の器形とみられる。104～107はその口縁部片である。108は器形の判明した唯一のものである。3本の平行沈線で渦巻文や曲線の区画文などを描いている。地文の縄文は102などと同様でまばらな印象である。

3c類は109～119である。磨消縄文手法のものを一括している。器形は平縁の深鉢と推定されるものが多い。口縁部が折り返し口縁となって肥厚しているのは109、113の2点である。109は口縁部が外反し、体部が脹らむ小型の深鉢である。残存部は少ない。口縁部の肥厚部分には縄文を残し、その下の頸部は無文、体部上半は沈線による文様となる。110と111は同一個体である。三角形の区画文が重要モチーフである。112と116も同一個体である。区画文内の無文部には横S字状の沈線文が配されている。113～115は口縁部片であるがいずれも細片である。117～119は同類の体部片である。

4類は沈線文を地文としているもので、図120～135である。地文とする沈線には網目状文の

ものや櫛目状文、縦位の平行線文などの種類がある。胎土や器形の点では後述する5類の土器と非常によく似ている。5類における撚糸文の効果を沈線で表現したものと考えられる。

沈線の網目状文(格子目状)を用いているのは120～130である。器形は平縁で口縁部がほぼ直上する単純な深鉢形が主である。120はAIII区より一括して出土した大型の深鉢で体部下半を欠く。口縁部の上部は肥厚し、その下位に1本の沈線を施している。赤褐色で焼成も良い。121は口縁部の肥厚はなく、横走する沈線が2本の口縁部片である。122は肥厚した口縁の下に平行沈線（3本）と縦に区切る線をもち、その下は地文の沈線である。123～130は同類の体部片である。124と125には横走する沈線がみられる。

131は櫛目状文を地文とした大型の深鉢である。BIII区に正立して一括出土した。体部下半の一部を欠くがほぼ完形である。口縁部が緩く外反した円筒形に近い器形である。櫛目文を縦に施すが、口縁の上端と体部の下部は無文のまま残している。口縁部の上端は撫で消した部分もある。櫛目を描く工具の原体幅は2cm程である。焼成良好で煤が多く付着する。

132は緩く湾曲した斜線を地文とした深鉢である。残存部位は少ない。口縁部が直上し、体部がやや脹らむ器形である。焼成は良くなく、煤が外面に付着する。

133～135は幅の狭い縦位の平行沈線文を地文としたものである。口縁部が外反する深鉢形らしい。口縁部に3本の平行沈線が横走する。

5類土器は撚糸文を地文としているもので、図136～165である。出土量が多い。地文とする撚糸文には網目状（格子目状）のものと単に縦位の平行線となるものの2種がある。前者が多い。

網目状撚糸文を用いているものは136～163などである。器形は平縁で口縁部が直上する単純な深鉢形がほとんどであるが138のみ小突起がついている。口縁部は肥厚するものとしないもの、平行沈線をもつもの等の違いが見られる。

136～140は口縁部が折り返し口縁となり、肥厚しているものである。肥厚部分の幅は深鉢の大きさに比例してるようである。136と137はある程度復元できた口縁部～体部片である。

142～145は口縁部が肥厚しないものである。口縁部上端を撫でて無文とするものが多い。

146～150は口縁部上端に平行沈線を施しているものである。沈線のある口縁部が肥厚するものもあるが、既述の136～140などに比べて顕著でない。146はやや肥厚した口縁部に2本の平行沈線が用いられている。147と148は沈線が1本、149と150は2本の例である。151～158は5類土器の体部片である。

159～163は5類の底部である。地文の撚糸文は底部まで施文されず、体部下位でとまる。平らな底部からすっきりと立ち上がる形状を示す。

164と165は縦の撚糸文を地文としている。口縁部が折り返し口縁で肥厚し、その上には横位

の撚糸文が施される。平縁の深鉢である。

6類は無文のもので図166と167の2点である。166は単純な器形の中型深鉢で、器面にやや凹凸がある。167は大型の壺形土器である。残存部位が少なく、体部下半は不明である。器面は丁寧にミガキが施されている。赤褐色の色調を呈し焼成も良い。

7類はIII群土器に含まれるが、細分されたどの類に入るのか不確実なものを一括している。図168～184である。168～170は壺形土器の口縁部である。太い隆線文（隆帯）が用いられていることから、1類かと思われる。171～173は折り返し口縁と沈線文をもつものである。174は口縁の外傾する器形らしい。ともに口唇部に刻み目を施し、無文の地に沈線の文様である。

176～179はともに横走する沈線をもつものである。180は沈線の曲線文の他に半円形に前へ張り出す突起をもつ。突起の中央に上下へ貫通する孔がある。181～184は沈線がなく無文のものである。182は壺の181、183、184は大波状口縁の深鉢の、それぞれ口縁部とみられる。

第Ⅳ群土器（第91図185～194，写真図版44）

縄文時代晩期の土器群である。遺構に関わるものはないが主としてAIII、AIV区に主として出土している。量は多くないが、1～3類に細分した。

1類は晩期初頭の大洞B式に相当するもので図185～190などである。185と190は体部にくびれをもつ浅鉢形土器である。ともに口縁部に横B字形の小突起をもち、文様帯は三叉文を連結したモチーフで表現されている。底部周縁にも1本の沈線が巡る。190には口唇部の中央内側に三叉文を意図した隆線や貼付文が見られる。器表面は黒色を呈している。186～188は器形の不明な1類の口縁部片である。189は注口土器の注口部である。

2類は晩期前葉の大洞BC式のもので、図191～192のみである。器形不明の口縁部片で、横B字形の小突起や羊歯状文が用いられている。器表面は異色を呈している。

3類は晩期中葉の大洞C式で、図193～194などである。193は渦巻文の施された口縁部である。194は無文部と平行沈線の用いられた体部の破片である。

第Ⅴ群土器（第91図195～225，写真図版44～46）

粗製土器と底部の破片を一括して本群とした。既述の各群に共伴するものや小破片のものを含むが、大部分は第III群（後期前葉）土器と同時期と考えられる。1類は斜行縄文のみのもの、2類は底部である。

1類は図195～211などであるが掲載しないものも多い。口唇部は単純なもの（195～201）と折り返し口縁状となり肥厚しているもの（202～207）の2種類に分けられる。いずれも深鉢形であるが、口縁部の直上するもの、緩く外反するものなどの器形がある。地文には、無節と単節の斜行縄文が用いられている。195はBIV区の1層中より一括して出土した大型の深鉢で、一部欠損するがほぼ完形品である。体部上半がふくらみ、下半がすぼみ小さめの底部をもつ。198

は口縁部の外反した小型深鉢である。残存部は少ない。196、197、199、200は同類の口縁部片である。口唇部が平らに撫で調整されている。201はＢⅢ－１ピット埋土より一括して出土した大型深鉢である。４分の１程の残存で底部を欠く。

202～207は折り返し口縁の深鉢の口縁部片である。折り返し口縁とする手法は既述のⅢ群４類や５類に見られたもので器形が類似している。肥厚部分を無文としているもの（205、206）と地文を残すものとがある。207は破片であるが口径の判明したもので、肥厚部の下を一本の沈線を用いて接合部を調整している。

208～211は地文のみの体部片である。

２類は底部片で、図212～225などである。無文のもの、沈線を施文したもの、地文のみのものなどが見られる。灰褐色や赤褐色の色調のものが多い。無文の地に沈線の施された212、213、215～217は第Ⅲ群２類土器の、214は第Ⅲ群３類のそれぞれ底部と思われる。212は沈線の区画文の施された朱塗りのもので、底面に網代痕（平織）を残している。213は底部の周縁に１本の沈線が巡る。214は台付鉢の高台部である。磨消無文帯がある。215は底部の周縁に沈線と刺突列点文が用いられている。216と217は体部下半に沈線が見られる。218～223はいずれも無文で平底を呈している。221の底面には網代痕（３条網み）が明瞭に残る。223の底面にも木葉痕が残る。224と225は単節斜行縄文のみの深鉢底部である。

⑵　**土製品**（第106図；写真図版56）

スプーン状土製品、円盤状土製品、玉の３点が出土している。このうち、玉はＢⅣ－１住居址周溝の埋土部分からの出土である。

①　スプーン状土製品（第106図３，写真図版56）

中央から先端部にかけて欠損しているため全長が不明であるが、凹部が残っておりスプーン状を呈している。頭部も欠損しているが穿孔部分がみられる。

②　円盤状土製品（第106図１・２，写真図版56）

破損品のため径が不明であるが、大形品と思われる。両面とも沈線で施文している。縁辺には表面に２本の沈線、裏面に１本の沈線を巡らせている。赤色塗彩品で、部分的に赤色が認められるものである。

③　玉（第106図４，写真図版56）

径約1.3cm、長さ約1.1cmで側面からややつぶれた形状の玉である。ほぼ中央に穿孔されており、その際に出た粘土が孔の縁に付着したままである。

⑶ 石器（第94図～第101図，写真図版47～51）

本遺跡出土の石器は、剝片石器40点、礫石器29点の計69点である。そのうち遺構から出土したのは17点である。石核は４点出土している。うち１点は遺構からの出土である。

石器の内訳は、石鏃６点、石錐１点、石匙１点、箆状石器２点、スクレイパー18点、加工痕ある剝片12点、石棒１点、磨石10点、敲石１点、凹石３点、石錘14点である。

① 石鏃（第94図１～６，写真図版47）

いずれも両面に細部調整されている。１～３は凹基無茎鏃で、１は抉り込みが深い。２は浅く三角形に近い。３も浅く、やや長身である。４は基部の抉り込みの浅い凹基有茎鏃で、扁平である。５・６はやや肉厚の剝片利用の円基鏃である。

② 石錐（第94図８，写真図版47）

片縁細部調整された不定形な剝片の両端に錐部を作りだした双刃錐である。先端部は両方とも欠損している。

③ 石匙（第94図９，写真図版47）

扁平な剝片を利用し、両縁に細部調整された縦型石匙である。両面調整による抉りの浅いつまみを作り出している。

④ 箆状石器（第94図13・14，写真図版47）

頭部にやや幅があり、側縁が直線的に開いているもので、13は刃部調整が左側縁は片面、右側縁は両面からなされ、それぞれ片刃、両刃である。14は片面細部調整され、刃部は片刃である。

⑤ スクレイパー（第94～96図，写真図版47・48）

刃部の調整状況によって概ね４種に分けられる。

ａ、先端または側縁に連続的な調整によって刃部を作り出している。（10、11、18、31、32）

10は打面と反対側に片面側縁部調整による直線的な刃部を作り出している。11は片側縁に直線的な刃部を作り出している。18は片縁と先端部に直線的な刃部を作り出している。31と32は片縁調整によって凹刃を作り出している。

ｂ、側縁にやや不規則な調整によって弧状の刃部を作り出している。（７、12、17）

７はややつぶれた状態の弧状刃部をもつ。12は片側縁両面調整によって弧状の刃部を作り出している。17は片縁細部調整による弧状の刃部をもつが、頭部側に刃部両面調整がみられる。

ｃ、縁辺のほぼ全周に剝離痕がみられる。（16、25、33、38）

16は刃部片面細部調整がなされている。25、38は細かい剝離、33は浅い剝離がみられる。

ｄ、１側縁ないし先端に部分的にわずかな剝離痕がみられる。（19、23、30、35、37、39）

30には片縁調整のほかに錐状部分もみられる。他はわずかな剝離調整のみである。

⑥　加工痕ある剝片（第96図15・20～22・24・26～29・34・36・40，写真図版48）

スクレイパーに分類したものほど調整が明瞭でない剝片を一括した。この中で、15と20は雑な調整であるがスクレイパーにやや近い。27はやや深い剝離がみられる。29は側縁部の調整か使用痕が明瞭でないがややつぶれた状態の剝離痕がある。

⑦　石棒（第97図42，写真図版49）

頭部のみの破損品で、その頭頂部も欠損している。非常に浅い抉りで頭部を作り出している。側面に平坦面をもつ。表面が粗く未成品ではないかと思われる。

⑧　磨石（第97～99図43～52，写真図版49・50）

棒状礫を用いたのが９点、円礫を用いたのが１点出土している。43と46は三角柱状礫で長軸稜線部分に磨面をもつ。47と50は平面が三角形状礫で長軸稜線部分に磨面をもつ。44は扁平な三角柱状礫で幅の狭い側面に磨面をもつ。49は四角柱状礫で幅の狭い側面に磨面をもつ。48は四角柱状礫で幅の狭い側面と長軸稜線部分の２面に磨面をもつ。45は楕円形礫で長軸稜線部分とその反対側面に合わせて３面の磨面をもつ。51は破損しているため詳細不明であるが平板状礫で、幅の狭い側面に２面ずつと幅広部分の計５面の磨面をもつ。52は楕円形礫の両端に磨面をもつものである。

⑨　敲石（第99図53，写真図版50）

楕円形礫を利用し、その扁平な２面を敲き面としている。

⑩　凹石（第99図54～56，写真図版50）

54は両面に２個ずつの凹部をもつ。55は両面とも１個ずつの浅い広めの凹部が形成されている。56は扁平な礫の両面に４～５個の凹部をもつものである。

⑪　石錘（第100・101図57～70，写真図版50・51）

57～63はＡⅣ－８ピットからの出土である。全14点ともほぼ楕円形の礫を利用している。そのうち58と60の２点が短軸方向の両端を両面から打ち欠いているほかは、すべて長軸方向の両端を両面から打ち欠いているものである。59は１端の片面に大きい打ち欠きがみられる。61は１端の片面に大きい打ち欠きがみられるほか、右側縁中央部に片面からの打ち欠きがある。62の片面１端にも大きい打ち欠きがみられる。68は１端がわずかな打ち欠きで、他端が欠損している。69は両端ともわずかな打ち欠きである。70は１端が大きな打ち欠きで同端側縁部が欠損しているものである。

⑫　石核（第101図71～74，写真図版51）

71は珪質泥岩、72～74は流紋岩質極細粒凝灰岩である。71は２分の１ほどの残存核、72、74は両面剝離された剝片核、73は両面とも部分的に剝離された盤状核である。

2．平安時代

〔1〕遺構と遺構内出土遺物

住居址4棟は、大ブロック3地区に分散し、2棟が一部重複している。そのうち1棟は削平されて形状が不明である。いずれも灰白色火山灰が混入しており、ほぼ同時期のものである。

ピットは、いずれも埋土に灰白色火山灰が混入し、1基を除いて長方形状のものである。

遺物は、住居址から墨書土器（坏）や土玉、砂鉄、鉄滓の付着した坏の底部、紡錘車などが出土しているが、全体的に土器量は少ない。なお、ここでは概要のみ記し、次の〔2〕出土遺物の中で詳述することとする。

(1) 住居址

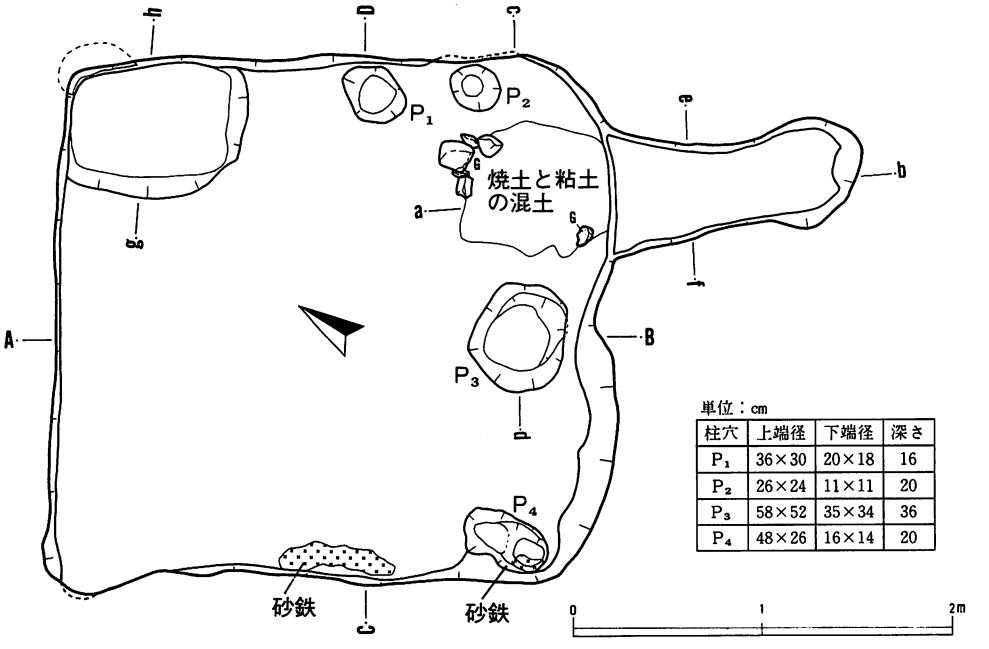
AⅣ－1住居址

遺構（第65・66図，写真図版24・25）

（検出状況）AⅣ区中央やや東寄りの表土を除去した黒褐色土～褐色土層（Ⅳ～Ⅴ層）面に、灰白色火山灰混入の黒褐色土の方形プランとして検出された。

（平面形）隅丸方形で、煙道の延びる方向は北西一南東である。

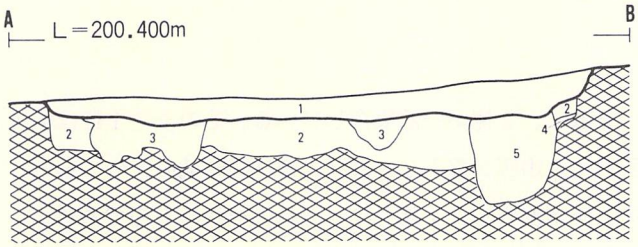
（規模）上端が2.9m×2.8m、下端が2.8m×2.7m、壁高が10cm～24cmである。

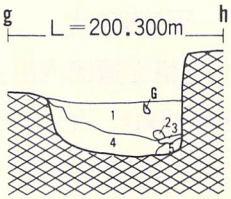


単位：cm

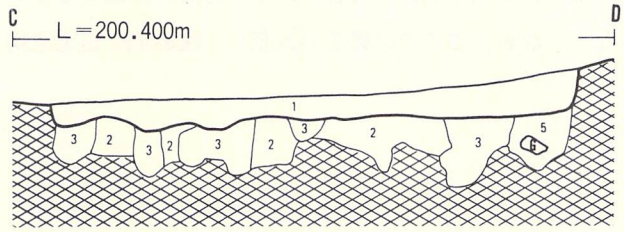
柱穴	上端径	下端径	深さ
P_1	36×30	20×18	16
P_2	26×24	11×11	20
P_3	58×52	35×34	36
P_4	48×26	16×14	20

第65図　AⅣ－1住居址　平面

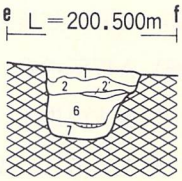


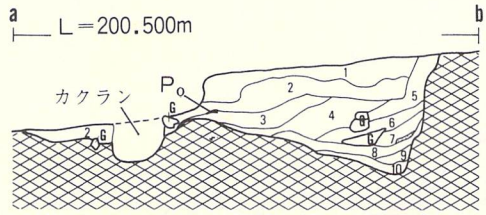


1．黒褐色土 10YR 3/2 灰白色火山灰　焼土炭化物が混入する
2．赤褐色土 5YR 4/6 焼土
3．黒 色 土 10YR 2/1 焼土が混入する。
4．暗褐色土 10YR 3/4 焼土　炭化物が混入する
5．褐 色 土 10YR 4/6 暗褐色土との混土

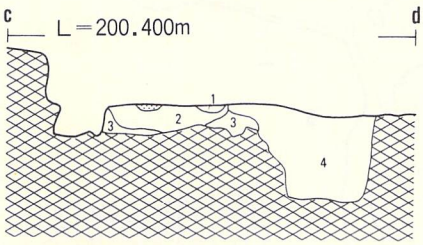


1．褐色土 10YR 2/2 灰白色火山灰が多く混入する　炭化物も混入する　粘性なくやわらかい
2．褐色土に黄褐色土がブロック状に入る貼床土
3．黒色土の撹乱土
4．白色火山灰混入の貼床土
5．褐色土と褐色土 7.5YR 4/3との混土　柱穴埋土

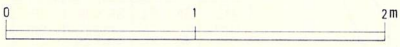




1．黒褐色土 10YR 2/2 灰白色火山灰を含む　(住居址埋土と同じ
2．にぶい黄橙色土 10YR 7/4～6/4 粘土質土　炭や焼土若干含む　かたい
3．黒褐色土 10YR 2/2　粘性なくかたくしまっている　炭若干含む
4．暗褐色土 10YR 3/3　粘性なくかたくしまっている　焼土を多く含む　下層部はやわらかく　サラサラしている　灰白色火山灰をわずかに含む
5．黒褐色土 7.5YR 2/2 赤土や焼土をブロックやしま状に含む　粘性なく　かたい
6．黒褐色土 10YS 2/2　粘性なくかたい　焼土若干含む
7．暗褐色土 10YR 3/3　9層に焼土が多く混入したもの　下部に焼土の薄い層をもつ
8．黒 色 土 10YR 1.7/1 粘性なく非常にやわらかい　炭を含む　焼土も若干含む
9．暗褐色土 10YR 3/4　地山の赤土と灰白色火山灰をわずかに含む。
10．暗褐色土 10YR 3/3　地山の赤土の汚れたもの



1．橙 色 土 7.5YR 6/6 粘土
2．褐 色 土 7.5YR 4/3 焼土が混入する
3．暗褐色土 7.5YR 3/3と黒褐色土 7.5YR 2/2との混土
4．褐 色 土 7.5YR 4/3と黒褐色土 7.5YR 2/2との混土　柱穴埋土



第66図　AⅣ－1住居址　断面

（埋土）攪乱土を除いて、灰白色火山灰や炭化物が混入する黒褐色土の単層である。

（壁）黒褐色土層から褐色土層まで掘り込んでいる。北東壁はほぼ垂直に立ち上がる。南東壁はやや外傾する。

（床面）黒褐色土に黄褐色土がブロック状に入る貼床でかたくしまっているが、無数の黒色土の攪乱部分があり凹凸が激しい。南西壁寄りに白色粘土と砂鉄が分布する。柱穴P_4の埋土上位（壁寄り）にも砂鉄が分布している。

（柱穴）4個確認された。埋土はいずれも黒色土と褐色土との混土である。

（施設）北隅に長方形状のピットがある。規模は開口部0.9m×0.7m、底部0.8m×0.5m、深さ0.3mで、黄褐色土層まで掘り込んでいる。また、北隅が半円形に抉り込まれている。

（カマド）南東壁の北東寄りに位置する。崩壊しており形状は不明である。燃焼部と思われる部分は攪乱を受けて詳細は不明であるが、厚さ約2mの赤色変化を受けている。また、その下位は焼土が混入する粘土となっている。煙道部は掘り込み式で、煙出し部にむかってゆるやかな傾斜をもって下降する。煙出し部は外傾して立ち上がる。煙道部及び煙出し部の埋土は、上位が火山灰混入土、中位が土器、焼土混入の粘土で、下位は焼土や灰白色火山灰混入土である。

遺物（第102図，写真図版52）

出土した遺物は土師器坏3点（口縁部1、体部1、底部1）、土師器甕20点（口縁部4、体部14、底部2）、縄文後～晩期の土器片26点、石器2点、砂鉄などである。土師器類のうち、床面及び貼床部から出土したものは第102図1の鉄滓が付着したB_2類の坏1点、2のA類の甕1点と、3～6などのB類の甕12点である。また東隅柱穴と北西隅ピット抉部の埋土よりB類の甕の破片1点ずつ出土している。その他埋土上位よりB_2類の坏2点、B類の甕5点である。当住居址の主体をなす土器は、ロクロ使用の非内黒坏B_2類と、ロクロ不使用の甕B類であり、時期は平安時代（10世紀頃）と推定される。

BIII－1住居址

遺構（第67図，写真図版26）

（検出状況）BIII区南西部、表土を除去した黒褐色土層（III層）面で、灰色火山灰の混入する曲尺状プランとして検出された。

（平面形・規模）斜面下方側が削平され、また作業手順の誤りにより南端部が深掘りで切られているため詳細は不明である。残存する長辺は4.7mある。

（埋土・壁・床面）削平のためいずれも確認されなかった。

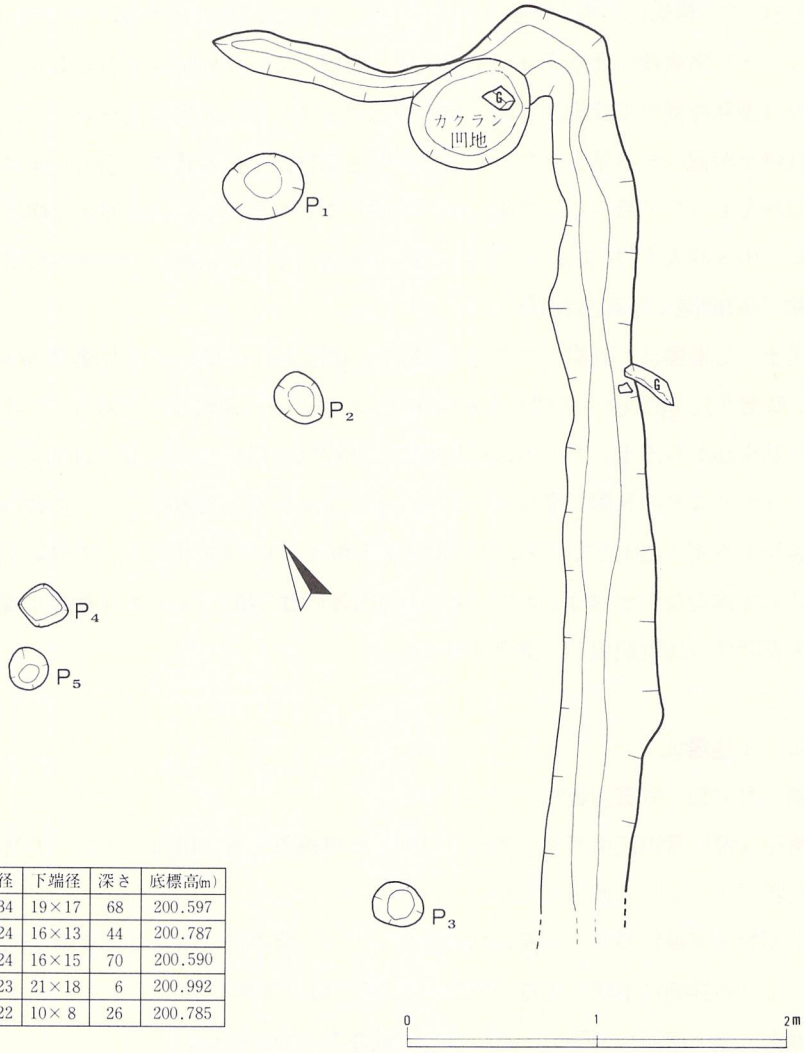
（柱穴）5個検出されている。いずれも黒褐色土の埋土である。なお、P_2の上部から鉄製紡錘車が出土している。

（周溝）幅40cm、深さ20cmで曲尺状にまわっている。埋土は、上位が灰褐色土、下位が黒褐色土で灰色の火山灰が混入している。

（カマド）検出されなかった。

遺物（第103図，写真図版52）

出土した遺物は第103図15の土師器坏口縁部１点（BⅣ－１住居址出土と接合した）、７の土師器甕口縁部１点、縄文前期の体部片１点、第106図７の鉄製紡錘車１点である。土師器坏はＡ₂類、甕はＢ類である。



単位：cm

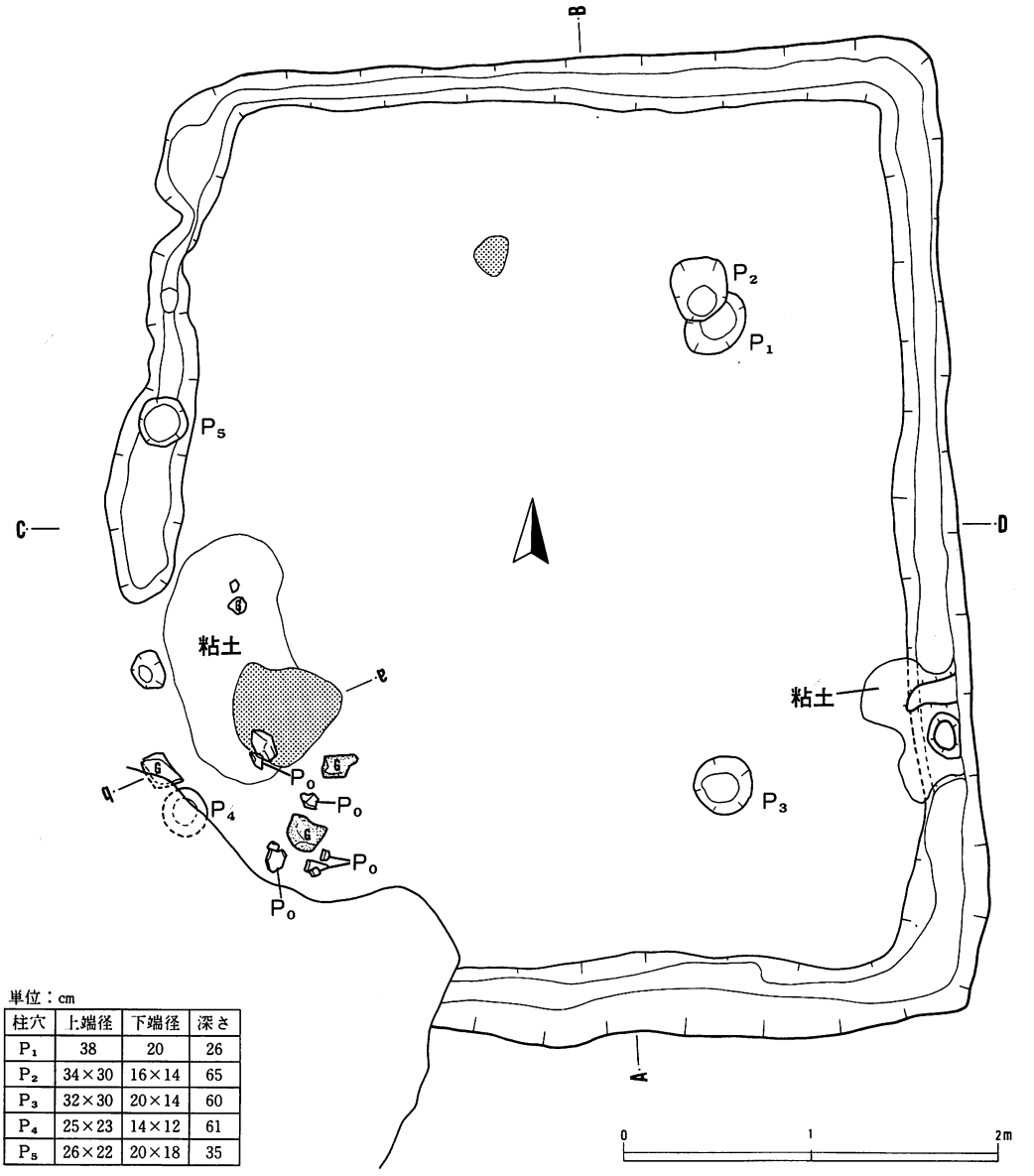
柱穴	上端径	下端径	深さ	底標高(m)
P_1	42×34	19×17	68	200.597
P_2	29×24	16×13	44	200.787
P_3	28×24	16×15	70	200.590
P_4	27×23	21×18	6	200.992
P_5	23×22	10× 8	26	200.785

第67図　BⅢ－１住居址

ＢⅢ－２住居址

遺構（第68・69図，写真図版26・27）

（検出状況）ＢⅢ区中央やや南西寄り、黒褐色土層（Ⅲ～Ⅳ層）面で、黒褐色土の長方形プランとして検出された。



単位：cm

柱穴	上端径	下端径	深さ
P_1	38	20	26
P_2	34×30	16×14	65
P_3	32×30	20×14	60
P_4	25×23	14×12	61
P_5	26×22	20×18	35

第68図　ＢⅢ－２住居址　平面

（平面形）ほぼ長方形で、長辺の方向は南―北である。

（規模）上端5.2m×4.5m、下端4.6m×3.7m、壁高が最大54cmである。

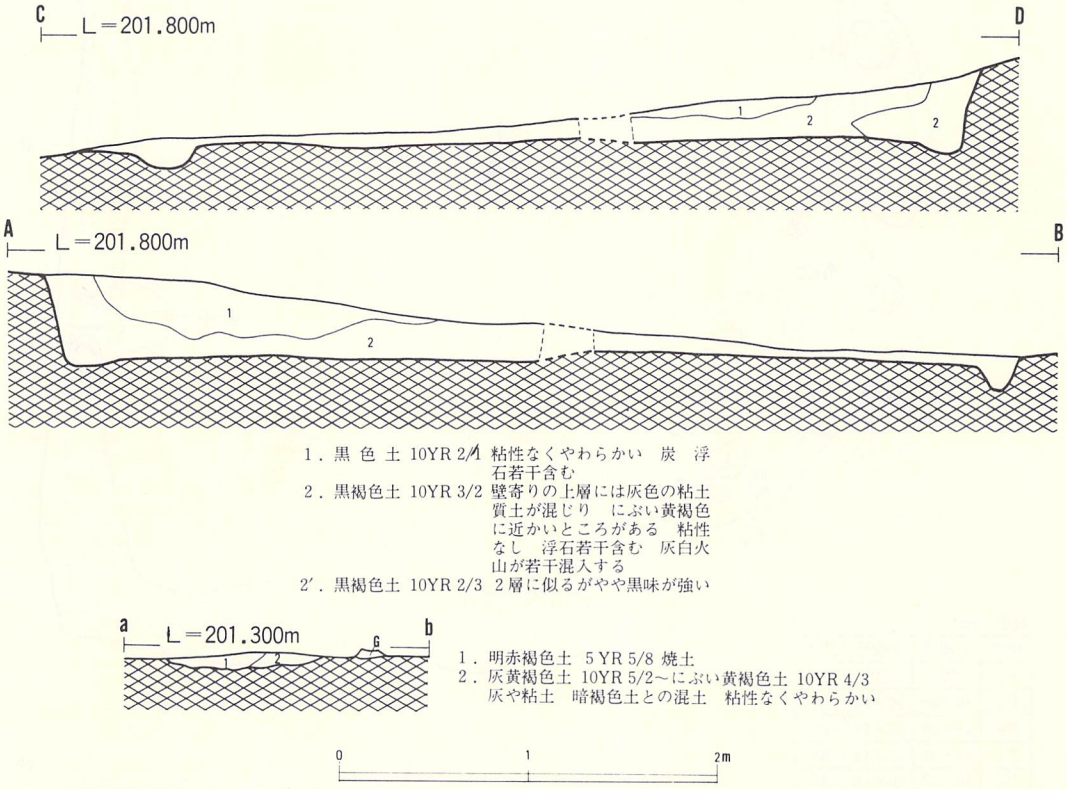
（埋土）２層に大別される。上位は黒色土で、下位全面には灰白色火山灰が混入する黒褐色土が堆積する。

（壁）東壁で黒褐色土層から褐色土層まで掘り込まれており、ほぼ垂直に立ち上がる。西壁は削平されてすでにない。

（床面）東壁寄りが褐色土層で、中央部がⅣ層の黒褐色土層、西半がⅢ層の黒褐色土で、ほぼ平坦である。中央に部分的に貼床土と思われる褐色土がある。

（周溝）南西隅を除いて幅20cm、深さ10cm～20cmの規模でまわっている。なお、東壁南寄りに白色粘土が分布している。

（カマド）西壁南寄りに位置していたと思われるが、礫や土器が焼土のまわりに散乱するのみで形状は全く不明である。焼土は厚さ約８cmである。



第69図　ＢⅢ－２住居址　断面

（重複）南西隅をわずかにＢIII－１住居址によって切られている。

遺物（第102図，写真図版52）

出土した遺物は土師器甕11点（口縁部１、体部８、底部２）である。床面及びカマド内より出土している。土師器甕はロクロ不使用のＢ類に分類されるものだけである。

ＢⅣ－１住居址

遺構（第70～72図，写真図版28・29）

（検出状況）ＢⅣ区中央やや西寄り、表土を除去した黒褐色土層（III層）面で、灰白色火山灰がまばらに混入した黒褐色土の方形プランとして検出された。

（平面形）隅丸方形で、やや長い辺の方向は北西一南東である。

（規模）上端4.5m×4.4m、下端4.0m×3.9m、壁高が15cm～73cmである。

（埋土）５層に大別される。２には黄褐色の火山灰が、３、４には灰白色火山灰が混入する。

（壁）Ⅳ層の黒褐色土層まで掘り込んでいる。全壁ともほぼ垂直に立ちあがる。

（床面）黒褐色土層で凹凸がある。

（柱穴）３個検出されている。P_1、P_2の埋土は黒色土～黒褐色土で灰白色火山灰が混入する。

（施設）東隅に円形のピットがある。規模は開口部径0.84m×0.74m、底部径0.73m×0.70m、深さ0.53mで、埋土は黒褐色土である。黄褐色土層まで掘り込んでいる。

（周溝）幅12m、深さ６cm～９cmで全周する。東側で土玉が出土している。

（カマド）２基検出されている。１基は北東壁の南東寄りに位置するもので、煙道、煙出し部のみ残っている。煙道部は刳貫き式で、煙出し部に向ってゆるやかな傾斜をもって下降する。煙出し部は直立する。煙道部の焚き口側は崩壊し、火山灰混入の黒褐色土に礫が含まれる。底部には薄く焼土がみられる。煙出し部には礫が３個重なり、その周囲は焼けた粘土と焼土と黒色土で埋まっている。底部には焼土が厚くみられる。このカマドは廃棄されたものである。

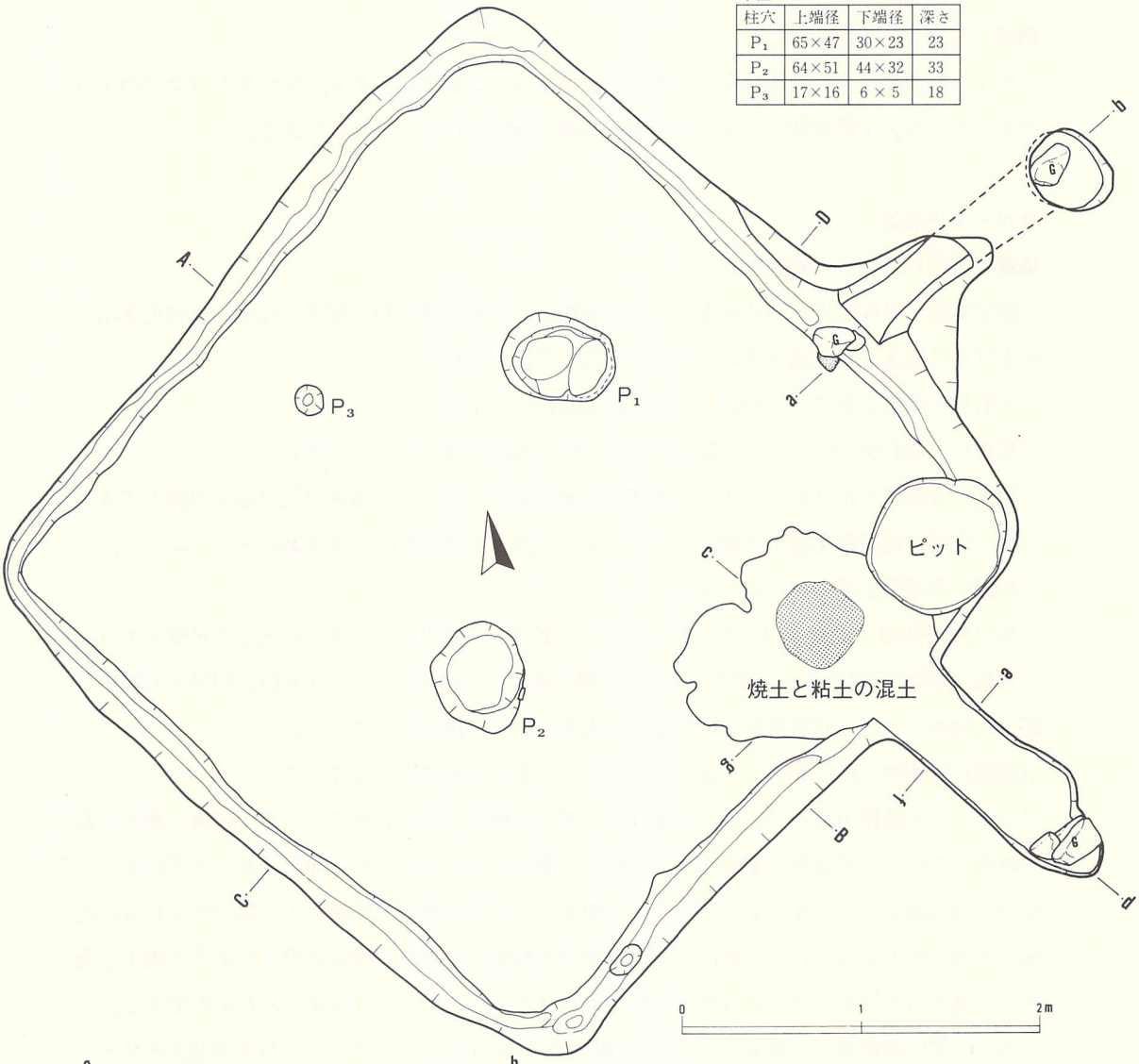
他の１基は南東壁の北東寄りに位置し、崩壊不明のものである。カマド天井部や袖部の粘土、支脚用と思われる土器底部、礫などが広範囲に分布している。燃焼部には厚さ約８cmの焼土が形成されている。煙道部は掘り込み式で、煙出し部にむかってゆるやかな傾斜をもって下がる。煙出し部は外傾して立ちあがる。煙道部及び煙出し部の埋土は、上位が火山灰混入土、中位は焼土や礫、土器混入の粘土、下位は焼土混入土である。煙出し部にはさらに大きな礫が上下に数個重なって埋まっている。

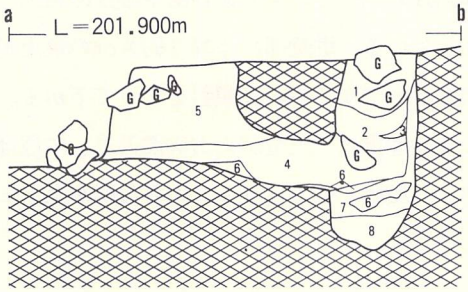
遺物（第103～105図，写真図版53～55）

出土した遺物は土師器坏42点（口縁部15、体部22、底部５）、土師器甕33点（口縁部９、体部部20、底部４）、縄文後期の土器細片41点、石器１点、土製品１点、鉄滓２点である。土師器坏

単位：cm

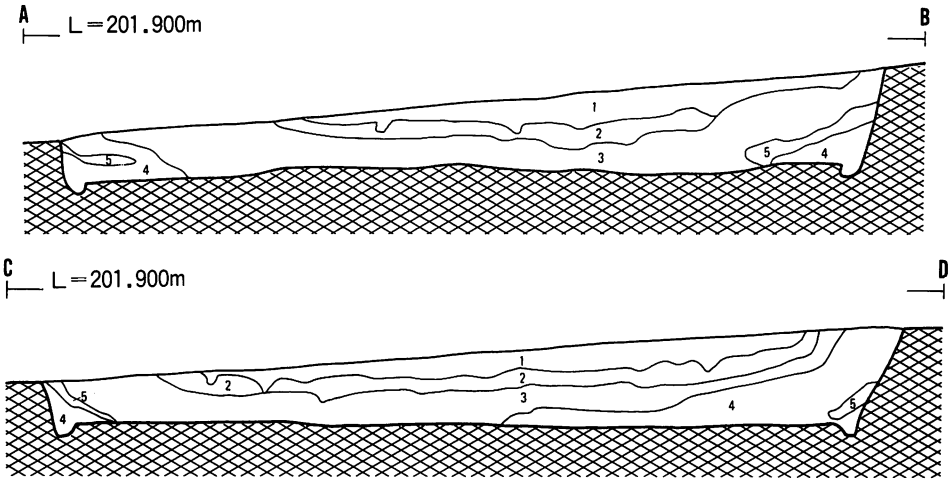
柱穴	上端径	下端径	深さ
P_1	65×47	30×23	23
P_2	64×51	44×32	33
P_3	17×16	6×5	18



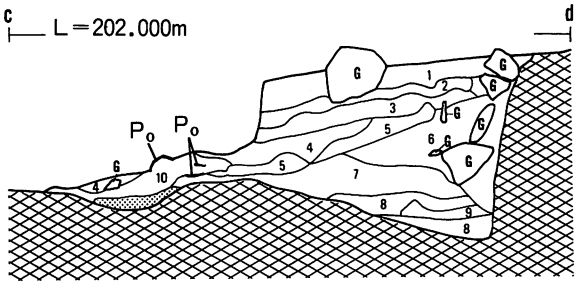


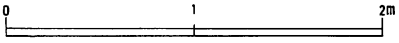
1．褐 色 土 7.5YR 4/4～暗褐色土 7.5YR 3/4 炭　焼土が混入　粘性なくやわらかい
2．暗褐色土 7.5YR 3/4と焼土との混土　炭含む　粘性なくやわらかい
3．黒 色 土 7.5YR 2/1 やや粘性あり　やわらかい
4．黒 色 土 7.5YR 2/1 3層とほとんど同じ
5．黒褐色土 10YR 2/2　灰白色火山灰土がまだらに混入　下部には焼土が混じる
6．明赤褐色土 5YR 5/8 焼土　粘性なくやわらかくしまりない。
7．暗褐色土 10YR 3/4　粘性なくやわらい　焼土若干含む
8．地山の赤土と暗褐色土との混土　粘性あり　やわらかい

第70図　BⅣ－1住居址



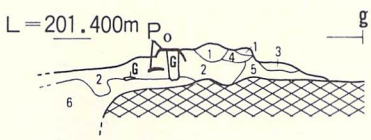
1．黒色土 10YR 2/1 土器片　炭若干含む　焼土含む
2．オリーブ褐色土 2.5Y 4/4～にぶい黄褐色土 10YR 4/3 黄褐色 2.5Y 5/6 細粒火山灰と黒褐色土の混土　やわらかい
3．黒褐色土 10YR 3/2 灰白色火山灰をわずかに含み　ややかたい　床面直上には火山灰を比較的多く含む　焼土と炭を若干含む　土器片出土
4．黒褐色土 10YR 3/2と灰白色火山灰との混土　火山灰がまだらに混じる　他の層に比較してサラサラしている
5．黒褐色土 10YR 2/2 やわらかい　粘性なし

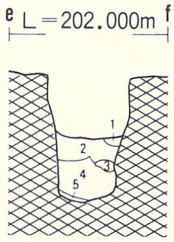




1．黒　褐　色　土 10YR 3/2 灰白色火山灰土がまばら（小ブロックに混入　粘性なし
2．にぶい黄褐色土 10YR 4/3 黒褐色土に黄褐色粘土質土が混入(煙道の上壁か？)粘性なくかたい　炭が混入
3．黒　褐　色　土 10YR 3/2 灰白色火山灰土がまばらに混入（ブロックのかたまりは1層より大きい）1層とほぼ同じ土性。
4．にぶい黄橙色 10YR 7/3の粘土質土と暗褐色土 10YR 3/4との混土　焼土と炭を含む　粘性なくかたい　煙道の天井壁にあたるものか
5．褐色土 10YR 4/4～暗褐色土 10YR 3/4 粘性なくかたい　炭と焼土が混じる　煙道部の上半（空洞部）での埋土であろう
6．黒　褐　色　土 10YR 2/3 焼土や赤土のブロック土が混じる　粘性なくややかたい　煙道部の先端の煙出部へ通ずる部分の埋土であろう
7．橙 色 土 5YR 6/8 焼土に黒褐色土が混じる　やわらかい　焼土がつづいており　焼道部の下部(床)にあたると思う
8．黒褐色土 7.5YR 2/2 焼土を多く含む　粘性なくやわかい
9．橙 色 土 5YR 6/8 焼土と黒褐色土が混じり　汚れた部分　やわらかい
10．橙色土 7.5YR 5/6～明黄褐色土 10YR 6/8 焼土と粘土質土との（粘土が焼土化したものか？）やや粘性あり　かたい　土器片含む
11．明赤褐色土 2.5YR 5/6 焼土

第71図　BⅣ－1住居址　断面





1．にぶい黄色土 2.5YR 6/4 粘土質土（天井部の粘土と思われる一崩落）
2．橙色土 7.5YR 7/6～明黄褐色土 10YR 燃土主体に粘土質土が混じる　粘性なくしまっている
3．明黄　褐 色 土 2.5Y 6/6 2層に似るがやや黄色味が強い
4．黒　　色　　土 10YR 7.1/1 粘性なくやわらかい
5．にぶい黄褐色土 10YR 4/3粘性なし　かたい　焼土若干含む
6．黒　褐　色　土 10YR 2/2浮石多く含む　しまりよい　ピットの埋土

1．にぶい黄色土 2.5Y 6/4 粘土質土（天井部の崩落か）
2．灰 黄 褐 色 土 10YR 4/2 粘性なくやわらかい
3．黒　　色　　土 10YR1.7/1 粘性なくややかたい
4．橙　　色　　土 7.5YR 7/6　焼土に黒褐色土や灰黄褐色土が混じる（煙道のトンネル部）粘性なくやわらかい
5．暗　褐　色　土 10YR 3/4　焼土混じる　やわらかい

第72図　BⅣ－1住居址　断面

や甕のうち床面及びカマドより出土したのは第103図９～第105図29など22点である。坏では内黒のA$_1$、A$_2$類、非内黒のB$_1$、B$_2$類がそれぞれ５～６点ずつ出土している。体部に「本」の字を墨書している坏が11と12の２点みられる。甕ではロクロ使用のA類とロクロ不使用のB類が共伴するが、B類が多い。東カマドの煙道部から出土した土器は21の甕である。なお東カマドの支脚として倒立に据え置かれていた土器は17と20の坏２点29の甕底部１点である。

(2)　ピット

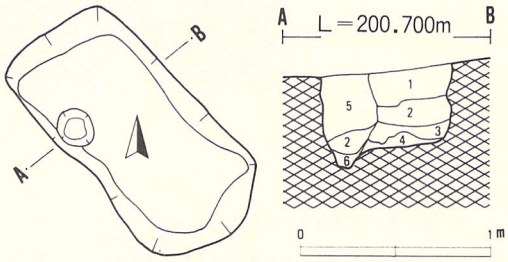
AⅣ－5ピット

遺構（第73図，写真図版30）

（検出状況）AⅣ１区北辺中央の表土を除去した面（Ⅳ層、一部掘り下げⅤ層）で、明黄褐色粘土や焼土混入土の長方形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも不整な隅丸長方形を呈し、断面形はビーカー状である。

（規模）開口部は1.44m×0.72m、底部は1.14m×0.57m、深さ0.40mである。



1．黒褐色土 10YR 2/2と明黄褐色粘土質土 10YR 6/6との混土
2．黒褐色土 10YR 2/3 灰白色火山灰が斑状に混入
3．黒褐色土 10YR 2/2 黄褐色土が混入
4．黄褐色土 10YR 5/6
5．黒褐色土 10YR 2/3
6．褐 色 土 10YR 4/6

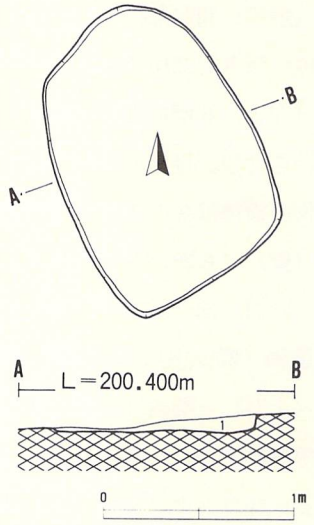
第73図　AⅣ－5ピット

（埋土）６層に細分されるが、５、６層は柱穴状ピットの埋土である。２層には灰白色火山灰が混入しており、その状況は隣接するAⅣ－１住居址の埋土と同じである。

（壁）黒褐色土層、暗褐色土層でやや外傾する。

（底面）黄褐色土層で、凹凸や柱穴状ピットなどがある。

遺物　縄文土器のみで、沈線が施文された破片や晩期の破片が出土している。



1．黒褐色土 10YR 2/2 灰白色火山灰が斑状に混入

第74図　AⅣ－６ピット

ＡⅣ－６ピット

遺構（第74図，写真図版30）

（検出状況）AⅣ１区西辺中央、表土除去面（Ｖ層）で、灰白色火山灰が混入する黒褐色土の長方形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも隅丸長方形を呈し、断面形は皿形を呈する。

（規模）開口部は1.50m×1.06m、底部は1.44m×1.04m、深さ最大0.10mである。

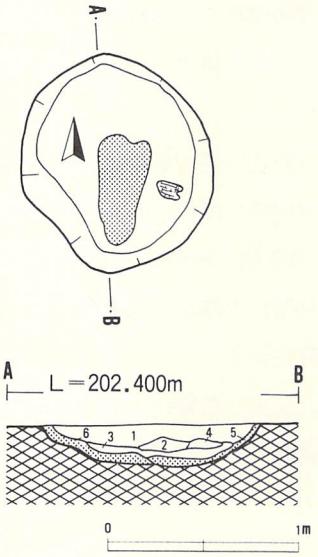
（埋土）黒褐色土の単層で、状況はAⅣ－１住居址の埋土と同じである。

（壁）暗褐色土層で、直立するが浅く、ない部分もある。

（底面）暗褐色土層で、ほぼ平坦である。

遺物（第82・86図；写真図版35・39）

（土器）縄文土器のみで、沈線の施文された破片（119）とループ文の施文された破片（48）が出土している。



1．黒褐色土 10YR 3/2　白色火山灰　炭化物　焼土が混入
2．黒褐色土 10YR 3/2と焼土との混土　炭化物が多く混入
3．黄橙色土 7.5YR 7/8 焼土
4．にぶい褐色土 7.5YR 5/4 焼土　炭化物が混入
5．橙 色 土 7.5YR 6/8 焼土
6．黒 色 土 10YR 2/1　炭化物　灰が混入

第75図　BⅣ－１ピット

ＢⅣ－１ピット

遺構（第75図，写真図版30）

（検出状況）BⅣｋ区南辺、表土を除去した段階で、灰白色火山灰混入黒褐色土の円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも楕円形を呈する。断面形は椀状である。

（規模）開口部径1.12m×1.00m、底部径0.98m×0.80m、深さ0.22mである。

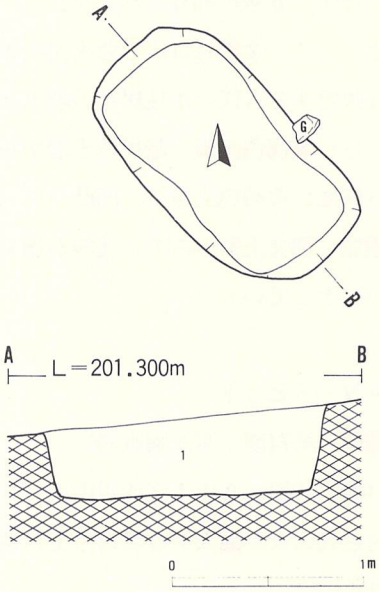
（埋土）6層に細分される。全層とも焼土ないしは炭化物を含む。焼土の広がりは上下2面に観察された。炭化物の樹種はケヤキ、ナラである。

（壁）立ちあがりが明確でない。

（底面）凹凸があり、中央に向かって傾斜する。

遺物（第105図，写真図版55）

（土器）土師器坏の破片2点（30・31）と縄文土器の沈線が施文された破片や53と同一個体の破片が出土している。坏はロクロ使用で、31は黒色処理されている。



1．黒褐色土 10YR 3/2 白色火山灰が斑状に混入　炭化物粒が若干混入

第76図　BⅣ－3ピット

BⅣ－3ピット

遺構（第76図，写真図版31）

（検出状況）BⅣb～f区の黒褐色土層（Ⅰ～Ⅱ層）面で、灰白色火山灰混入土の楕円形プランとして検出された。

（形状）平面形は開口部、底部とも隅丸長方形を呈する。断面形はビーカー状である。

（規模）開口部が1.50m×0.80m、底部が1.31m×0.70m、深さが0.40mである。

（埋土）黒褐色土の単層である。灰白色火山灰が斑状に混入する。

（壁）上部から黒褐色土層、中掫浮石層、黒褐色土層であり、長辺中央部が張り出すが全体に直立する。

（底面）黒褐色土層で、平坦であるが斜面に沿ってやや傾斜する。

遺物　ロクロ使用で黒色処理された土師器坏の体部破片や沈線が施文された縄文土器破片が出土している。

〔2〕出土遺物

平安時代の遺物は、遺構内及び遺構外を含めて土器約250点、石器1点、鉄製品1点、鉄滓6点、鞴の羽口1点などが出土している。

(1) **土器**（第102～第105図，写真図版52～55）

平安時代の土器は遺構内と遺構外を含めて、総数246点出土している。土師器の坏と甕である。これらは器形、成形技法により下記のように分類した。

土師器坏
- A₁類……内黒で、底部を静止糸切りで切り離した後、再調整しているもの
- A₂類……内黒で、底部を回転糸切りで切り離し、無調整のもの
- B₁類……非内黒で、底部を静止糸切りで切り離した後、再調整しているもの
- B₂類……非内黒で、底部を回転糸切りで切り離し、無調整のもの

土師器甕
- A類……ロクロ成形しているもの
- B類……ロクロを使用していないもの

坏A_1類は第103図9や10などに代表される。ロクロ成形で、内面はヘラミガキを施し黒色処理している。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部で直上気味となる器形である。口径が14cm、底径6cm程、器厚は0.4cm～0.6cmとやや厚手である。静止糸切りで切り離した後、底部の周縁を手持ちヘラケズリで再調整している。

坏A_2類は第103図16などに代表される。ロクロ成形で、内面はヘラミガキを施し黒色処理している。体部は内湾して立ち上がり、口縁部はやや外反する器形である。口径が14.0cm～14.5cm、底径5cm程、器厚は0.3cm～0.4cmと、A_1類に比べて薄手となる。口径に比べて底部が小さい印象である。回転糸切りで切り離し、再調整はしない。

坏B_1類は図17に代表される。ロクロ成形で黒色処理がない。器形はA_1類と酷似し、体部は内湾し口縁部が直上する。大きさもやはり口径14cm前後、底径6cm、器厚が0.4cm～0.6cmとやや厚手である。静止糸切りで切り離した後、底部の周縁を手持ちヘラケズリで再調整している。

坏B_2類は図19や30に代表される。ロクロ成形で黒色処理がない。器形はA_2類と似ており、体部が内湾し、口縁部はやや外反する。口径14cm、底径5.0cm～6.5cm程、器厚は0.3cm～0.5cmで薄手である。回転糸切りで切り離し、再調整はしない。

内黒（黒色処理）の有無でA類とB類に分けたが、底部の切り離しや器形から見ると、静止糸切り再調整のA_1とB_1類、回転糸切り無調整のA_2とB_2類がそれぞれ近い関係にある。

甕A類は第104図21や23などで代表される。ロクロ成形であるが体部外面にヘラケズリやヘラナデを施す。器形には口縁部が短く外傾するものと、外傾したのち口唇部を上に短く引きだすものの2種がある。口径は15cm～21cm程と大小がある。出土数は甕B類に比べて少ない。

甕Ｂ類は図26や28などで代表される。ロクロは使用していない。口縁部横ナデ、体部外面はヘラケズリ、ヘラナデ、内面はヘラナデ、刷毛目などを施して成形している。刷毛目を用いるものは少ない。器形には口縁部が外傾又は外反するものと、短く外反するものの２種がある。最大径が口縁部にあるものと体部にあるものとの相違が見られる。口径は11cm～20cmとバラエティーがある。又、底部は第102図６のように周縁が張り出し、屈曲して体部に立ち上がる形と、第105図29のようにすっきりした立ち上がりの２種がある。出土数が多い。器面に凹凸があり、胎土がもろくなっているものがほとんどである。

以上の分類をもとに各遺構から出土した土器の特徴を述べる。

第102図１～６はＡⅣ－１住居址で出土している。図１は坏Ｂ$_2$類の底部で鉄滓が付着している。鍛冶作業の過程で、鉄滓が凝固する前に何らかの原因で破片についたと見られ、表裏に連続して付着する。図２は甕Ａ類の口縁部片である。図３～６は甕Ｂ類の口縁～底部片である。いずれも残存部分が少ない。口縁部が外反し、体部が脹らむ器形である。図６の底面は砂粒が多く付着したいわゆる砂底のものである。底部の周縁が外に張り出し、屈曲して体部へ立ち上がる。

図７はＢⅢ－１住居址の床面出土である。甕Ｂ類の口縁部片で、口縁が短く外反する器形である。磨耗があり胎土が不良である。

図８はＢⅢ－２住居址の床面出土である。甕Ｂ類の底部片である。底部の周縁が外へ張り出し屈曲して体部へ立ち上がる器形である。体部の下端の調整が雑で空洞部分がある。

第103図９～第105図29まではＢⅣ－１住居址より出土したものである。これらのうち図９～図20は坏類で、坏Ａ$_1$類は図９～図13の５点、坏Ａ$_2$類は図14～図16の３点、坏Ｂ$_1$類は図17と図18の２点、坏Ｂ$_2$類は図19と図20の２点である。図11は全体の４分の３を残存するものであり、体部に「本」の墨書が見られる。図12も同じく「本」の墨書がある体部片である。図17は東カマドの支脚に用いられていたもので口縁部を若干欠損するがほぼ完形品である。図20の底部も東カマドの支脚とされていたものである。

21～24の４点は甕Ａ類である。図21はＢⅣ－１住居址の東カマドの煙道部より出土したものである。口縁部が短く外傾した長胴形で、体部上半はロクロ痕の凹凸が顕著に残る。図22と図23は口縁部が外傾後、口唇部を上に引きだした同形の甕であるが大きさが異なっている。図24は残存部が極めて少ないものの底部と体部の一部分から、復元できた小型の甕である。底面の切り離しは回転糸切りである。

図25～図29までの５点は甕Ｂ類である。図25と図26は口縁部の外反する屈曲の仕方が他のＢ類に比べて強くなっている。また内面調整に刷毛目を用いている点も異なる。図26と図27は甕Ｂ類の標準的な器形で、出土量が多い。図29の底部は東カマドの支脚として据え置かれていた

もので、体部の立ち上がりはすっきりした形である。

図30と図31は、BⅣ－１ピットより出土した坏の口縁部片で、B_2類とA_1類である。図32と図33は土取穴より出土した坏B_2類、図34～図36は遺構外出土の坏A_1、坏B_1、坏A_2の破片である。

⑵ 石器（第97図41，写真図版51）

砥石１点が出土している。両面ともよく使用されており、中央部で折半したものと思われる。両側面も使用されている。

⑶ 鉄製品・鉄滓等

紡錘車が１点、鉄滓が６点、その他に砂鉄が出土している。

① 紡錘車（第106図，写真図版56）

BⅢ－１住居址からの出土である。軸長が16.9cm、軸径が0.6cm×0.5cm、車径が5.5cmである。形状は錆で不明瞭であるが軸断面が楕円形、車が円形を呈する。

② 鉄滓（写真図版56）

６点のうち11と12はBⅣ－１住居址からの出土である。最も重量のあるものは16である。

③ 砂鉄（写真図版56－10）

AⅣ－１住居址床面の２地点から出土したものである。

⑷ その他（第106図，写真図版56）

鞴の羽口先端部破片が出土している。外径６cm、内径３cm、現存長８cmで、先端部には鉄滓と自然釉がかかり内側に丸くなっている。

3．近世・近現代

〔1〕遺構と遺構内出土遺物

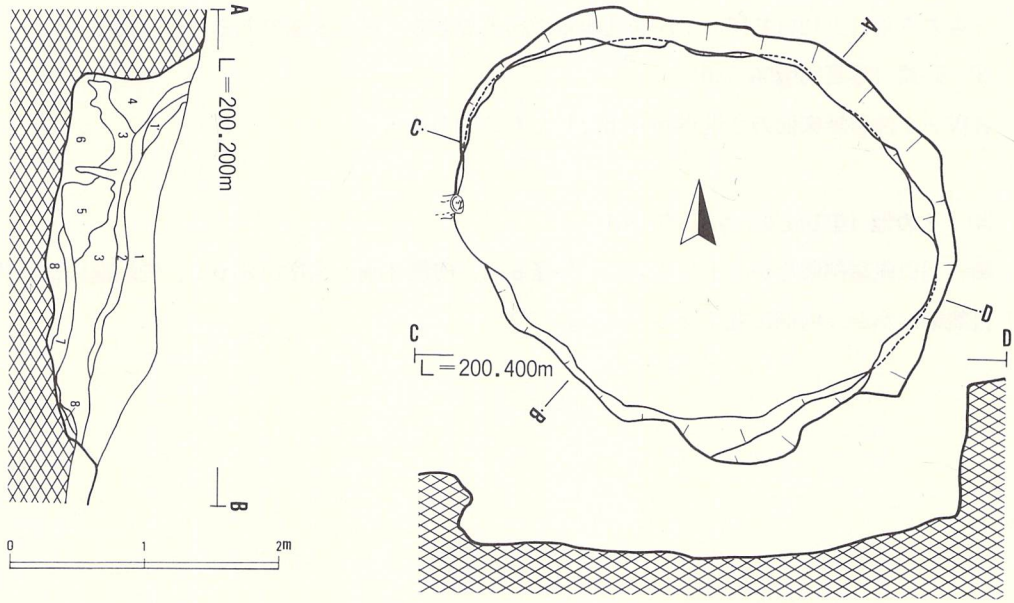
江戸時代以降の土取穴と大正末～昭和初期の炭窯で、土取穴１基には種々の遺物が紛れ込んでいる。

(1) 土取穴

遺構（第77図，写真図版31）

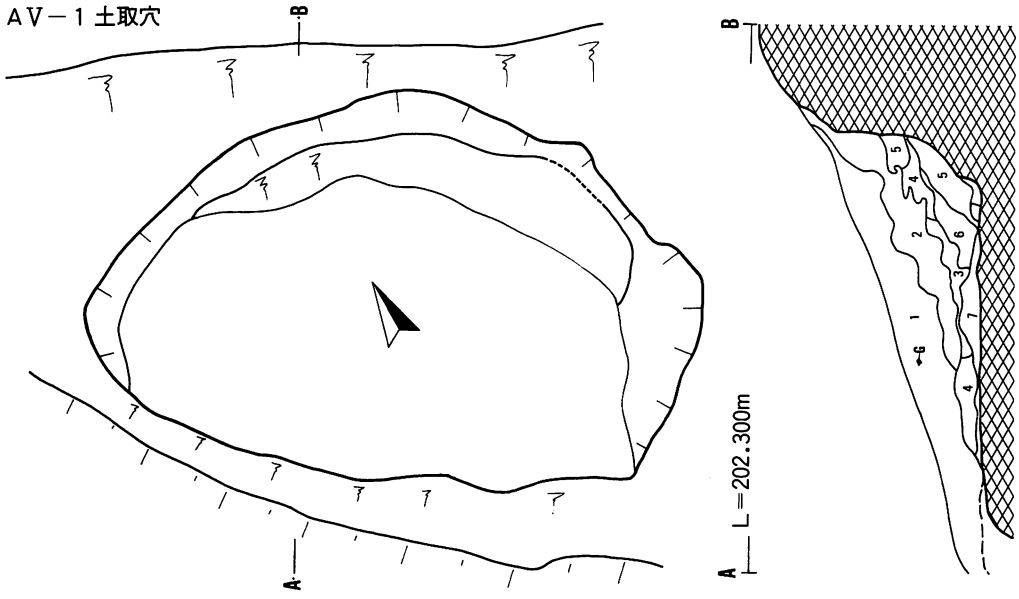
３箇所検出された。いずれも調査区南端の崖にかかる位置である。AⅣ－１土取穴とＢＶ－１土取穴は、平面形が住居址状で楕円形を呈するが、ＢＶ－２土取穴は湾入が多く不整形である。埋土は上位が表土であるほかは、Ⅵ層の黄褐色土やその下位の青灰色土が大ブロックで堆積ないしは混入するものである。

掘り込みは黒褐色土層から黄褐色～明黄褐色土層、さらに砂質と粘土質の互層からなる青灰色～乳白色土層にまで達している。底面はAⅣ－１土取穴とＢＶ－１土取穴は平坦部が多い。しかし、住居址等の床面のようなかたくしまった面や柱穴等はいっさい検出されていない。

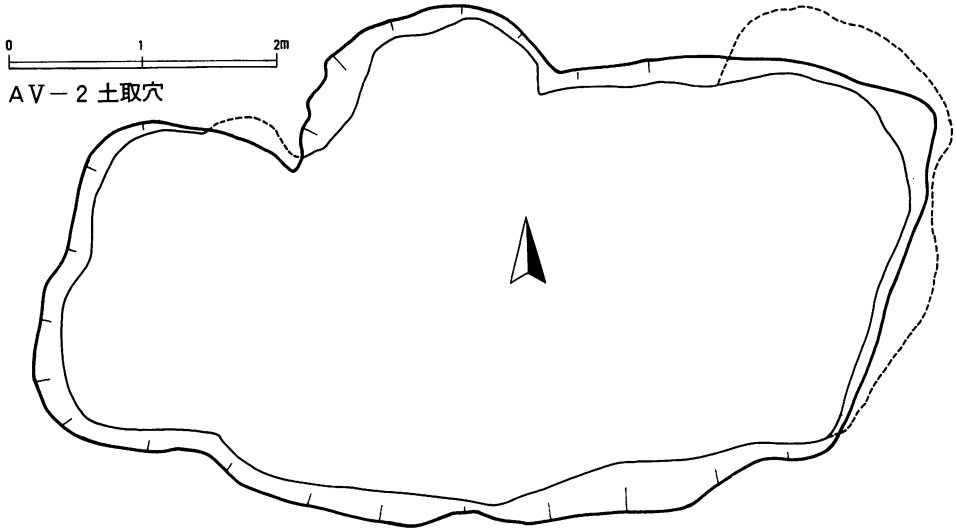


1．黒 色 土 10YR 2/1 粘性なくやわらかい　植生根が多い　1′はやや浮石が少ない
2．黒褐色土 10YR 2/2 粘性なくやわらかい　中振浮石を若干含む
3．黒 色 土 10YR 2/1 粘性なく１層とほとんど同じだがややしまりがある
4．黒 色 土 10YR 2/1と明黄褐色土 10YR 6/8との混土
5．暗褐色土 10YR 3/3 粘性あり　かたい　基本土層の第５層にあたる　ブロック土
6．黄褐色土 10YR 5/8のブロック土　粘性ありかたい
7．明褐色土 10YR 0/8とにぶい黄橙色土 10YR 6/3との混土　粘性あり　かたい
8．黒褐色土 10YR 2/3 粘性あり　しまっている

第77図　AⅣ－１土取穴



1．黒 色 土 10YR 2/1 表土　植生根が多い　非常にやわらかい
2．黒 色 土 10YR 2/1 1層とほぼ同じだが　地山の赤土が出量混入する　植生根多くやわらかい
3．黒 色 土 10YR 2/1と地山の赤土の混土（5：1）やわらかい
4．地山の赤土に黒色土が混じる　（赤土主体）全体の色調はにぶい黄褐色土 10YR 4/3 やわらかく粘性がある
5．明黄褐色土 10YR 6/8 壁の地山の赤土（粘土質）の崩落土やわらかく粘性がある
6．黄 褐 色 土 10YR 5/8 地山の赤土の汚れたもの　赤色浮石がやや多い　やわらかく粘性あり
7．浅 黄 色 土 2.5Y 7/3 赤土の下層の粘土質土　砂質土を含む　かたく粘性あり



第78図　AV－1・AV－2土取穴

遺物（第82・83・91・95・105図，写真図版35・36・44・47・48・55）

縄文時代早・後・晩期の土器（41・65・190）や平安時代の坏片２点（32・33）、残存部が３分の２の寛永通宝、剝片石器（７・36～40）などが出土している。

(2) 炭窯

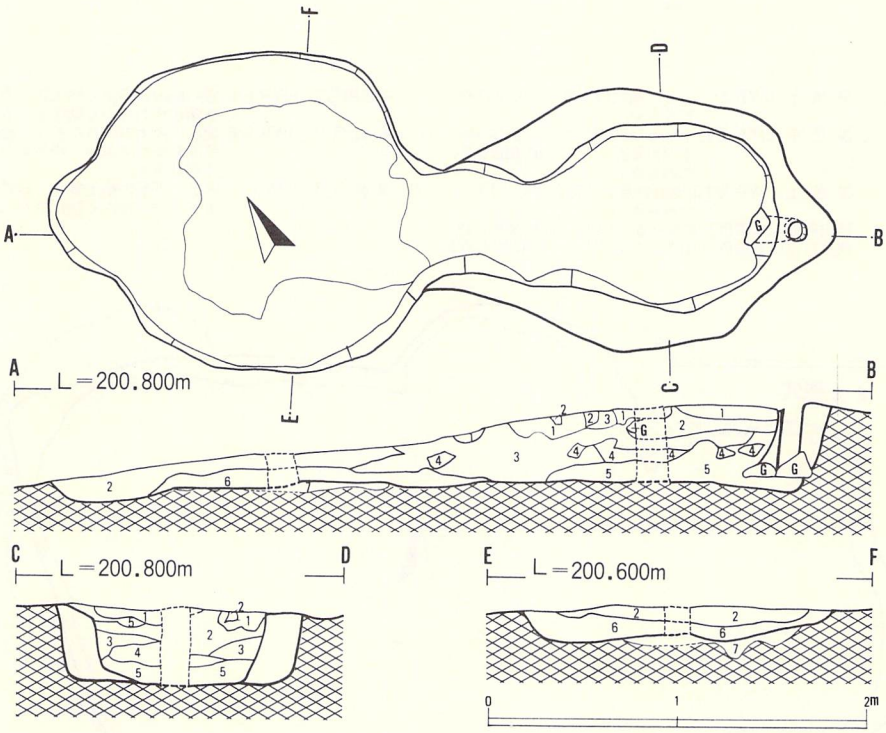
遺構（第79図，写真図版32）

（検出状況）ＡⅢｏ～Ｐ区、表土を除去した黒色土中で焼土や炭化物混入土の楕円形プランとして検出された。

（形状）窯本体と前庭部からなり、ひょうたん状を呈する。

（規模）本体外側で2.1m×1.4m、前庭部が1.9m×1.6m、本体の深さが0.4mである。

（構造）壁体を10cm～25cmの厚さの粘土で造っている。天井部は崩落して不明。煙出し部は下



1．オリーブ褐色土 2.5YR 4/6　粘土質　粘性あり　かたくしまっている
2．黒　色　土 10YR 1.7/1 粘性なくやわらかい　灰と焼土を若干含む
3．オリーブ褐色土 10YR 1.7/1（１層）と焼土と灰白色粘土との混土　やわらかい
4．灰白色土 5Ｙ7/2～オリーブ黄色粘土質土 5Ｙ6/3 粘性なくかたい　上壁の崩落土
5．橙色土 5YR 7/8～6/8 焼土　やわらかい
6．灰黄褐色土 10YR 4/2 主体に黒色土が混じる　焼土　炭を多く含む　粘性なくかたくしまっている
7．褐 色 土 10YR 4/6

第79図　炭窯

部を石組みにして土管を立てている。焚き口部は不明である。前庭部の底に粘土が敷きつめられている。

（埋土）灰や焼土、粘土などの混土である。底面には粉炭と灰が広がっている。前庭部には、不完全炭化木や炭が多く残っている。

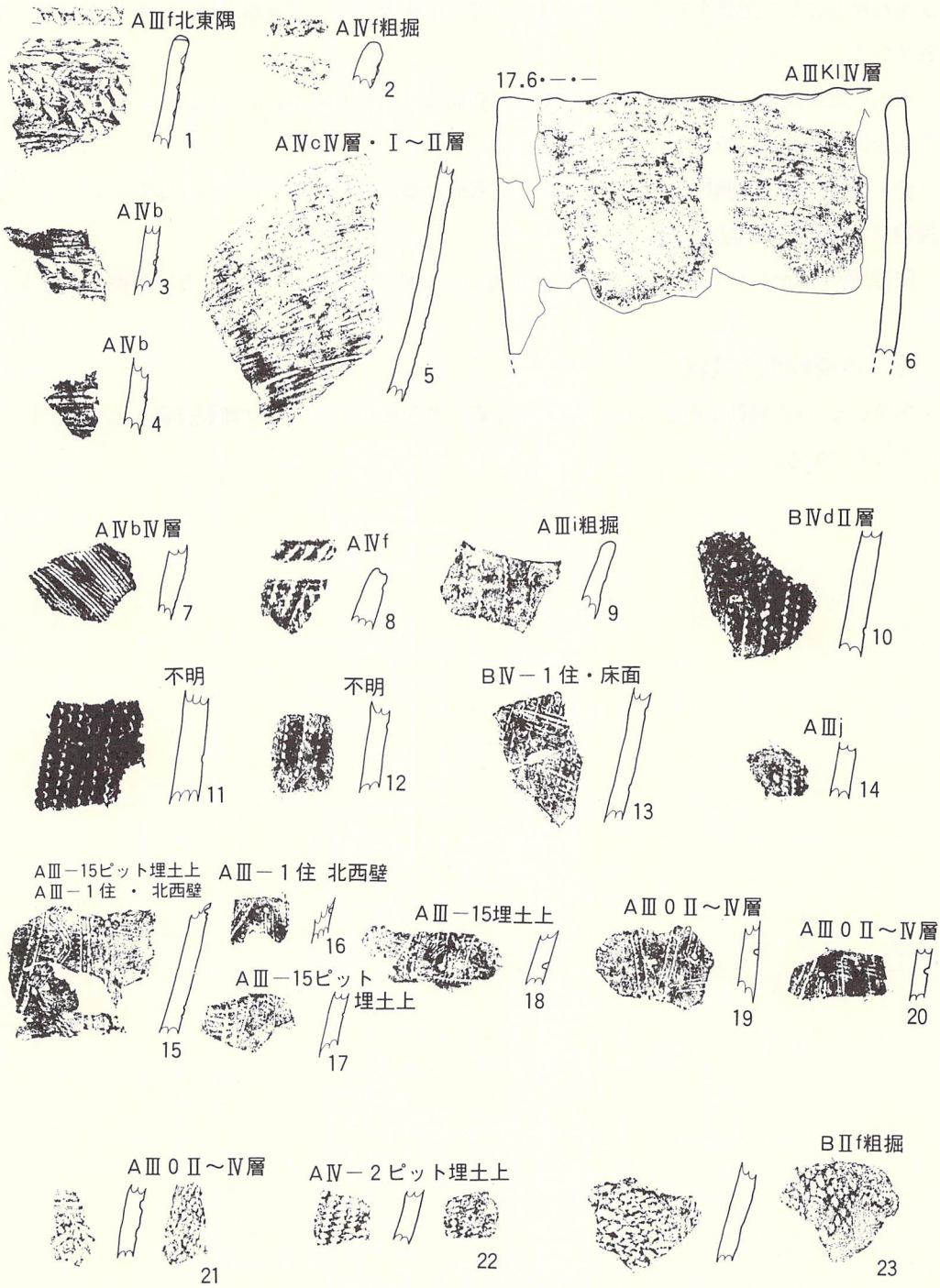
（壁・広面）壁の内側は真赤に焼けており、底面は煙出し口に向かって下り傾斜している。

遺物（第106図，写真図版56）

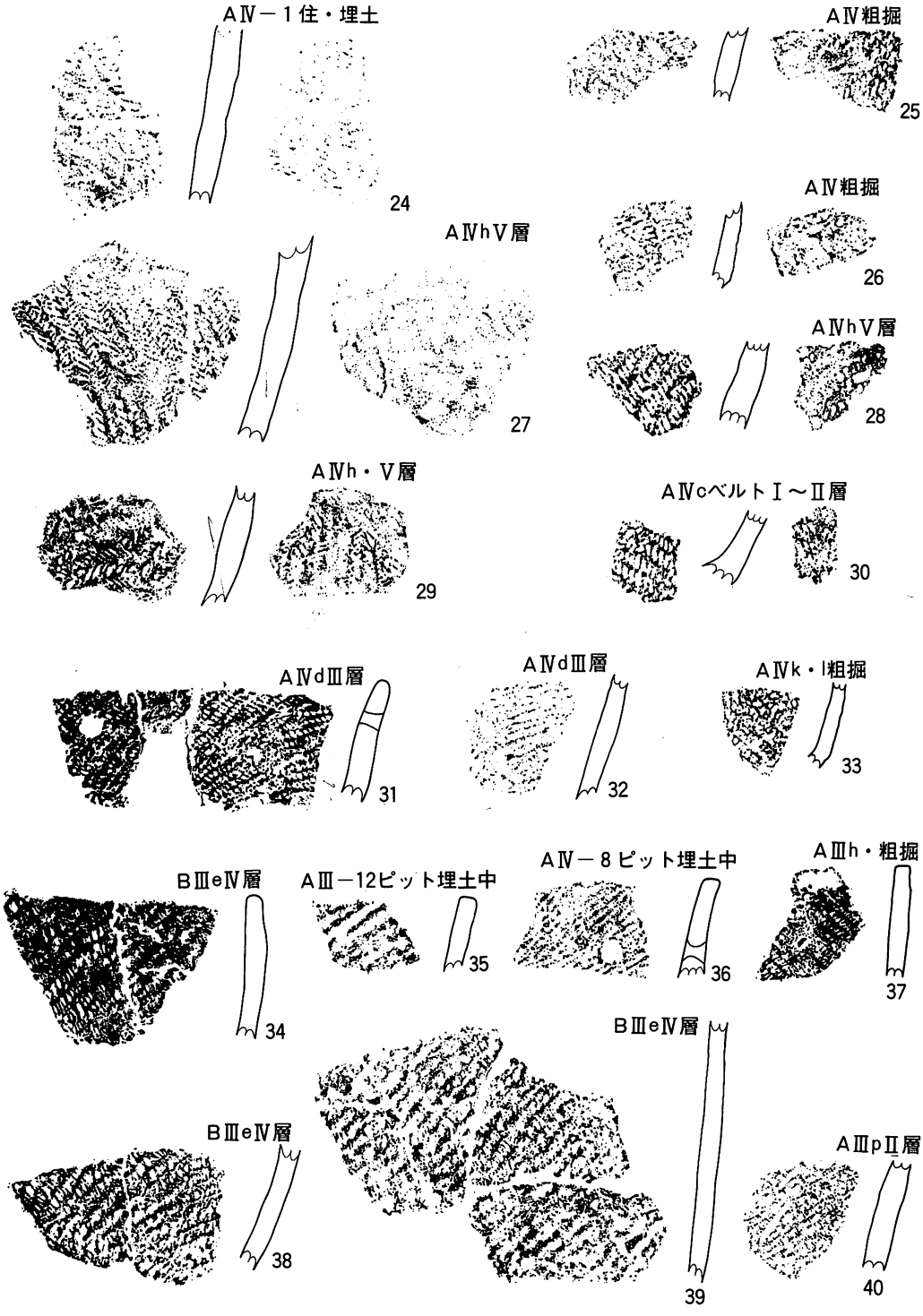
（鉄器）鉤が出土している。カギとカマの両方ついた鉄器であるが、カマの方は欠損している。

〔2〕遺構外出土遺物

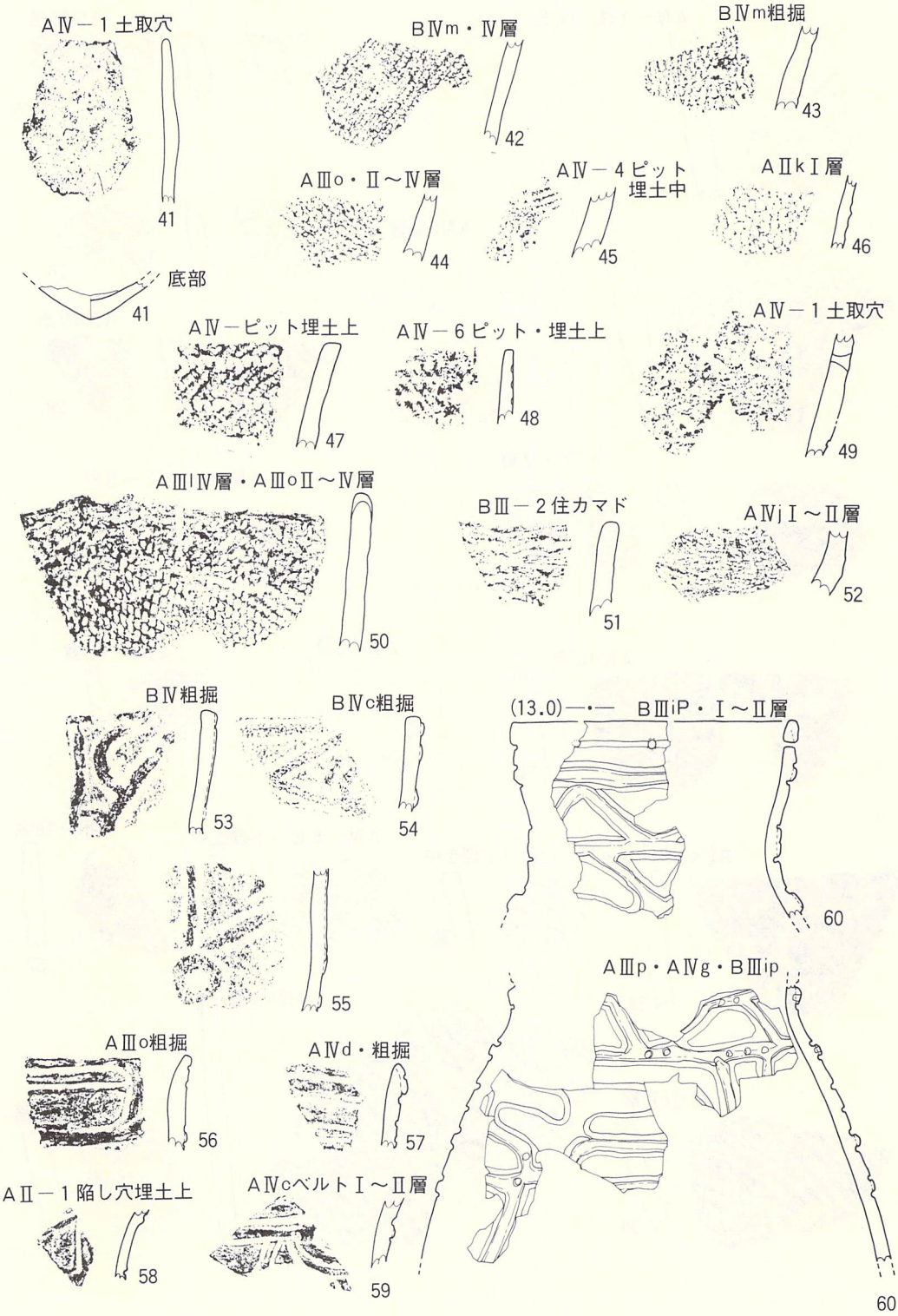
陶器が5点（青緑釉1点を含む）、磁器が4点、残存部が3分の1の寛永通寶1点が出土しているのみである。



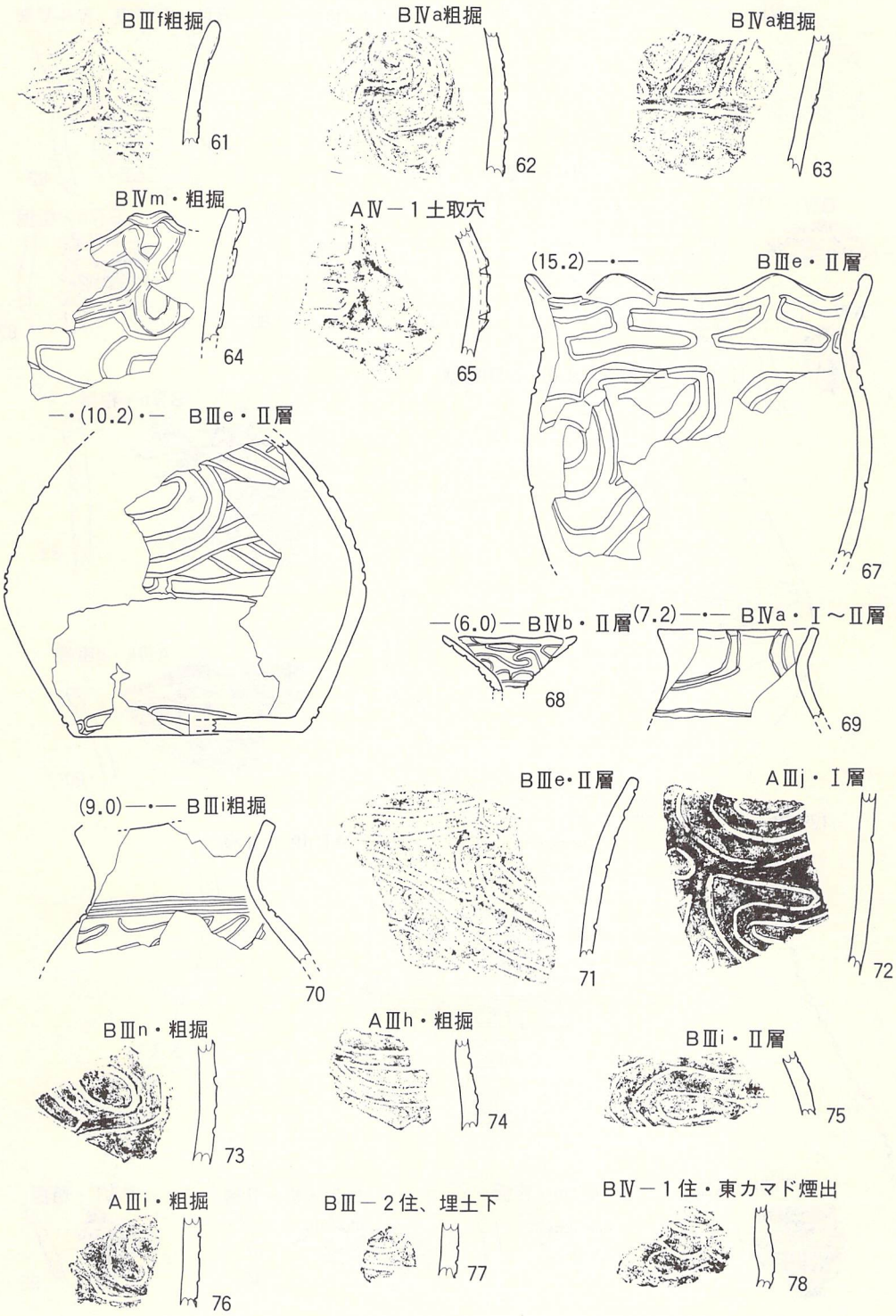
第80図　縄文土器(1)　第Ⅰ・Ⅱ群土器　S＝1/3



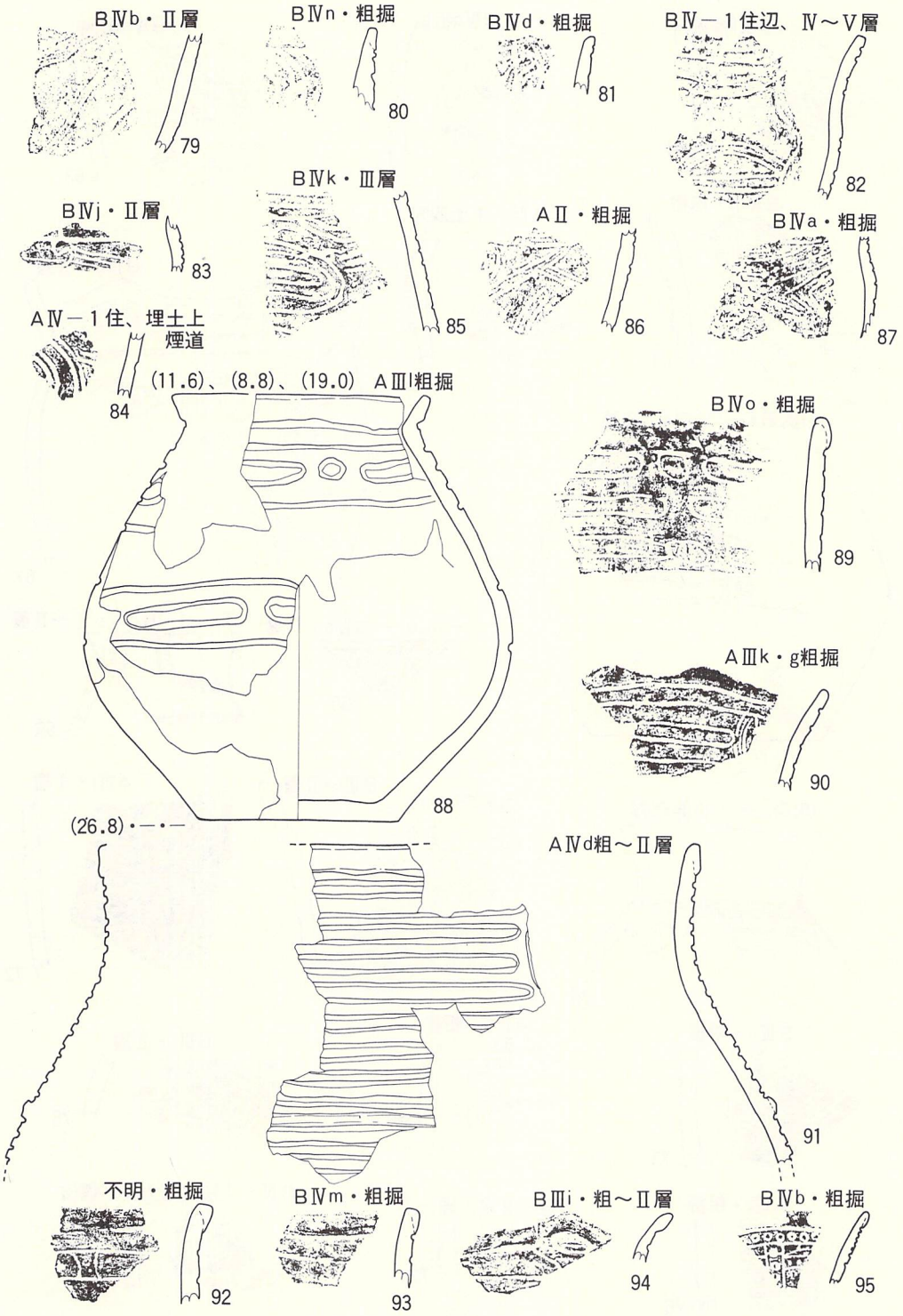
第81図　縄文土器(2) 第Ⅱ群土器 S＝1/3



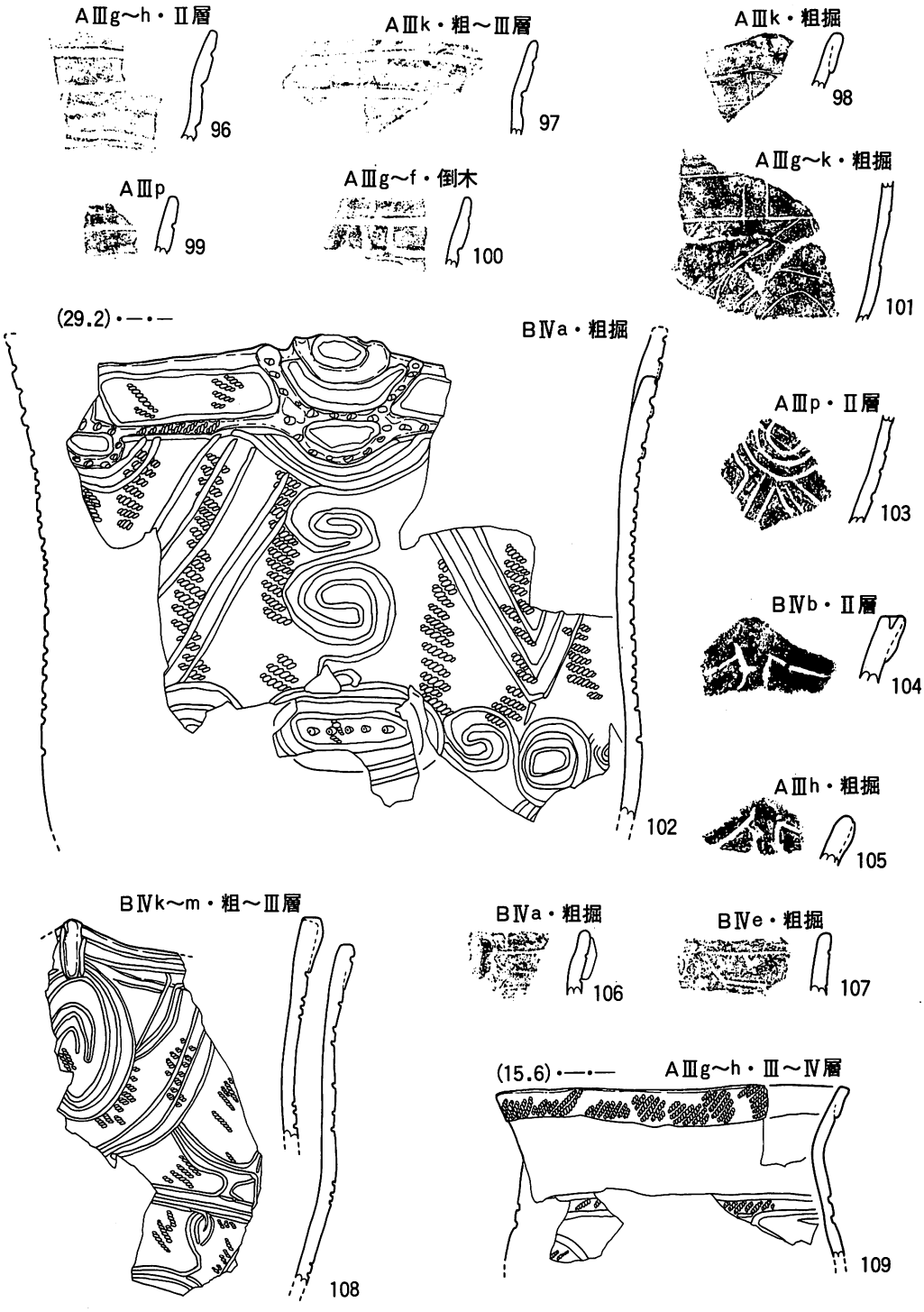
第82図　縄文土器(3) 第Ⅱ・Ⅲ群土器 S＝1/3



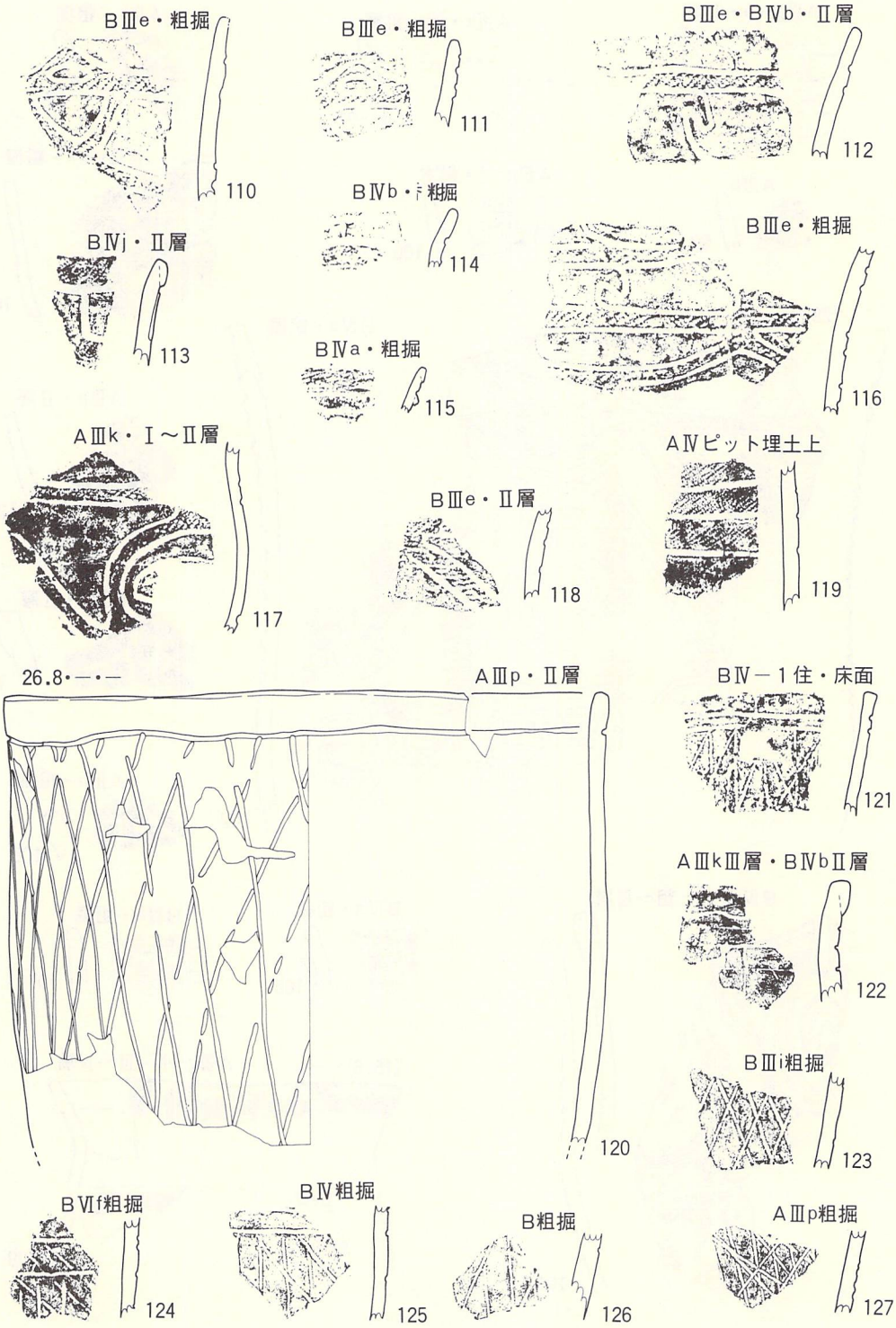
第83図　縄文土器(4) 第Ⅲ群土器　S＝1/3



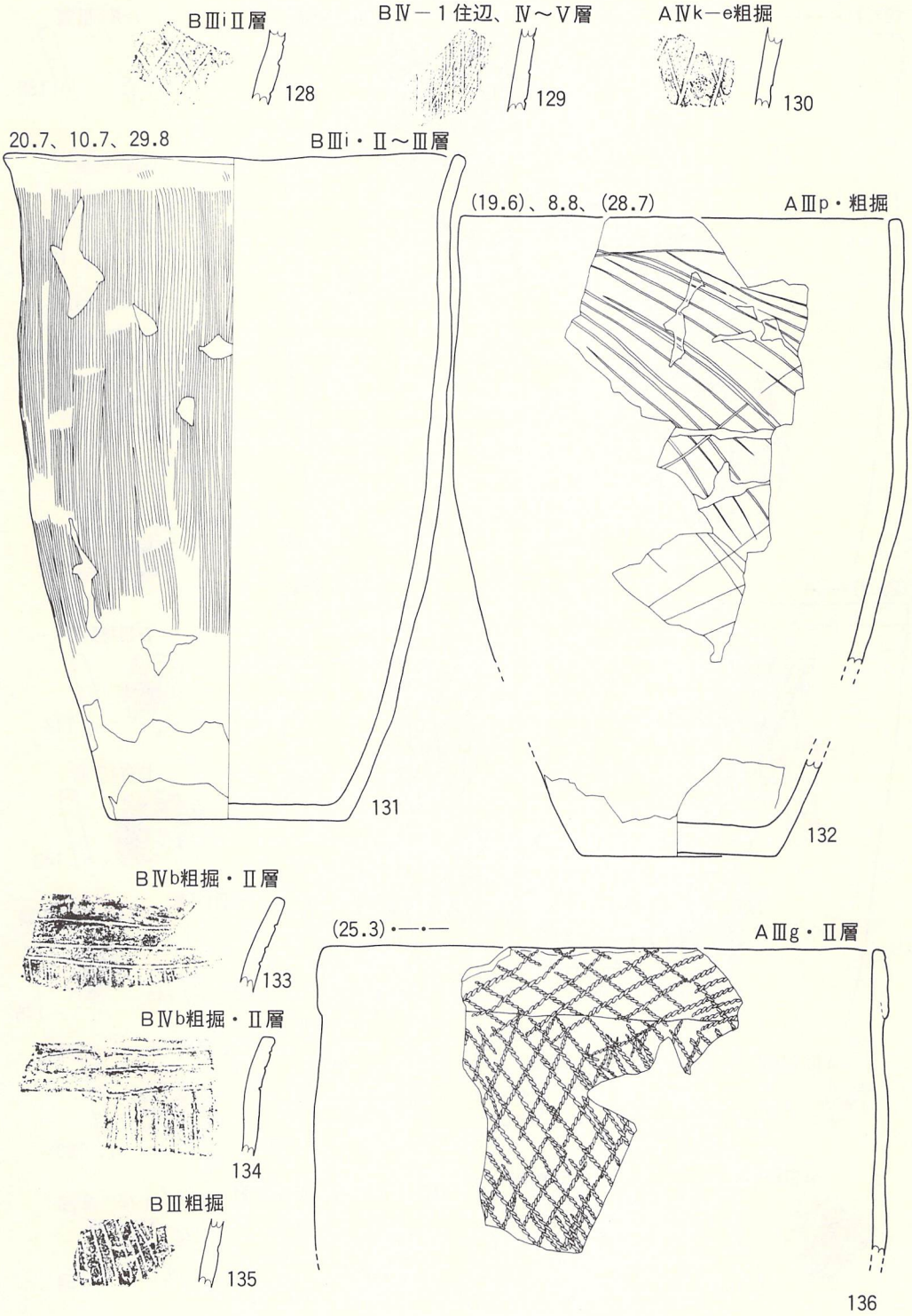
第84図　縄文土器(5) 第Ⅲ群土器 S＝1/3



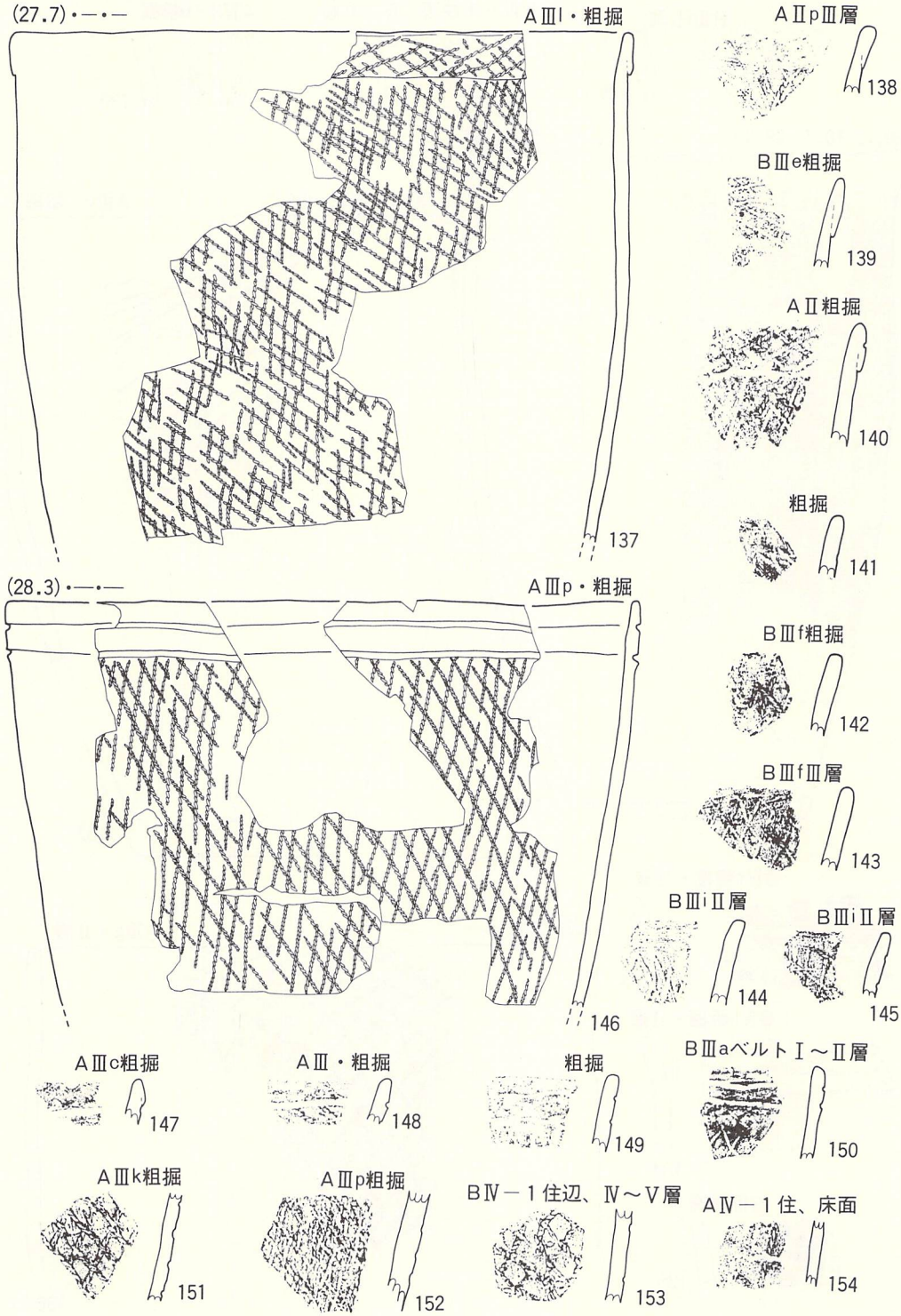
第85図　縄文土器(6) 第Ⅲ群土器 S＝1/3



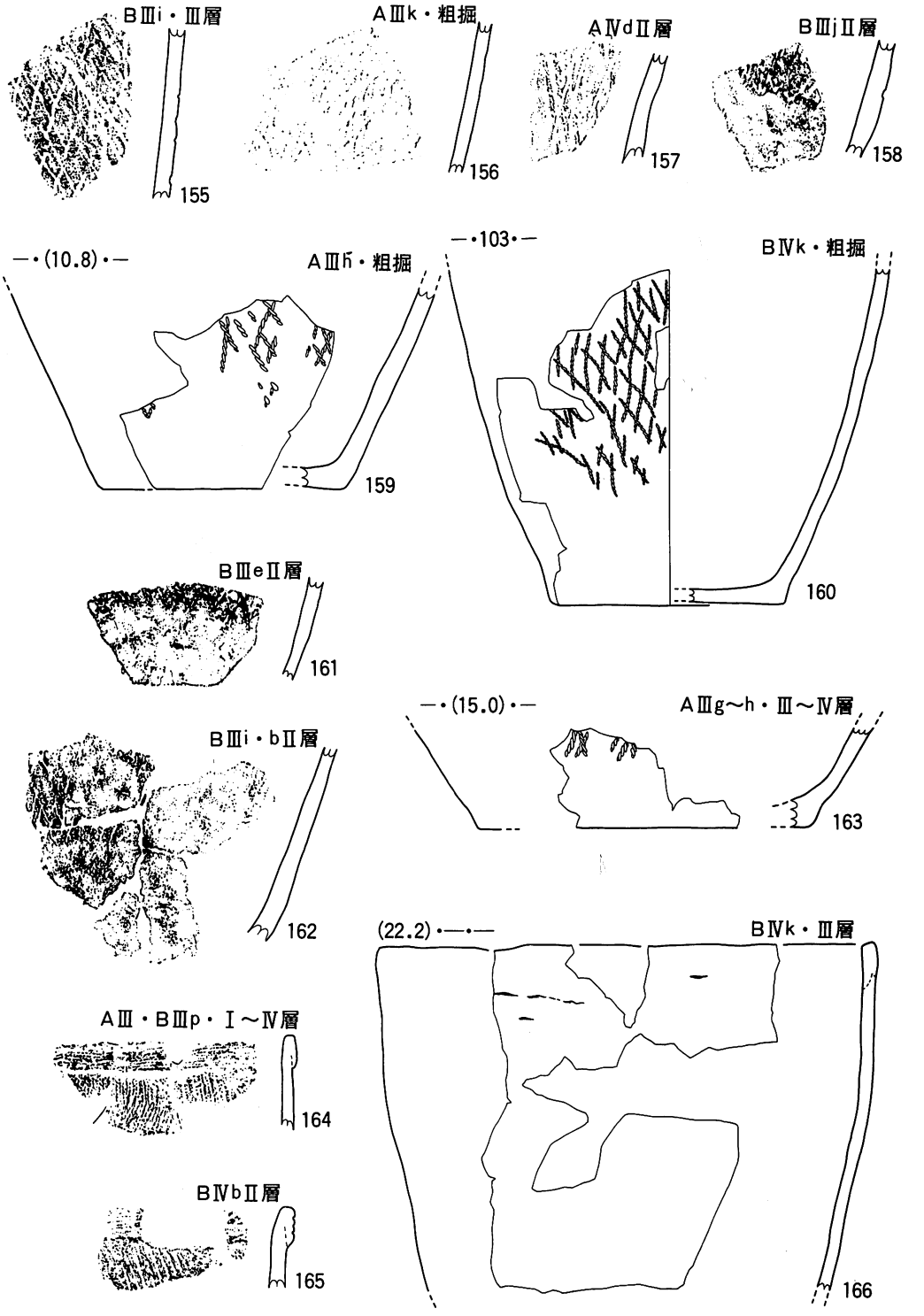
第86図　縄文土器(7) 第Ⅲ群土器 S＝1/3



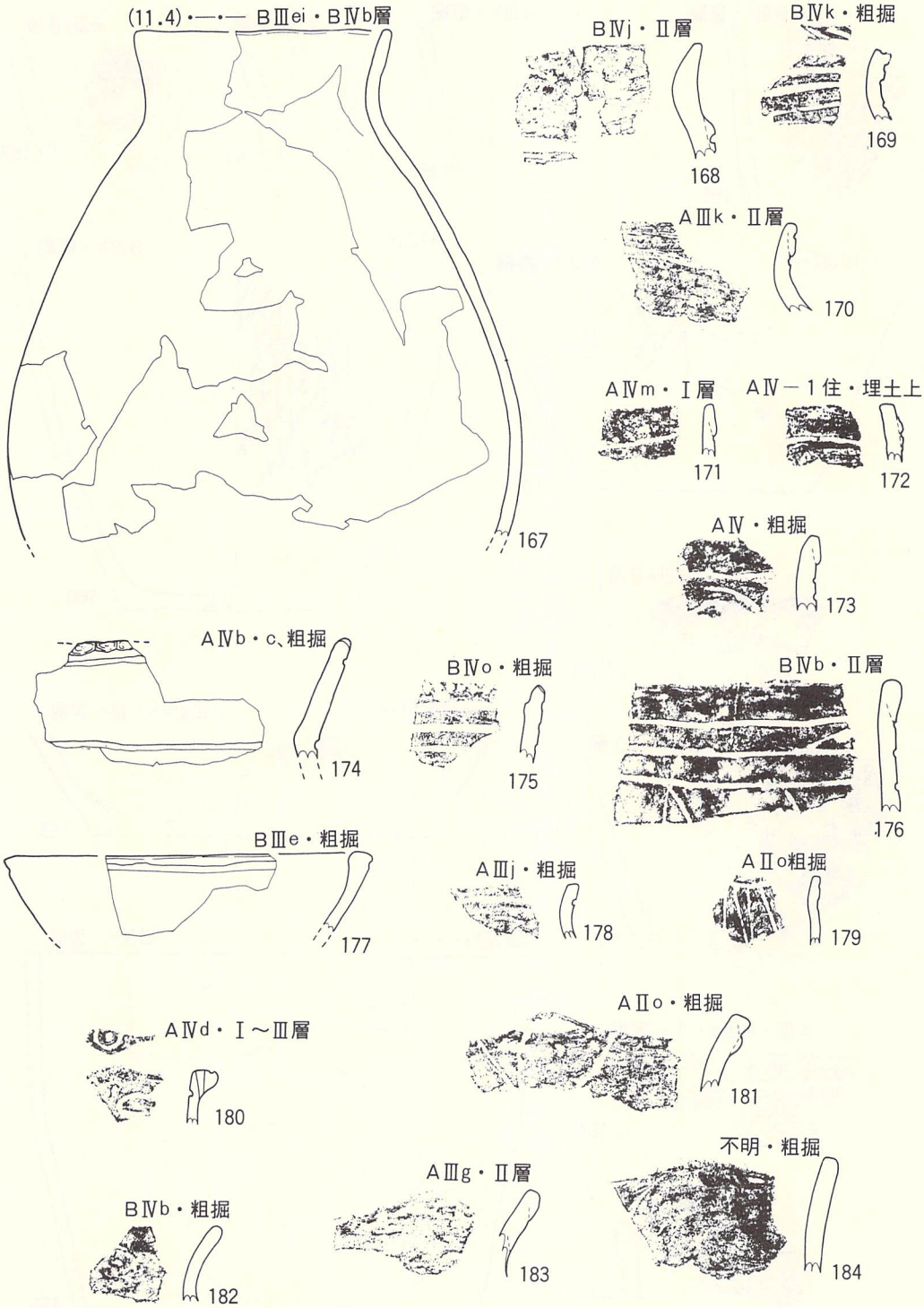
第87図　縄文土器(8) 第Ⅲ群土器 S＝1/3



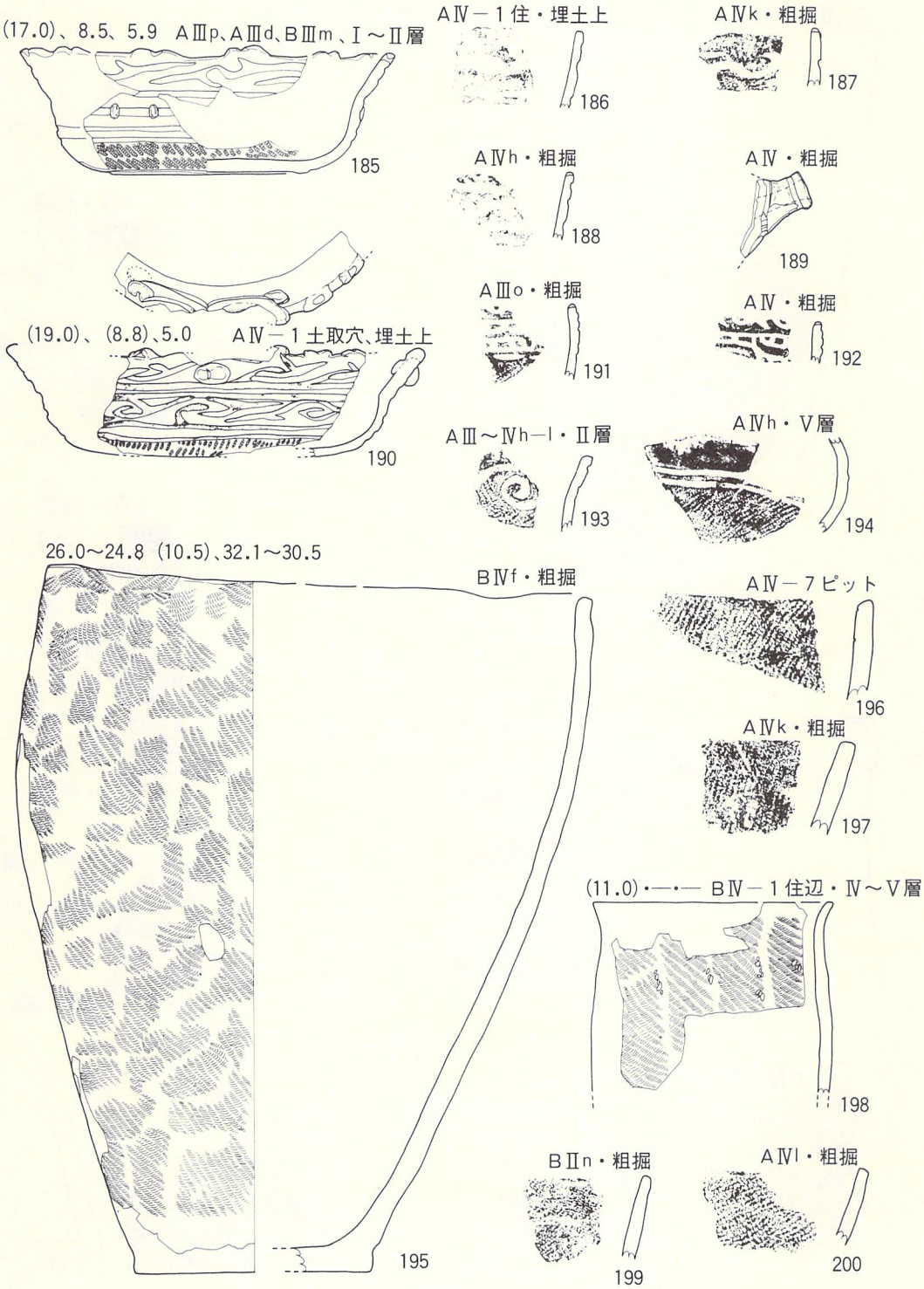
第88図　縄文土器(9) 第Ⅲ群土器 S＝1/3



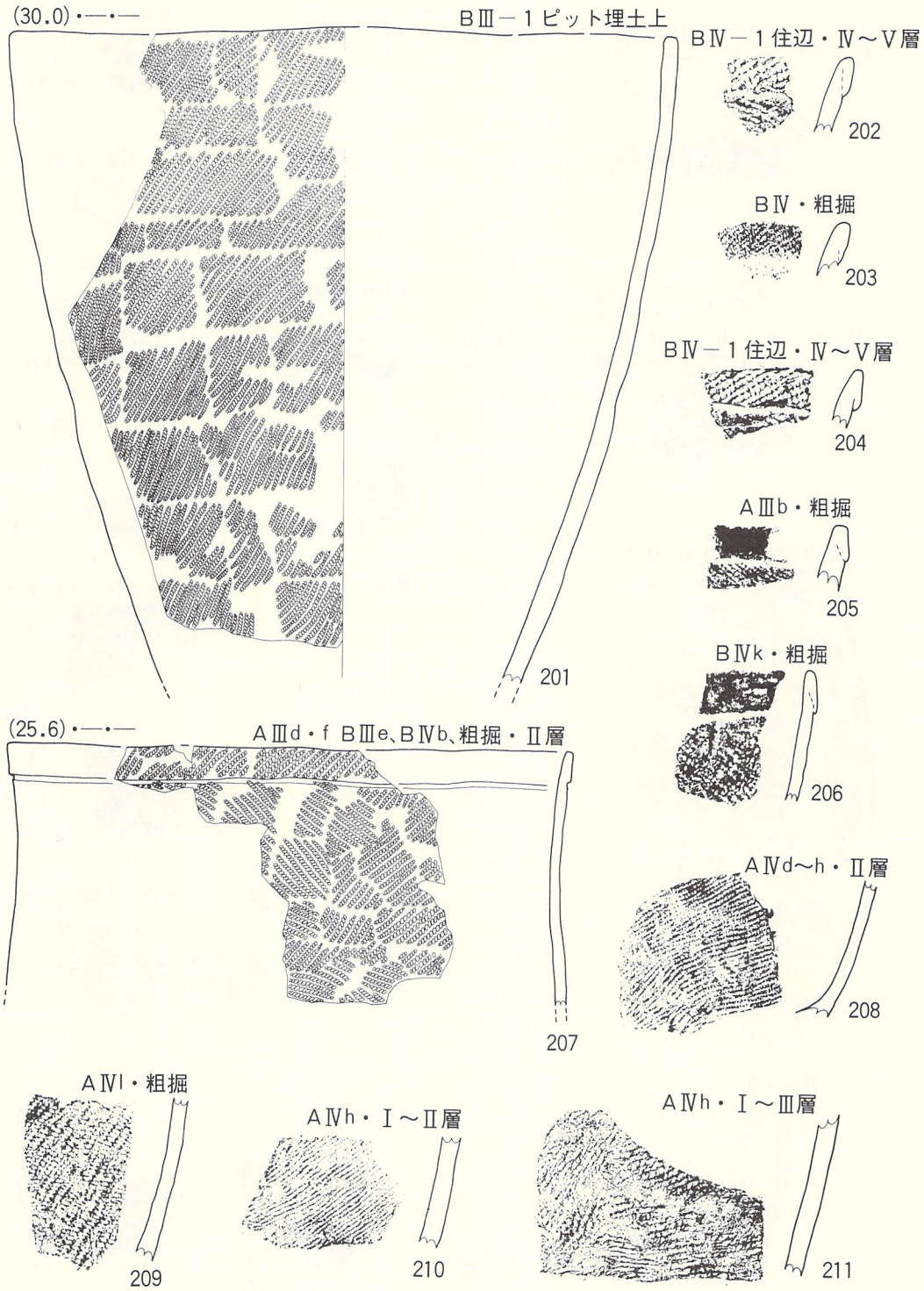
第89図　縄文土器(10) 第Ⅲ群土器 S＝1/3



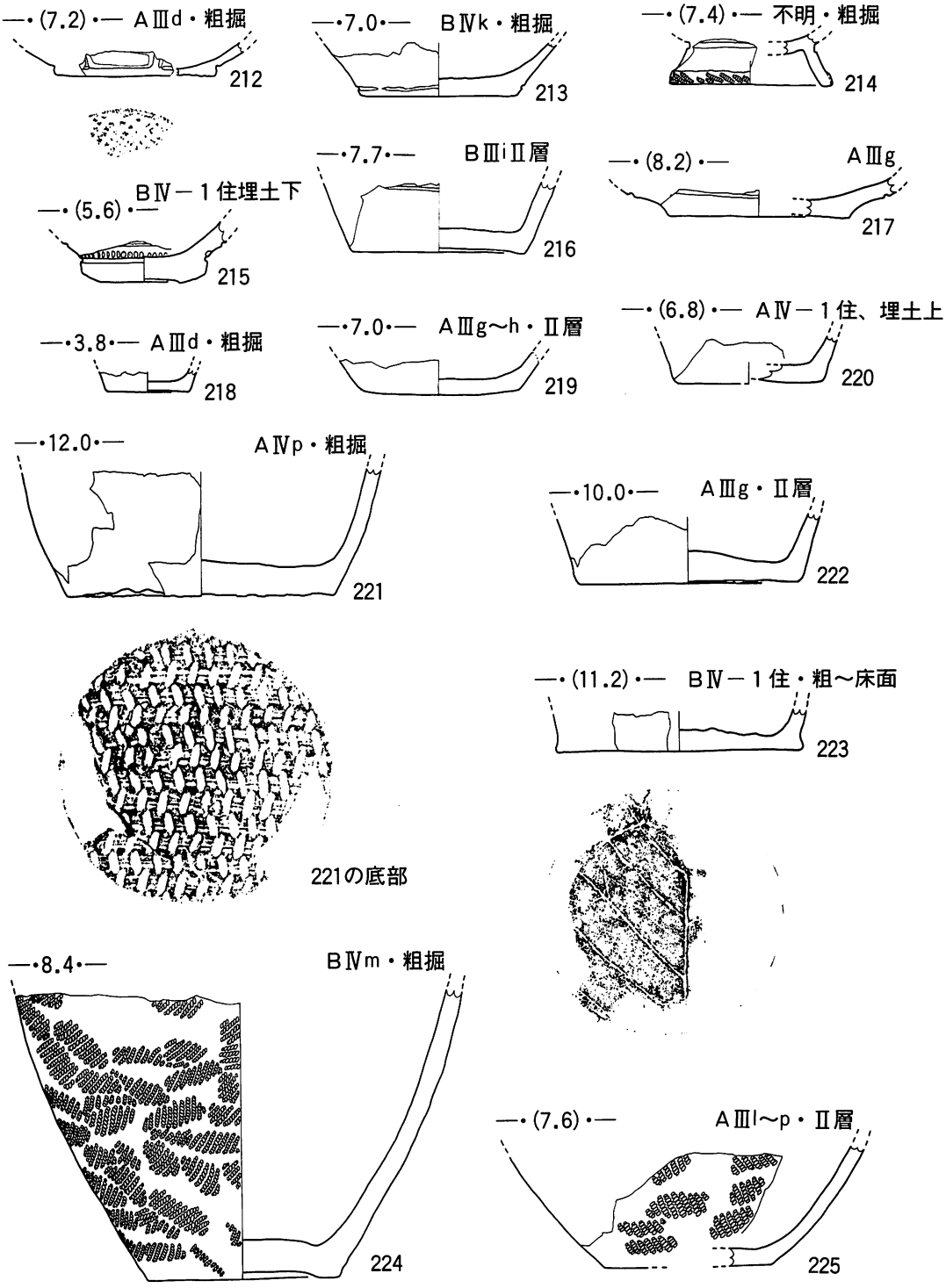
第90図　縄文土器(11) 第Ⅲ群土器 S＝1/3



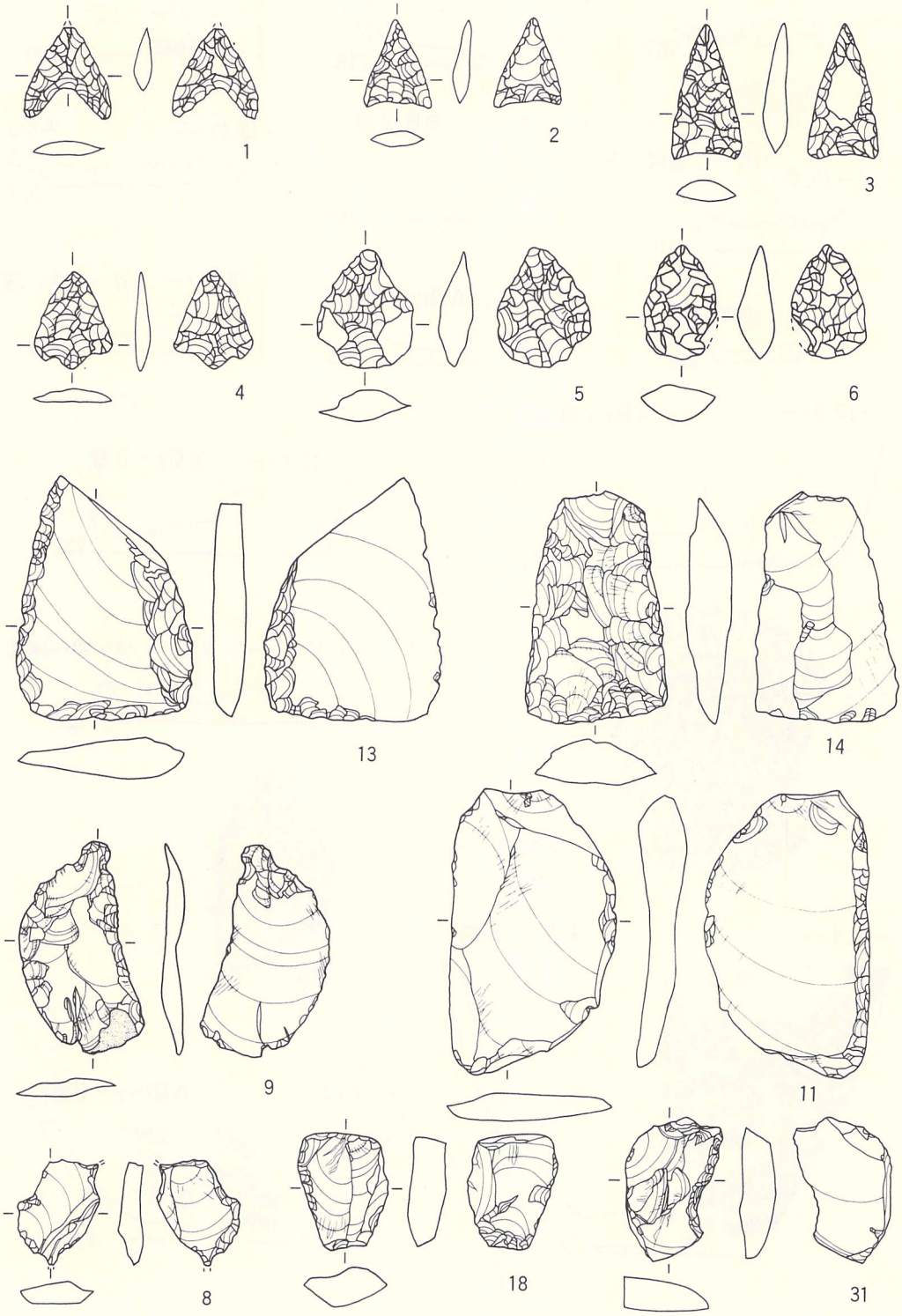
第91図　縄文土器(12) 第Ⅳ、Ⅴ群土器 S＝1/3



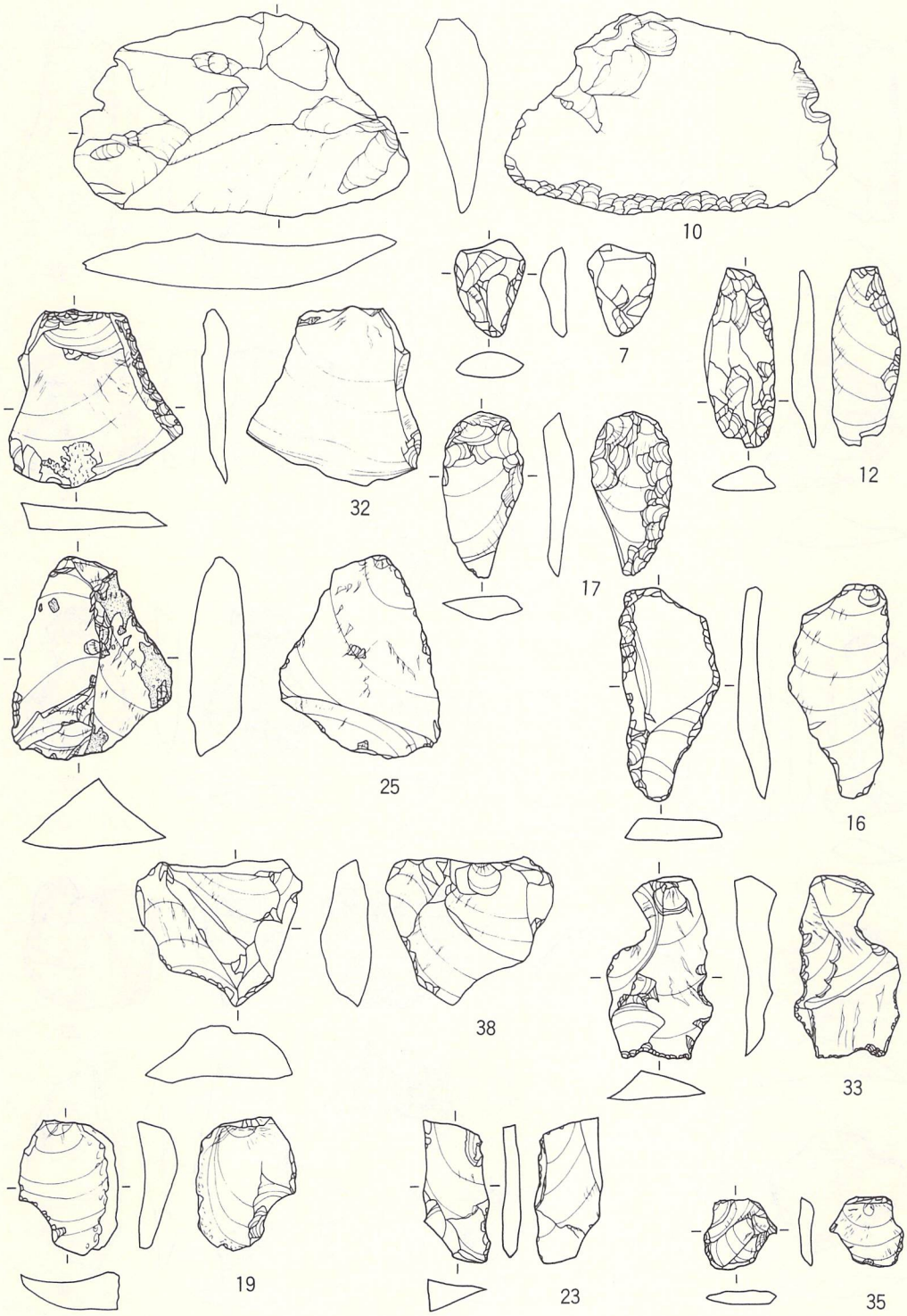
第92図　縄文土器(13) 第Ⅴ群土器 S＝1/3



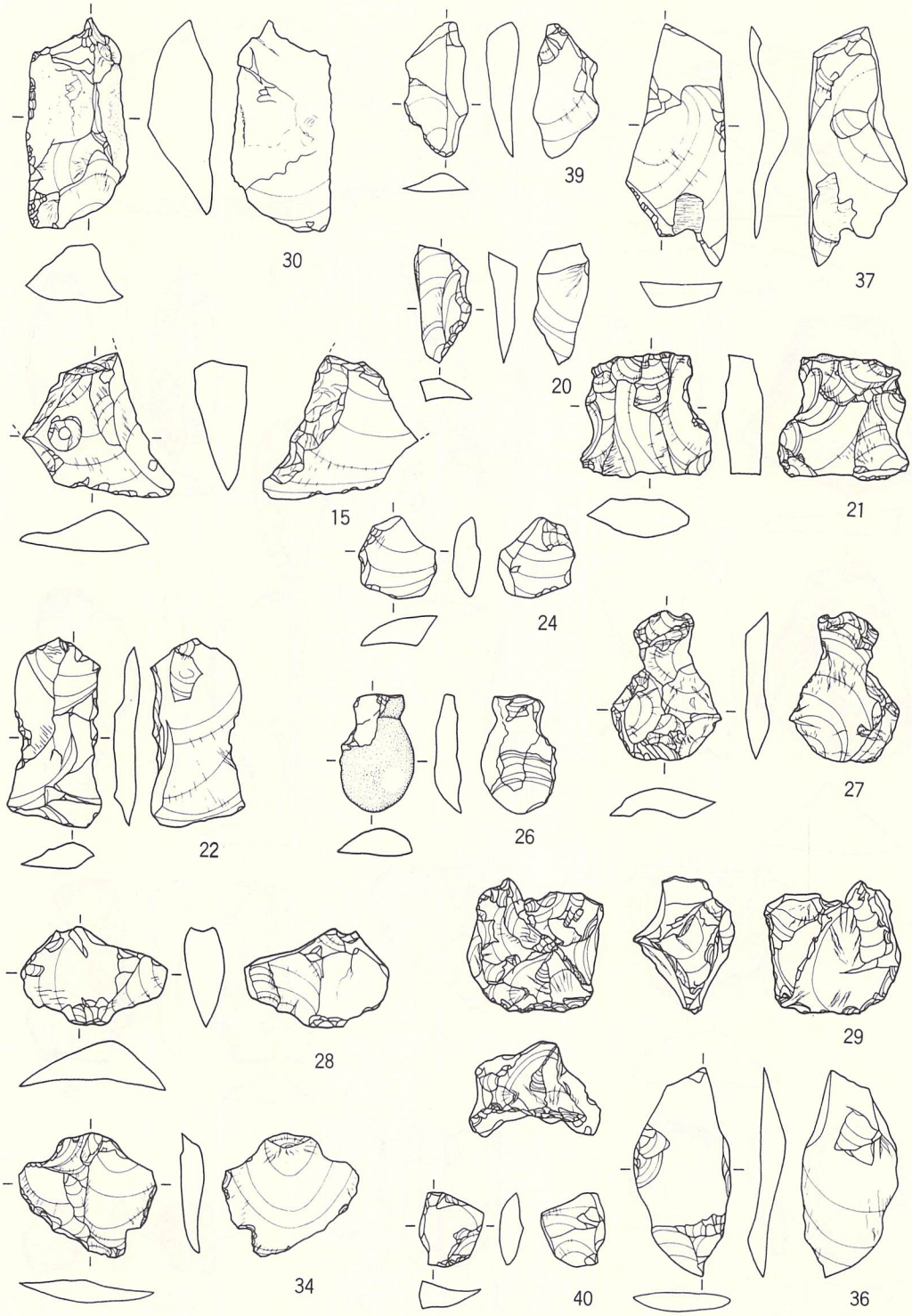
第93図　縄文土器(14) 第Ⅴ群土器 S＝1/3



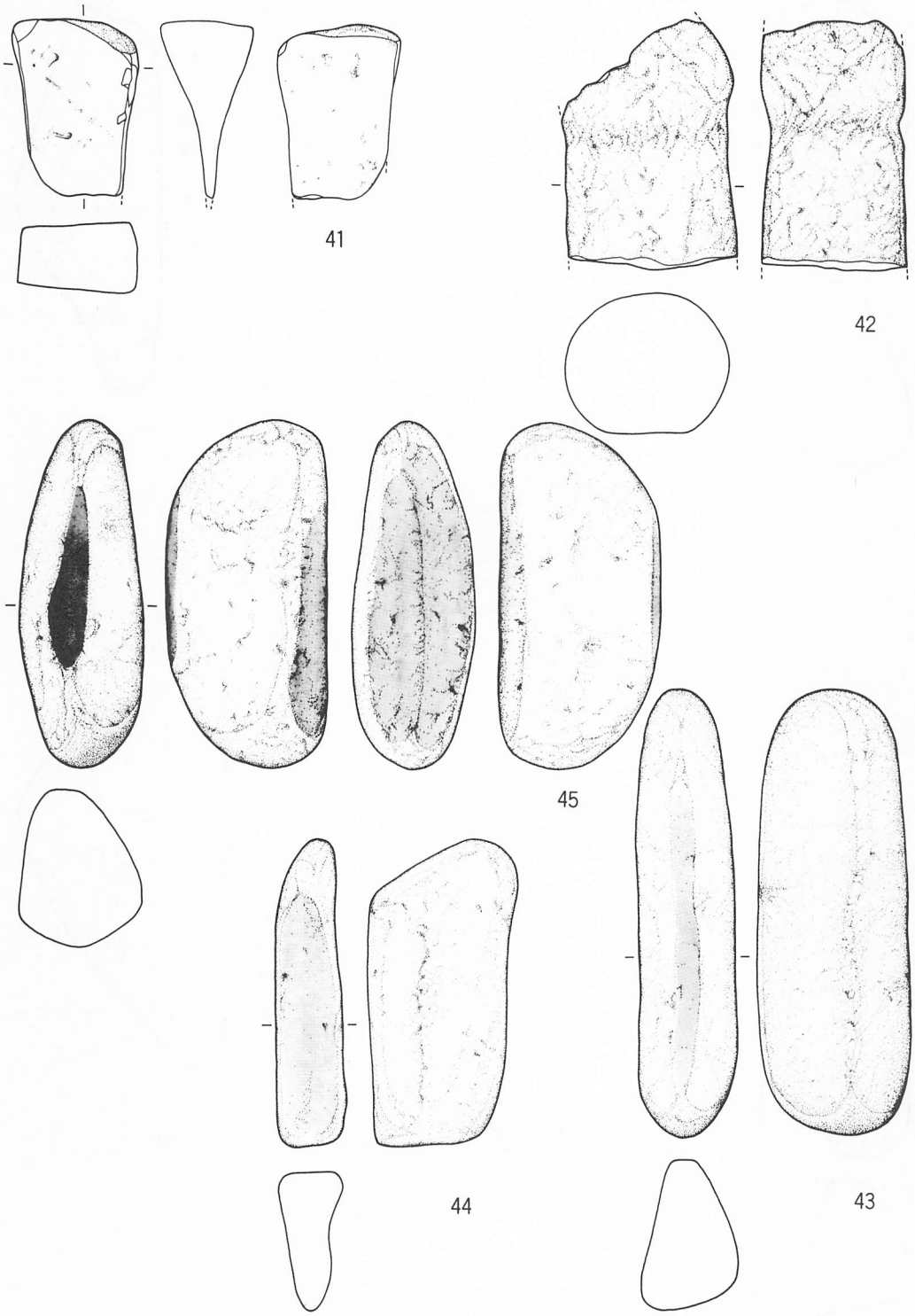
第94図　石器(1)　1～6のS＝2/3、その他のS＝1/2



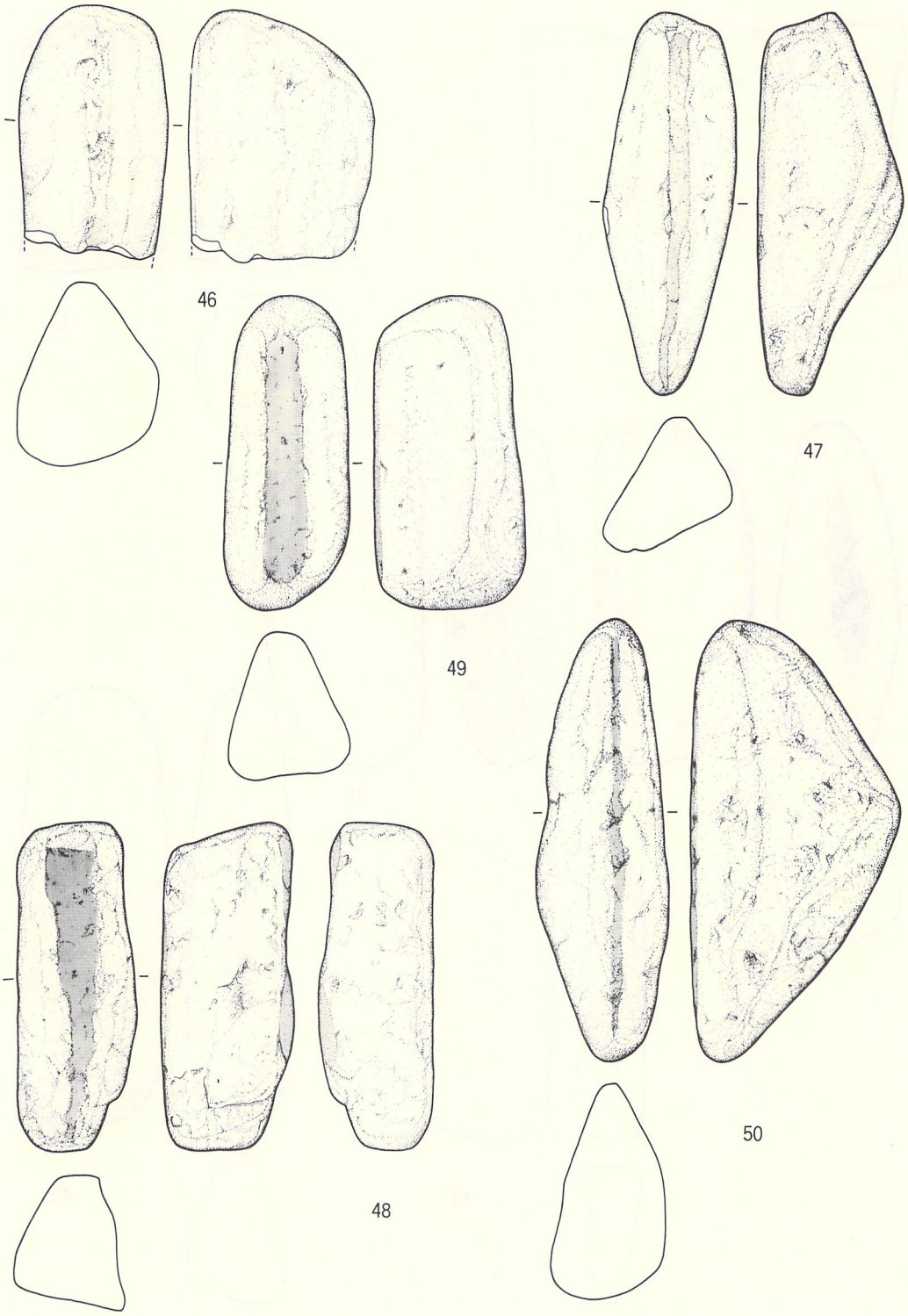
第95図　石器(2)　S＝1/2



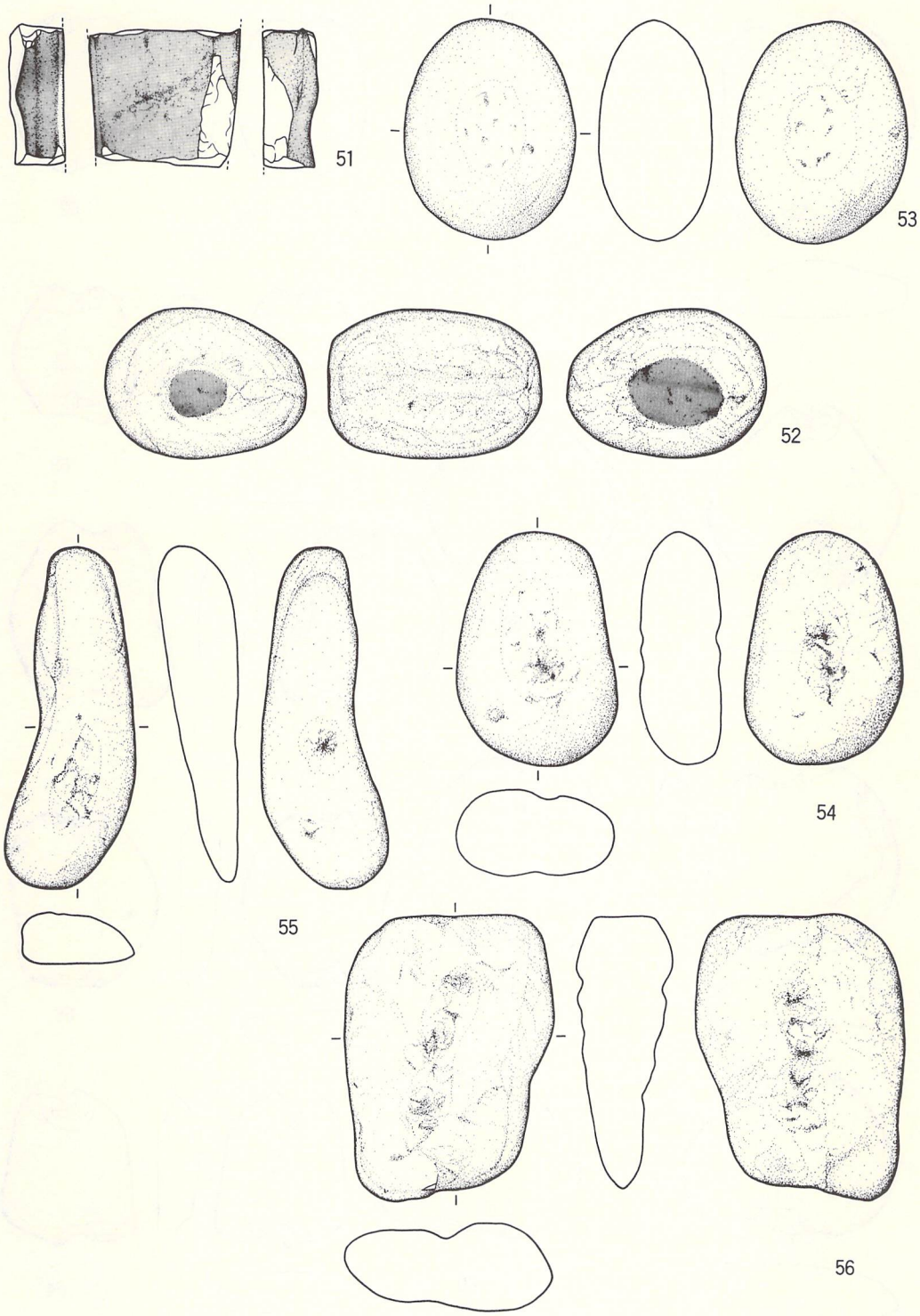
第96図　石器(3)　S＝1/2



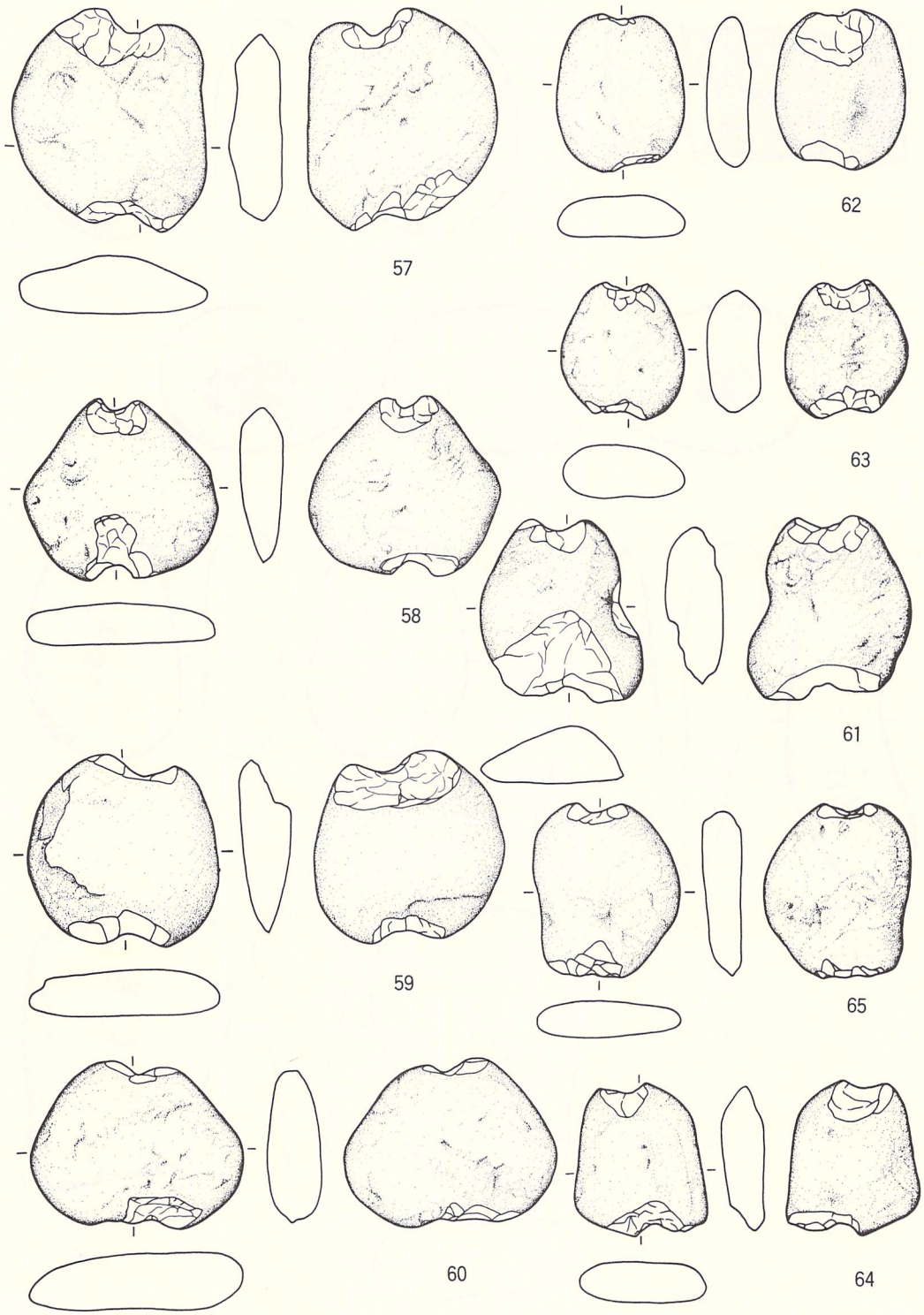
第97図　石器(4)　S＝1/3



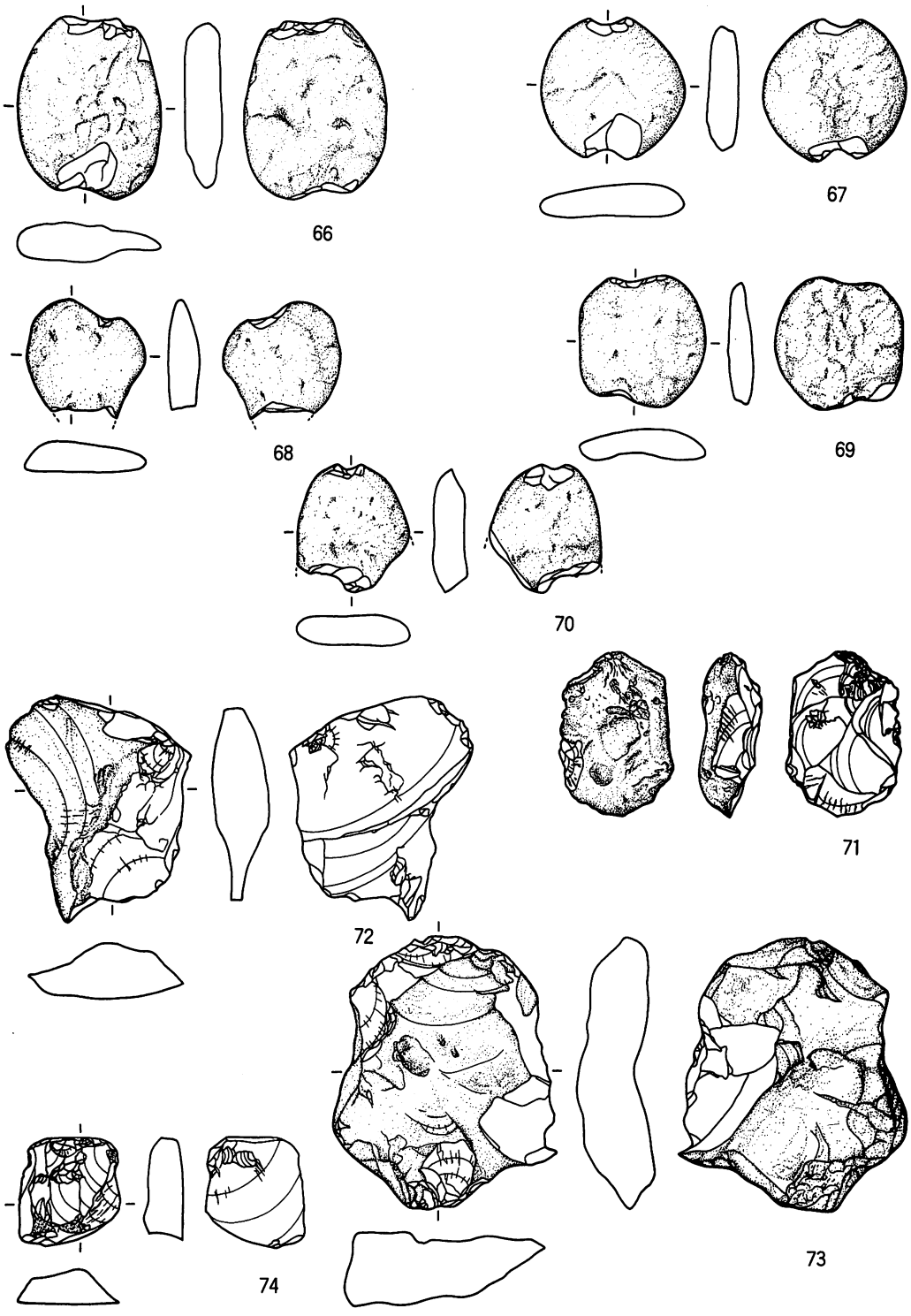
第98図　石器(5)　S＝1/3



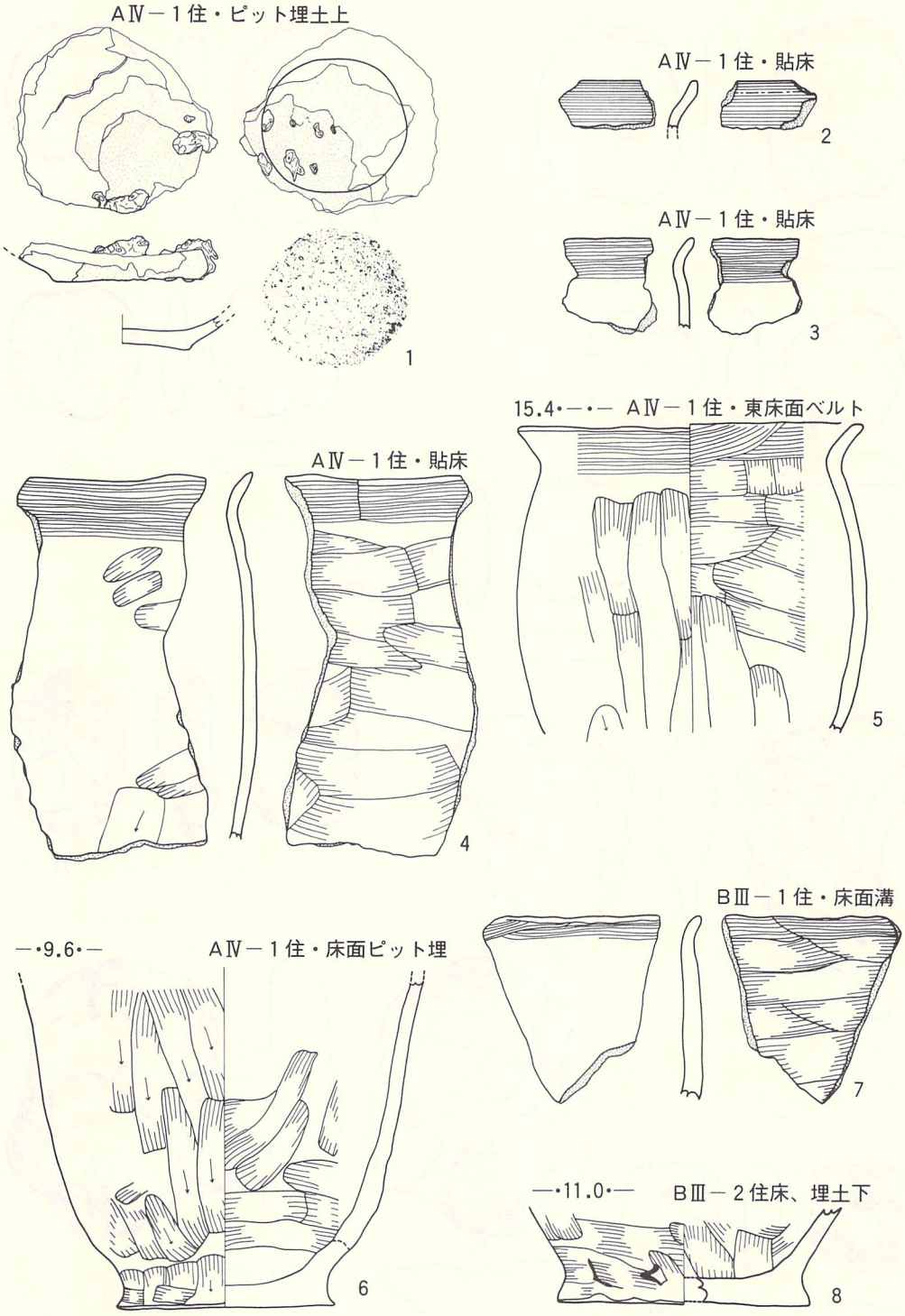
第99図　石器(6)　S＝1/3



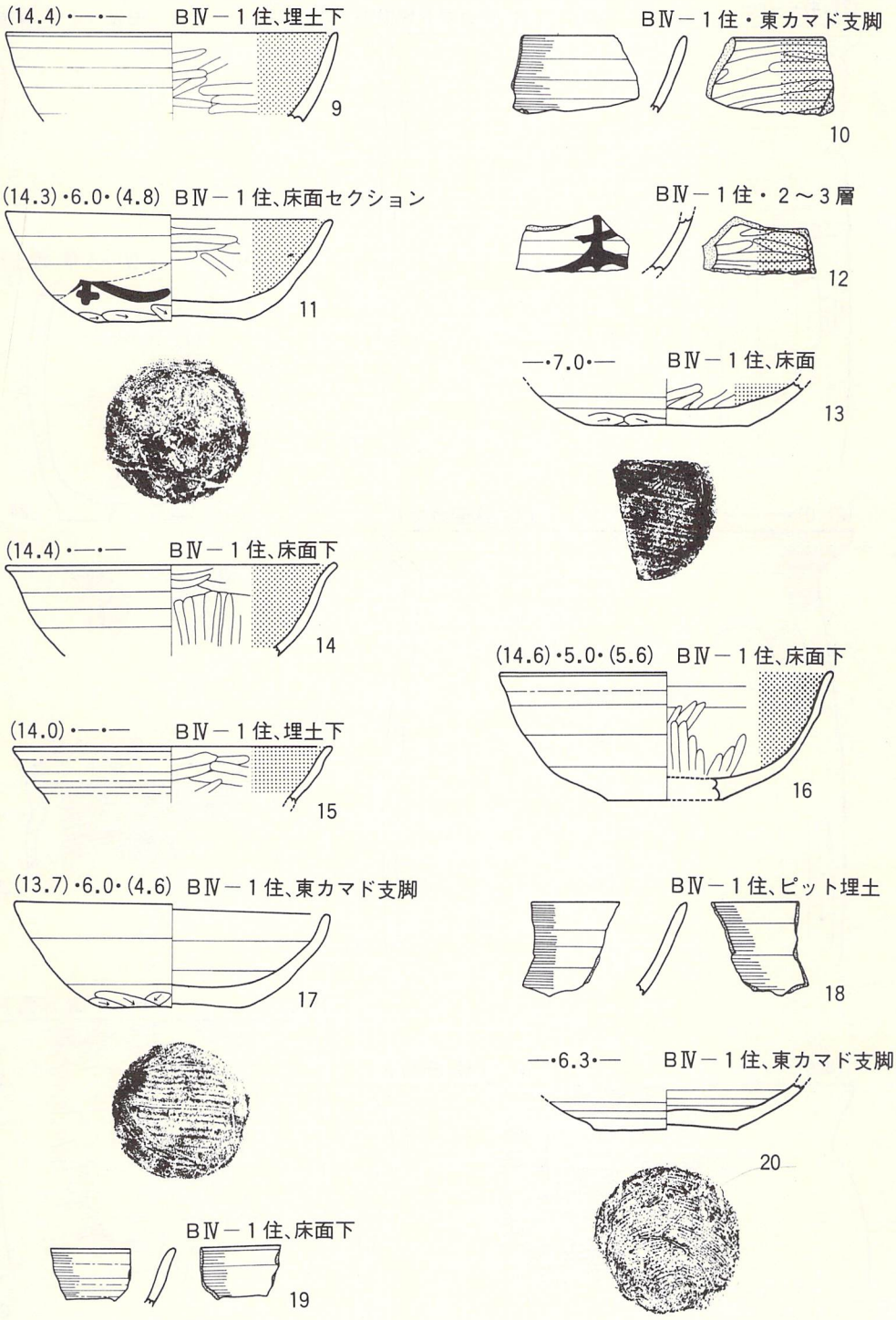
第100図　石器(7)　S＝1/3



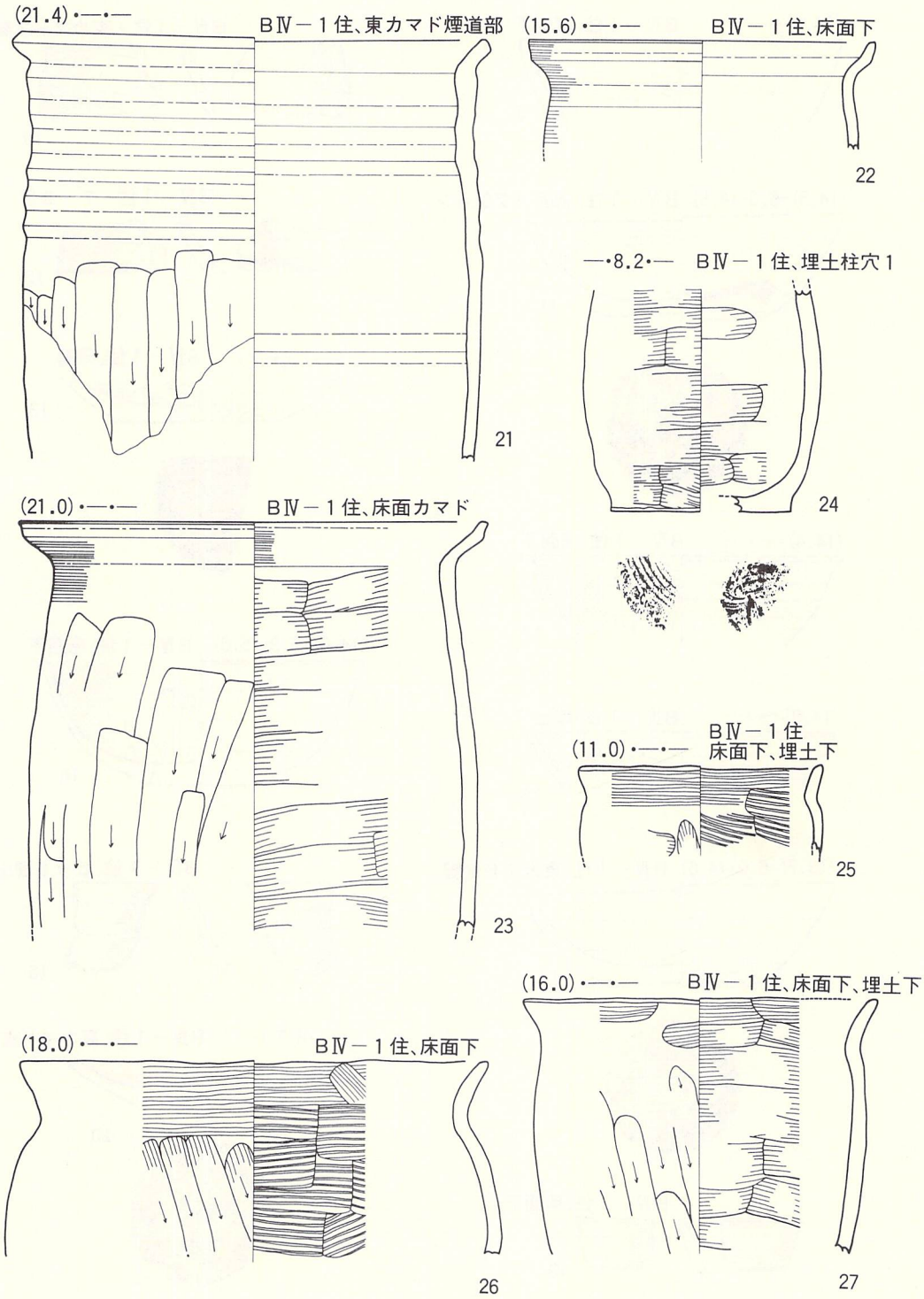
第101図　石器(8)　S＝1/3



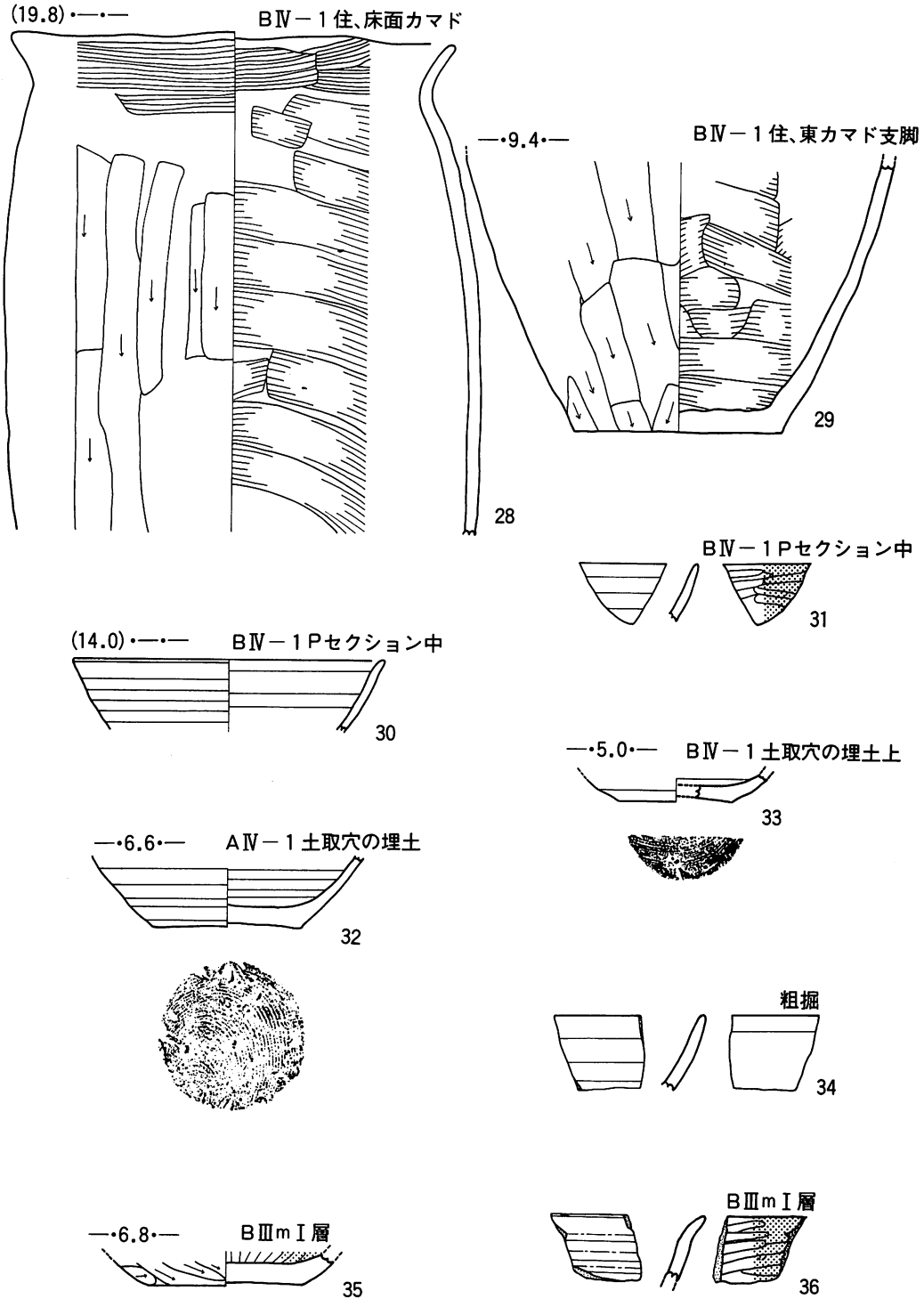
第102図　平安時代の土器(1)　S＝1/3



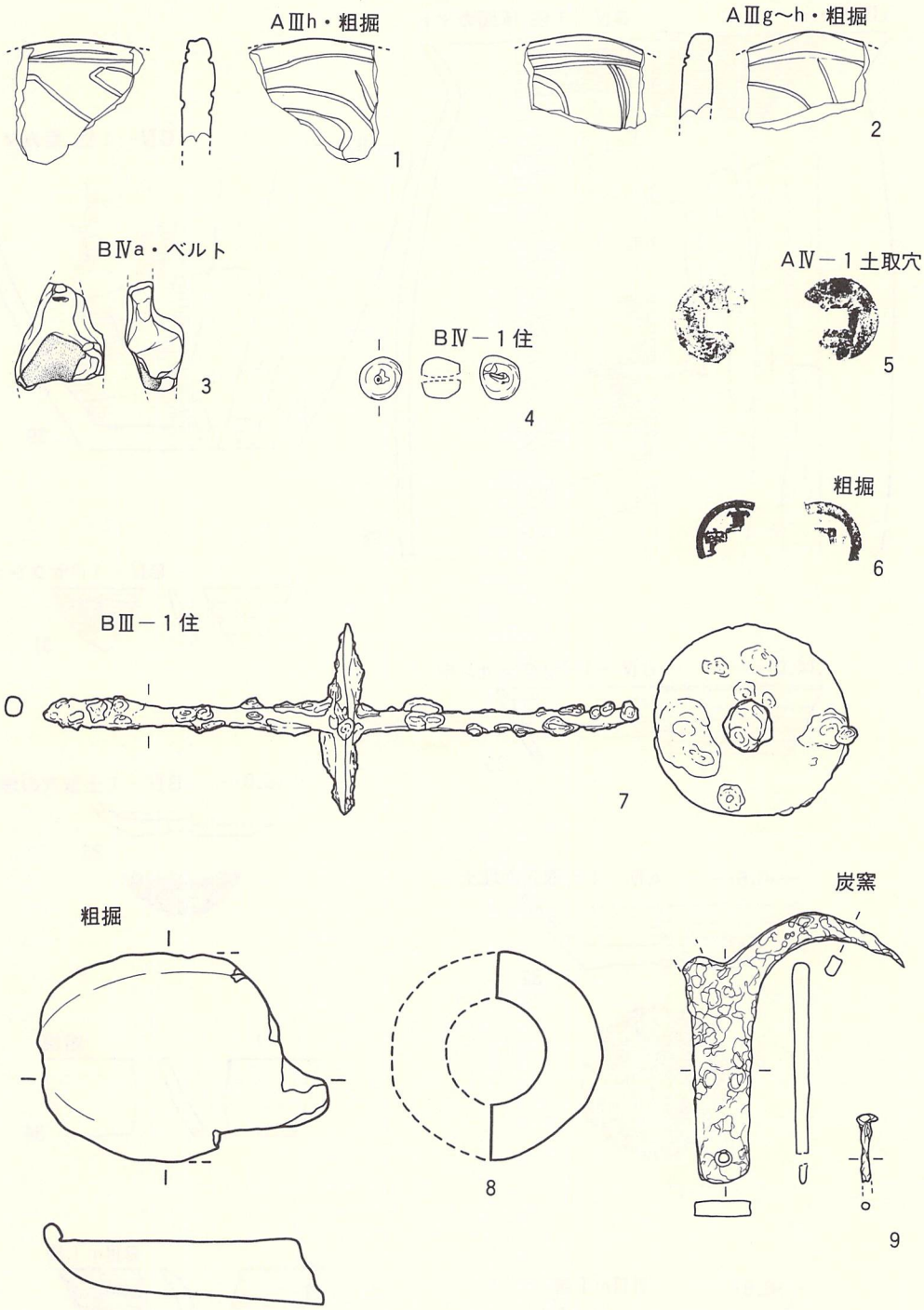
第103図　平安時代の土器(2)　S＝1/3



第104図　平安時代の土器(3)　S＝1/3



第105図　平安時代の土器(4)　S＝1/3



第106図　土製品・金属製品　S＝1/2

遺物観察一覧表

1．縄文土器

図版No.	器　種	出土地点　層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	文　様	地　文	焼成	胎土色調	備　考	分類
1	深鉢、口縁	AⅢf北東隅　V	—	—	—	6～7	爪形刺突文	貝殻条痕文	良	灰黄褐色	接合破片あり	Ⅰ-1
2	深鉢、口縁	AⅣf　粗	—	—	—	8～9	爪形刺突文	—	良	にぶい黄橙色		Ⅰ-1
3	深鉢、口縁	AⅣb　粗	—	—	—	6～7	爪形刺突文	貝殻条痕文	良	灰黄褐色		Ⅰ-1
4	深鉢、口縁	AⅣb　粗	—	—	—	7～8	爪形刺突文	貝殻条痕文	良	褐灰色	接合破片あり	Ⅰ-1
5	深鉢、体部	AⅣc　Ⅰ～Ⅳ	—	—	—	7		貝殻条痕文	良	褐灰色		Ⅰ-1
6	深鉢口縁～体部	AⅢg　風倒木痕	17.6	—	—	9～10		貝殻条痕文	良	にぶい橙色	炭化物(内)	Ⅰ-1
7	深鉢、体部	AⅣb　Ⅵ	—	—	—	8～9		貝殻条痕文	良	にぶい橙色		Ⅰ-1
8	深鉢、口縁	AⅣf　Ⅰ	—	—	—	9～10		貝殻腹縁文	良	灰黄褐色		Ⅰ-2
9	深鉢、口縁	AⅢi　粗	—	—	—	6～8		貝殻腹縁文	良	にぶい黄橙色	炭化物(内)	Ⅰ-2
10	深鉢、体部	BⅣj　Ⅱ	—	—	—	8～9		貝殻腹縁文	良	橙色		Ⅰ-2
11	深鉢、体部	不明　粗	—	—	—	10～11		貝殻腹縁文	良	にぶい黄橙色		Ⅰ-2
12	深鉢、体部	不明　粗	—	—	—	7～8		貝殻腹縁文	良	にぶい黄橙色	微量の繊維含	Ⅰ-2
13	深鉢、体部	BⅣ－1住　床	—	—	—	7～8	貝殻条痕文	貝殻腹縁文	良	褐灰色	炭化物(内)	Ⅰ-2
14	深鉢、体部	AⅢj　Ⅰ	—	—	—	7～8		貝殻腹縁文	良	にぶい黄橙色		Ⅰ-2
15	深鉢、体部	AⅢ－15P　上 AⅢ－1住　北西壁	—	—	—	6～8	沈線文、貝殻腹縁文、刺突文	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物(内・外)	Ⅰ-3
16	深鉢、体部	AⅢ－1住　北西壁	—	—	—	6～8	沈線文、貝殻腹縁文、刺突文	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物(内・外)	Ⅰ-3
17	深鉢、体部	AⅢ－15P　上	—	—	—	6～8	沈線文、貝殻腹縁文、刺突文	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物(内・外)	Ⅰ-3
18	深鉢、体部	AⅢ－15P　上	—	—	—	6～8	沈線文、貝殻腹縁文、刺突文	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物(内・外)	Ⅰ-3
19	深鉢、体部	AⅢo　Ⅱ～Ⅳ	—	—	—	6～7	沈線文、貝殻腹縁文、刺突文	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物	Ⅰ-3
20	深鉢、体部	AⅢo　Ⅱ～Ⅳ	—	—	—	6～7	沈線文、貝殻腹縁文、刺突文	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物	Ⅰ-3
21	深鉢、体部	AⅢo　Ⅱ～Ⅳ	—	—	—	7～8	沈線文	RL	良	橙	繊維含表裏縄文	Ⅱ-1
22	深鉢、体部	AⅣ－2P　上	—	—	—	7		RL	良	明赤褐色	繊維含表裏縄文	Ⅱ-1
23	深鉢、体部	BⅡf　粗	—	—	—	7～8		RL	良	明赤褐色	繊維含表裏縄文	Ⅱ-1
24	深鉢、体部	AⅣ－住　上 AⅣn　Ⅴ	—	—	—	9～12		0段多条	やや良	橙色	繊維含表裏縄文	Ⅱ-1
25	深鉢、体部	AⅣ　粗	—	—	—	8～9		0段多条	良	にぶい黄橙色	繊維含表裏縄文	Ⅱ-1
26	深鉢、体部	AⅣ　粗	—	—	—	8～9		0段多条	良	にぶい黄橙色	繊維含表裏縄文	Ⅱ-1
27	深鉢、体部	AⅣh　Ⅴ	—	—	—	12～13		0段多条(撚り戻し有)	やや良	橙色	繊維含表裏縄文	Ⅱ-1
28	深鉢、体部	AⅣh　Ⅴ	—	—	—	11～12		0段多条	良	にぶい褐色	繊維含表裏縄文	Ⅱ-1
29	深鉢、体部	AⅣh　Ⅴ	—	—	—	10～12		0段多条(撚り戻し有)	やや良	橙色	繊維含表裏縄文	Ⅱ-1
30	深鉢、体部	AⅣcベルト　Ⅰ、Ⅱ	—	—	—	8～9		0段多条	良	にぶい黄橙色	繊維含表裏縄文	Ⅱ-1
31	深鉢、口縁	AⅣd　Ⅲ	—	—	—	6～10 12		RL	良	にぶい黄橙色	繊維含補修孔	Ⅱ-2
32	深鉢、体下	AⅣd　Ⅲ	—	—	—	7～9		RL	やや良	にぶい黄橙色	繊維含	Ⅱ-2
33	深鉢、体下	AⅣk・e　粗	—	—	—	5～6		RL	良	にぶい黄橙色	繊維含	Ⅱ-2
34	深鉢、口縁	BⅢe　Ⅳ	—	—	—	6～9		0段多条	不良	にぶい褐色	繊維含	Ⅱ-2
35	深鉢、口縁	AⅢ－12P　中	—	—	—	8～9		0段多条	不良	橙色	繊維含補修孔	Ⅱ-2
36	深鉢、口縁	AⅣ－8P　中	—	—	—	8～11		0段多条	良	褐灰色	繊維含補修孔	Ⅱ-2
37	深鉢、口縁	AⅢh　粗	—	—	—	7～8		0段多条	良		繊維含炭化物(外)	Ⅱ-2
38	深鉢、口縁	BⅢe　Ⅳ	—	—	—	6～9		0段多条	不良	にぶい褐色	繊維含炭化物(外)	Ⅱ-2
39	深鉢、口縁	BⅢe　Ⅳ	—	—	—	6～9		0段多条	不良	にぶい褐色	繊維含	Ⅱ-2
40	深鉢、体部	AⅢp　Ⅱ	—	—	—	9～11		0段多条	不良	にぶい橙色	繊維含	Ⅱ-2
41	深鉢、底部	AⅣ-1　土取穴上	—	—	—	8～9		無文	良	にぶい赤褐色	繊維含	Ⅱ-3
42	深鉢、体部	BⅣm　Ⅳ	—	—	—	6～8		LR	良	にぶい橙色	繊維含	Ⅱ-4

図版No	器種	出土地点	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	文様	地文	焼成	胎土色調	備考	分類
43	深鉢、体部	BIVm	粗	—	—	—	8～9		多軸絡条体	良	褐灰色	繊維含	II-4
44	深鉢、体部	AIIIo	II～IV	—	—	—	7～9		RL	良	にぶい褐色	繊維含	II-4
45	深鉢、体部	AIV－4p	中	—	—	—	12		RL	不良	にぶい橙色	繊維含	II-4
46	深鉢、体部	AIIk	I	—	—	—	4～6		LR(太)	良	褐灰色	繊維含	II-4
47	深鉢、口縁	AIV－土取穴	上	—	—	—	4～5 6～7	原体末端圧痕文 (ループ文)	0段多条	良	にぶい褐色	繊維含	II-5
48	深鉢、体部	AIII－2p	上	—	—	—	9～10	押引き沈線文	0段多条	不良	にぶい赤褐色	繊維含	II-5
49	深鉢、口縁	AIV－6p AIIIe	IV	—	—	—	6～8 9		不整撚糸文	良	橙色	繊維含補修孔	II-5
50	深鉢、口縁	AIIIo	II～IV	—	—	—	9～10	不整撚糸文、 小突起	RLR	良	にぶい橙色	繊維含	II-6
51	深鉢、口縁	BIII－2住	カマド	—	—	—	8～9		不整撚糸文	良	橙色	繊維含	II-6
52	深鉢、体部	AIVJ	I～II	—	—	—	7～8 11		不整撚糸文	良	にぶい褐色	繊維含	II-6
53	深鉢、口縁、体部	BIV	粗	—	—	—	5～7	隆線区画文	無文	良	にぶい橙色		III-1a
54	深鉢、口縁、体部	BIVc	粗	—	—	—	7～9	隆線区画文	無文	良	にぶい褐色		III-1a
55	深鉢、口縁、 体部	BIVp	粗	—	—	—	6	隆線区画文	無文	良	にぶい褐色		III-1a
56	深鉢、口縁	AIIIo	粗	—	—	—	7～9 5	沈線文、 隆線区画文	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物(外微)	III-1b
57	深鉢、口縁	AIVd	粗	—	—	—	6～7 9	沈線文、 隆線区画文	無文	良	にぶい橙色		III-1b
58	鉢、体部	AII－1陥	上	—	—	—	3～4	沈線文、 隆線区画文	無文	良	にぶい橙色	赤色塗彩 (内外)	III-1b
59	深鉢、口縁	AIVcベルト BIIIj	I II II	—	—	—	6～7 7～8	沈線文、 隆線区画文	無文	良	褐灰色		III-1b
60a	壺、口縁、体部	BIIIp	I～II	13.0	—	—	6～7 8～10	沈線文、隆線区 画文、刺突文	無文	良	にぶい橙色		III-1b
60b	壺、口縁、体部 深鉢	AIIIpBIIIi	粗～II	12.6	—	—	6～7 8～10	沈線文、隆線区 画文、刺突文	無文	良	にぶい橙色		III-1b
61	口縁、体部2	BIIIf	粗	—	—	—	5～6	沈線文、隆線 区画文、突起	無文	良	にぶい褐色	炭化物(外)	III-1b
62	口縁、体部2	BIVa	粗	—	—	—	5～6	沈線文、 隆線区画文	無文	良	にぶい褐色	炭化物(外)	III-1b
63	深鉢、 口縁、体部2	BIVa	粗	—	—	—	5～6	沈線文、 隆線区画文	無文	良	にぶい褐色	炭化物(外)	III-1b
64	深鉢、口～	BIVm	粗	—	—	—	6～7 8～9	沈線文、隆線区 画文、突起	無文	良	褐灰色		III-1b
65	壺、体部	AIV－1 土取穴	上	—	—	—	5～6 9	沈線文、 隆線区画文	無文	良	にぶい橙色		III-1b
66	壺、体～底	BIIIi	II	—	10.2	—	6	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物、朱塗	III-2a
67	鉢、口～体	BIIIe BIVb	II II	15.2	合わせ目径	—	6	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物(外)	III-2a
68	蓋(切断壺)	BIVb	II	—	6.0	—	3～4	沈線区画文 曲線文	無文	やや良	にぶい黄橙色		III-2a
69	壺、口縁～	BIVa	I～II	7.2	—	—	4～5	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい褐色		III-2a
70	壺、口縁～体部	BIIIi	粗	9.0	—	—	5～6	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色		III-2a
71	深鉢、口縁	BIIIe	II	—	—	—	6～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	褐灰色		III-2a
72	深鉢、体部	AIIIj	I	—	—	—	6～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	褐灰色	炭化物(外)	III-2a
73	壺、体部	BIIIn	粗	—	—	—	7～8	沈線区画文 曲線文	無文	良	橙色		III-2a
74	鉢？体部	AIIIh	粗	—	—	—	5～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色		III-2a
75	壺、体部	BIIIi	II	—	—	—	6～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい黄橙色		III-2a
76	鉢、体部	BIIIi	粗	—	—	—	5～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい赤褐色		III-2a
77	壺？体部	BIII－2住	下	—	—	—	7	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色		III-2a
78	壺、体部	BIV－1住 東カマド煙出		—	—	—	5～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい黄橙色		III-2a
79	深鉢、体部	BIIIi	粗	—	—	—	6～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	褐灰色	炭化物(外)	III-2a
80	深鉢、口縁	BIVn	粗	—	—	—	4～9	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色		III-2a
81	鉢、口縁	BIVd BIVj	粗 粗	—	—	—	5～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色		III-2a
82	鉢、口縁	BIV－1住辺	IV～V	—	—	—	5～6	沈線区画文 曲線文	無文	良	褐灰色	炭化物(内)	III-2a
83	壺、体部	BIVj	II	—	—	—	4～5	沈線区画文 曲線文	無文	良	褐灰色		III-2a
84	鉢、体部	AIV－1住	煙道 上	—	—	—	5～6	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色		III-2a
85	壺？体部	BIVk	III	—	—	—	7	沈線区画文 曲線文	無文	良	褐灰色		III-2a
86	鉢・体部	AII	粗	—	—	—	6～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色		III-2a
87	壺？体部	BIVa	粗	—	—	—	4～6	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい赤褐色	炭化物(内外)	III-2a
88	壺 口～体、体～底	AIIIe	粗	11.6	8.8	19.0	6～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい黄橙色		III-2b

図版No.	器種	出土地点	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	文様	地文	焼成	胎土色調	備考	分類
89	深鉢、口縁	BIVo	粗	—	—	—	7～8	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい黄橙色		III-2b
90	深鉢、口縁	AIIIk・j	粗	—	—	—	4～5	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色		III-2b
91	壺、口～体	AIVd	粗～II	26.8	—	—	8～10	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物(微)	III-2b
92	深鉢、口縁	不明	粗	—	—	—	6～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい褐色		III-2b
93	深鉢、口縁	BIVm	粗	—	—	—	6～7	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色		III-2b
94	鉢？口縁	BIIIi	II	—	—	—	4～6	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい黄橙色		III-2b
95	鉢、口縁	BIVb	II	—	—	—	4	沈線区画文 曲線文、刺突文	無文	良	にぶい褐色		III-2b
96	鉢、口縁	AIIIg～h	II	—	—	—	4～6	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色	朱塗(内外)	III-2b
97	鉢、口縁	AIIIg・f	粗III	—	—	—	4～6	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色	朱塗(内外)	III-2b
98	鉢、口縁、体部	AIIIk	粗	—	—	—	4～5	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色	炭化物(外)	III-2b
99	鉢、口縁	AIIIp		—	—	—	4～6	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色	朱塗(内外)	III-2b
100	鉢、口縁	AIIIg・f	倒木	—	—	—	4～6	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色	朱塗(内外)	III-2b
101	鉢、口縁、体部	AIIIg・k	粗	—	—	—	4～5	沈線区画文 曲線文	無文	良	にぶい橙色	炭化物(外)	III-2b
102	深鉢、口～体	BIVa	粗	29.2	—	—	7～8	隆線文、沈線文、 刺突文	LR	良	にぶい黄橙色		III-3a
103	鉢？体部	AIIIp	II	—	—	—	5～6	隆線文、沈線文、 刺突文	—	良	にぶい橙色		III-3a
104	深鉢、口縁	BIVb	II	—	—	—	7～8	貼付文、沈線文	—	良	にぶい黄橙色	炭化物(外)	III-3b
105	深鉢、口縁	AIIIh	粗	—	—	—	5～6	貼付文、沈線文	—	良	黒褐色	炭化物(外)	III-3b
106	深鉢、口縁	BIVa	粗	—	—	—		貼付文、沈線文	—	良	にぶい橙色		III-3b
107	深鉢、口縁	BIVe BIVm	粗 粗	—	—	—	6～7	貼付文、沈線文	—	良	にぶい橙色	炭化物(外)	III-3b
108	深鉢、口～体	BIVk	III	—	—	—	5～7	貼付文、沈線文	LR	良	にぶい黄橙色		III-3b
109	深鉢、口～体	AIIIg～h	III～IV	15.6	—	—	5～6	沈線区画文、磨消縄文	LR	良	にぶい赤褐色		III-3c
110	深鉢、口縁	BIIIe	粗	—	—	—	5～7	沈線区画文 磨消縄文	LR	良	にぶい黄橙色		III-3c
111	深鉢、口縁	BIIIe	粗	—	—	—	5～7	沈線区画文 磨消縄文	LR	良	にぶい黄橙色		III-3c
112	深鉢、口、体	BIIIe BIVb	II	—	—	—	6～7	沈線区画文 磨消縄文	LR	良	にぶい橙色	炭化物(外微)	III-3c
113	深鉢、口縁	BIVj	II	—	—	—	6～7 8	沈線区画文 磨消縄文	LR	良	にぶい橙色		III-3c
114	鉢？口縁	BIVb	粗	—	—	—	5～6	沈線区画文 磨消縄文	LR	良	橙色		III-3c
115	鉢？口縁	BIVa	粗	—	—	—	4～5	沈線区画文、磨消縄文、隆線文	—	良	にぶい橙色		III-3c
116	口縁、深鉢、体部	BIIIe	粗	—	—	—	6～7	沈線区画文 磨消縄文	LR	良	にぶい橙色	炭化物(外微)	III-3c
117	深鉢、体部	AIIIk	I～II	—	—	—	5～6	沈線区画文 磨消縄文	LR	良	褐色～黒褐色	炭化物(外微)	III-3c
118	深鉢、体部	BIIIe	II	—	—	—	6～7	沈線区画文 磨消縄文	LR	良	にぶい黄橙色		III-3c
119	壺、体部	AIV－6p	上	—	—	—	6	沈線区画文 磨消縄文	LR	良	にぶい赤褐色		III-3c
120	深鉢、口～体	AIIIp BIV－1住	II 床	26.8	—	—	6～7 0.9～10	沈線文	網目状沈線	良	にぶい褐色		III-4
121	深鉢、口縁	BIIIe AIIIk	II III	—	—	—	5～6	沈線文	網目状沈線	不良	にぶい黄褐色	炭化物(外)	III-4
122	深鉢、口縁	BIVb	II	—	—	—	8～10		網目状沈線	良	にぶい褐色	炭化物(外微)	III-4
123	深鉢、体部	BIIIi	粗	—	—	—	6		網目状沈線	良	褐灰色	炭化物(外微)	III-4
124	深鉢、口縁	BIVf	粗	—	—	—	5～6	沈線文	網目状沈線	良	にぶい黄褐色		III-4
125	深鉢、口縁	BIV	粗	—	—	—	5～6	沈線文	網目状沈線	良	にぶい黄橙色	炭化物(外微)	III-4
126	深鉢、体部	BIV	粗	—	—	—	8～9		網目状沈線	良	にぶい褐色		III-4
127	深鉢、体部	AIIIp	粗	—	—	—	6		網目状沈線	良	褐灰色		III-4
128	深鉢、体部	BIIIi	II	—	—	—	6～7		網目状沈線	良	にぶい褐色		III-4
129	深鉢、体部	BIV－1住辺	III～V	—	—	—	6		網目状沈線	良	褐灰色		III-4
130	深鉢、体部	AIVk～e	粗	—	—	—	6～7		網目状沈線	良	にぶい赤褐色		III-4
131	深鉢、完、口～体	BIIIi	II～III	20.7	10.7	29.8	6～7		櫛目状沈線	良	にぶい黄橙色	炭化物(内)	III-4
132	深鉢、底、粗	AIIIp	粗	(19.6)	8.8	(28.7)	6～7		斜線状沈線	不良	にぶい黄橙色	炭化物 (口縁・外)	III-4
133	深鉢、口縁	BIVb	II	—	—	—	6	沈線文	縦位平行沈線	良	褐灰色	炭化物(外)	III-4
134	深鉢、口縁	BIVb	粗～II	—	—	—	6～7	沈線文	縦位平行沈線	良	橙色	炭化物(外微)	III-4

図版No.	器種	出土地点	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	文様	地文	焼成	胎土色調	備考	分類
135	深鉢、体部	BIII	粗	—	—	—	5～6		縦位平行沈線	良	橙～にぶい橙色		III-4
136	深鉢、口縁～	AIIIg	II	(25.3)	—	—	6～7	折り返し口縁	網目状撚糸文	良	にぶい褐色	炭化物	III-5
137	深鉢、口～体	AIIIe	粗	(27.7)	—	—	6～7	折り返し口縁	網目状撚糸文	良	暗褐色	炭化物(全面)	III-5
138	深鉢、口縁	AIIIp	III	—	—	—	5～6	折り返し口縁	網目状撚糸文	良	橙		III-5
139	深鉢、口縁	BIIIe	粗	—	—	—	5～6	折り返し口縁	網目状撚糸文	良	にぶい橙色		III-5
140	深鉢、口縁	AII	粗	—	—	—	6～8	折り返し口縁	網目状撚糸文	良	褐灰色		III-5
141	深鉢、口縁	不明	粗	—	—	—	6～7		網目状撚糸文	良	橙色		III-5
142	深鉢、口縁	BIIIf	粗	—	—	—	6～7		網目状撚糸文	良	橙色		III-5
143	深鉢、口縁	BIIIf	III	—	—	—	6～7		網目状撚糸文	良	橙色		III-5
144	深鉢、口縁	BIIIi	II	—	—	—	6～7		網目状撚糸文	良	にぶい黄橙色		III-5
145	深鉢、口縁	BIIIi AIIIp	II 粗	—	—	—	5～6		網目状撚糸文	良	橙色		III-5
146	深鉢、口～体	k	II	(28.3)	—	—	6	沈線文	網目状撚糸文	良	にぶい褐色	炭化物(全面)	III-5
147	深鉢、口縁	AIIIc	粗	—	—	—	6～7	沈線文	網目状撚糸文	良	橙色		III-5
148	深鉢、口縁	AIII	粗	—	—	—	5～7	沈線文	網目状撚糸文	良	にぶい黄橙色		III-5
149	深鉢、口縁	不明	粗	—	—	—	5～6	沈線文	網目状撚糸文	良	にぶい黄橙		III-5
150	深鉢、口縁	AIIIaベルト	I～II	—	—	—	5～6	沈線文	網目状撚糸文	良	褐色	炭化物(内外)	III-5
151	深鉢、体部	AIIIk	粗	—	—	—	6		網目状撚糸文	良	にぶい赤褐色		III-5
152	深鉢、体部	AIIIp	粗	—	—	—	9		網目状撚糸文	良	にぶい赤褐色	炭化物(外微)	III-5
153	深鉢、体部	BIV－1住辺	IV～V	—	—	—	6～7		網目状撚糸文	良	赤褐色		III-5
154	深鉢、体部	AIV－1住	床	—	—	—	4～5		網目状撚糸文	不良	にぶい黄橙色		III-5
155	深鉢、体部	BIIIi	III	—	—	—	6～7		網目状撚糸文	良	橙色	炭化物(外・多)	III-5
156	深鉢、体部	AIIIk	粗	—	—	—	5～6		網目状撚糸文	良	にぶい橙色	炭化物(内・外)	III-5
157	深鉢、体部	AIVd	II	—	—	—	6～7	沈線文(斜線)	網目状撚糸文	良	褐灰色	炭化物(外)	III-5
158	深鉢、体部下	BIIIi	II	—	—	—	7～8		網目状撚糸文	良	にぶい褐色	炭化物(内外)	III-5
159	深鉢、体～底	AIIIU	粗	—	(10.8)	—	8～9		網目状撚糸文	良	にぶい黄橙色		III-5
160	深鉢、体～底	BIVk	粗	—	10.3	—	6～7		網目状撚糸文	やや良	灰黄褐色	炭化物	III-5
161	深鉢、体部下	BIIIe	II	—	—	—	4～7		網目状撚糸文	良	にぶい橙色	炭化物(外)	III-5
162	深鉢、体～(底)	BIIIib	II	—	—	—	5～7		網目状撚糸文	良	にぶい赤褐色	炭化物(外)	III-5
163	深鉢、底部	AIIIg～U	III～V	—	(15.0)	—	6～7		網目状撚糸文	良	黒色		III-5
164	深鉢、口縁	AIIIpII～IV BIIIpI～II		—	—	—	4～5 6		縦位撚糸文	良	橙色		III-5
165	深鉢、口縁	BIVb	II	—	—	—	7～9		縦位撚糸文	良	にぶい黄橙色		III-5
166	深鉢、口～体	BIVk BIIIe、i	III	(22.2)	—	—	6～8		無文	やや良	にぶい黄橙色	炭化物	III-6
167	壺、口～体	BIVb	II	(11.4)	—	—	5～6		無文	良	明赤褐色		III-6
168	壺、口縁	BIVj	II	—	—	—	4～13 9～11	隆線文、沈線文	無文	良	にぶい橙色		III-7
169	鉢？口縁	BIVk	粗	—	—	—	5～6	隆線文、沈線文、口唇刻み	無文	良	褐灰色		III-7
170	壺、口縁	AIIIk	II	—	—	—	7～8	隆線文、沈線文	無文	良	明赤褐色	炭化物(内外)	III-7
171	深鉢、口縁	AIVm	I	—	—	—	5～6	隆線文、沈線文	無文	良	橙色		III-7
172	深鉢、口縁	AIV－1住	上	—	—	—	6～8	隆線文、沈線文	無文	良	にぶい橙色		III-7
173	深鉢、口縁	AIV	粗	—	—	—	7～8 9	隆線文、沈線文	無文	良	にぶい橙色		III-7
174	深鉢、口縁	AIVb、c	粗	—	—	—	8～11	沈線文、口唇押圧	無文	良	灰黄褐色		III-7
175	鉢、口縁	BIVo	粗	—	—	—	6～7 8	沈線文、口唇押圧	無文	良	にぶい赤褐色		III-7
176	深鉢、口縁	BIVb	II	—	—	—	8 9～10	沈線文	無文	良	橙色		III-7
177	壺？浅鉢？	BIIIc AIII	粗 粗	(16.3)	—	—	9～10 4～5	沈線文	無文	良	にぶい黄橙色		III-7
178	壺、口縁	AIIIj	粗	—	—	—	4～5 6	沈線文	無文	良	橙色		III-7
179	鉢？口縁	AIIo	粗	—	—	—	4	沈線文	無文	良	橙色		III-7
180	鉢？口縁	AIVdI～III		—	—	—	4	沈線文、突起	無文	良	橙色		III-7

図版No	器種	出土地点	層位	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	器厚(mm)	文様	地文	焼成	胎土色調	備考	分類
181	深鉢、口縁	AIIo AIII	粗 粗	—	—	—	7 9～10	突起	無文	良	にぶい橙色		III-7
182	壺？口縁	BIVb	粗	—	—	—	5～6		無文	良	暗褐色		III-7
183	深鉢、口縁	AIIIg	II	—	—	—	7	突起	無文	良	にぶい橙色		III-7
184	深鉢、口縁	不明	粗	—	—	—	7～8	突起	無文	良	にぶい黄橙色	炭化物(外)	III-7
185	浅鉢、完	BIIIm AIVd	I～II II	(17.0)	8.5	5.9	4～6	沈線文、三叉文、突起	RL	良	にぶい褐色		IV-1
186	鉢、口縁	AIV－1住	上	—	—	—	4	三叉文	—	良	にぶい橙色	炭化物(内)	IV-1
187	鉢、口縁	AIVk	粗	—	—	—	4～7	三叉文	—	良	褐色		IV-1
188	鉢、口縁	AIVh	粗	—	—	—	4	三叉文	—	良	橙色		IV-1
189	注口	AIV	粗	—	—	—		三叉文	無文	良	灰オリーブ		IV-1
190	鉢、口～体、底部	AIV－1 土取穴上		(19.0)	(8.8)	5.0	体部 3～4	沈線文、三叉文、突起	LR	良	黒褐色 ～黒色		IV-1
191	鉢、口縁	AIIIo	粗	—	—	—	4	羊歯状文	LR	良	にぶい黄橙色		IV-2
192	鉢、口縁	AIV	粗	—	—	—	4	羊歯状文	LR	良	にぶい黄橙色		IV-2
193	鉢、口縁	AIVke AIIIh	II 粗	—	—	—	4～5 5～6	沈線文、磨消文	RL	良	にぶい橙色	炭化物	IV-3
194	壺、体部	AIVh	V	—	—	—	4～5	沈線文、磨消文	LR	良	にぶい黄橙色		IV-3
195	深鉢、完	BIVf	粗(I)	24.8～26.0	(10.5)	32.1～小30.5	8～9		Lr	良	にぶい橙色		V-1
196	深鉢、口縁	AIV－7p		—	—	—	6～7		LR	良	灰褐色	炭化物	V-1
197	深鉢、口縁	AIVk	粗	—	—	—	8		LR	良	にぶい褐色	炭化物(外)	V-1
198	鉢、口～体	BIV－1住辺	IV～V	(11.0)	—	—	5～6		Lr	良	灰褐色	炭化物(内)	V-1
199	深鉢、口縁	BIIn	粗	—	—	—	5～6		LR	良	にぶい黄橙色		V-1
200	鉢、口縁	AIVe	粗	—	—	—	5～6		LR	良	明赤褐色		V-1
201	深鉢、口～体下	BIII－1p	上	(30.0)	—	—	7～10 (下)		LR	良	橙色	炭化物(外)	V-1
202	深鉢、口縁～底部	BIV－1住辺	IV～V	—	(9.6)	—	8～9	折り返し口縁	LR	良	にぶい赤褐色		V-1
203	鉢？口縁	BIV	粗	—	—	—	6～7	折り返し口縁	LR	良	にぶい橙色		V-1
204	深鉢、体部	BIV－1住辺	IV～V	—	(9.6)	—	8～9 7～10	折り返し口縁	LR	良	にぶい褐色		V-1
205	深鉢、口縁	AIIIb	粗	—	—	—	体9	折り返し口縁	RL	良	にぶい赤褐色		V-1
206	深鉢、口縁	BIVk BIIIe BIVb	粗 粗	—	—	—	5～6	折り返し口縁	LR	良	にぶい黄橙色		V-1
207	深鉢、口～	AIIIdf その他	II	(25.6)	—	—	5～6		LR	良	にぶい橙色	炭化物 (正面)	V-1
208	鉢、体下	AIVd～h	II	—	—	—	5		LR	良	にぶい黄橙色		V-1
209	深鉢、体部	AIVe	粗	—	—	—	7～8		RL	良	にぶい褐色	炭化物(外)	V-1
210	深鉢、体部	AIVh	I～III	—	—	—	7～8		Lr	良	灰白色		V-1
211	深鉢、体部	AIVh	I～III	—	—	—	8		Lr	良	にぶい黄橙色		V-1
212	皿？浅鉢	AIIId	粗	—	(7.2)	—	4	隆線文、沈線文	無文	不良	橙色	朱塗 (内外面)	V-2
213	壺？底部	BIVk	粗	—	7.0	—	5	沈線文	無文	良	にぶい黄橙色		V-2
214	台付鉢、台	不明	粗	—	(7.4)	—	4～6	磨消縄文、沈線文	RL	良	にぶい橙色		V-2
215	不明、底	BIV－1住 BIIIi	下 II	—	(5.6)	—	6～7	沈線文、刺突文	無文	良	灰黄褐色		V-2
216	深鉢、底部	BIVb	II	—	7.7	—	6～7	沈線文	無文	良	にぶい橙色		V-2
217	浅鉢？底部	AIIIg		—	(8.2)	—	6～7	沈線文	無文	良	にぶい橙色		V-2
218	鉢、底部	AIIId	粗	—	3.8	—	4～5		無文	良	橙色		V-2
219	鉢、底部	AIIIk	II	—	7.0	—	5～7		無文	良	褐色	炭化物(内面)	V-2
220	深鉢、底部	AIV－1住	上	—	(6.8)	—	5～6		無文	良	褐灰色		V-2
221	深鉢、底部	AIVp	粗	—	12.0	—	7		無文	良	にぶい赤褐色		V-2
222	深鉢、底部	AIIIg 倒木痕	II IV	—	10.0	—	6～8		無文	良	にぶい橙色		V-2
223	深鉢、底部	BIV－1住	粗・床	—	(11.2)	—	7		無文	良	にぶい褐色		V-2
224	深鉢、体～底	BIVm	粗	—	8.4	—	8～9		LR	良	にぶい褐色	炭化物	V-2
225	深鉢、底部	AIIIe・p	II	—	(7.6)	—	5～6		RL	良	にぶい黄橙色		V-2

2．石　　器

番号	種　　類	出土地点・層　位	最大長(cm)	最大巾(cm)	最大厚(cm)	重　量(g)	石　　質	産　　地
1	石　鏃	BIV－1住埋土上	(2.1)	1.9	0.4	0.9	硬質泥岩	―　新第三系中新統
2	石　鏃	BIIIm杭　3層	2.0	1.5	0.4	0.7	硬質泥岩	―　新第三系中新統
3	石　鏃	AIIIb　粗	3.0	1.6	0.5	2.0	珪質泥岩	新第三系中新統
4	石　鏃	AIIIg　粗	2.2	1.8	0.3	0.9	チャート	北上山地　古生界
5	石　鏃	BIVn　粗	2.7	2.1	0.6	3.2	チャート	北上山地　古生界
6	石　鏃	AIV－1住埋土上	2.6	1.7	0.8	2.7	泥質チャート	北上山地　古生界
7	スクレイパー	AIV－1土取穴	2.1	2.9	0.7	4.8	チャート	北上山地　古生界
8	石　錐	BIIIi　粗	(3.2)	2.5	0.7	10.9	珪質泥岩	―　新第三系中新統
9	石　匙	BIVm　4層	6.4	3.2	0.6	18.0	硬質泥岩	―　新第三系中新統
10	スクレイパー	BIIIi　2層	6.0	9.9	1.7	100.0	玻璃質流紋岩	雫石盆地西南域　新第三系中新統
11	スクレイパー	BIIIo　1層	8.6	4.9	0.9	64.6	珪質泥岩	―　新第三系中新統
12	スクレイパー	AIVh　5層	5.4	2.1	0.7	13.6	チャート	北上山地　古生界
13	篦状石器	AIVc　4層	7.3	5.3	1.2	53.7	粘板岩	北上山地　古生界
14	篦状石器	AIIo　3層	6.9	4.3	1.4	47.3	珪質泥岩	―　新第三系中新統
15	加工痕ある剝片	BIVa　1層	(4.3)	3.8	1.5	27.3	粘板岩	北上山地　古生界
16	スクレイパー	BIVb－c　ベルト	6.3	2.9	0.8	20.2	珪質泥岩	―　新第三系中新統
17	スクレイパー	AIIf　1層	4.9	2.4	0.7	13.5	珪質泥岩	―　新第三系中新統
18	スクレイパー	AIIe　2～4層	3.6	2.6	1.2	16.4	チャート	北上山地　古生界
19	スクレイパー	AIV－2住辺　4層	4.0	3.0	1.1	17.4	珪質泥岩	―　新第三系中新統
20	加工痕ある剝片	AIVd　3層	3.6	1.6	0.8	4.2	珪質泥岩	―　新第三系中新統
21	加工痕ある剝片	BIVb　粗	3.7	3.9	1.2	26.4	粘板岩	北上山地　古生界
22	加工痕ある剝片	BIVe　4層	5.6	2.4	0.7	19.7	チャート	北上山地　古生界
23	スクレイパー	BIVn　粗	4.3	1.9	0.9	12.8	チャート	北上山地　古生界
24	加工痕ある剝片	AIVb　粗	2.4	2.3	0.8	5.0	チャート	北上山地　古生界
25	スクレイパー	AIVd～h　2～4層	6.0	4.6	2.0	48.8	チャート	北上山地　古生界
26	加工痕ある剝片	BIVm　1～2層	5.8	3.6	0.6	11.7	チャート	北上山地　古生界
27	加工痕ある剝片	BIVk　3層	4.5	3.2	0.7	10.0	チャート	北上山地　古生界
28	加工痕ある剝片	AIVk　粗	2.8	4.4	1.2	17.7	チャート	北上山地　古生界
29	加工痕ある剝片	AIVj　1～2層	4.0	3.8	3.0	45.5	チャート	北上山地　古生界
30	スクレイパー	AIVj　1～2層	6.2	3.0	2.0	37.5	チャート	北上山地　古生界
31	スクレイパー	AIVj　1～2層	4.3	2.8	1.0	21.7	流紋岩質極細粒凝灰岩	―　新第三系中新統
32	スクレイパー	BIVb　2層	5.2	5.2	0.7	33.5	チャート	北上山地　古生界
33	スクレイパー	BIVb　2層	5.5	3.1	1.2	21.5	チャート	北上山地　古生界
34	加工痕ある剝片	BIIIe　4層	3.7	4.2	0.7	23.4	珪質泥岩	―　新第三系中新統
35	スクレイパー	BIIIe　4層	2.2	2.1	0.4	2.7	珪質泥岩	―　新第三系中新統
36	加工痕ある剝片	AIV－1土取穴	6.1	2.9	0.7	16.6	流紋岩質極細粒凝灰岩	―　新第三系中新統
37	加工痕ある剝片	AIV－1底面	7.1	3.0	0.7	19.9	流紋岩質極細粒凝灰岩	―　新第三系中新統

番号	種　　類	出土地点・層　位	最大長 (cm)	最大巾 (cm)	最大厚 (cm)	重　量 (g)	石　　質	産　　地
38	スクレイパー	AIV－1底面	4.3	5.0	1.5	36.5	流紋岩質極細粒凝灰岩	―　新第三系中新統
39	スクレイパー	AIV－1底面	4.1	1.8	0.9	10.3	チャート	北上山地　古生界
40	加工痕ある剝片	AIV－1底面	2.2	2.0	0.8	2.9	チャート	北上山地　古生界
41	砥　石	AIV j　2層	(7.7)	5.5	4.2	138.0	流紋岩質凝灰岩	奥羽山地　新第三系中新統
42	石　棒	AIII e　2層	(11.0)	7.7	6.3	768.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
43	磨　石	AIII－11p埋土下	20.1	4.5	6.7	940.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
44	磨　石	AIV－1住貼床	13.8	3.2	6.2	390.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
45	磨　石	AIII g　風倒木痕～4層	15.5	5.5	7.3	790.0	両輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
46	磨　石	AIII g　風倒木痕～4層	(11.2)	6.6	8.3	830.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
47	磨　石	AIV d～h　2～4層	17.2	5.9	6.5	660.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
48	磨　石	AIV d～h　2～4層	14.7	5.3	6.0	690.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
49	磨　石	BIII n　4層	14.1	5.7	6.8	780.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
50	磨　石	BIV k　4層	20.0	6.0	9.5	1,100.0	両輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
51	磨　石	粗	(6.1)	2.4	6.7	160.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
52	磨　石	AIV l　2～4層	6.7	9.0	9.5	870.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
53	敲　石	BIIIm　4層	9.8	7.7	5.1	540.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
54	凹　石	AIII g　風倒木痕～4層	10.4	8.2	3.9	380.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
55	凹　石	AIII k　1層	15.2	5.8	3.3	330.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
56	凹　石	BIVm　1層	12.7	9.4	3.9	590.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
57	石　錘	AIV－8p埋土中	9.8	8.6	2.6	260.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
58	石　錘	AIV－8p埋土中	8.2	8.7	1.9	180.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
59	石　錘	AIV－8p埋土中	8.6	8.5	2.3	210.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
60	石　錘	AIV－8p埋土中	7.6	9.5	2.6	240.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
61	石　錘	AIV－8p埋土中	8.3	7.4	2.7	170.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
62	石　錘	AIV－8p埋土中	7.1	8.5	1.9	120.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
63	石　錘	AIV－8p埋土中	6.2	5.6	2.3	120.0	両輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
64	石　錘	AIV d～h　3～4層	7.0	6.0	1.9	110.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
65	石　錘	AIV d～h　3～4層	7.9	6.6	1.7	140.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
66	石　錘	AIV d～h　2層	8.1	6.4	1.8	140.0	輝緑凝灰岩質チャート	北上山地　古生界
67	石　錘	AIV f　1層	6.3	6.5	1.6	90.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
68	石　錘	AIII k　2層	5.3	5.3	1.4	50.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
69	石　錘	AIII k　2層	5.9	5.7	1.3	60.0	輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
70	石　錘	AIII k　2層	(5.7)	5.1	1.5	50.0	両輝石安山岩	奥羽山地　新第三系中新統
71	石　核	AIV－2p	7.4	5.2	2.7	145.0	珪質泥岩	―　新第三系中新統
72	剝片石核	AIII k　1層	9.2	8.3	2.5	150.0	流紋岩質極細粒凝灰岩	―　新第三系中新統
73	盤状石核	BIV－1住辺　4～5層	12.3	10.1	3.3	485.0	流紋岩質極細粒凝灰岩	―　新第三系中新統
74	剝片石核	BIV－1住辺　4～5層	5.0	4.5	1.7	30.0	流紋岩質極細粒凝灰岩	―　新第三系中新統

3．平安時代の土器

図版番号	種類	出土地点	調整 上段：外面		技法 下段：内面		法量(cm)				備考	分類
			口縁部	体部上半	体部下半	底部	口径	器高	底径	器厚		
1	土師器坏	AIV－1隹 P埋土上位	—	—	—	回転糸切り —	—	—	6.0	0.5	非内黒 鉄滓が付着	坏B_2
2	土師器甕	AIV－1住居址 貼床	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	—	—	—	0.4～0.5	煤が外面に付着 ロクロ使用	甕A
3	土師器甕	AIV－住居址 貼床	横ナデ 横ナデ	—	—	—	—	—	—	0.4～0.5		甕B
4	土師器甕	AIV－1住居址 北東隅床面	横ナデ 横ナデ	ナデ ヘラナデ	—	—	—	—	—	0.5～0.6		甕B
5	土師器甕	AIV－1住居址 東床面ベルト	横ナデ 横ナデ	ヘラナデ ヘラナデ	—	—	15.4	—	—	0.5～0.6		甕B
6	土師器甕	AIV－1住居址 床面・ピット埋	—	—	ヘラナデ ナデ(指？)	砂底 ナデ	—	—	9.6	0.5～0.8	器面に凹凸がある	甕B
7	土師器甕	BIII－1住居址 床面・溝	横ナデ 横ナデ	—	—	—	—	—	—	0.6～0.8	磨もうがあり胎土不良	甕B
8	土師器甕	BIII－2住居址 東側床・埋土下	—	—	ヘラナデ ヘラナデ	ヘラナデ ヘラナデ	—	—	11.0	0.7	硬質の焼成	甕B
9	土師器坏	BIV－1住居址 埋土下位	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	14.4	—	—	0.5～0.6	内黒	坏A_1
10	土師器坏	BIV－1住居址 東カマド支脚	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	—	—	—	0.4	内黒	坏A_1
11	土師器坏	BIV－1住居址 床面セクション	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	ヘラケズリ ヘラミガキ	静止糸切り ヘラミガキ	14.3	4.8	6.0	0.4～0.6	内黒・底再調整 墨書あり	坏A_1
12	土師器坏	BIV－1住居址 2～3層	—	—	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	—	—	0.4～0.5	内黒 墨書あり	坏A_1
13	土師器坏	BIV－1住居址 床面	—	—	ロクロナデ ヘラケズリ	静止糸切り ヘラミガキ	—	—	7.0	0.5	内黒 底再調整あり	坏A_1
14	土師器坏	BIV－1住居址 床面下	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	14.4	—	—	0.4	内黒	坏A_2
15	土師器坏	BIV－1住居址 埋土下位	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	14.0	—	—	0.3～0.4	内黒	坏A_2
16	土師器坏	BIV－1住居址 床面下	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	回転糸切り ヘラミガキ	14.6	5.6	5.0	0.3	内黒	坏A_2
17	土師器坏	BIV－1住居址 東カマド支脚	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラケズリ ロクロナデ	静止糸切り ロクロナデ	13.7	4.6	6.0	0.4～0.7	非内黒 底再調整あり	坏B_1
18	土師器坏	BIV－1住居址 東カマド、ピット埋	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	—	—	0.5	非内黒	坏B_1
19	土師器坏	BIV－1住居址 床面下	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	—	—	—	0.3～0.4	非内黒	坏B_2
20	土師器坏	BIV－1住居址 東カマド支脚	—	—	ロクロナデ ロクロナデ	回転糸切り ロクロナデ	—	—	6.3	0.4～0.5	非内黒	坏B_2
21	土師器・甕	BIV－1住居址 東カマド煙道部	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラケズリ ロクロナデ	—	21.4	—	—	0.5～0.7	外面に煤付着	甕A
22	土師器・甕	BIV－1住居址 床面下	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	15.6	—	—	0.5	内面に煤付着	甕A
23	土師器・甕	BIV－1住居址 床面下	ロクロナデ ロクロナデ	ヘラケズリ ヘラナデ	ヘラケズリ ヘラナデ	—	21.0	—	—	0.6～0.7	№002と004土器	甕A
24	土師器・甕	BIV－1住居址 埋土柱穴1	—	—	ナデ ナデ	回転糸切り ロクロナデ	—	—	8.2	0.7		甕A

図版番号	種類	出土地点	調整 上段：外面		技法 下段：内面		法量(cm)				備考	分類
			口縁部	体部上半	体部下半	底部	口径	器高	底径	器厚		
25	土師器・甕	BIV－1住居址 床面下・埋土下	横ナデ 横ナデ	ヘラナデ 刷毛目	—	—	11.0	—	—	0.4		甕B
26	土師器・甕	BIV－1住居址 床面下	横ナデ 横ナデ	ヘラケズリ(浅) 刷毛目	—	—	18.0	—	—	0.6		甕B
27	土師器・甕	BIV－1住居址 床面下・埋土下	横ナデ 横ナデ	ヘラケズリ ヘラケズリ	—	—	16.0	—	—	0.6		甕B
28	土師器・甕	BIV－1住居址 床面・カマド	横ナデ 横ナデ	ヘラケズリ ヘラケズリ	ヘラケズリ ヘラナデ	—	19.8	—	—	0.5～0.7	No.002土器 体下半煤付着	甕B
29	土師器・甕	BIV－1住居址 東カマド支脚	—	—	ヘラケズリ ヘラナデ	— ナデ(指？)	—	—	9.4	0.6～0.8		甕B
30	土師器坏	BIV－1ピット セクション中	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	14.0	—	—	0.3	非内黒	坏B_2
31	土師器坏	BIV－1ピット セクション中	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	—	—	—	0.4	内黒 (内外面とも)	坏A_1
32	土師器坏	AIV－1土取 穴の埋土	—	—	ロクロナデ ロクロナデ	回転糸切り ロクロナデ	—	—	6.6	0.3～0.4	非内黒	坏B_2
33	土師器坏	BV－1土取 穴の埋土上位	—	—	ロクロナデ ロクロナデ	回転糸切り ロクロナデ	—	—	5.0	0.4	非内黒	坏B_2
34	土師器坏	粗堀	ロクロナデ ロクロナデ	ロクロナデ ロクロナデ	—	—	—	—	—	0.5	非内黒	坏B_1
35	土師器坏	BIIIm1層	—	—	ヘラケズリ ヘラミガキ	静止糸切り ヘラミガキ	—	—	6.8	0.7	内黒	坏A_1
36	土師器坏	BIIIm1層	ロクロナデ ヘラミガキ	ロクロナデ ヘラミガキ	—	—	—	—	—	0.6	内黒	坏A_2

V まとめ

1．遺構について

(1) 住居址

〈縄文時代〉

縄文時代の住居址は2棟であるが、1棟は長方形、他の1棟は形状不明である。長方形の住居址からは、物見台式期の土器が壁部分からと住居址に切られたピットの上面とから出土している。しかし、この遺物の出土状況からは時期を即断できない。埋土の状況をみると、中掫浮石が混入する層が壁寄りにある。中掫浮石の降下年代について最近の調査結果から前期末と考えられるようになっている(注1)。このことと検出状況とを考えあわせると、この住居址の時期は、中掫浮石の降下後の前期末とみられる。

〈平安時代〉

4棟検出されている。以下、7項目にわけて簡単にまとめてみる。

① 形状・規模

平面形は、ほぼ正方形が2棟（AIV－1住居址、BIV－1住居址）、長方形が1棟（BIII－2住居址）、不明が1棟（BIII－1住居址）である。規模は、AIV－1住居址が2.8m前後と小さいが、他は一辺が4.5m前後と大きめである。

② 埋土

いずれも埋土に灰白色火山灰が混入し、BIV－1住居址上位にはさらに黄褐色の火山灰が混入する。

③ 床面

AIV－1住居址が全面、BIII－2住居址が部分的に貼床となっている。

④ 柱穴

各住居址3～5個検出されているが、配置や規模等から主柱穴と確認できたのはBIII－2住居址の3個のみである。

⑤ カマド

本体はいずれも崩壊しているがBIII－1住居址を除いて検出された。このうちAIV－1住居址は1基、BIV－1住居址は2基ある。BIV－1住居址の1基の煙道は刳貫き式、他は掘り込み式でつくりかえられたものである。AIV－1住居址の煙道も掘り込み式である。いずれの煙道も煙出し部にむかって緩い傾斜をもって下がる。刳貫き式の煙道は北東方向へ、掘り込み式の煙道は南東方向へのびている。

⑥　施設

AIV－1住居址とBIV－1住居址の隅にピットが検出された。形状は、前者が方形、後者が円形である。

⑦　遺物

いずれの住居址からもロクロ不使用の土師器甕の破片が出土している。また、BIII－1住居址とBIV－1住居址とから接合する土師器坏口縁部が出土している。

以上の状況から、4棟の住居址はほぼ同時期の存在で、その時期は平安時代（10世紀頃）と推定される。なお、AIV－1住居址は、床面から砂鉄や鉄滓の付着した坏の底部が出土している。また、住居址の周辺から羽口の破片や鉄滓が出土している。これらのことからAIV－1住居址は工房跡と考えられる。

(2)　ピット

〈縄文時代〉

46基が検出されているが、占地をみると南半に集中している。平安時代の住居址間とII～III区間にはやや空間がある。形状で分類すると平面形が円形30、楕円形14、隅丸長方形1、不整五角形1で、断面形がフラスコ状13、ビーカー状31、皿状1、円筒状1となる。規模は底部径が1m以下のものが17基ある。最大規模はAIII－12ピットの底部径1.7m×1.6mで、最深ピットはBII－2ピットの約0.9mである。埋土の状況で特徴的なのは、中掫浮石が載っていることである。AIII－12ピットとBIII－3ピットは完全に中掫浮石が遺構を覆っているし、AIII－13ピット、AIV－2ピット、BIV－7ピットの3基は最上位に載っている。

以上の諸状況と検出状況とから、各遺構の時期を推定してみると、中掫浮石が載るピットは、中掫浮石降下以前の時期であり前期以前と推定される。また、AIII－15ピットはAIII－1住居址以前でありやはり前期以前と推定される。さらに、削平を受けていない斜面上方側のIV～V層で検出されたBIV－9～16ピット、BV－1ピット、そして中央部V～VI層で検出されたAIII－14・16・17ピット、BII－2・4ピット、BIII－2・4ピットも前期以前と推定される。そのほか、削平を受けた検出面であるが、埋土の状況などから前期以前と推定されるのがAIII－1・3・6・7・10・11ピット、AIV－1・4・8ピットである。他の15基は、後期の土器が混入していたり、埋土が全体にやわらかく、その状況が互いに似ていることから後・晩期と推定される。

〈平安時代〉

4基検出されているが、占地はいずれも住居址に近接している。形状は隅丸長方形3基、楕円形1基である。楕円形の1基は底面が椀状である。規模は隅丸長方形の3基がいずれも長辺で1.5mほどある。埋土は住居址と同じく灰白色火山灰が混入する。

位置と埋土から、AIV－5・6ピットはAIV－1住居址の、BIV－3ピットはBIV－1住居址の付属施設と推定される。BIV－1ピットは焼土や土器が混入しており、他とは性格が違うものであろう。

(3) 陥し穴状遺構

7基検出されているが、占地は遺跡中央III区に2基、他は北東II区に集中する。形状で分類すると長方形状を呈するのが2基、溝状を呈するのが5基である。規模は、開口部長軸方向で2.1m～2.2mのもの3基、2.6m～2.8mのもの3基、3.6mのもの1基である。埋土状況は、長方形状の1基には灰白色火山灰が入り、もう1基には検出段階で同火山灰がわずかに認められたのみである。この遺構には底面3隅に杭穴が検出されている。

溝状と長方形状の遺構の配置には明確な相違がある。溝状の5基の長軸方向は、3基が北西―南東方向、2基が西北西―東南東方向で、等高線に対してほぼ直交する。長方形状の2基の長軸方向は南―北方向で、等高線に対してほぼ平行する。

灰白色火山灰の降下時期から、長方形状遺構は平安時代以前と推定される。溝状遺構は検出状況等から縄文時代と推定される。

(4) 土取穴

3箇所とも旧道沿いにあり、埋土や掘り込みの状況から土取穴とした。遺物の状況から近世以降に当地の土蔵築造に利用されたものと考えられる(注2)。

(5) 炭　窯

小規模な炭窯で、土管と鉤が使用されている。土管は大正末期に使用されはじめたもので、指導員が回り始め普及したものである。また、木炭検査制度ができ、検査者や生産者がカギとカマを使用するようになったのが昭和初期である。規模としては15kg詰で4～5俵程度焼けるものである。したがって、この炭窯は昭和初期に築造され、家庭用木炭を焼いたものと思われる。

注(1)　「考古風土記」8号　火山灰について

注(2)　浄法寺町　資料館長佐藤基三氏の御教示による。

2．遺物について

(1) 土　器

〈縄文時代〉

遺構内外を含めて出土総数3,500点である。第I群～V群に大別し、さらに各群を細別した。第I群土器は早期中葉に位置づけられる貝殻文系の土器である。その中で1類は貝殻腹縁条痕文を地文としたもので、爪形の刺突文、口縁部形態、胎土に繊維を含まない点など、白浜式に

類似する。ただし底部が不明なこと、口縁部での沈線文が見られないことで資料的には充分な比較は困難である。2類は貝殻腹縁圧痕文を地文としたもので寺の沢式や吹切沢式に類似する。地文や器形、胎土は両者に近いと考えられるが、寺の沢式に見られる刺突文や吹切沢式に多い隆起帯の懸垂文、刺突文による帯状文、貝殻腹縁による波状圧痕文は用いていない。県内においては二戸市長瀬B遺跡など出土例が増えつつある土器であるが、浄法寺町内では桂平遺跡、飛鳥台地Ⅰ遺跡で出土している。3類は無文の地に平行沈線や貝殻腹縁文を用いて幾可学文様を表現したもので、物見台式に比定される。器形は不明であるが、胎土や器厚、文様の節目に施される小円形刺突文など、極めて相似する。浄法寺町でも出土例が多く、五庵Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡、田余内Ⅰ遺跡などで出土している。

第Ⅱ群土器は早期後末～前期初頭に位置づけられる縄文系の土器である。その中で1類は器壁の表裏に縄文を施したもので、赤御堂式や早稲田Ⅳ類に比定される。用いる縄文に多様性があり、胎土に繊維を含まず、成形がいびつであることや沈線文も見られるなど、類似する点が多い。器形や口縁部など不明な点をもち、やはり詳細な比較はできない。この類は大槌町崎山弁天遺跡、矢巾町大渡野遺跡をはじめ、浄法寺町内の五庵Ⅲ、安比内Ⅰ、飛鳥台地Ⅰなどの各遺跡で出土している。2類は表面にのみ縄文を施したもので、4類を含めて、早稲田Ⅴ類に比定される。単節斜行縄文以外に0段多条縄文や多軸絡条体などの特殊な縄文を用いること、胎土に繊維を含むこと、口縁部文様帯がないことなどがその共通する点である。一方口唇部の施文がないことや底部が不明という点では不確定要素をもつ。本類は県北の二戸市沢内B遺跡、上里遺跡、中曽根遺跡などで好例が見られる。3類の位置づけは不明である。5類は2点のみであるが、胎土に繊維を含み、縄文原体の末端の回転施文（ループ文）や横方向の押し引き文を施文しており、前期初頭の長七谷地Ⅲ群、早稲田Ⅵ類、大木1式などに類するものであろう。また6類は不整な撚糸文が口縁部に用いられており、大木1～2式と見られる。

第Ⅲ群土器は後期前半に位置づけられる土器群である。出土量が最も多い。十腰内Ⅰ式の前半期のものに比定される。関東地方の掘之内式、東北地方南東部の宮戸Ⅰ式、南境式などに併行する。施文の違いから7類に分類したが、その順位は新旧を意味しない。1類は無文地に区画文を表現し、隆線のみによるもの1a類、隆線と沈線文を併用するものを1b類とした。円文や長円文、「8」字状貼付文が見られる。2類はやはり無文地に沈線による区画文や曲線文を用いるものである。その中で平行沈線を主とする2a類は、入組文や渦巻文、孤状文を体部上半に展開している。横位の長楕円形や円文を主とする2b類には口縁部への隆帯の貼り付けが見られる。3類は地文に縄文を用いているもので、沈線による区画文、曲線文で表現する。隆線区画文を一部にもつ3a類と短い棒状の貼付文をもつ3b類は、ともに縄文がまばらであり、地文が重視されていない印象をもつ。磨消縄文を用いる3c類には横S字状の懸垂文が特徴的

である。4類～7類は1～3類に伴うと考えられるものである。沈線による網目状文、平行線文などをもつ4類は、5類における撚糸文の文様効果を沈線で表現したと考えられ、器形や折り返し口縁など共通性が高い。これらの第III群土器の器形には大波状口縁や平縁の折り返し口縁の深鉢と壺形土器が主体を占め、浅鉢や台付鉢などは見られない。同期のものは大迫町立石遺跡や県北の遺跡で出土例が多い。浄法寺町内では五庵II・III遺跡、海上I・II遺跡、飛鳥台地I遺跡等で出土している。

第IV群土器は晩期の大洞B～C式にわたるが、出土数は少ない。

第V群土器は粗整土器及び底部を一括している。器形からその大部分は第III群土器に伴うものと考えられる。

以上のことから本遺跡における縄文時代は、出土量の多さから、早期後半と後期前半の時期にその隆盛期があったと推定される。

〈平安時代〉

土師器の坏と甕のみで、他の器形は見られない。総出土数は246点である。出土数が少ないため、土器の分類にあたっては器形の全体を知る個体をもとにその特徴を把握し、一部分のみの破片も含めて行った。

坏は内黒（A類）と非内黒（B類）と大別し、さらに底部の切り離し技法の違いにより、A_1、A_2、B_1、B_2の4類に細分した。A類は従来から表杉ノ入式（9世紀～10世紀）や桜井第2型式（9世紀前半～）とされてきたものであり、B類は須恵系土器（11世紀～12世紀）や赤焼土器などと呼ばれていたものにあたる。一般的には前者から後者へとその盛業時期が新しくなるとされている。本遺跡全体の出土数ではA類とB類が半々の割合である。遺物の多いBIV－1住居址だけで見るとA類にくらべてB類がやや多い。粗略な見方をすれば、本遺跡のあり方はその過渡期となる10世紀代という位置づけとなる。

坏のA類とB類の器形と切り離し技法に着目すると、A_1とB_1、A_2とB_2がそれぞれ近い関係にある。A_1とB_1類は共に口縁部が直上気味の器形で、底部がやや広く厚手の器厚である。A_2とB_2類は口縁部がやや外反する器形で、小さめの底部をもち薄手である。この類似性は、製作時において、同じ手法で成形されたものでも黒色処理（内黒）される場合とされない場合があったと見ることができる。B類については酸化炎焼成された須恵器と把える見方と土師器生産の流れの中に把える見方とに分かれているが、本遺跡の坏を見る限り後者と考えられる。

またA_1やB_1類における底部の静止糸切り後再調整する技法の年代観は今のところ明確ではない。回転糸切りと同時に行われてきたとすれば、9世紀以降本遺跡の時期までは続いていることとなる。隣接する飛鳥台I遺跡や安比内I遺跡でも静止糸切りの坏を出土しているが、

この他の県北地方での出土例は極めて少ない。この技法の存続年代は今後の課題となる。なお器壁への墨書はA_1類にのみ見られた。

甕はロクロの使用、不使用でA類とB類とに大別した。遺跡全体での出土数はA類が極めて少なく、B類が圧倒的（約10倍）に多い。この傾向は同時代と考えられる浄法寺町の各遺跡をはじめ、一戸町北館B遺跡、田中IV遺跡、二戸市中曽根II遺跡、安代町扇畑遺跡など、県北地方に一様に見られる。甕A、B類ともそれぞれ2種の口縁部形態がある。また甕B類には最大径の位置、底部の立ち上がり方、内面調整の刷毛目の有無などの相違があるものの、個体数が少ないため細分はしなかった。いずれも器面に凹凸があり、外面は粗いヘラケズリが施されている。これらB類の甕は口縁部の外反の程度が弱く短く、体部が脹らむ器形がより新しいものとする見方をとれば、BIV－1住居址は他の住居址よりもやや古い時期のものが多い。ただし他の住居址の出土数が少ないので断定はできない。

以上のように本遺跡の平安時代の遺物には、坏と甕だけで他の器形はないこと、須恵器が伴わないこと、坏には静止糸切り再調整のものがあること、甕はロクロ不使用のものが主体であることなどの特徴点があげられる。時期は他の遺跡例などから10世紀代のものと考えたい。

(2) 土製品

円盤状土製品は沈線による曲線文が施されているもので縄文時代後期とみられるが、スプーン状土製品は時期を特定できない。玉は平安時代住居址の周溝部分からの出土であり、住居址に伴うものとも思われる。

(3) 石　器

出土点数の最も多いのは、スクレイパーの18点、次が石錘の14点である。そのうち半数の7点が同一ピットからの出土である。また遺構外出土のうち4点もそのピットの周辺からの出土であり、漁網用か編物用の錘としてまとまっていたことがうかがえる。その他に点数の多い器種は磨石である。その磨石も10点のうち9点までが棒状のものという特徴がある。

石質の占有率をみると、剝片石器ではチャートが45％、珪質泥岩が22.5％と2種で約70％を占める。礫石器では輝石安山岩が83％を占める。

(4) その他

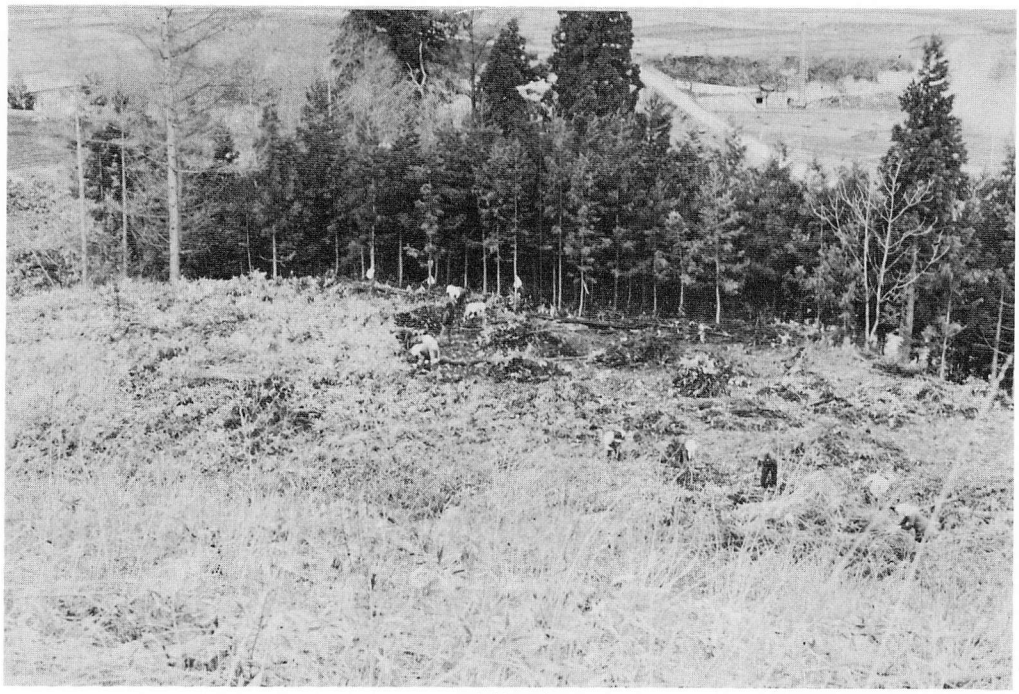
遺構内外から製鉄に関係する遺物が出土している。列記すると、まず鞴の羽口、AIV－1住居址から砂鉄と鉄滓付着の坏、BIII－1住居址から紡錘車、BIV－1住居址から2点の鉄滓、そして遺構外鉄滓が4点となる。

写　真　図　版

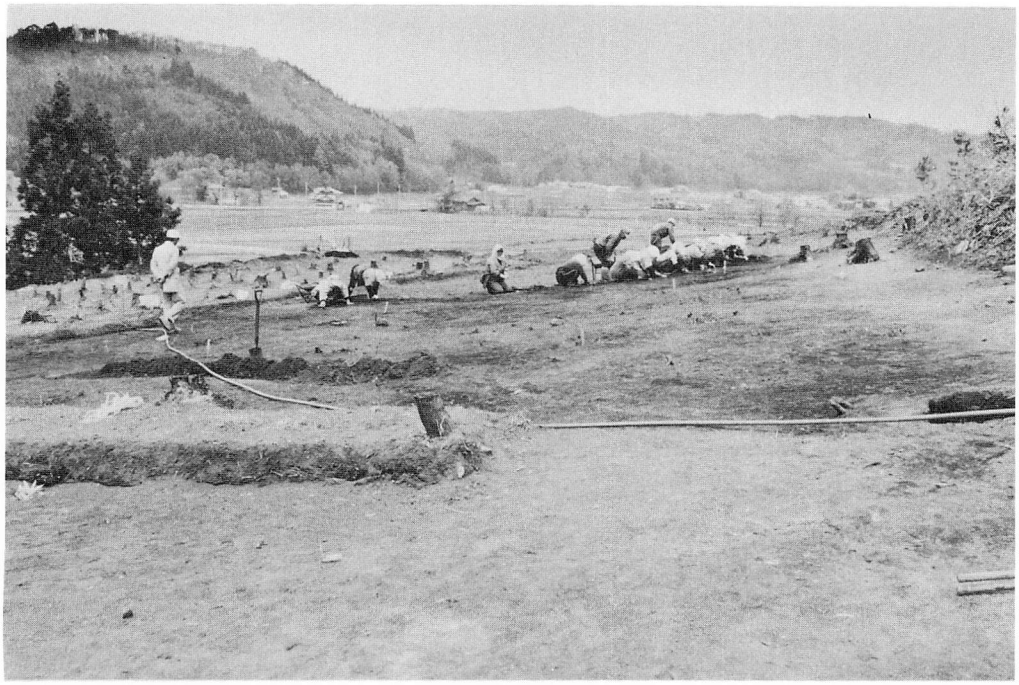
遺跡位置　　（北から）

遺跡全景　　（北西から）

写真図版１　遺跡空中写真



雑物撤去　　（東から）

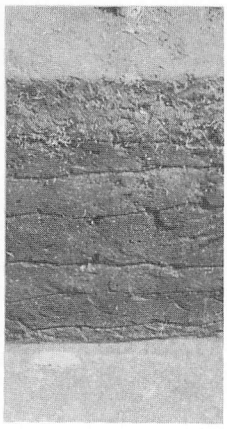


遺構検出　　（南から）

写真図版２　調査開始状況

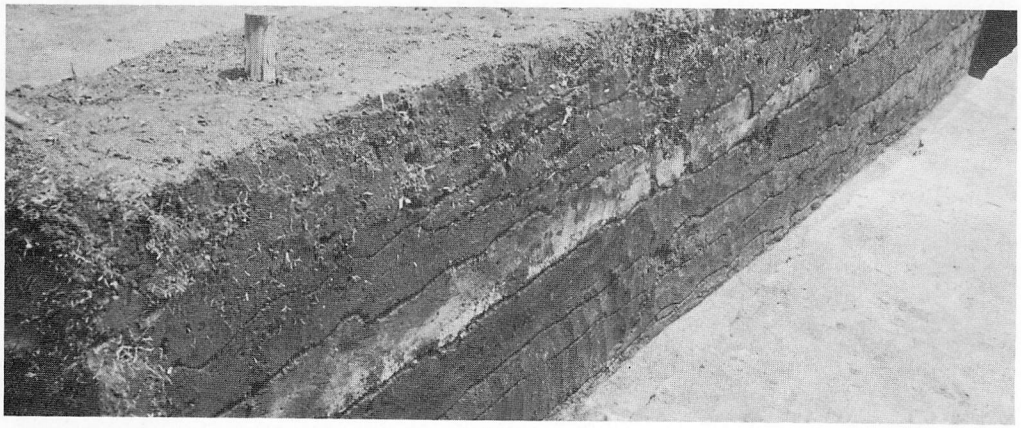
AⅣb

BⅣa



BⅣc

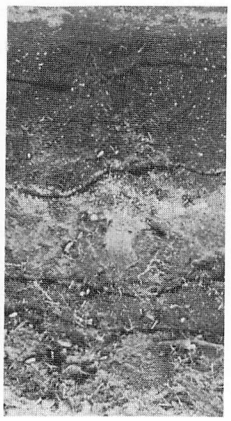
BⅣd



BⅣb～c

BⅡe

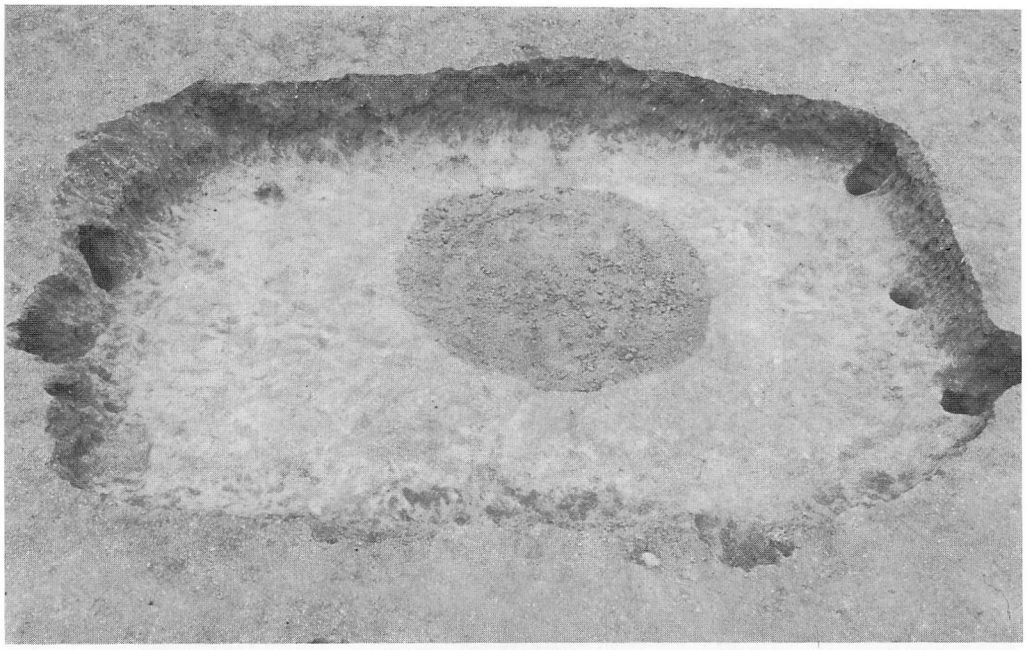
BⅢa



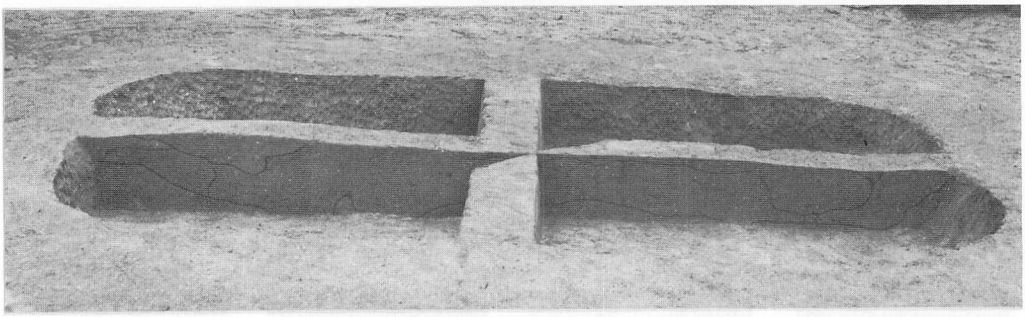
BⅣe

(BⅣm)

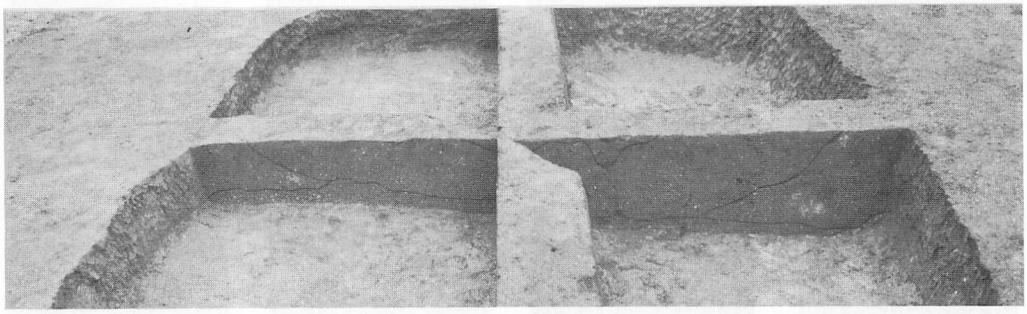
写真図版 3　土層断面



平面

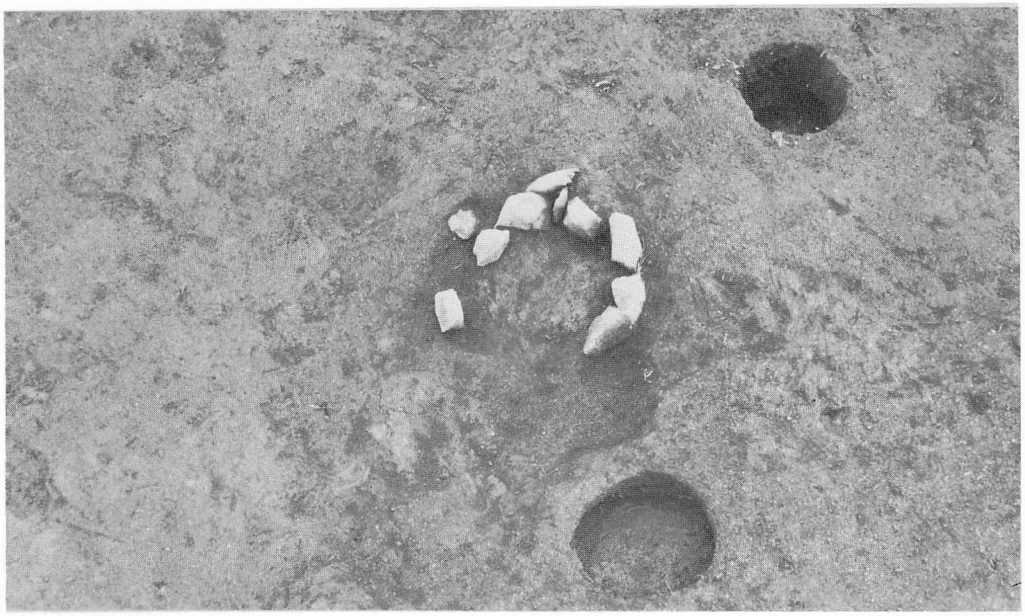


断面

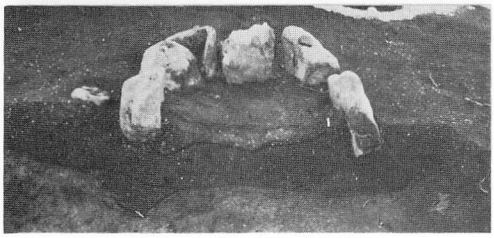


断面

写真図版４　ＡⅢ－１住居址

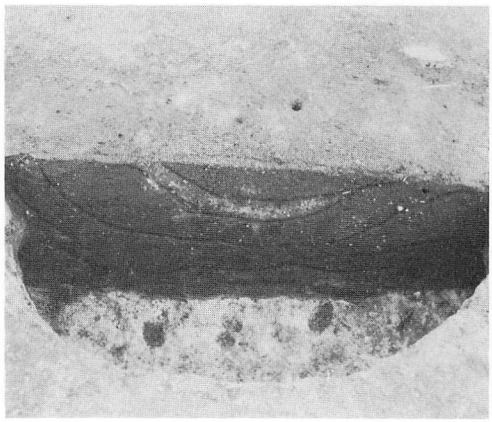


AⅣ－2住居址　平面



AⅣ－2住居址・炉 断面

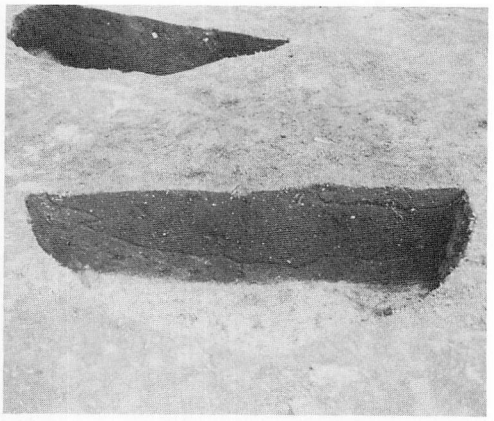
AⅡ－ピット　平面



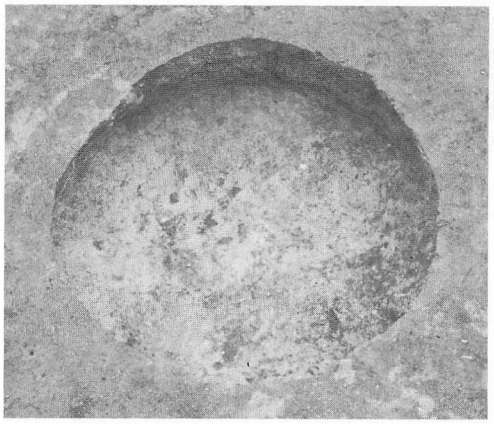
AⅡ－1ピット　断面

写真図版5　AⅣ－2住居址・ピット(1)

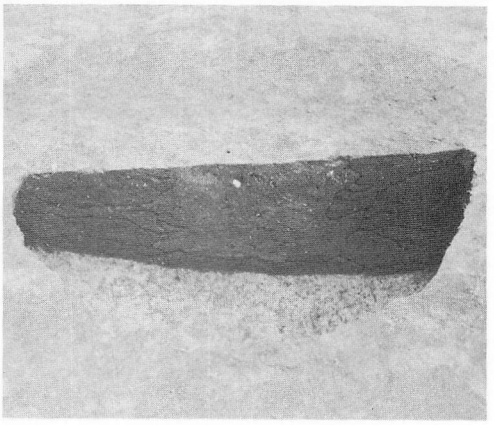
AⅢ－1ピット　平面



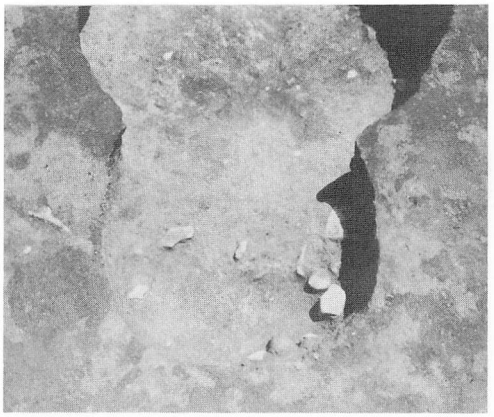
AⅢ－1ピット　断面



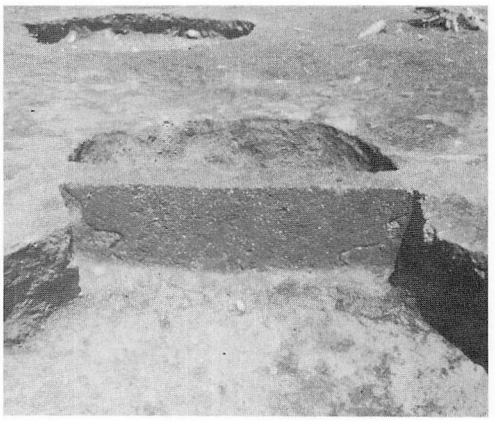
AⅢ－2ピット　平面



AⅢ－2ピット　断面



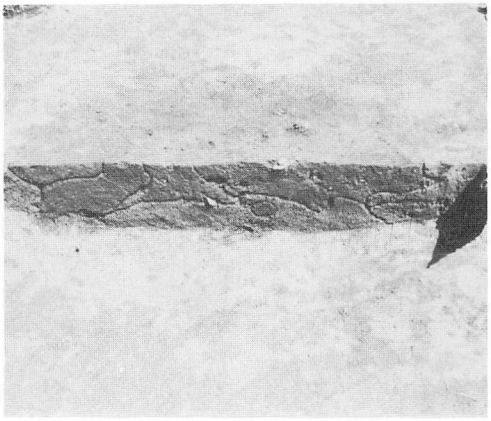
AⅢ－3ピット　平面



AⅢ－3ピット　断面

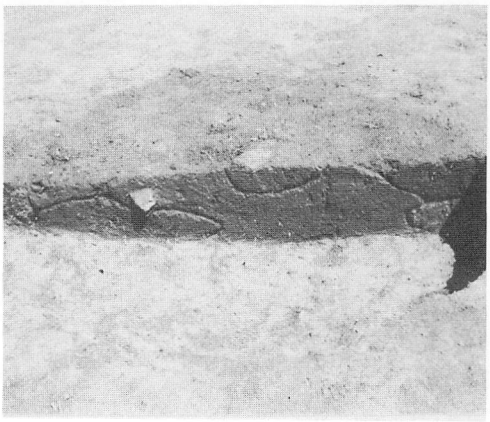
写真図版6　ピット(2)

AⅢ－4ピット　平面



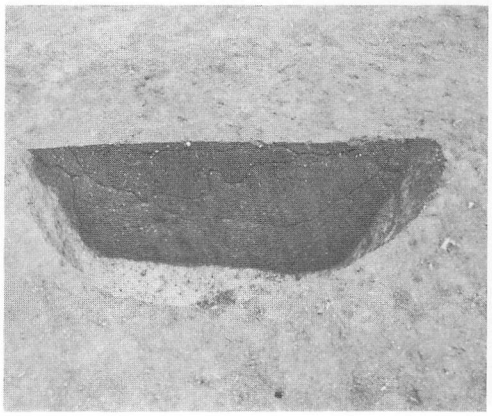
AⅢ－4ピット　断面

AⅢ－5ピット　平面



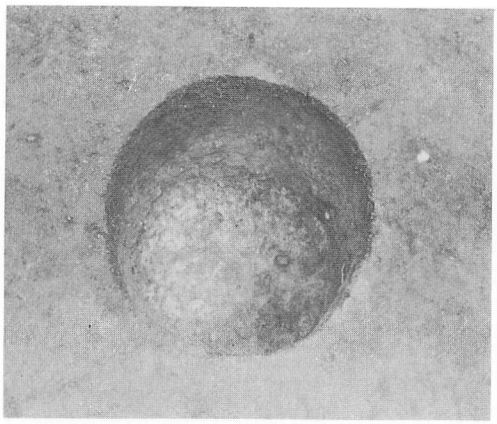
AⅢ－5ピット　断面

AⅢ－6ピット　平面

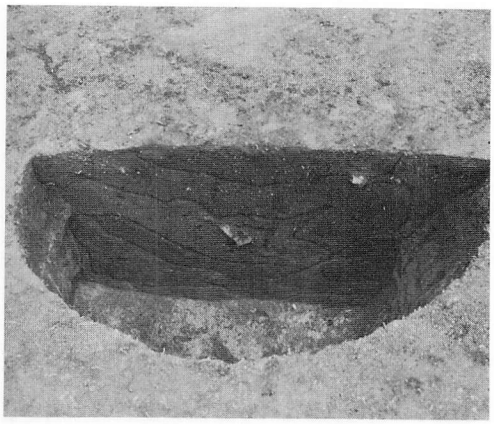


AⅢ－6ピット　断面

写真図版7　ピット(3)

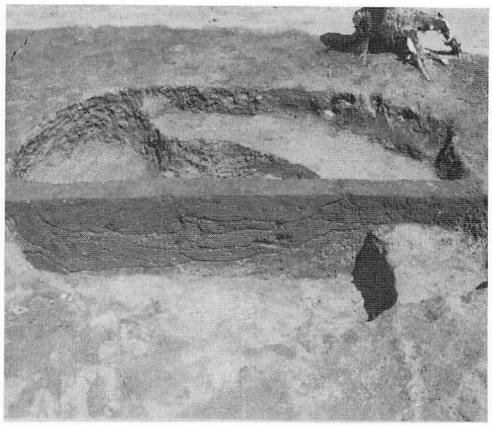


AⅢ－7ピット　平面

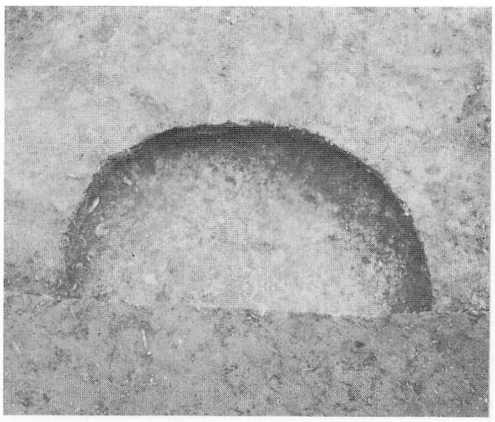


AⅢ－7ピット　断面

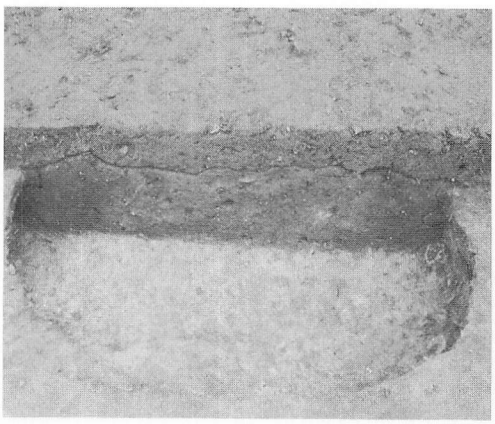
AⅢ－8・10ピット　平面



AⅢ－8・10ピット　断面



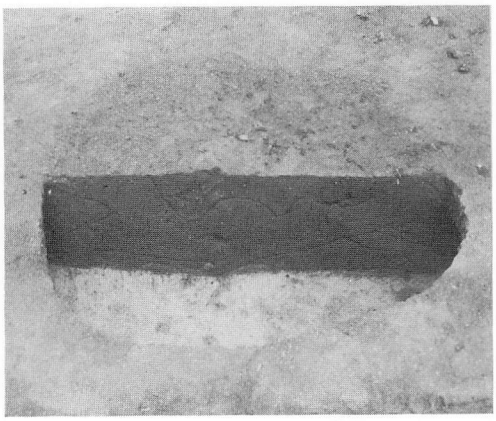
AⅢ－9ピット　平面



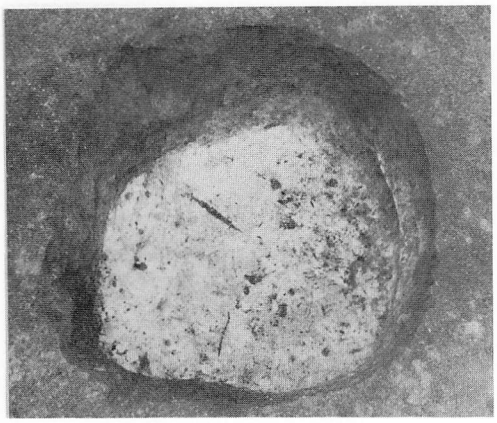
AⅢ－9ピット　断面

写真図版8　ピット(4)

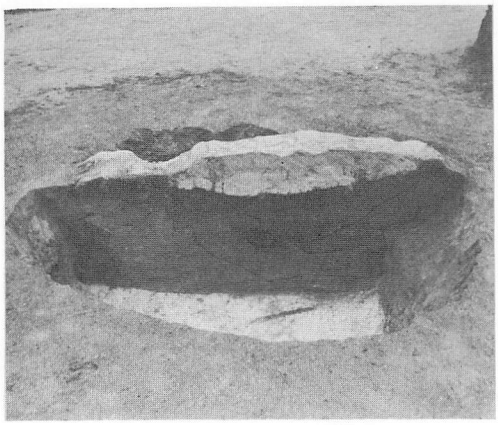
AⅢ－11ピット　平面



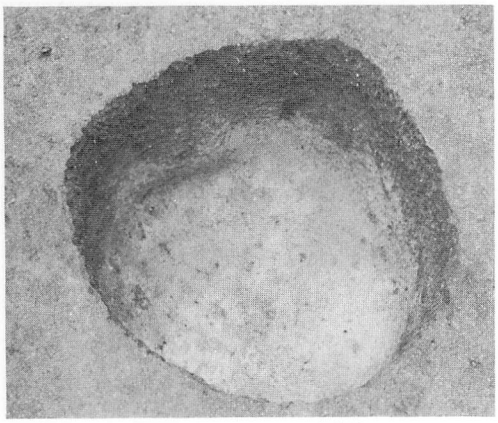
AⅢ－11ピット　断面



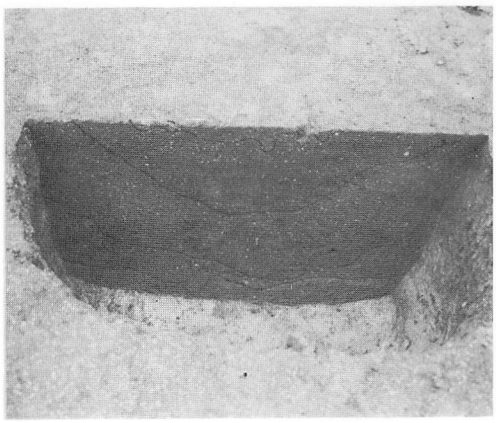
AⅢ－12ピット　平面



AⅢ－12ピット　断面

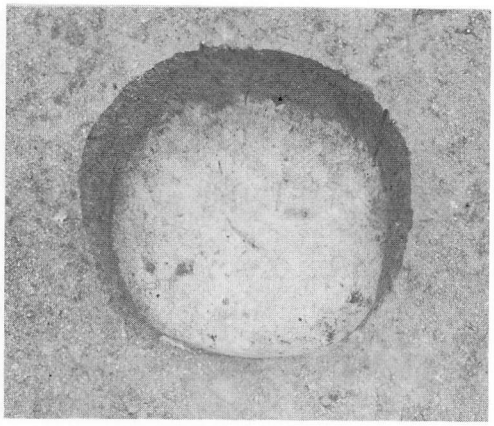


AⅢ－13ピット　平面

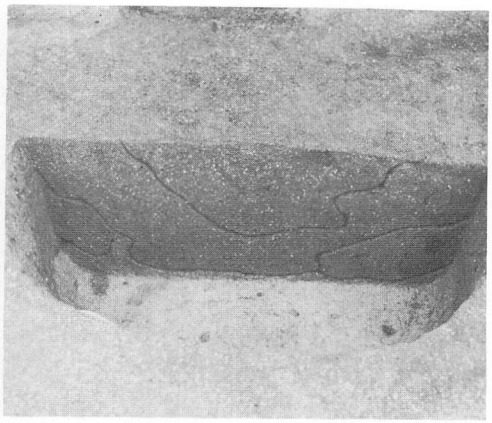


AⅢ－13ピット　断面

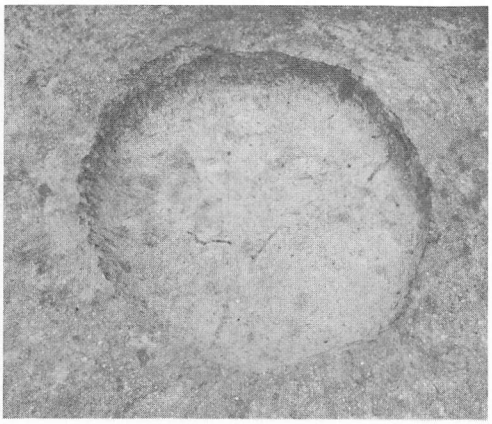
写真図版９　ピット(5)



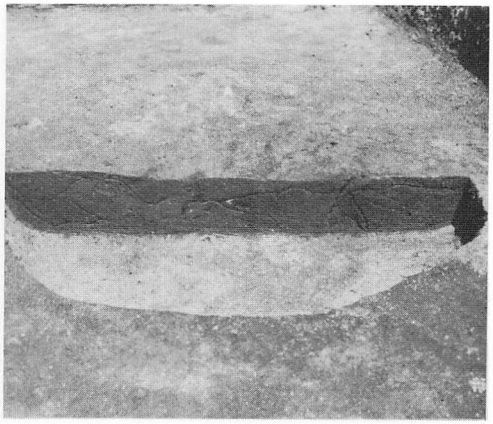
AⅢ－14ピット　平面



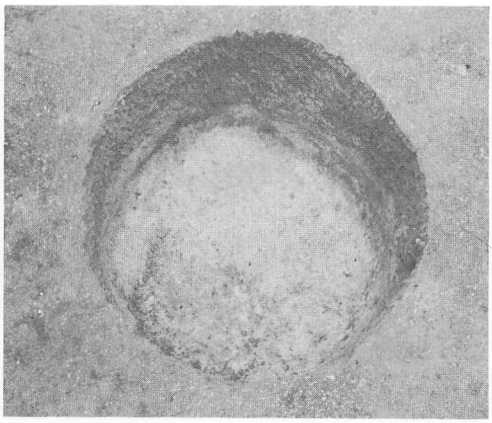
AⅢ－14ピット　断面



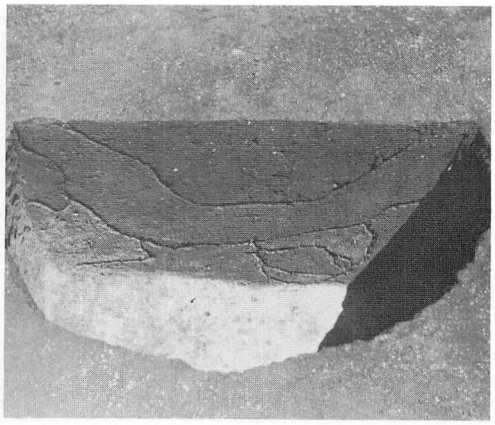
AⅢ－15ピット　平面



AⅢ－15ピット　断面

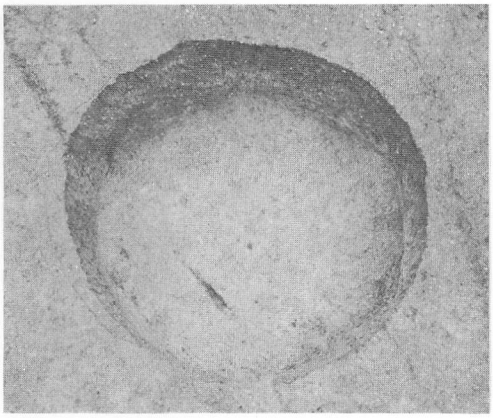


AⅢ－16ピット　平面

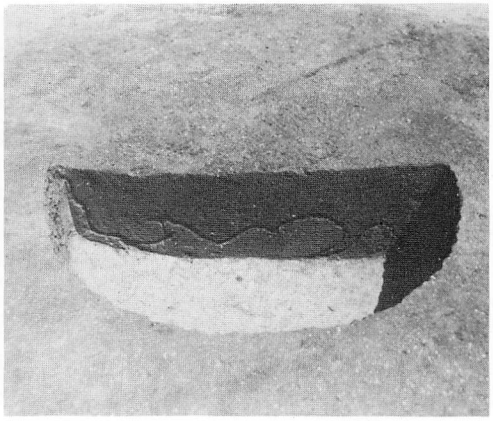


AⅢ－16ピット　断面

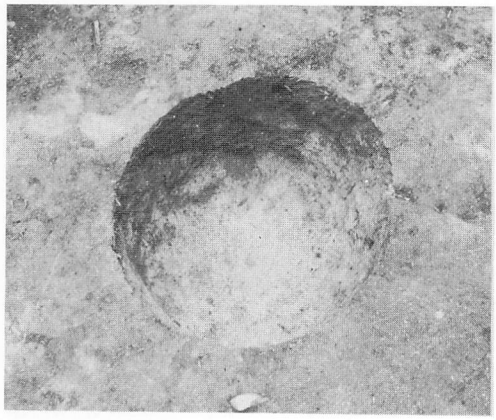
写真図版10　ピット(6)



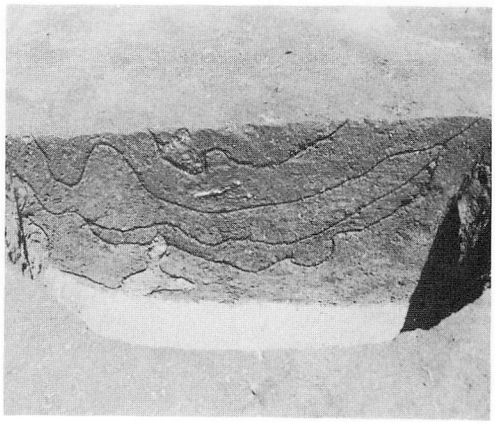
AⅢ－17ピット　平面



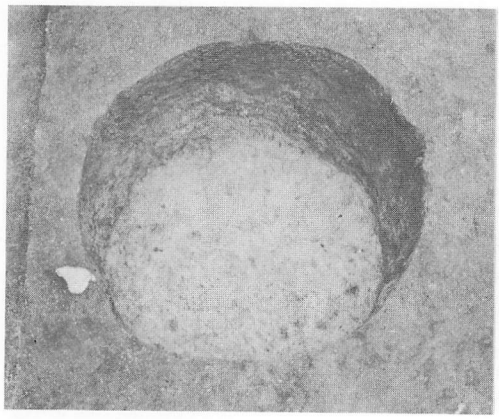
AⅢ－17ピット　断面



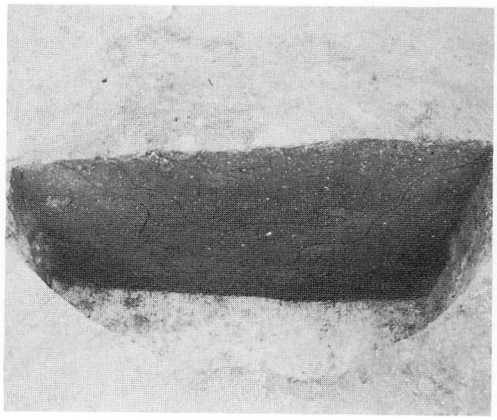
AⅣ－１ピット　平面



AⅣ－１ピット　断面

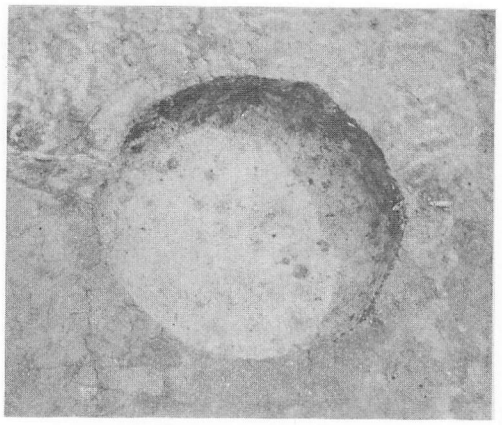


AⅣ－２ピット　平面

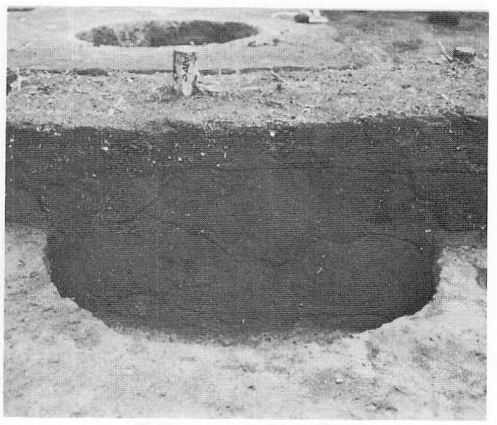


AⅣ－２ピット　断面

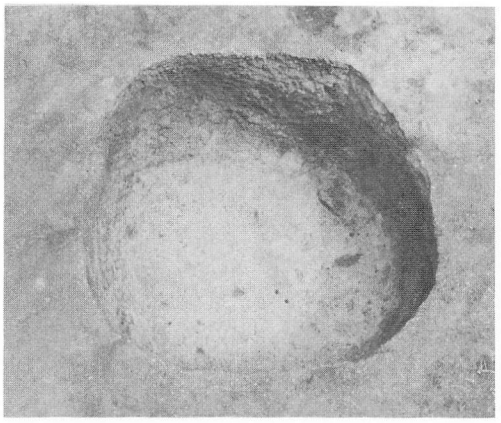
写真図版11　ピット(7)



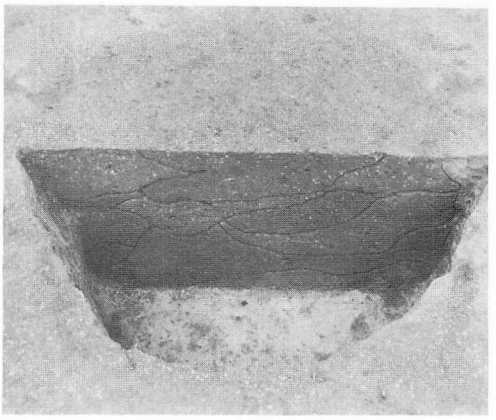
AⅣ－3ピット　平面



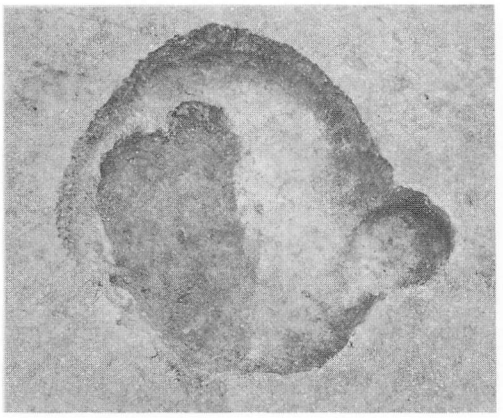
AⅣ－3ピット　断面



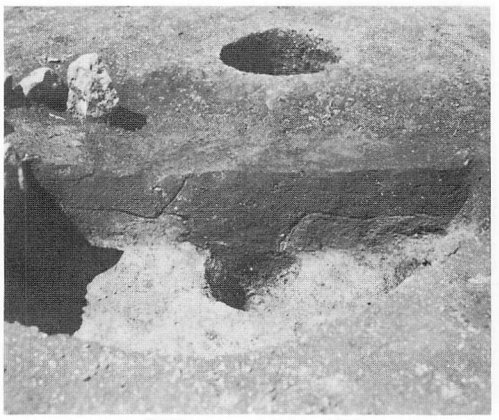
AⅣ－4ピット　平面



AⅣ－4ピット　断面

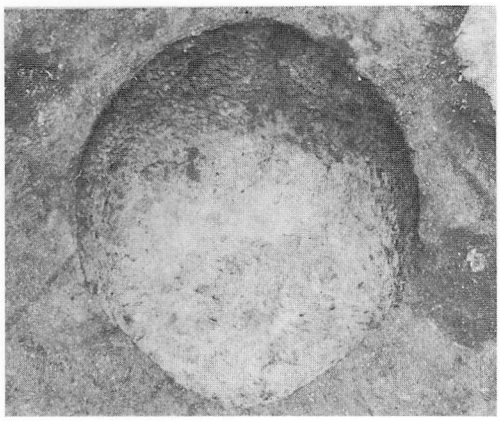


AⅣ－7ピット　平面

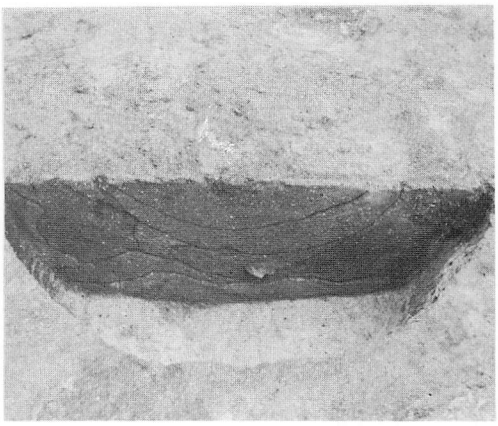


AⅣ－7ピット　断面

写真図版12　ピット(8)

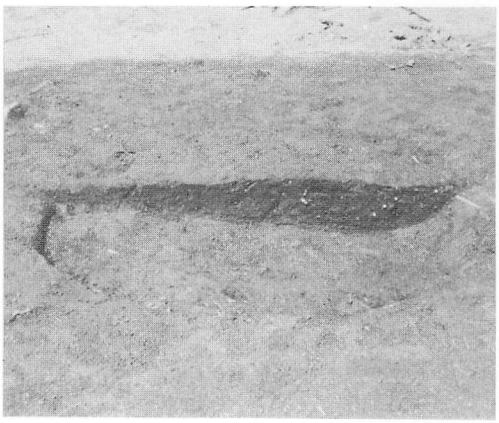


AⅣ－8ピット　平面

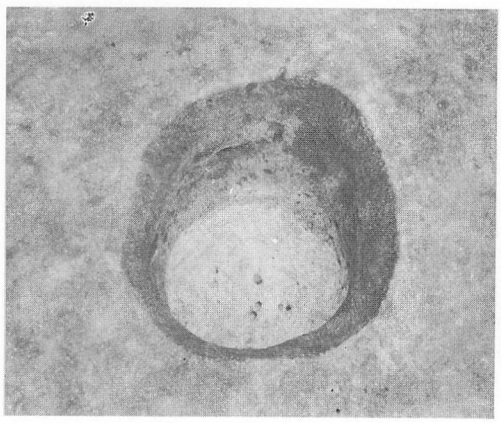


AⅣ－8ピット　断面

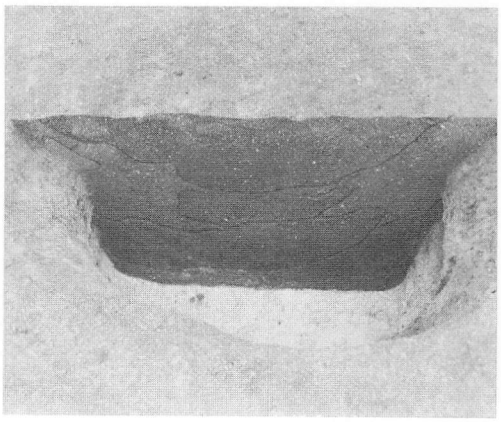
BⅡ－1ピット　平面



BⅡ－1ピット　断面

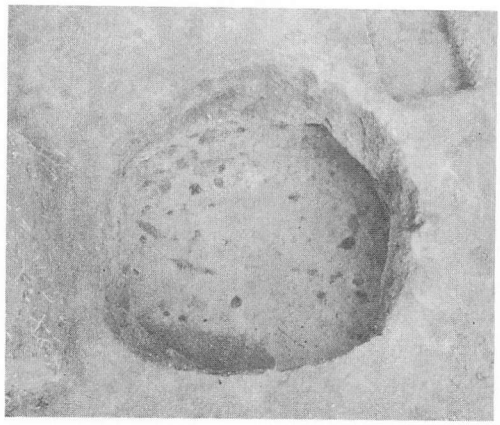


BⅡ－2ピット　平面

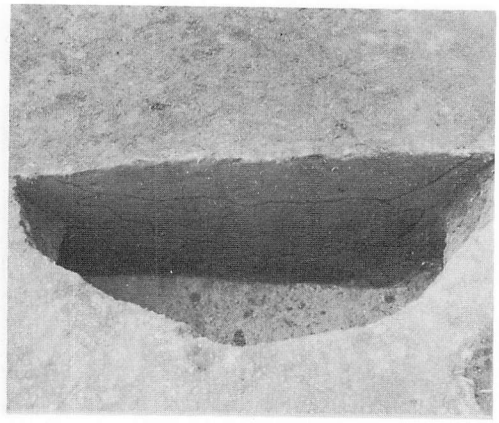


BⅡ－2ピット　断面

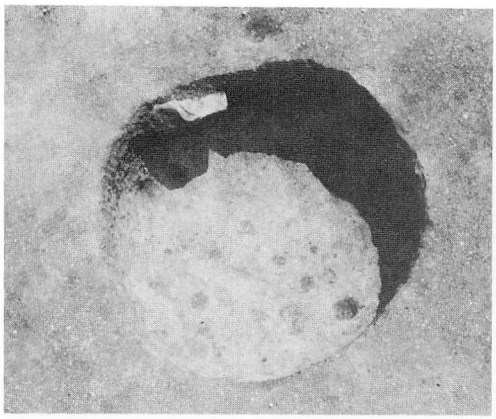
写真図版13　ピット(9)



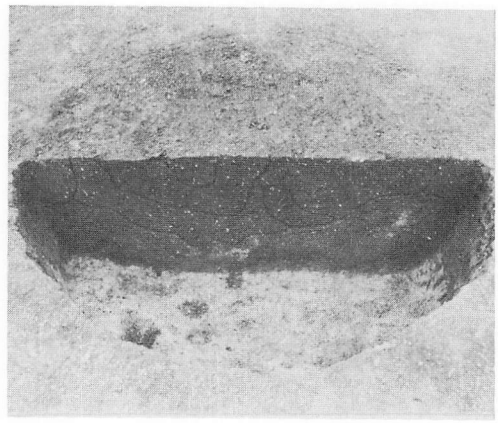
BⅡ－3ピット　平面



BⅡ－3ピット　断面

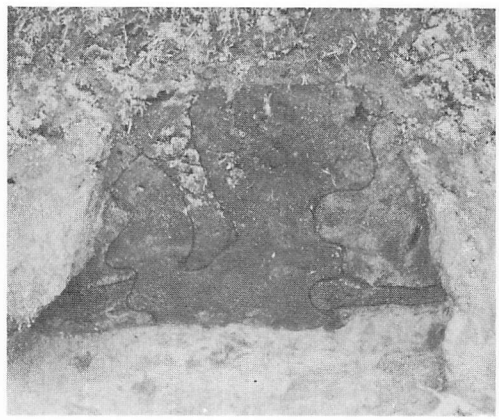


BⅡ－4ピット　平面



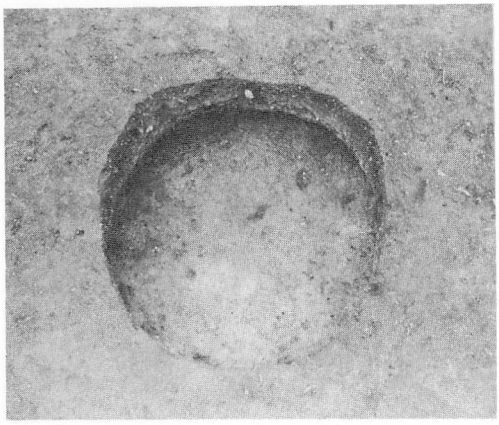
BⅡ－4ピット　断面

BⅡ－5ピット　平面

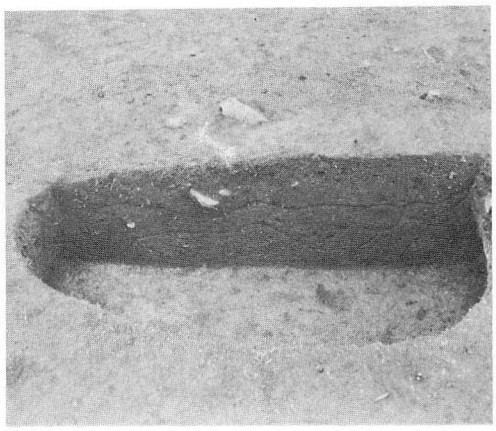


BⅡ－5ピット　断面

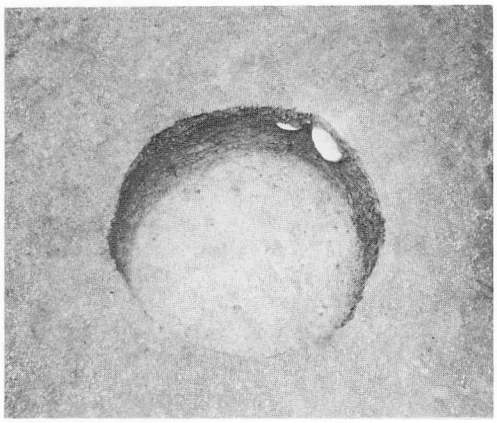
写真図版14　ピット(10)



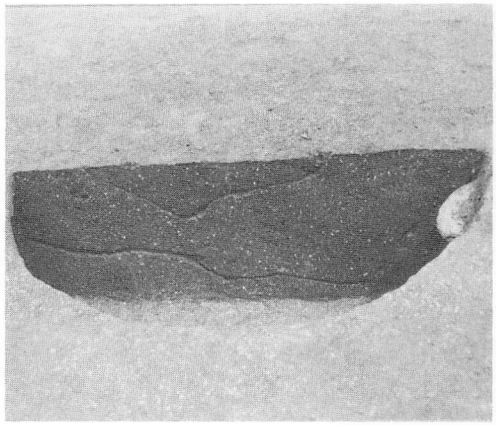
BⅢ－１ピット　平面



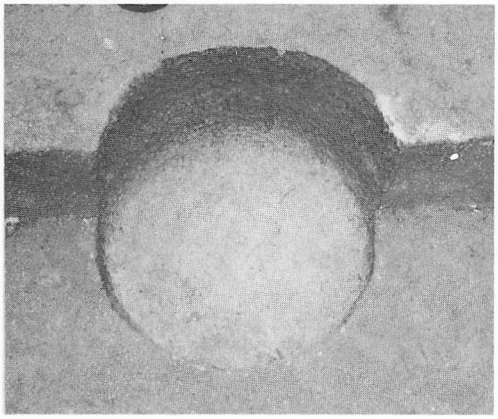
BⅢ－１ピット　断面



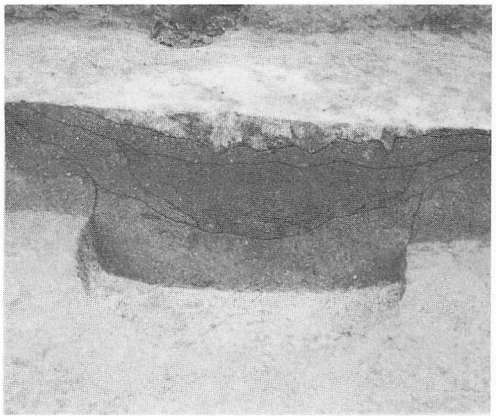
BⅢ－２ピット　平面



BⅢ－２ピット　断面

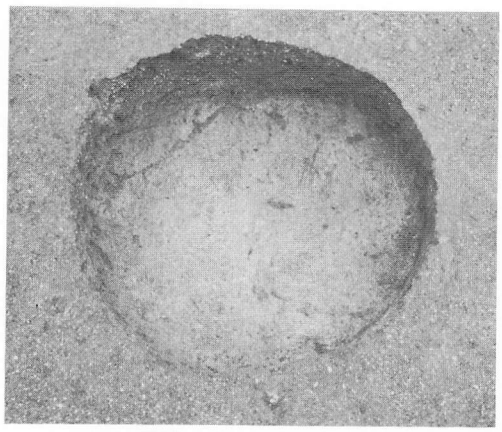


BⅢ－３ピット　平面

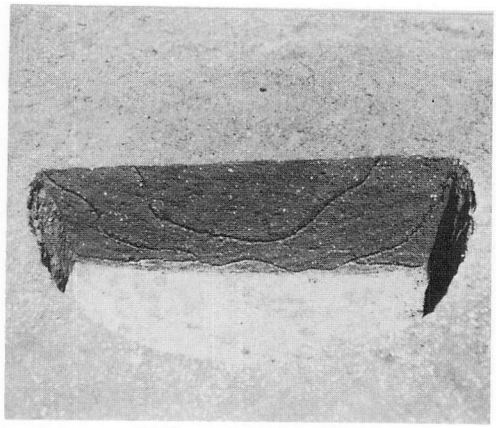


BⅢ－３ピット　断面

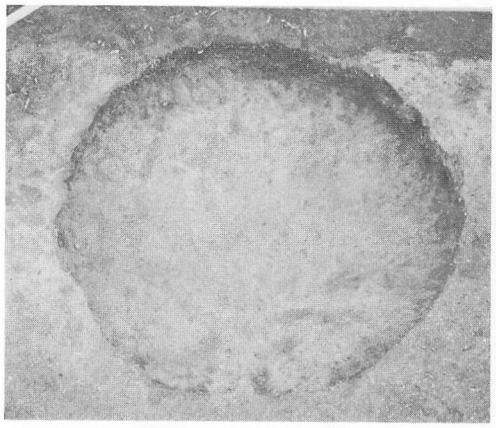
写真図版15　ピット(11)



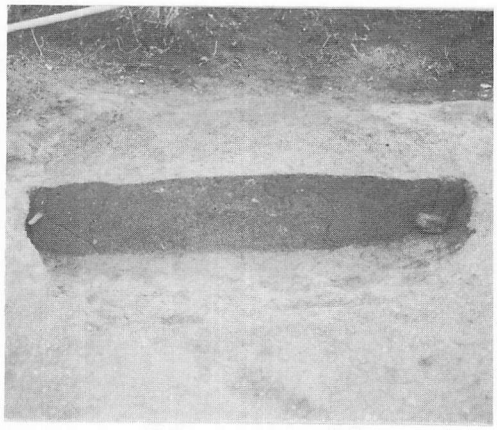
BⅢ－4ピット　平面



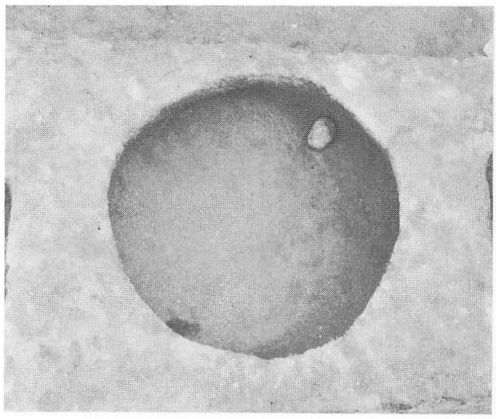
BⅢ－4ピット　断面



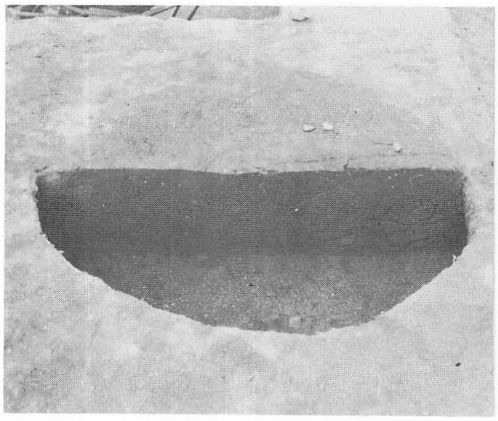
BⅣ－4ピット　平面



BⅣ－4ピット　断面

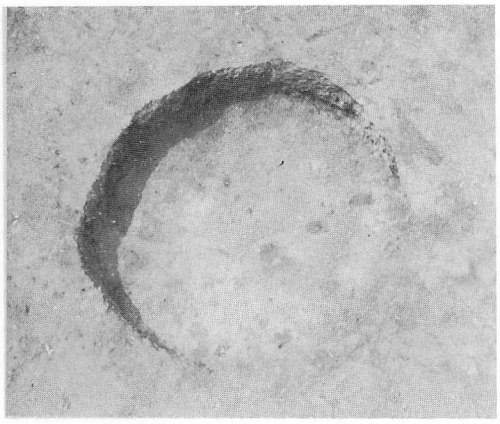


BⅣ－5ピット　平面

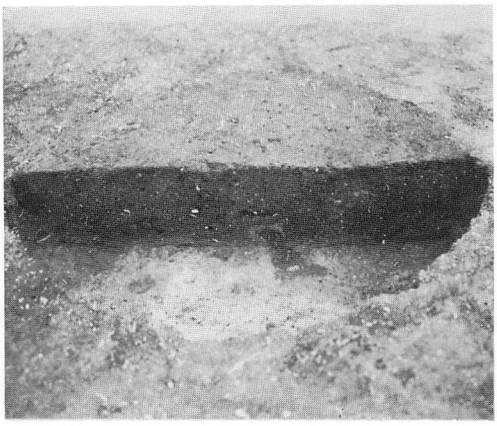


BⅣ－5ピット　断面

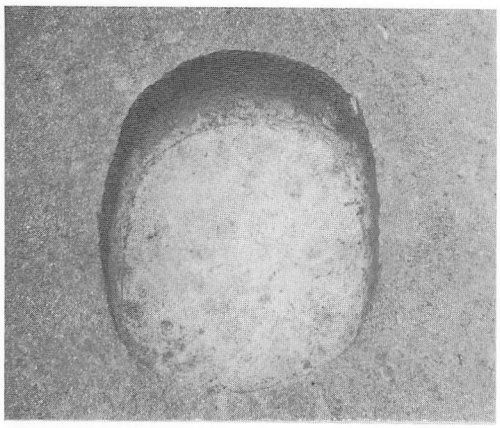
写真図版16　ピット(12)



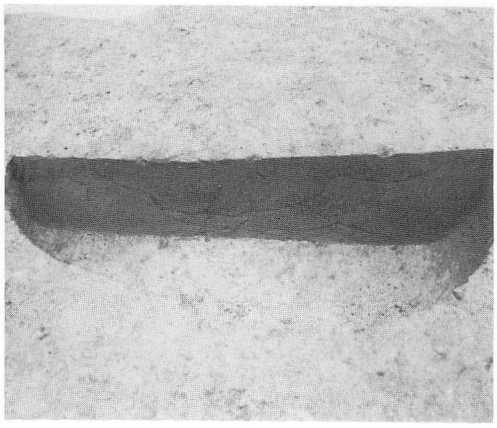
BⅣ－6ピット　平面



BⅣ－6ピット　断面

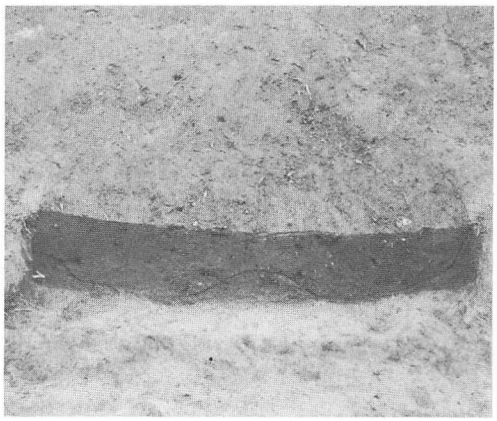


BⅣ－7ピット　平面



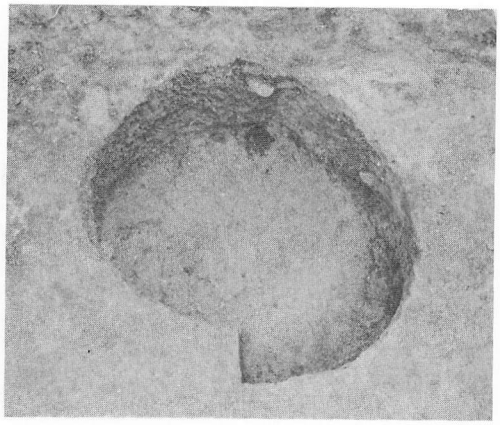
BⅣ－7ピット　断面

BⅣ－8ピット　平面

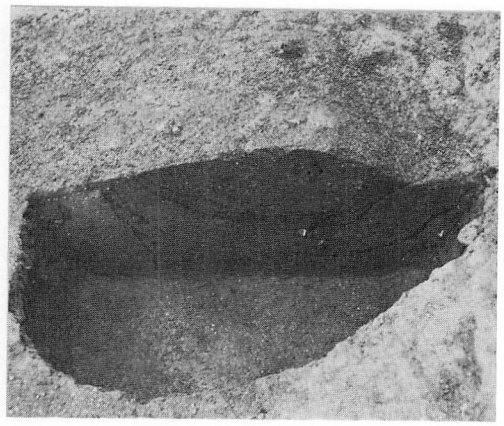


BⅣ－8ピット　断面

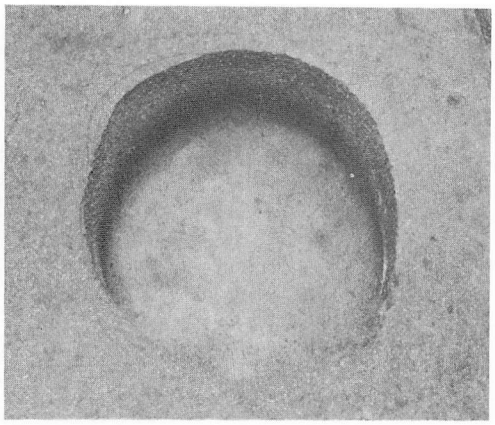
写真図版17　ピット(13)



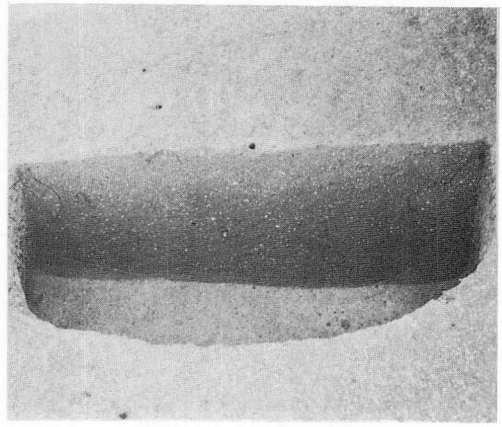
BⅣ－9ピット　平面



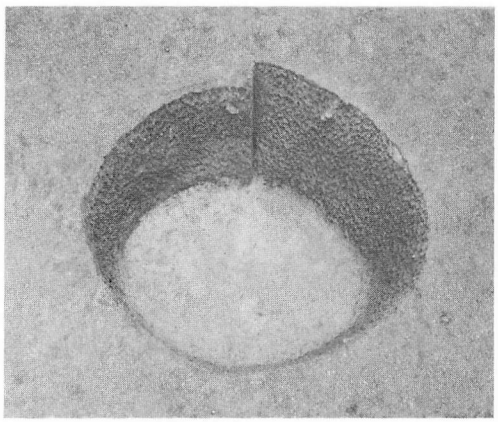
BⅣ－9ピット　断面



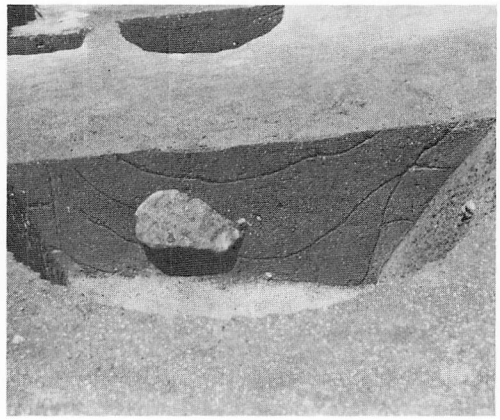
BⅣ－10ピット　平面



BⅣ－10ピット　断面



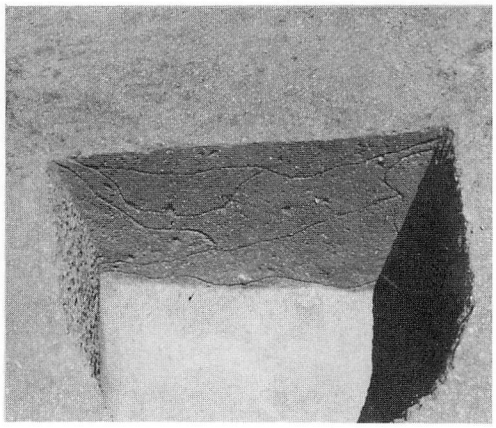
BⅣ－11ピット　平面



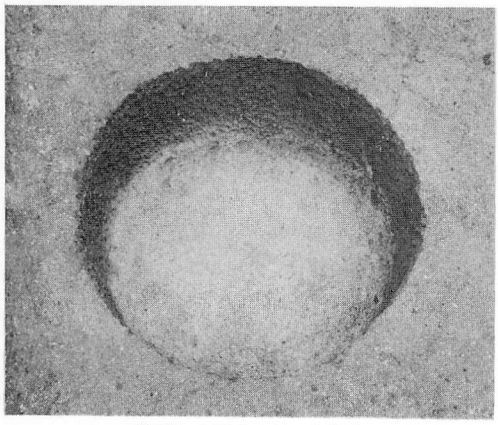
BⅣ－11ピット　断面

写真図版18　ピット(14)

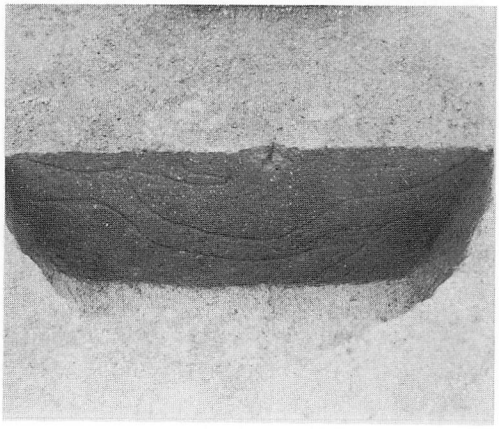
BⅣ－12ピット　平面



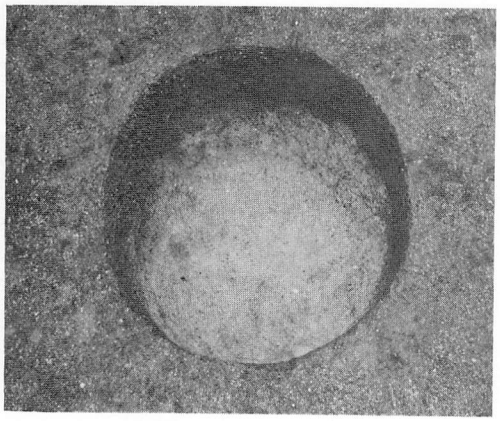
BⅣ－12ピット　断面



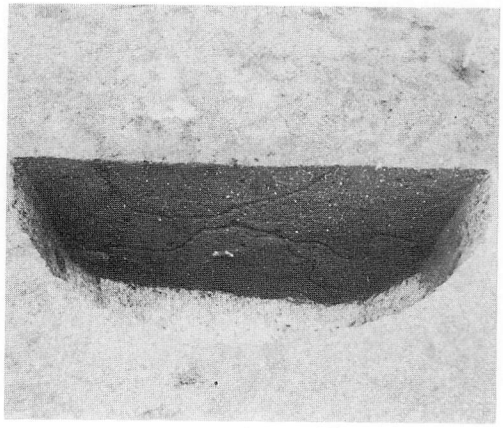
BⅣ－13ピット　平面



BⅣ－13ピット　断面

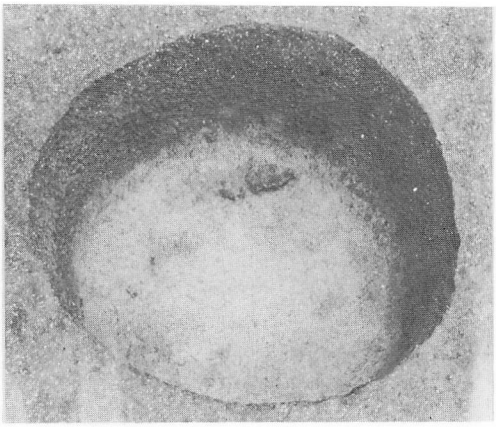


BⅣ－14ピット　平面

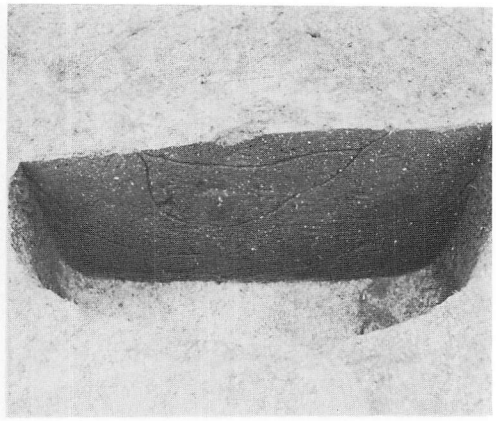


BⅣ－14ピット　断面

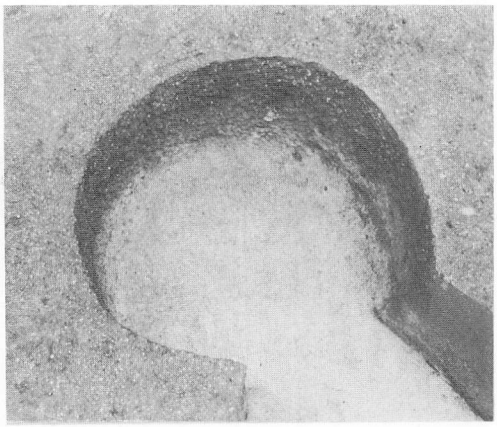
写真図版19　ピット(15)



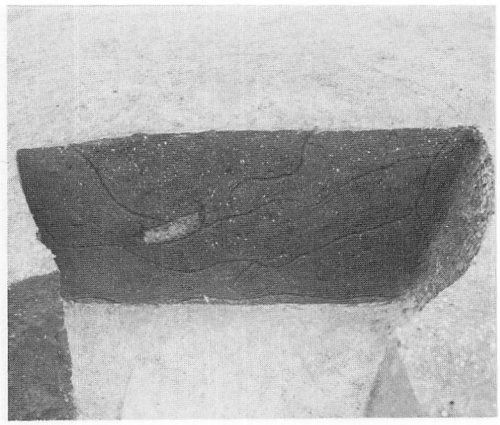
BⅣ－15ピット　平面



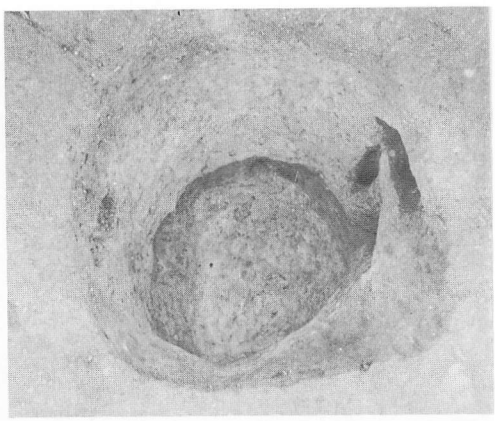
BⅣ－15ピット　断面



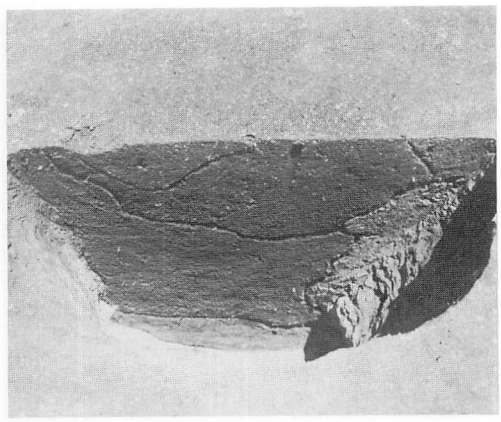
BⅣ－16ピット　平面



BⅣ－16ピット　断面



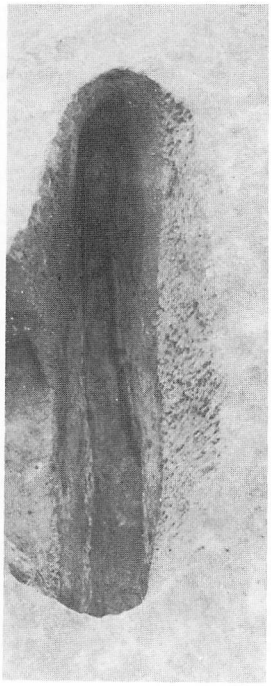
BⅤ－1ピット　平面



BⅤ－1ピット　断面

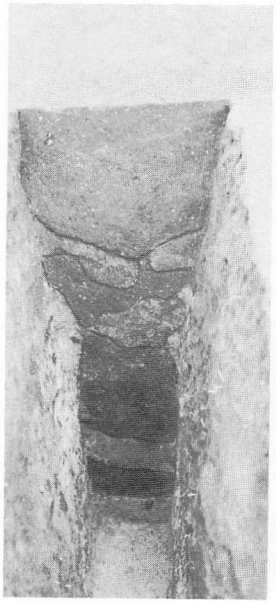
写真図版20　ピット(16)

AⅡ－２陥し穴　平面

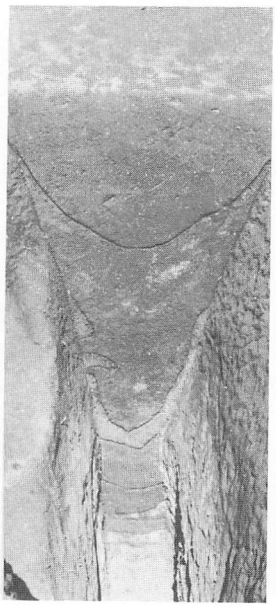


AⅢ－１陥し穴　平面

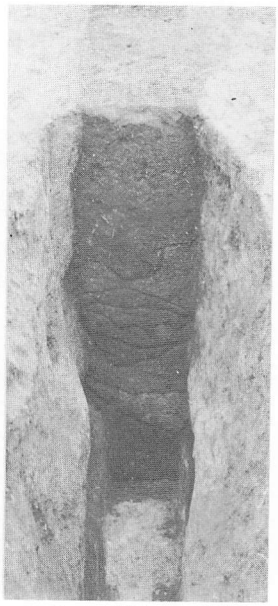
BⅡ－１陥し穴　平面



AⅡ－２陥し穴　断面

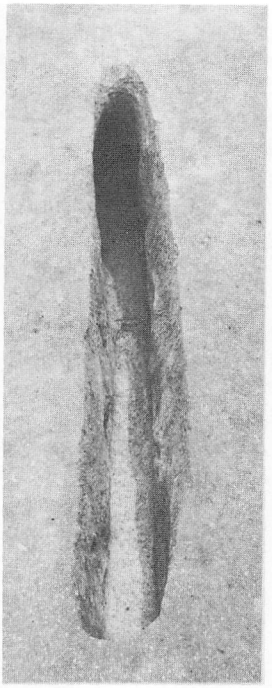


AⅢ－１陥し穴　断面

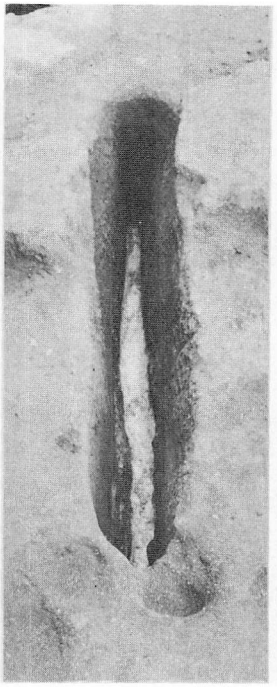


BⅡ－１陥し穴　断面

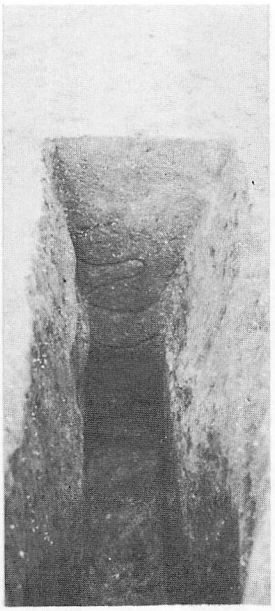
写真図版21　陥し穴状遺構(1)



BⅡ－３陥し穴　平面



BⅢ－１陥し穴　平面

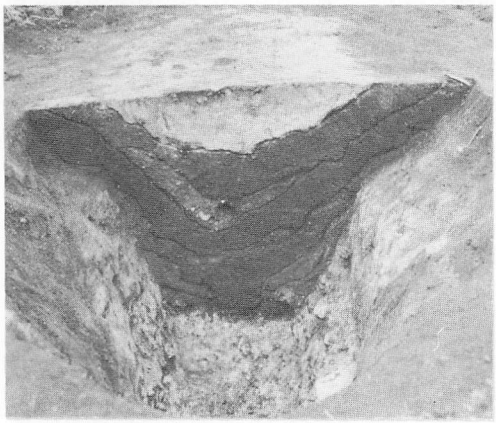


BⅡ－３陥し穴　断面

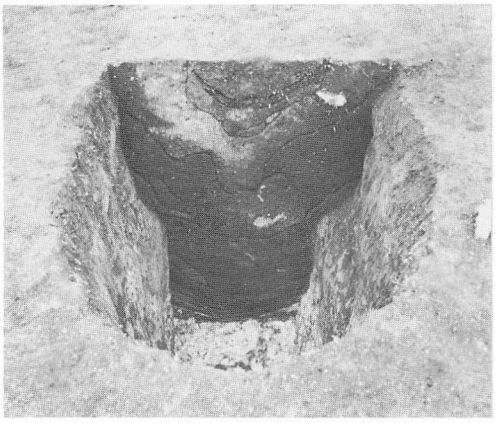
BⅢ－１陥し穴　断面

写真図版22　陥し穴状遺構(2)

AⅡ－1陥し穴状遺構　平面



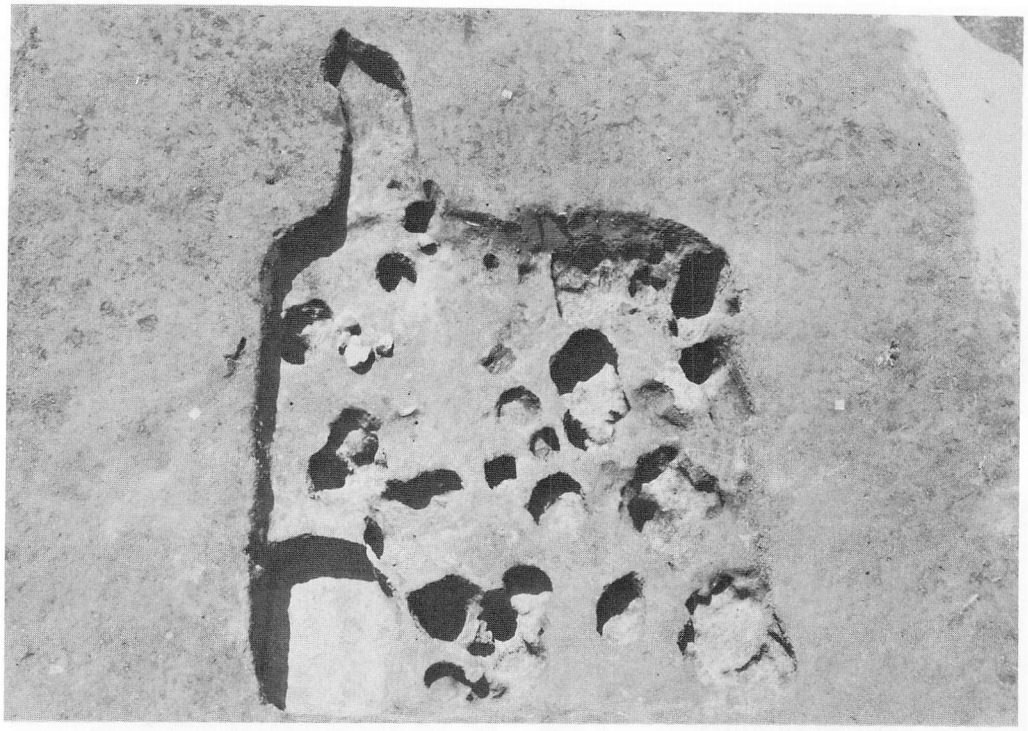
AⅡ－1陥し穴状遺構　断面



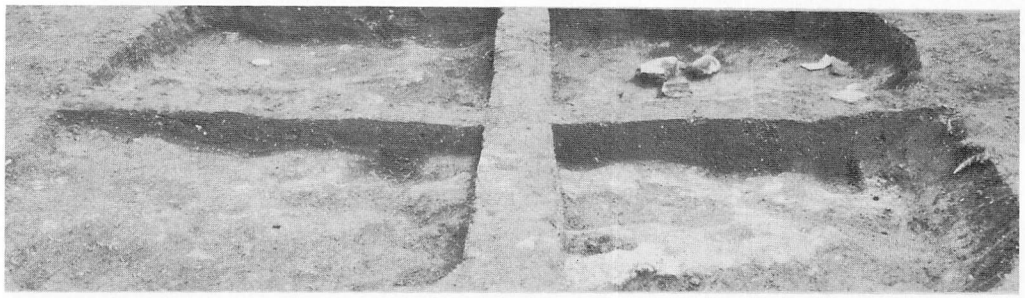
BⅡ－2陥し穴状遺構　断面

BⅡ－2陥し穴状遺構　平面

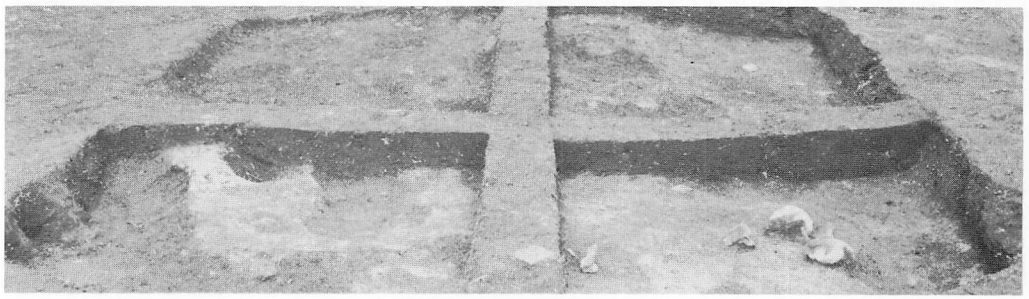
写真図版23　陥し穴状遺構(3)



平　面

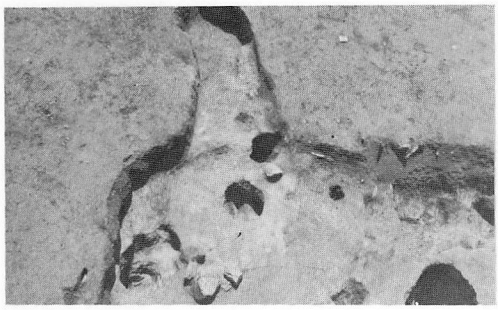


断　面

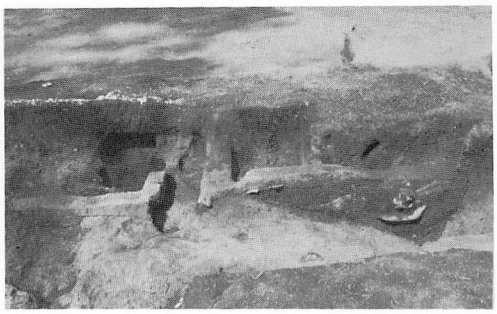


断　面

写真図版24　AⅣ－1住居址(1)

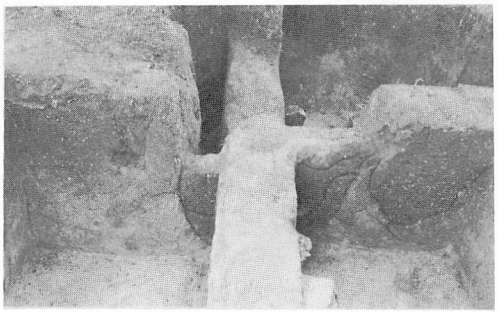


カマド　平面

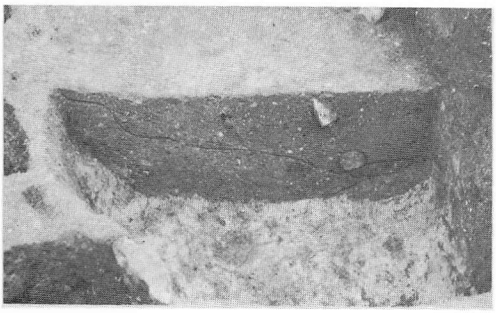


煙道　断面

カマド　断面



煙道　断面

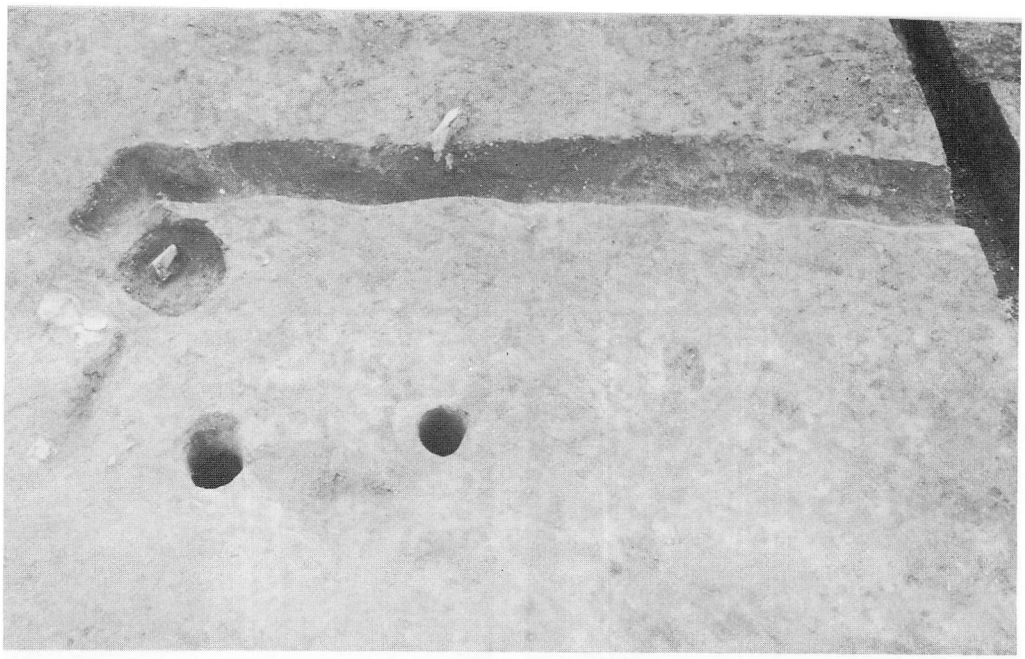


ピット　断面

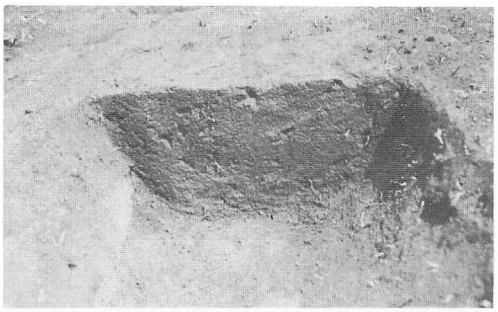
砂鉄・白粘土出土状況

貼床　断面

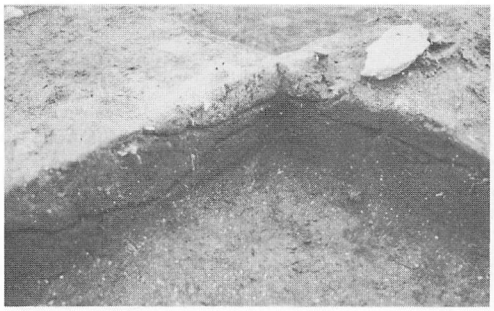
写真図版25　AⅣ－1住居址(2)



BⅢ－1住居址　平面



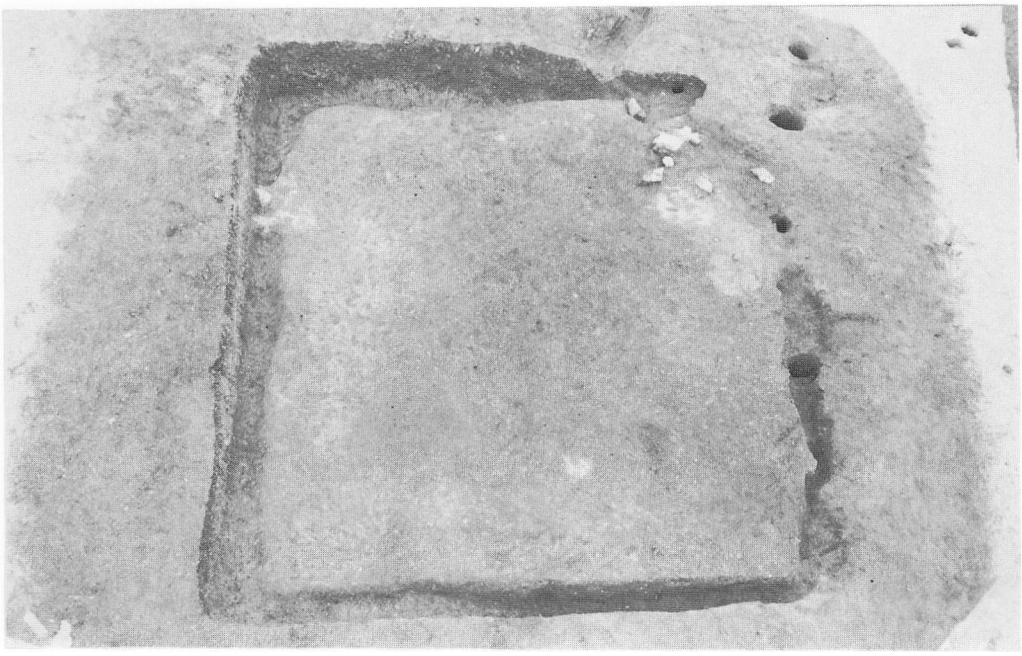
BⅢ－1住居址　平面



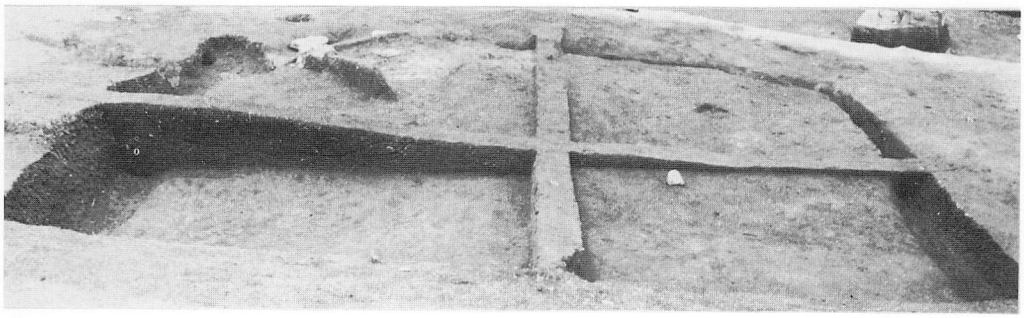
BⅢ－2住居址カマド　断面

BⅢ－2住居址カマド　断面

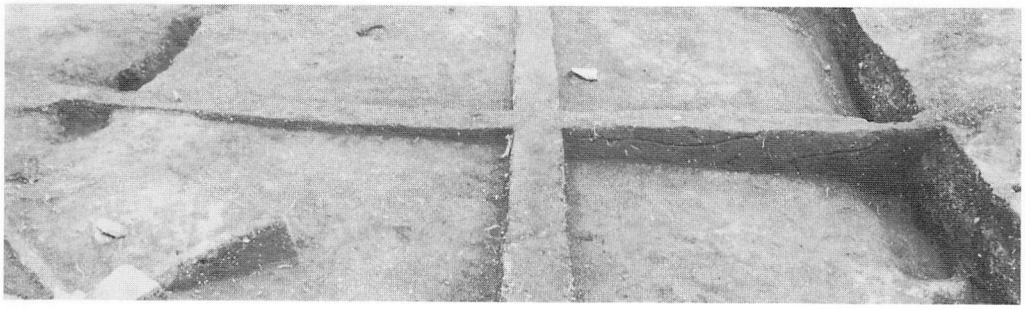
写真図版26　BⅢ－1住居址・BⅢ－2住居址(1)



平　面

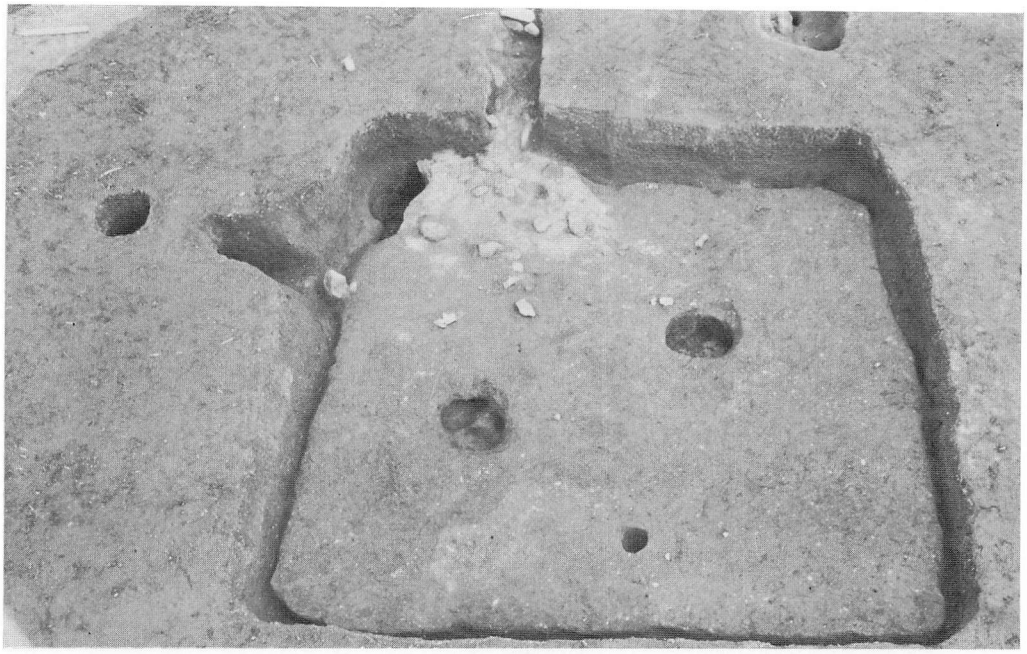


断　面

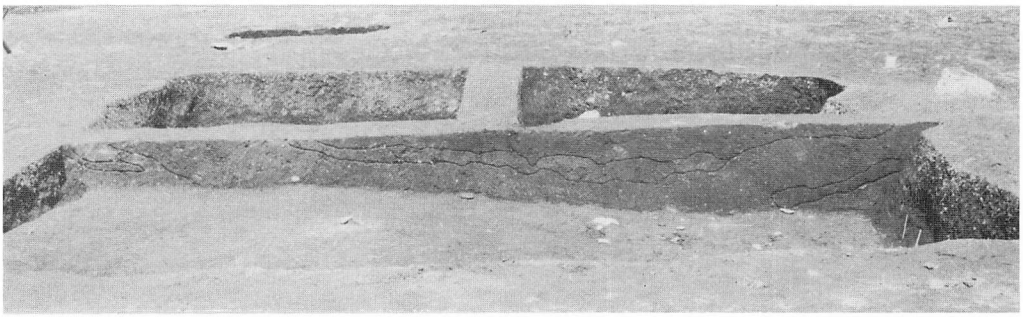


断　面

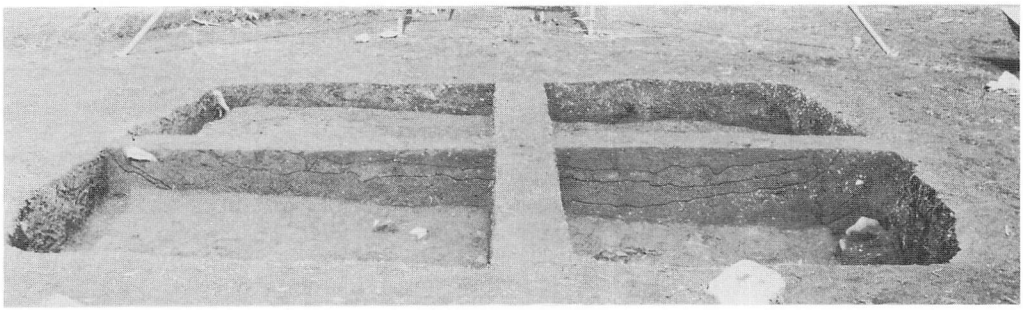
写真図版27　BⅢ－2住居址(2)



平　面



断　面



断　面

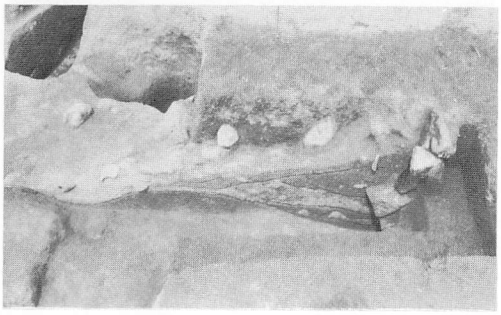
写真図版28　BⅣ－1住居址(1)

北東カマド　平面

北東カマド煙道　断面

北東カマド煙道　断面

南東カマド　平面

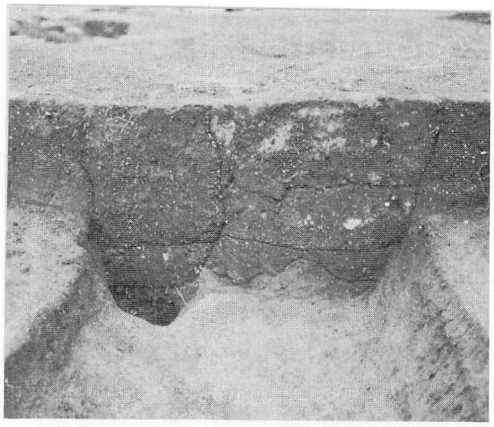


南東カマド煙道　断面

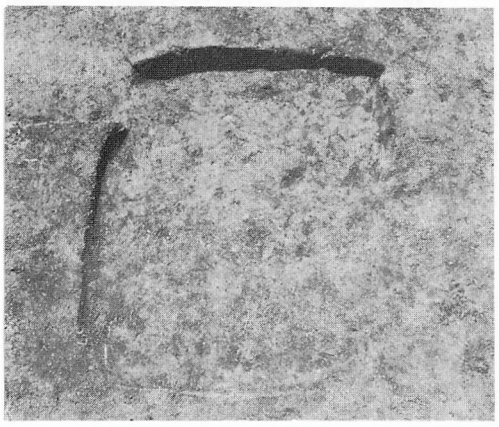
ピット　平面

写真図版29　BⅣ－1住居址(2)

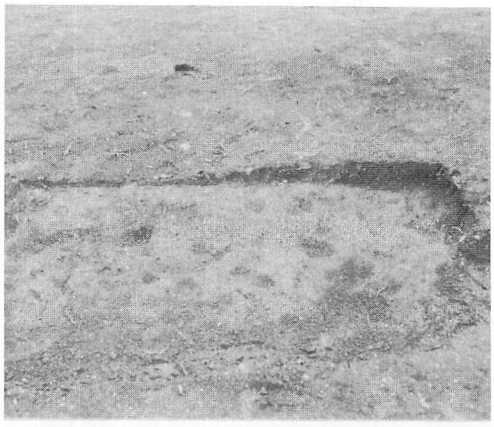
AⅣ－5ピット　平面



AⅣ－5ピット　断面

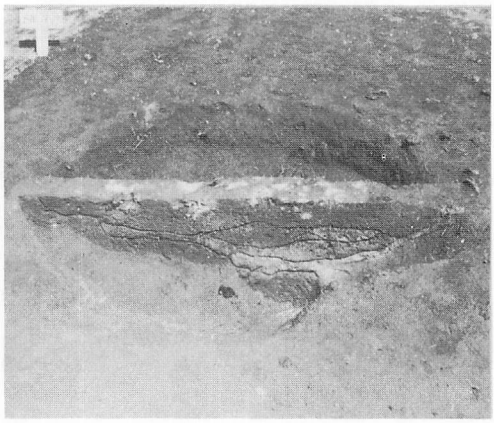


AⅣ－6ピット　平面



AⅣ－6ピット　断面

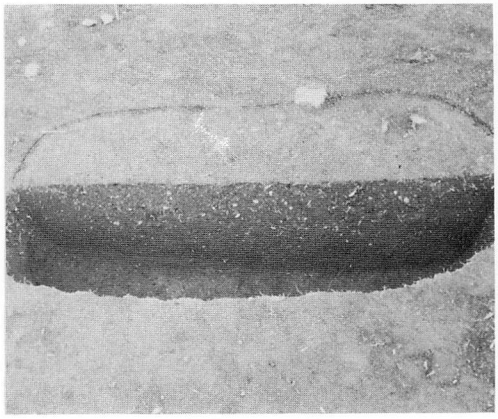
BⅣ－1ピット　平面



BⅣ－1ピット　断面

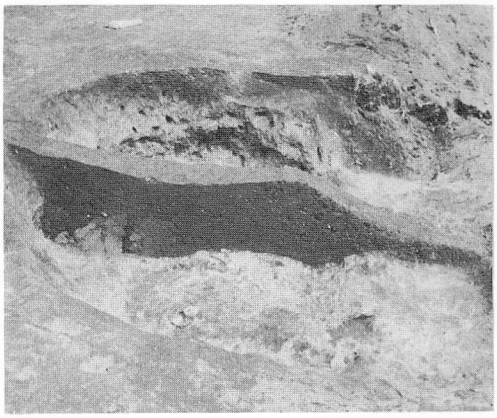
写真図版30　平安時代ピット(1)

BⅣ－３ピット　平面



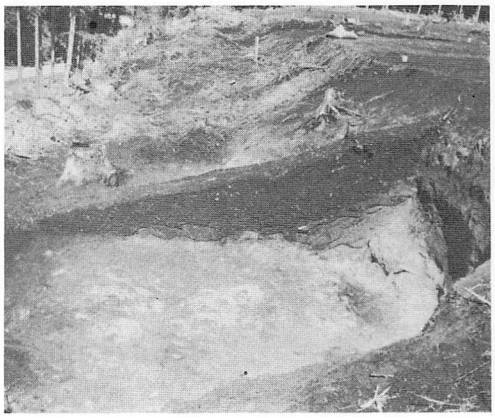
BⅣ－３ピット　断面

AⅣ－１土取穴　平面



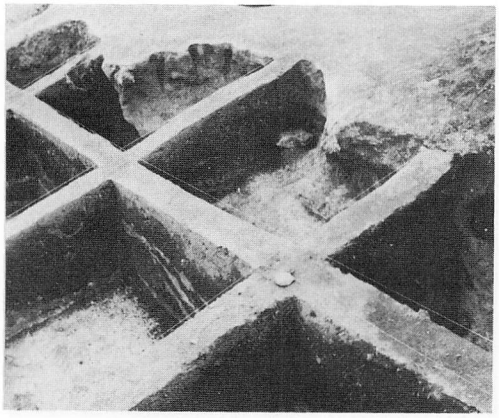
AⅣ－１土取穴　断面

BⅤ－１土取穴　平面

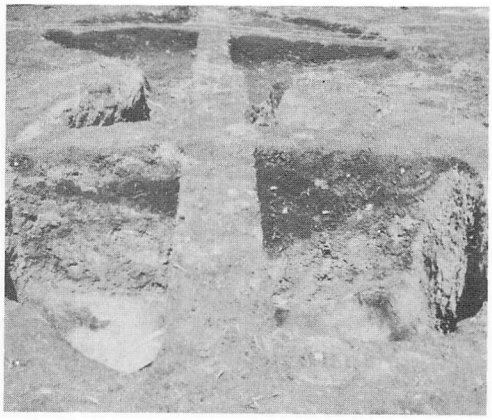


BⅤ－１土取穴　断面

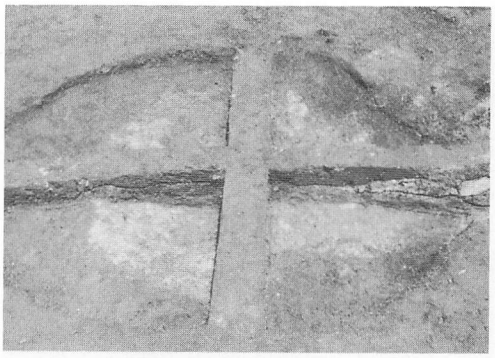
写真図版31　平安時代ピット(2)・土取穴(1)



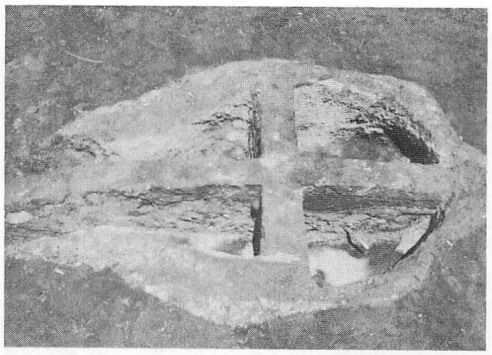
BⅤ－2土取穴



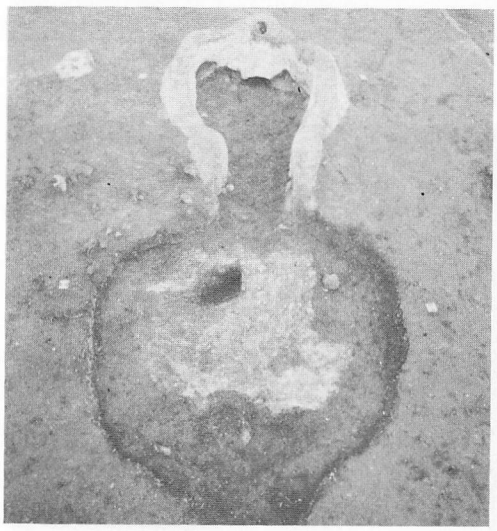
AⅢ－炭窯 断面



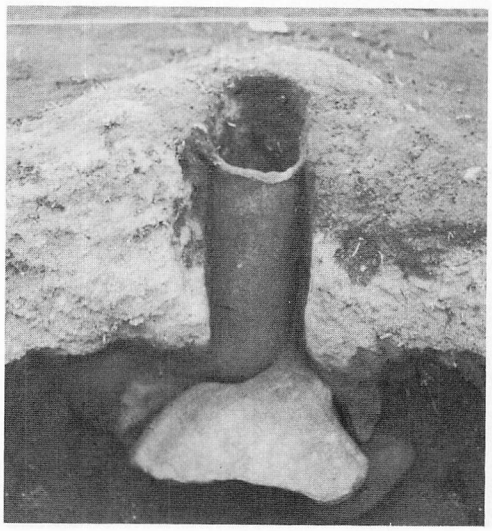
AⅢ－炭窯 断面



AⅢ－炭窯 断面

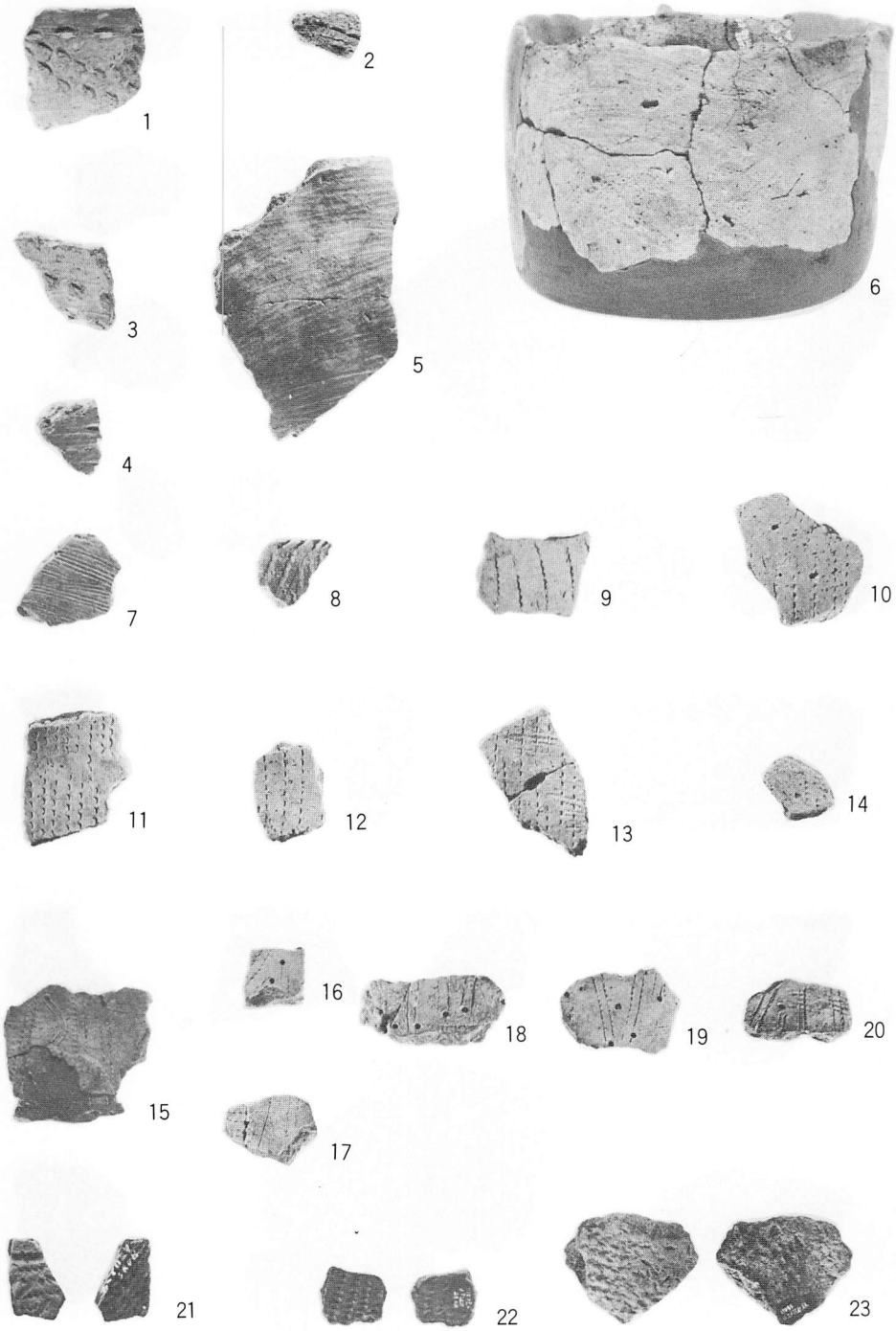


AⅢ－炭窯 平面

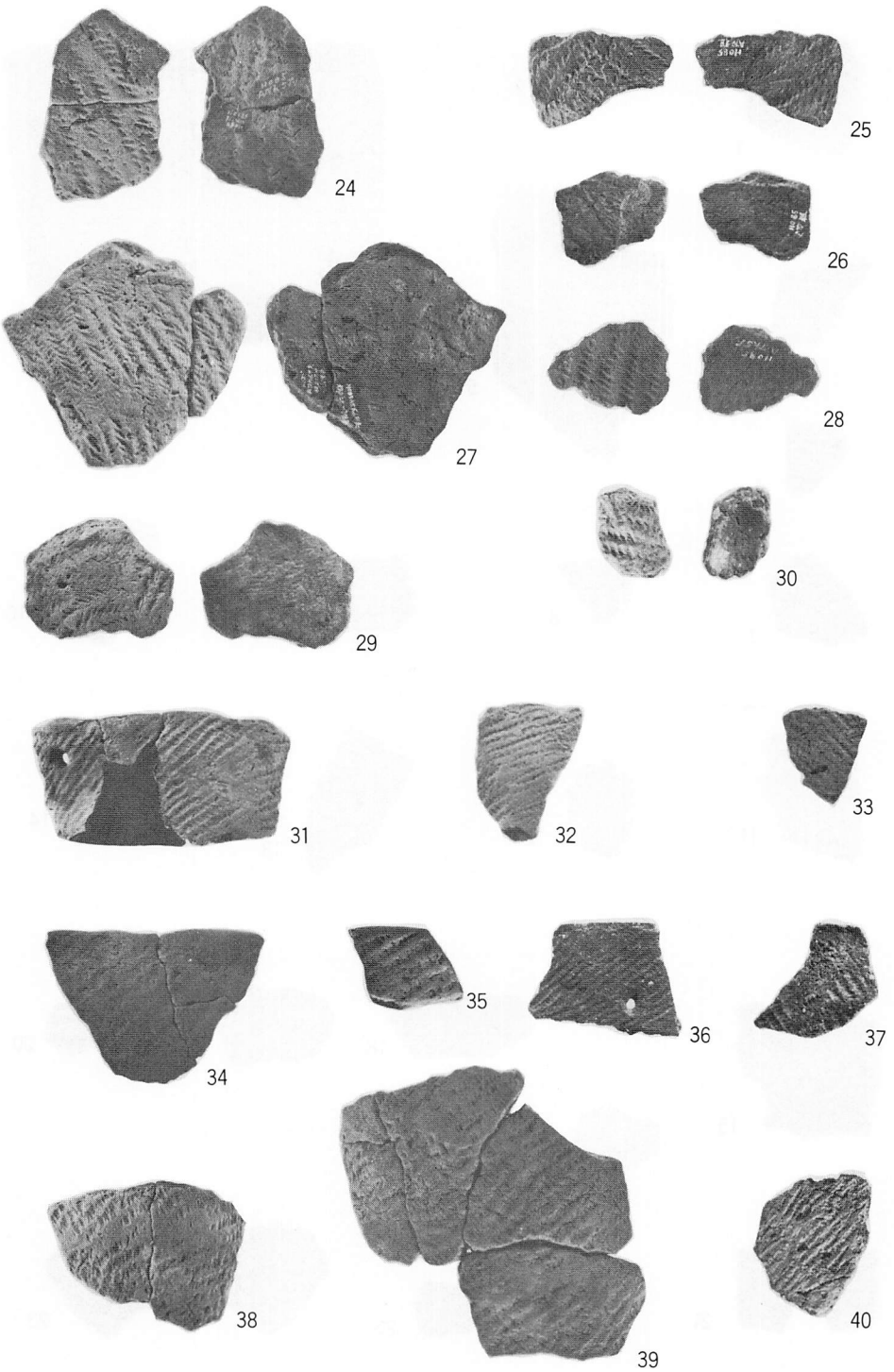


AⅢ－炭窯 煙出し部

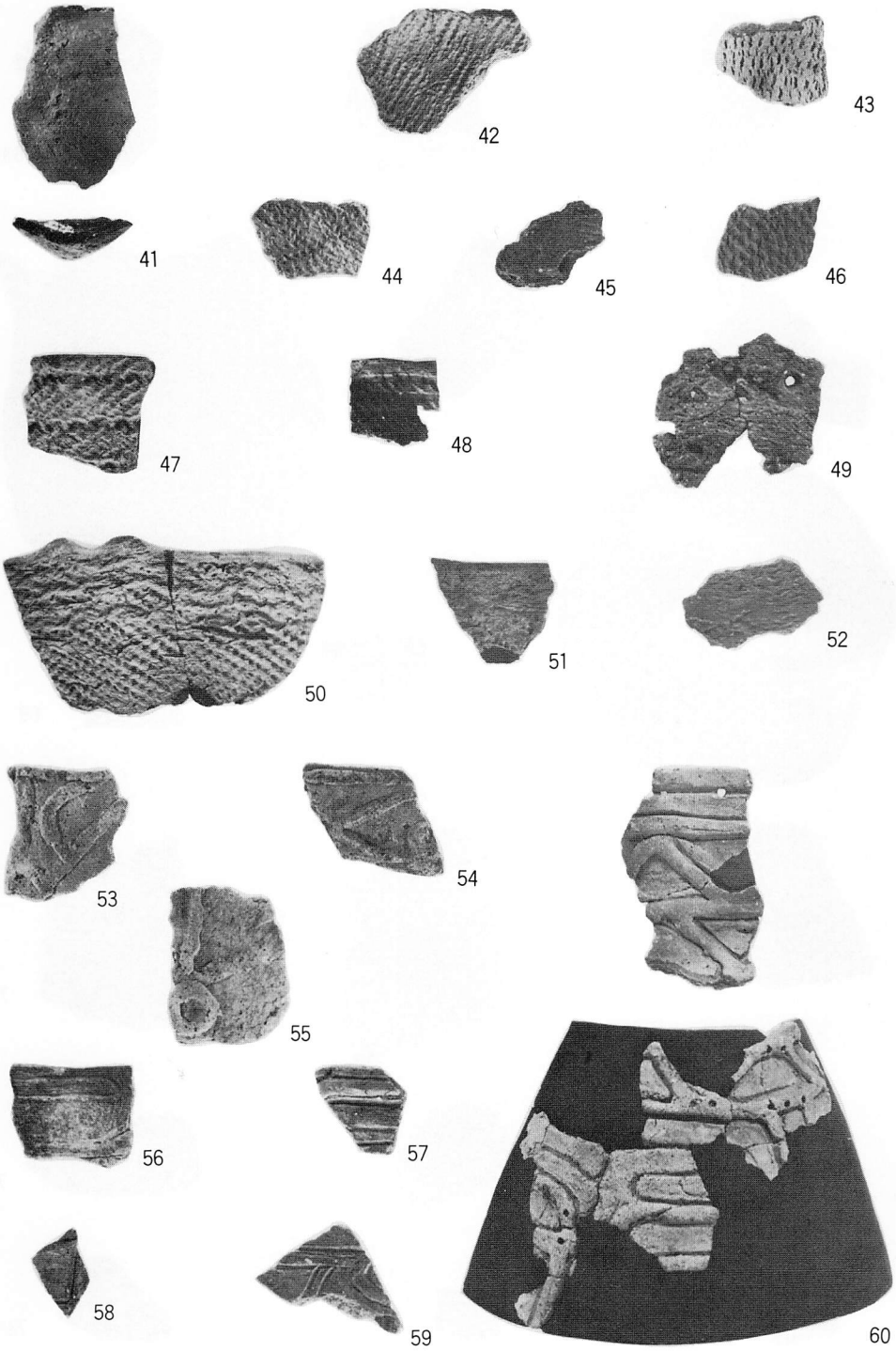
写真図版32　土取穴(2)・炭窯



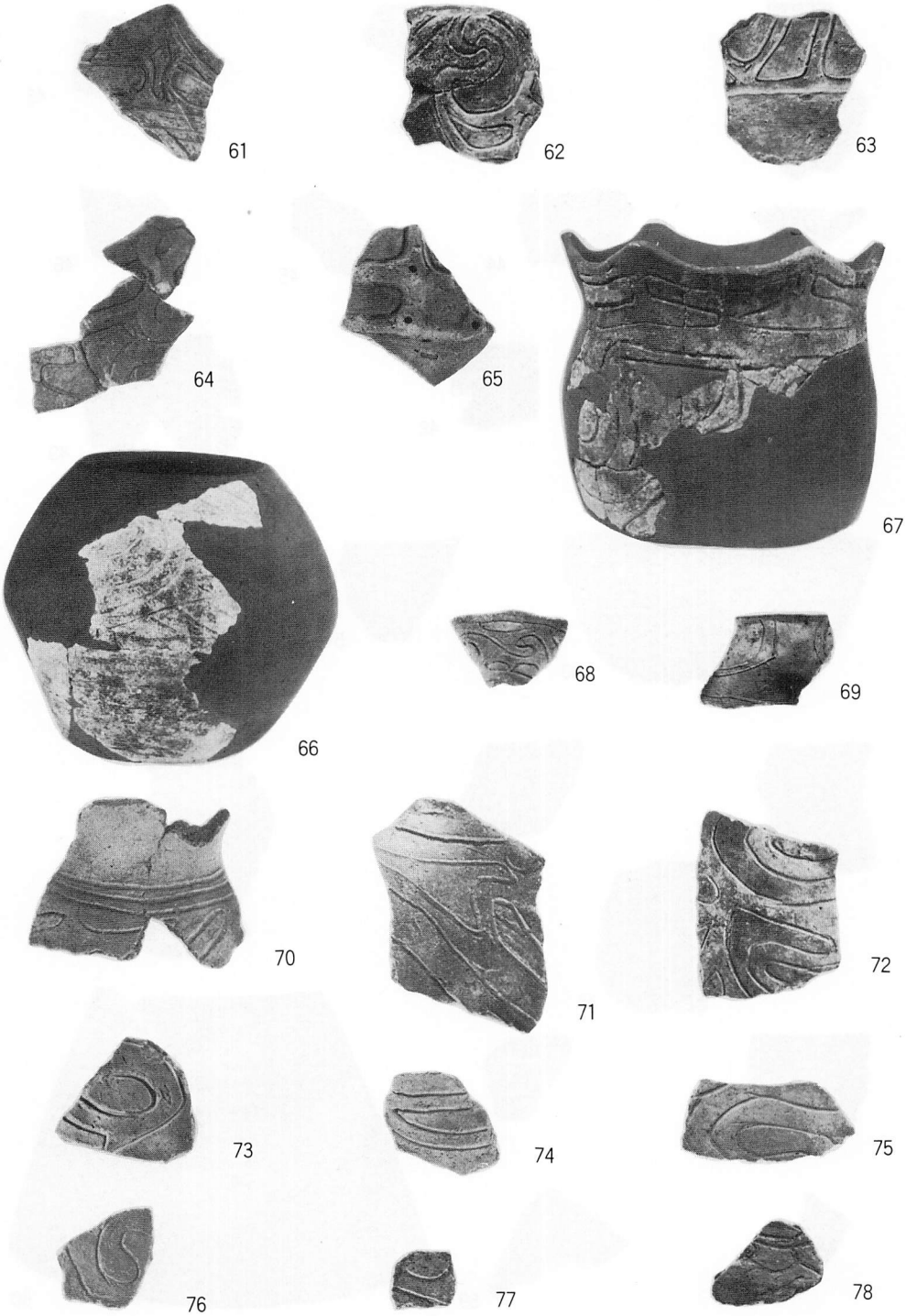
写真図版33　縄文土器(1)



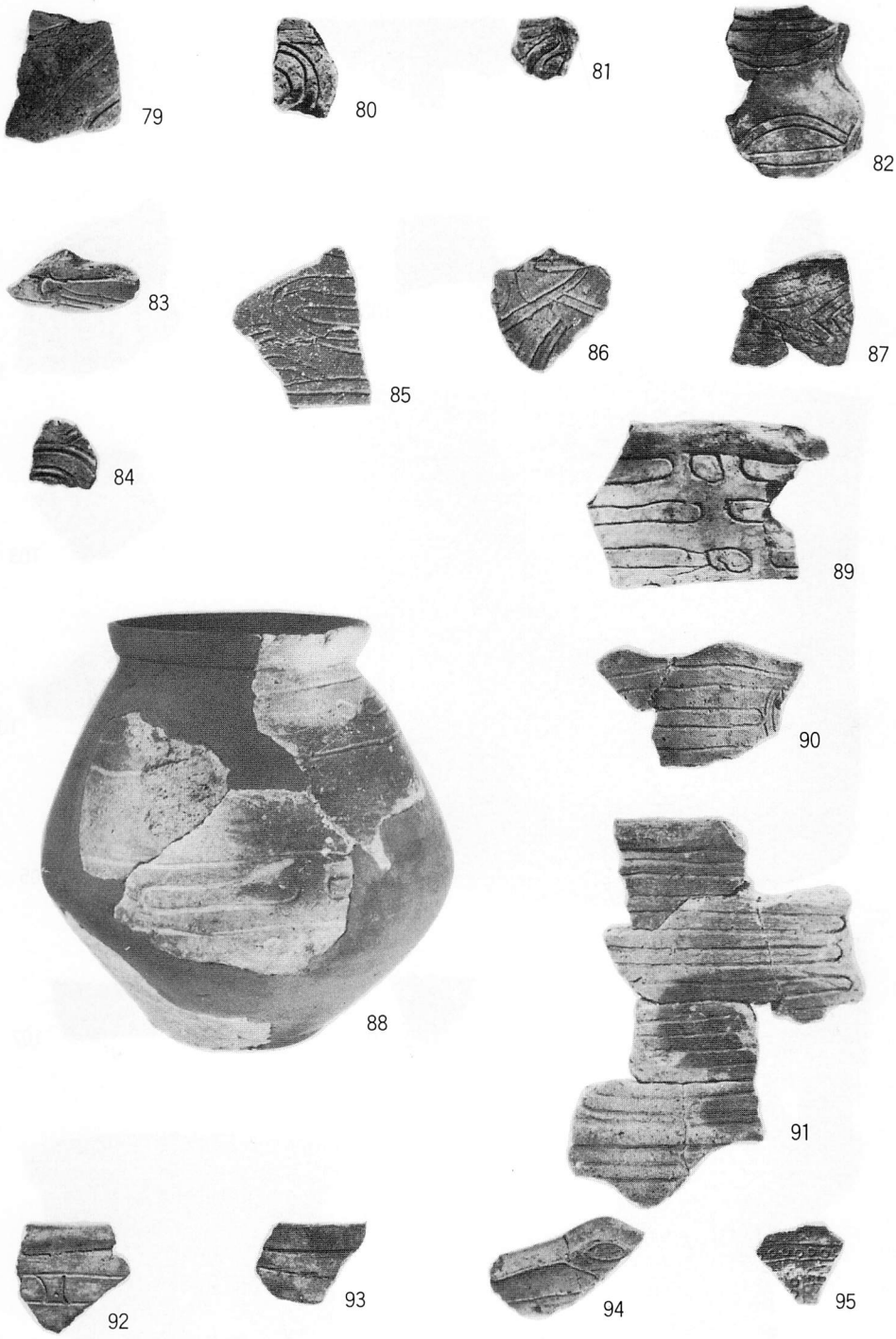
写真図版34　縄文土器(2)



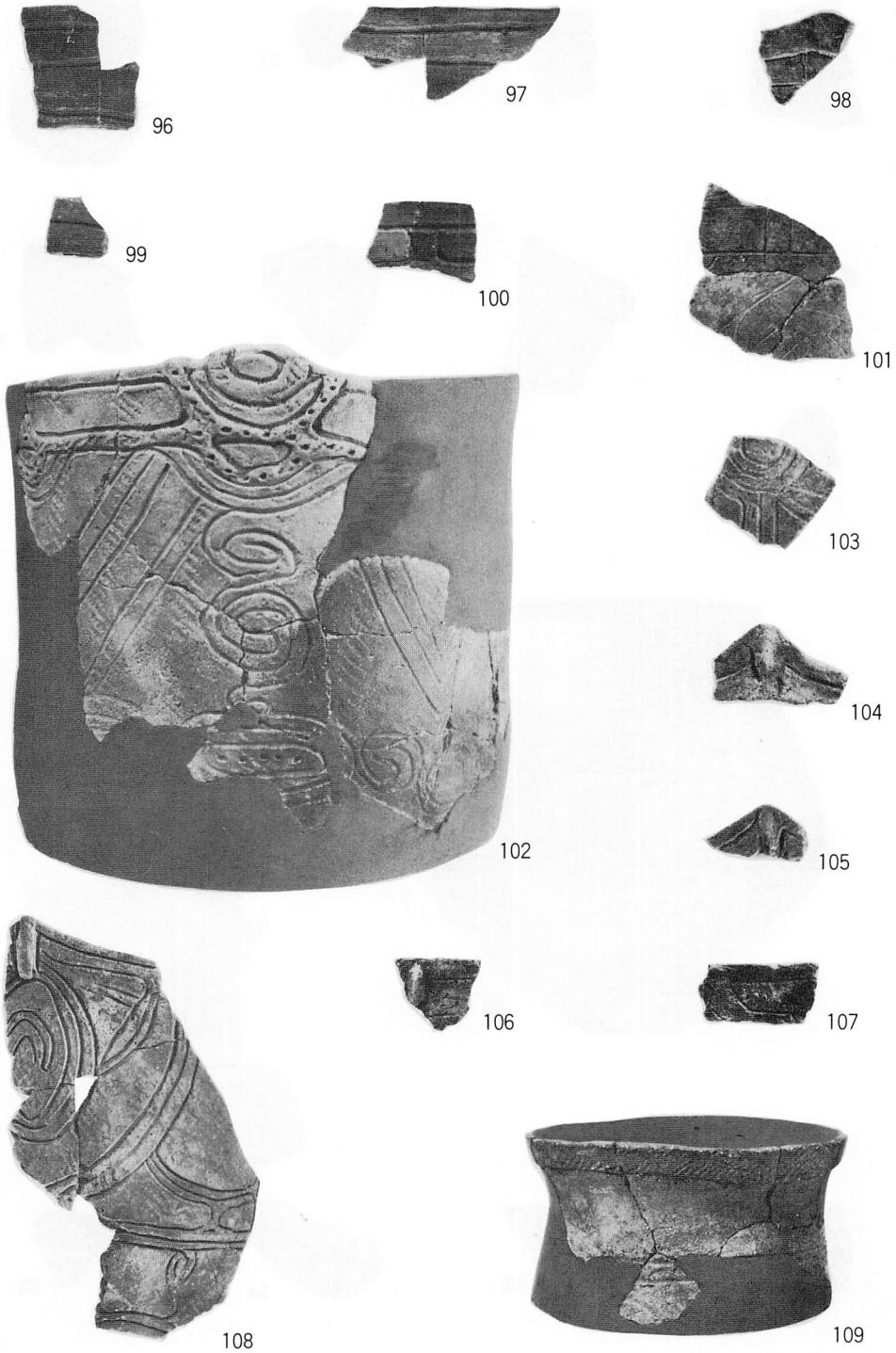
写真図版35　縄文土器(3)



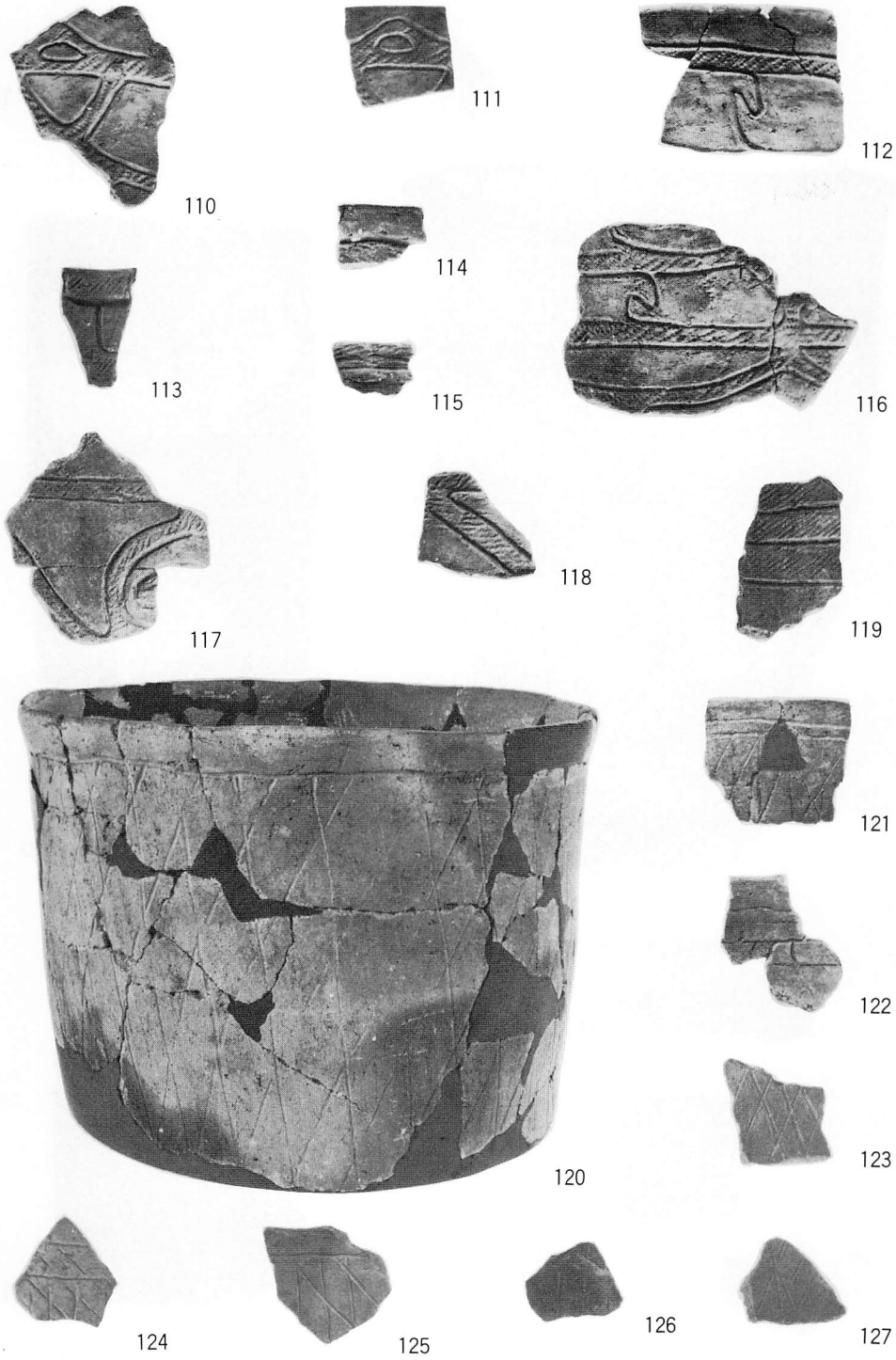
写真図版36　縄文土器(4)



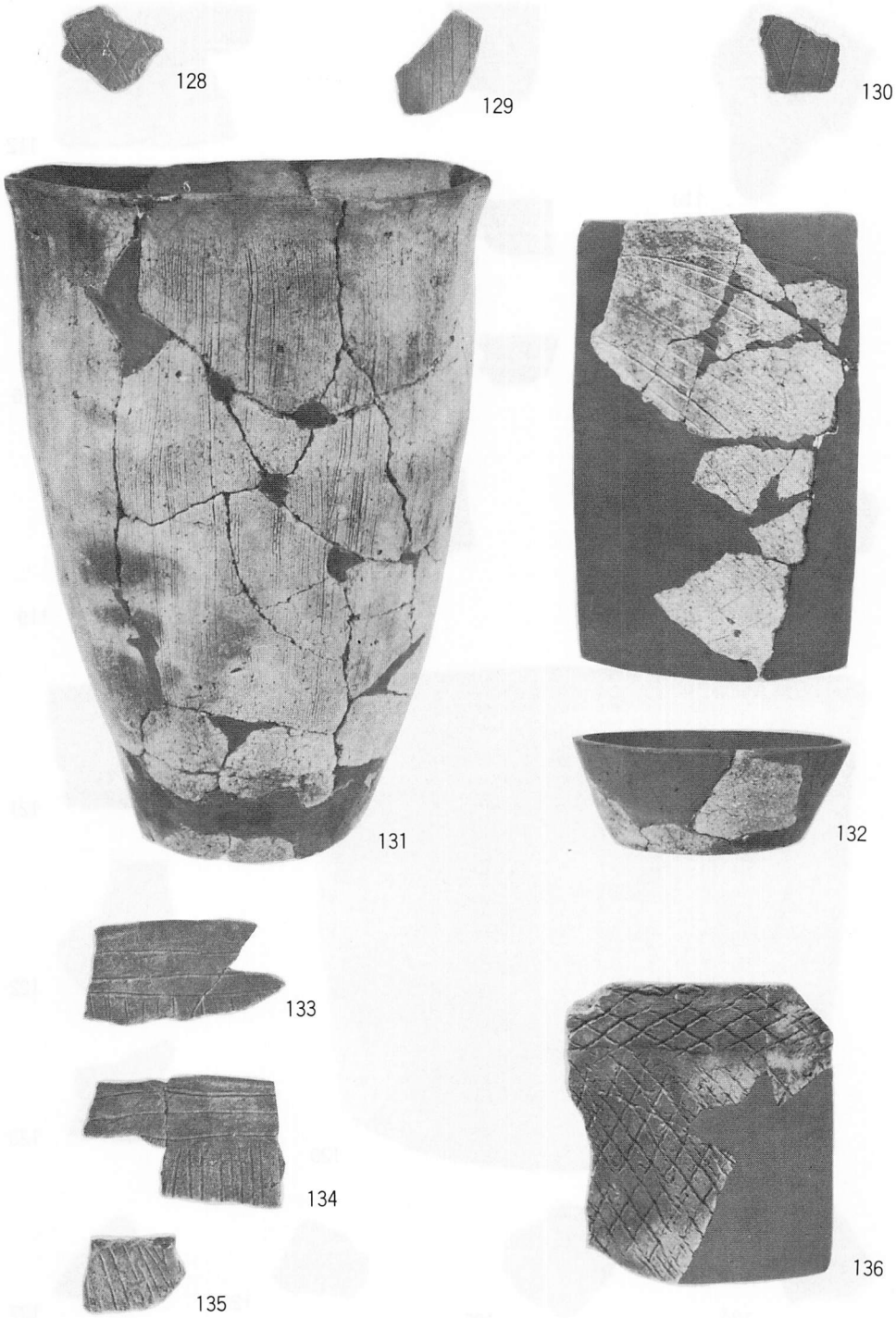
写真図版37　縄文土器(5)



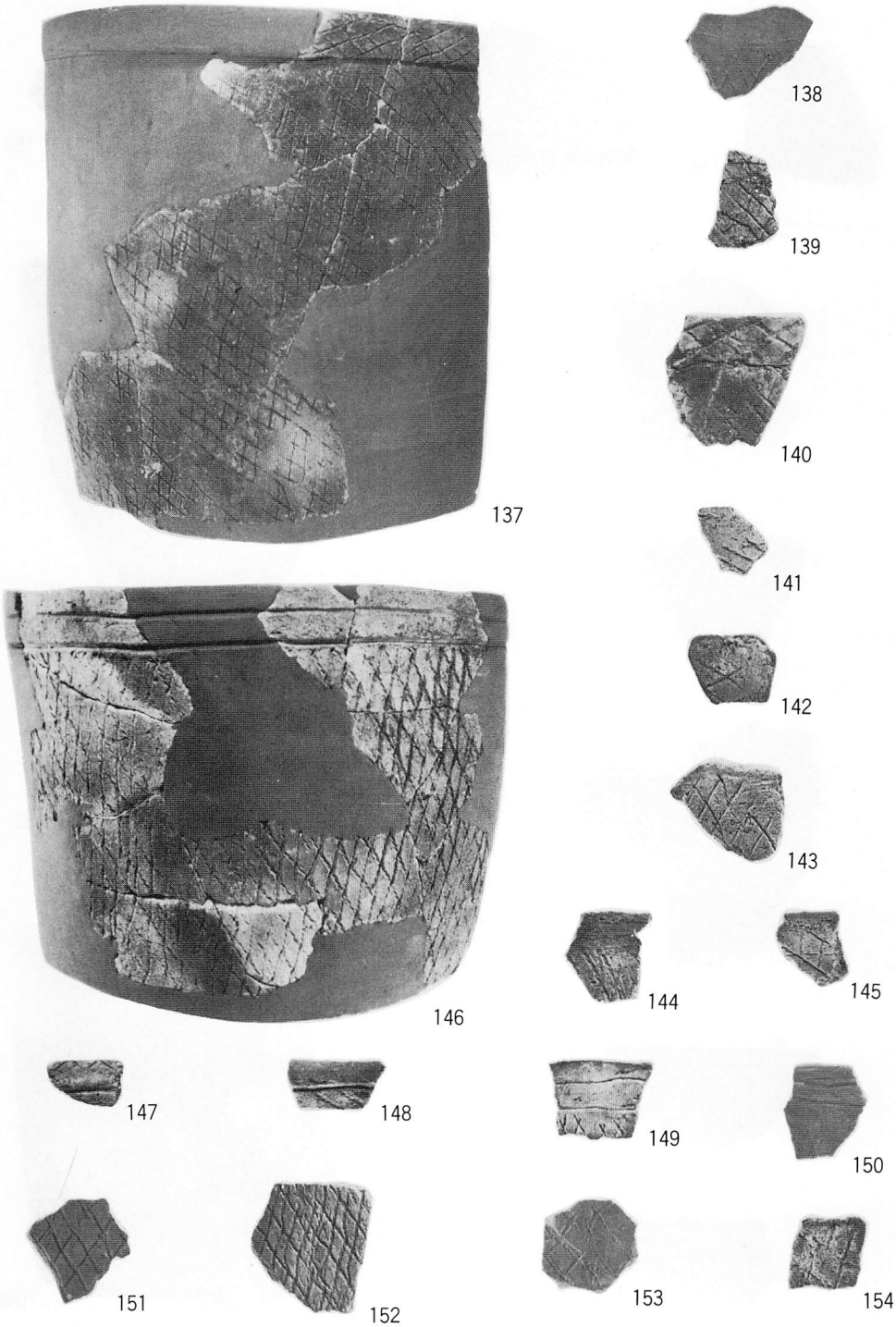
写真図版38　縄文土器(6)



写真図版39　縄文土器(7)

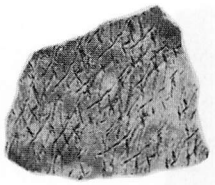


写真図版40　縄文土器(8)

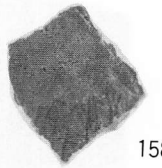


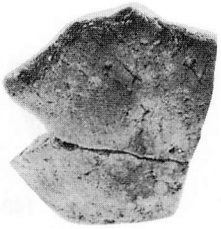
写真図版41　縄文土器(9)

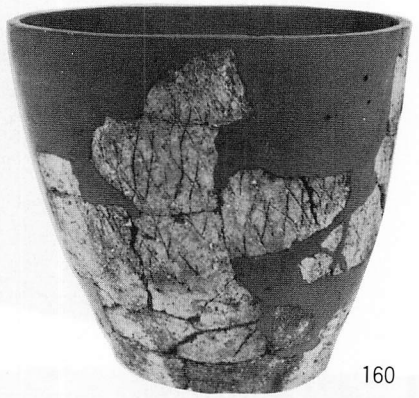
155


156

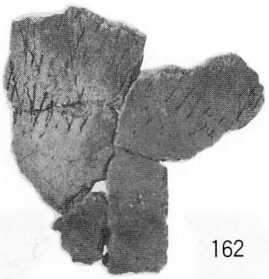
157


158


159


160

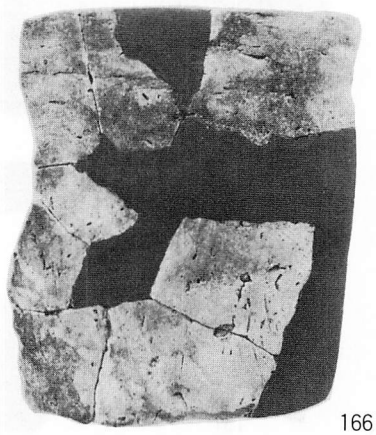
161


162

163

164

165


166

写真図版42　縄文土器(10)

167

168

169

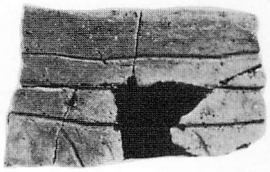
170

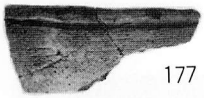
171

172

174

175


176


177

178

179

180

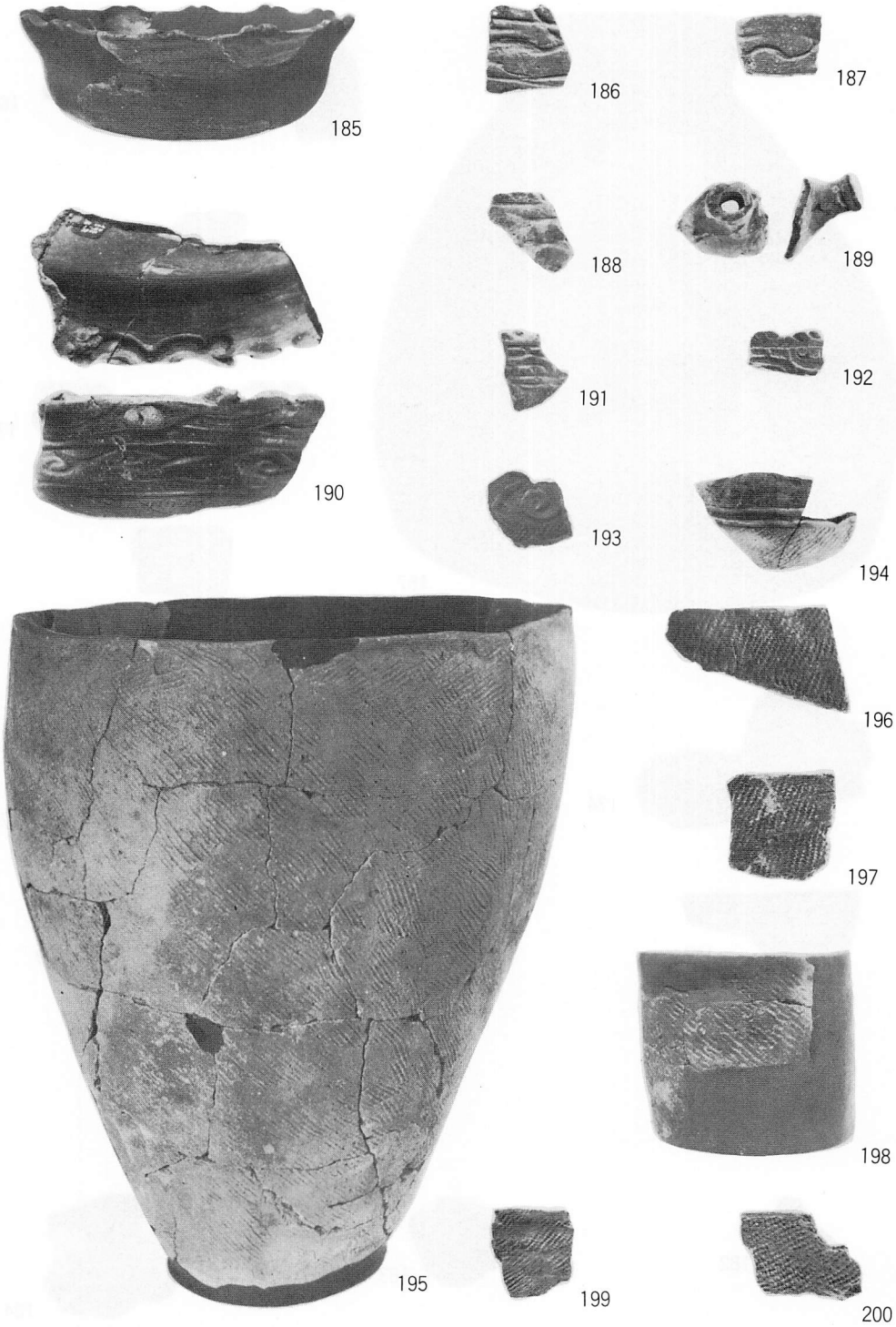
181

182

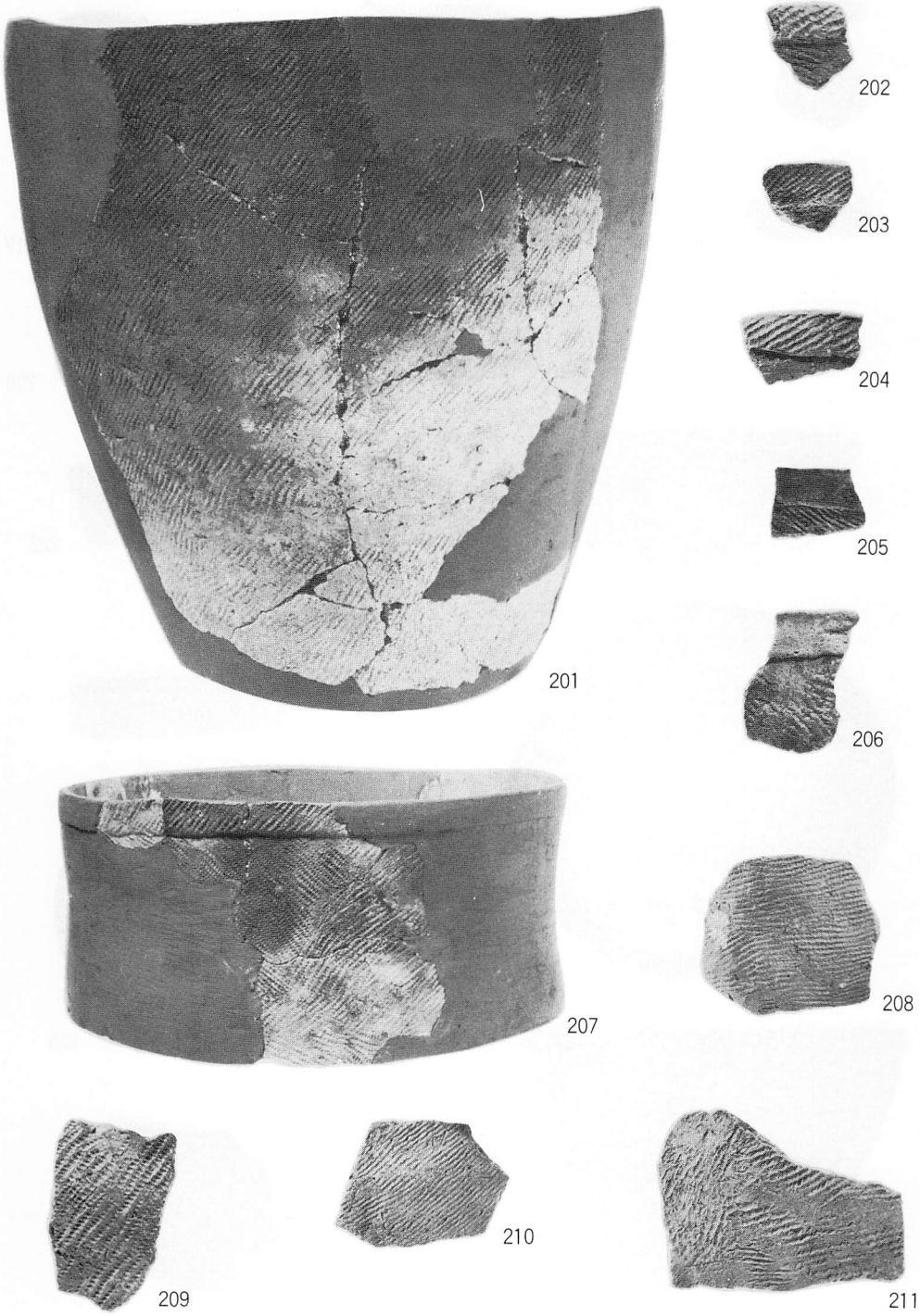
183

184

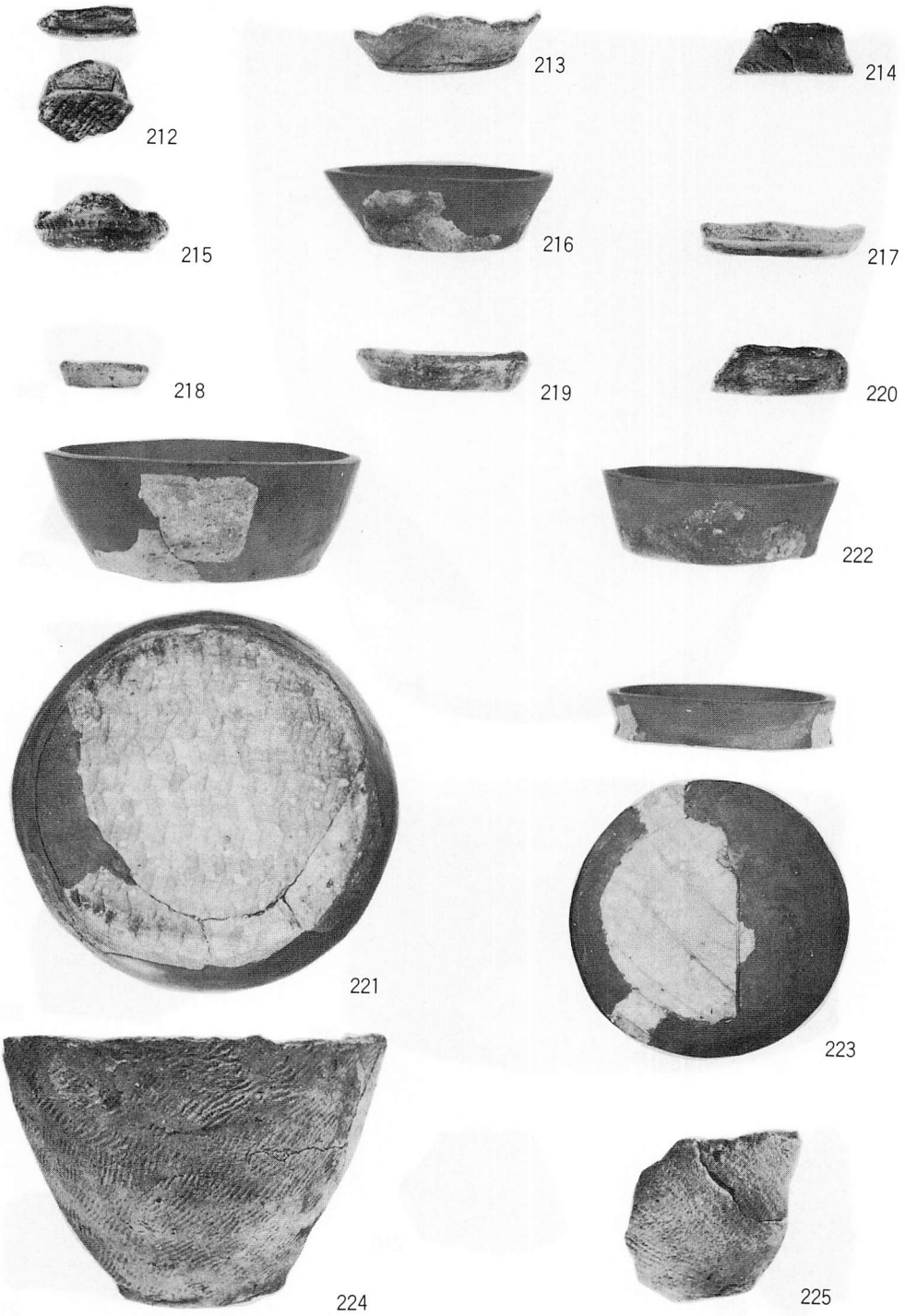
写真図版43　縄文土器(11)



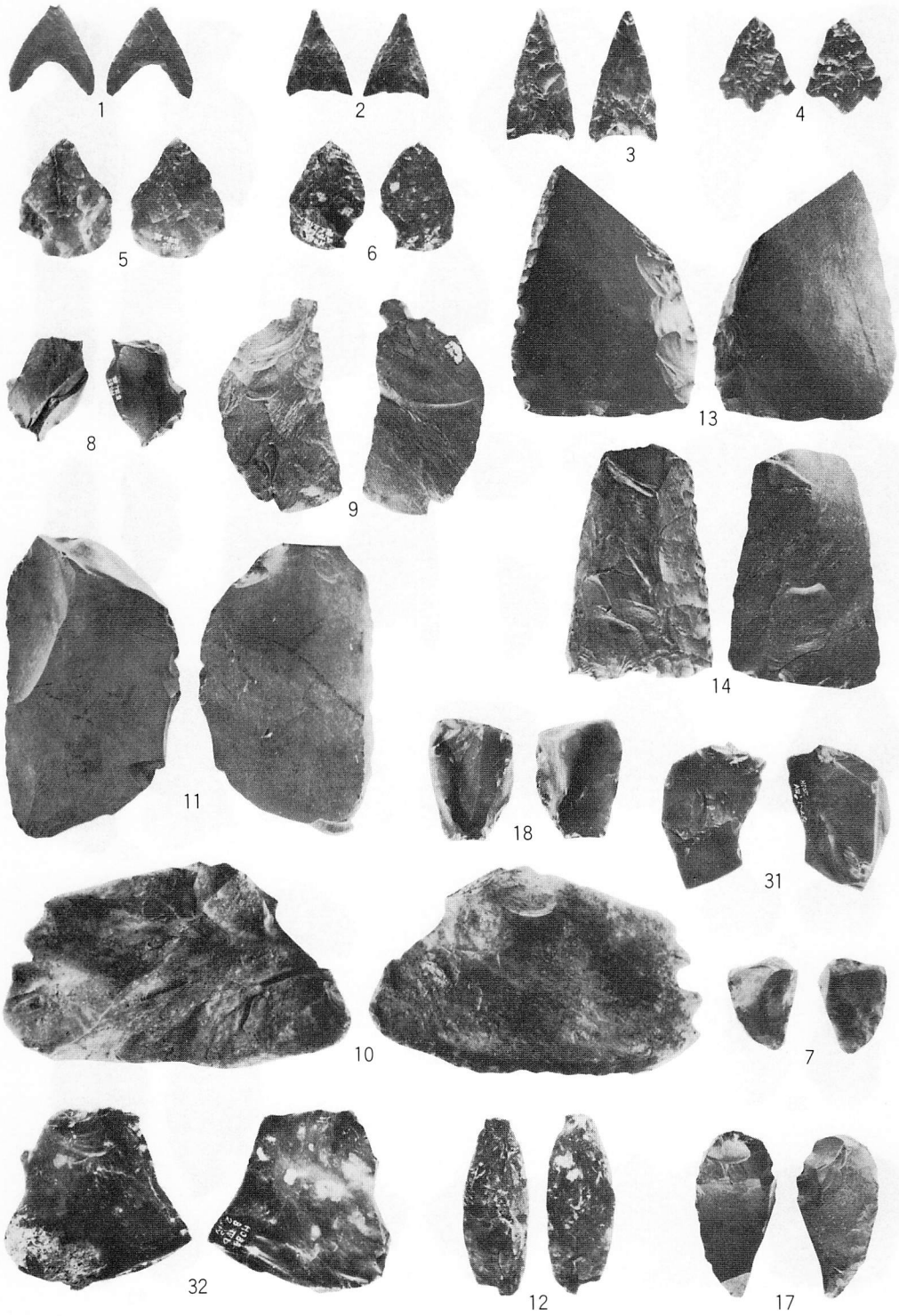
写真図版44　縄文土器(12)



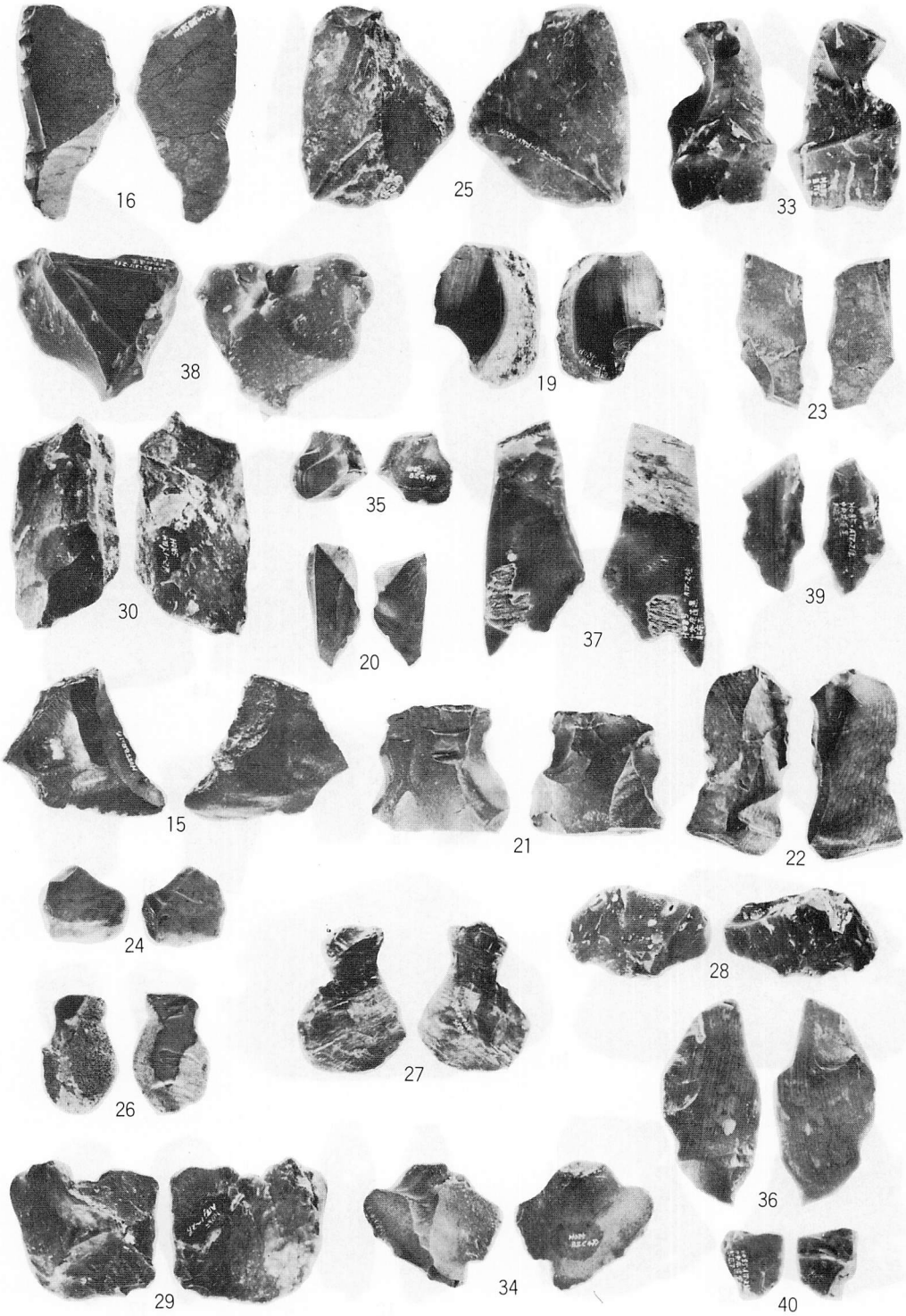
写真図版45　縄文土器(13)



写真図版46　縄文土器(14)

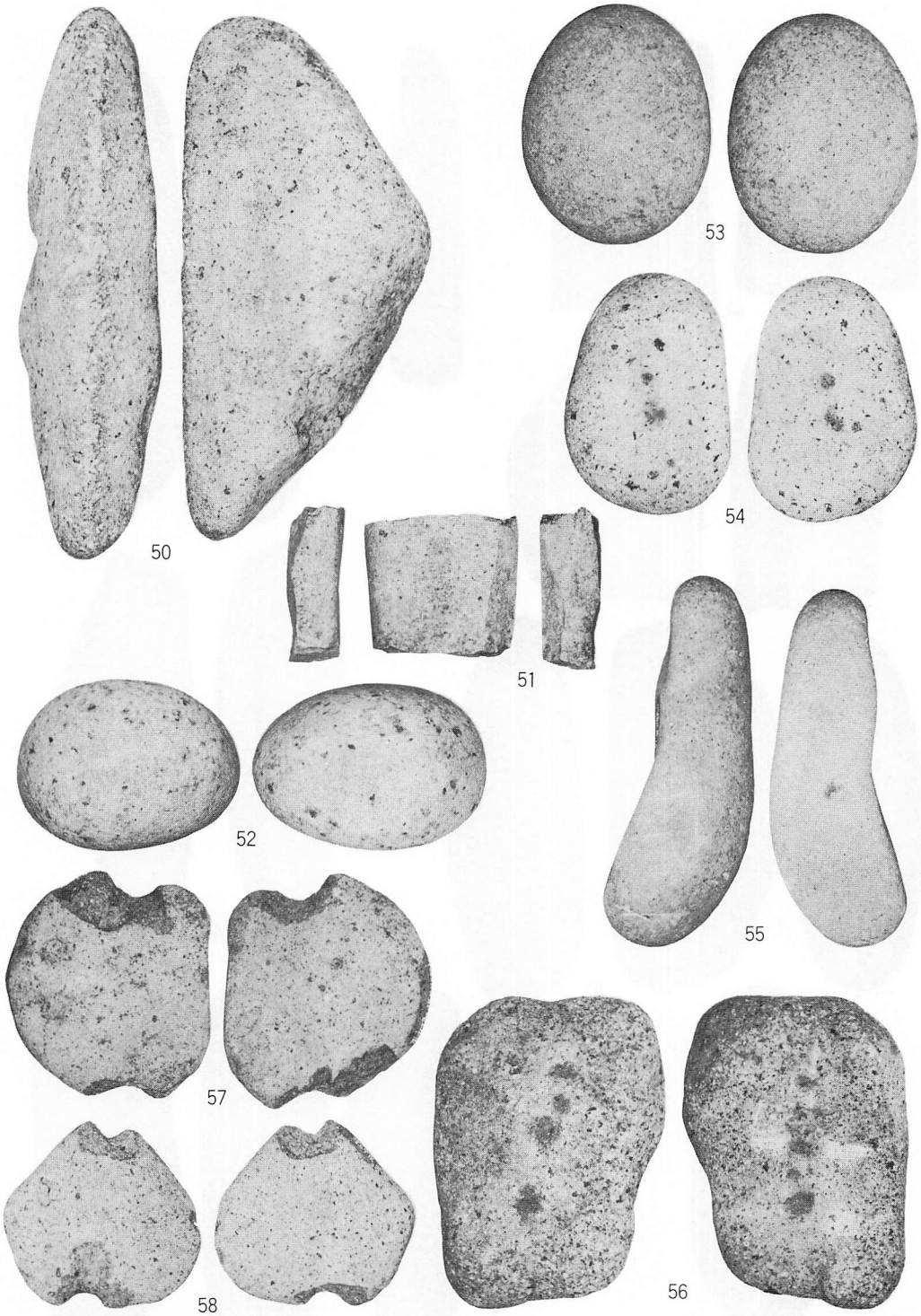


写真図版47　石器(1)

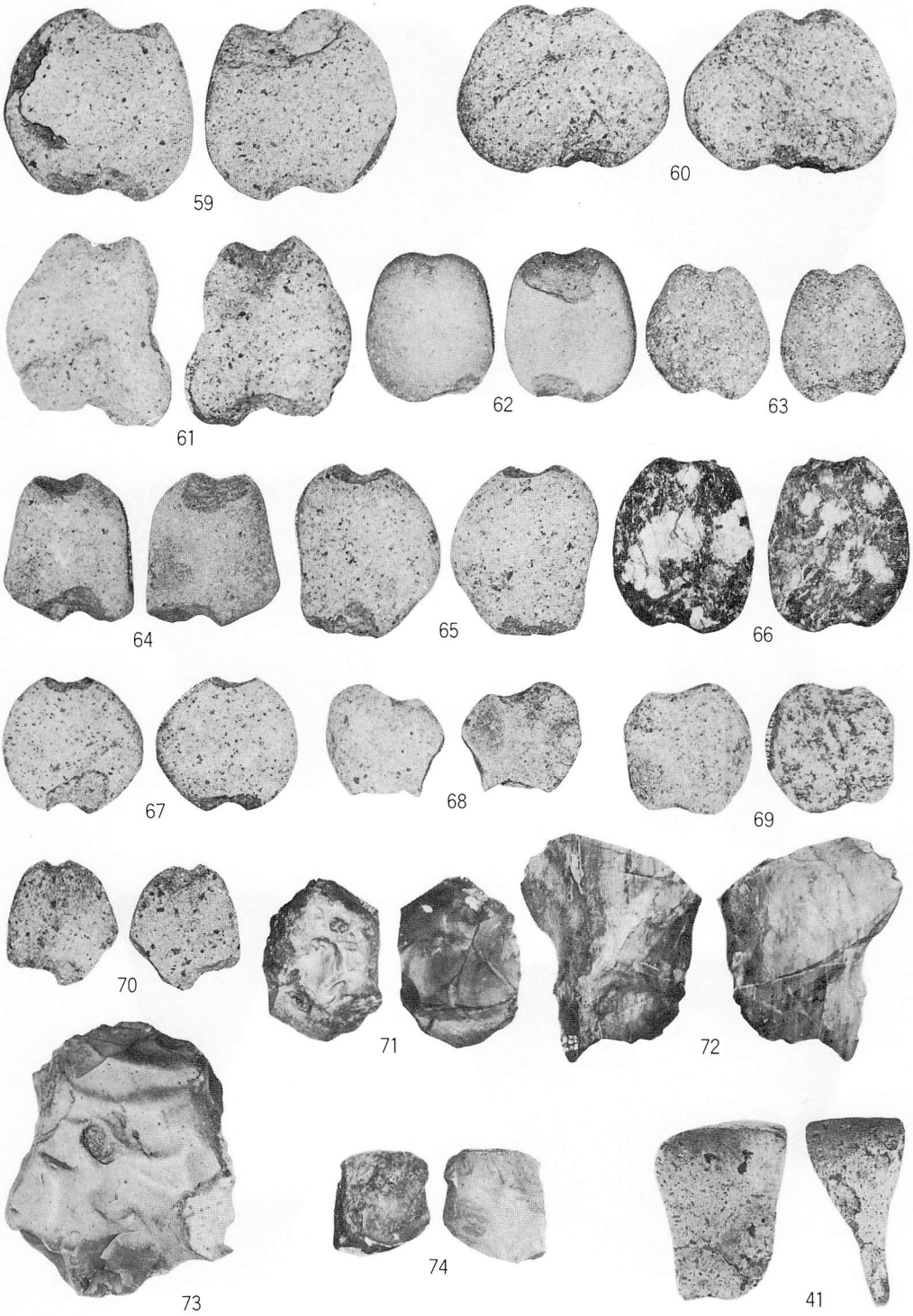


写真図版48　石器(2)

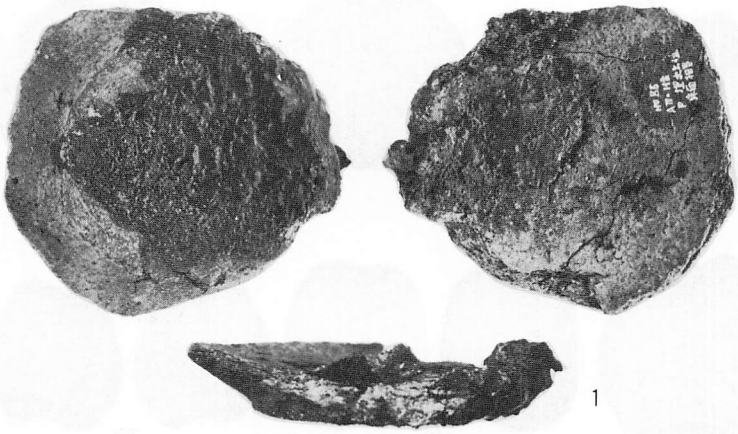
写真図版49　石器(3)



写真図版50　石器(4)



写真図版51　石器(5)

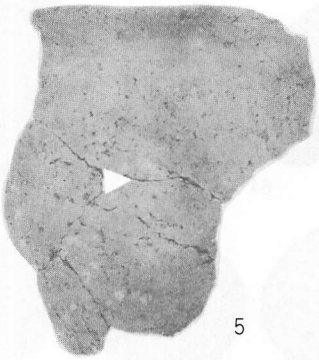


1

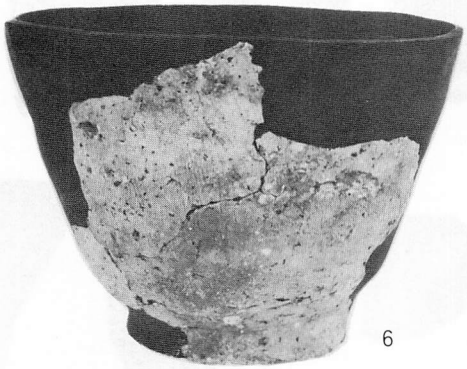
2

3

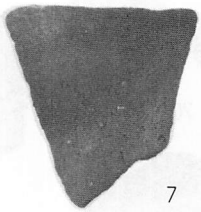
4



5



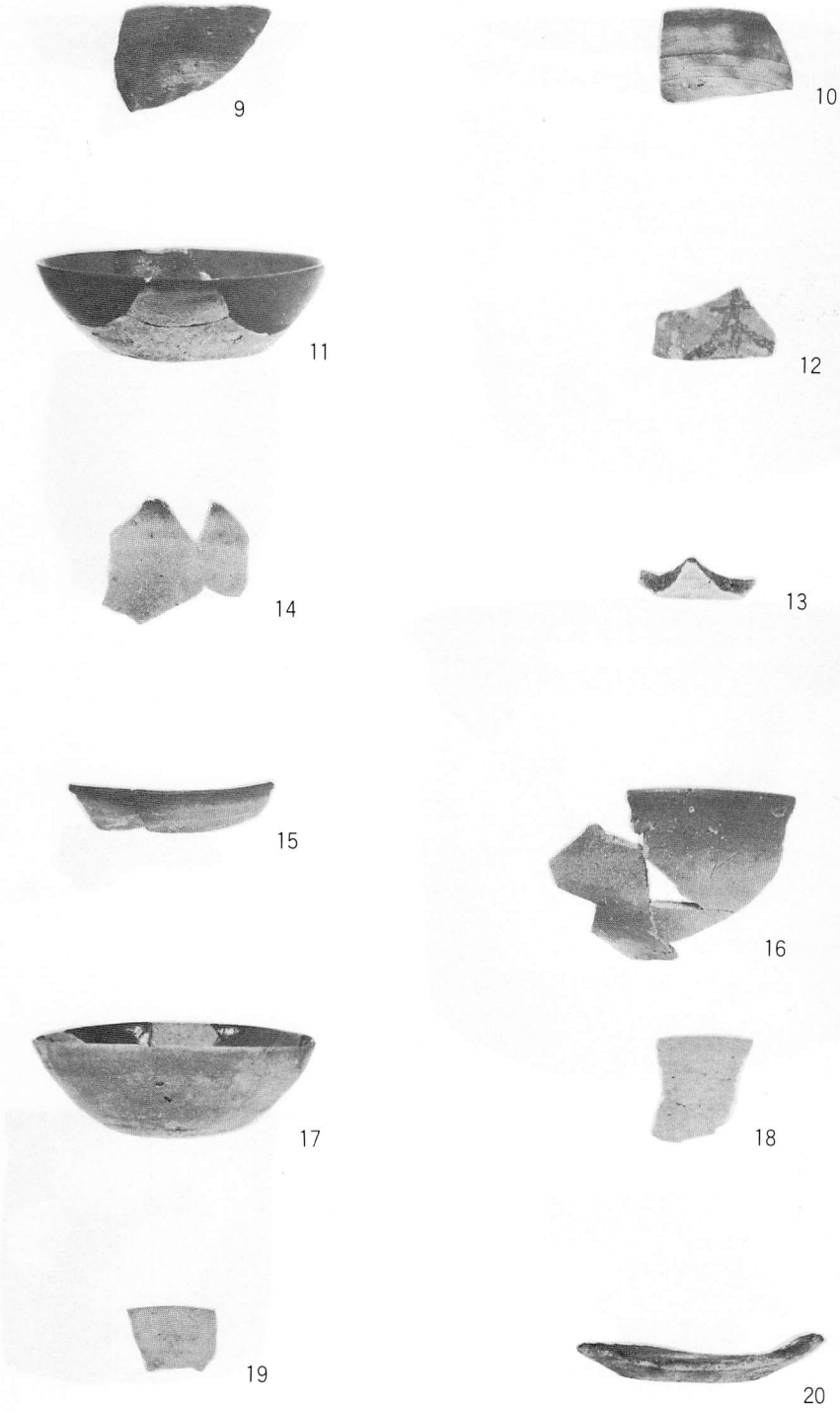
6



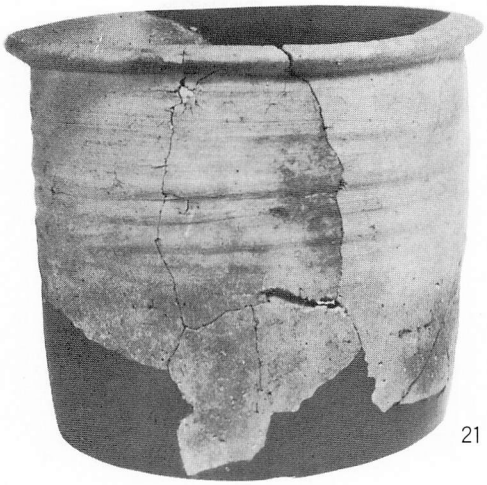
7

8

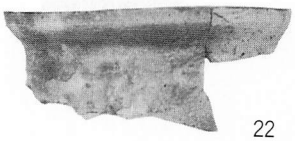
写真図版52　平安時代の土器(1)



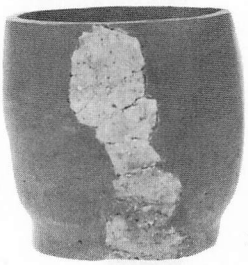
写真図版53　平安時代の土器(2)



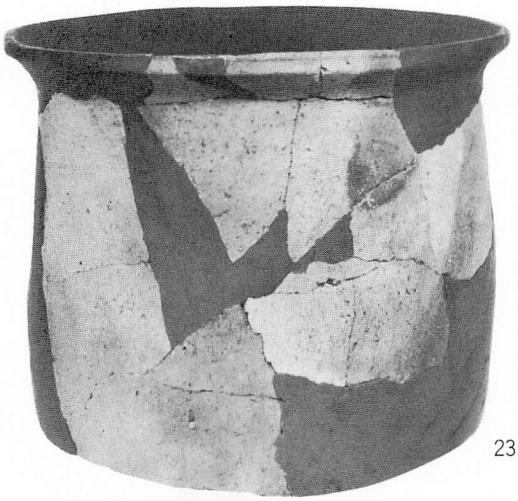
21



22

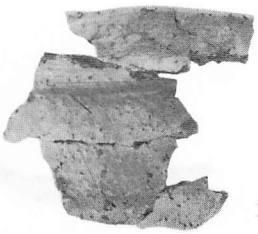


24

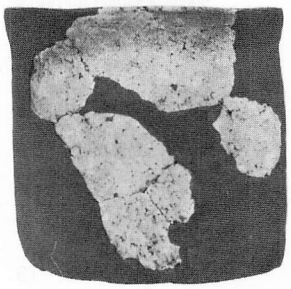


23

25



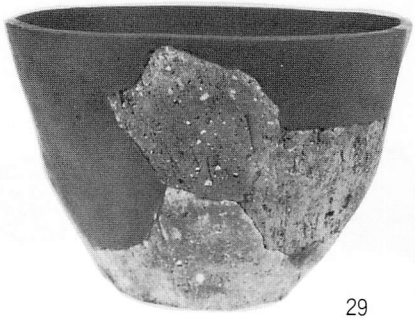
26



27

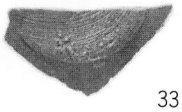
写真図版54　平安時代の土器(3)

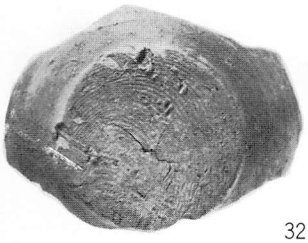
28

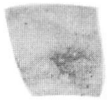

29

31

30


33

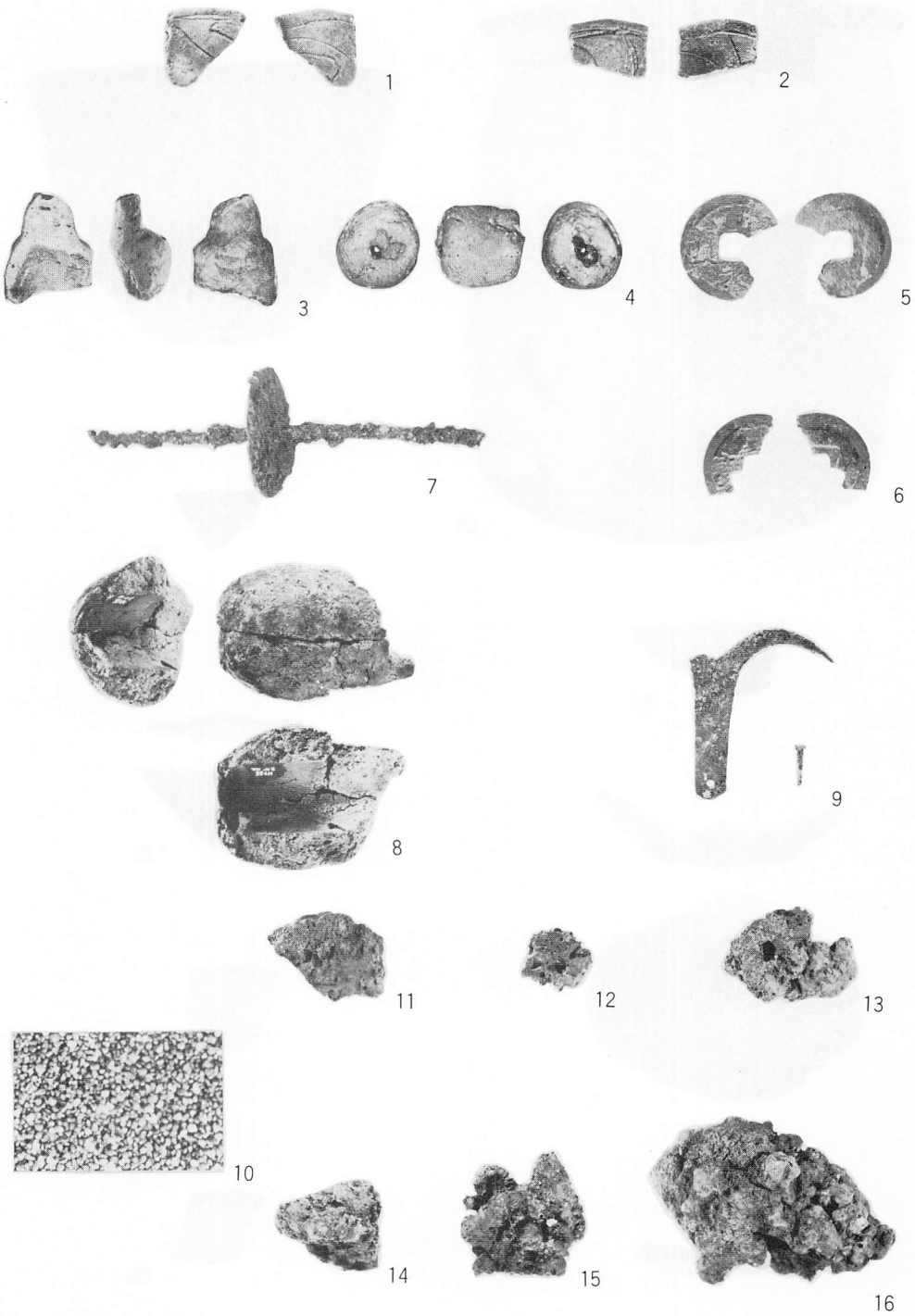

32


34

35

36

写真図版55　平安時代の土器(4)



写真図版56　土製品・金属製品

財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター職員

所長	及川昌二
副所長	宮英一

[管理課]

課長	千葉久夫
課長補佐	阿部詔夫
主事	立花多加志
運転技士兼技能員	佐藤春男

[調査課]

課長	昆野靖		
主任文化財専門調査員	工藤利幸		
〃	高橋与右エ門		
文化財専門調査員	菊池利和	文化財専門調査員	光井文行
〃	渡辺洋一	〃	玉川英喜
〃	田鎖寿夫	〃	石川長喜
〃	佐々木嘉直	〃	中川重紀
〃	平井進	〃	高橋義介
〃	中村良一	〃	酒井宗孝
〃	田村壮一		

[資料課]

課長	名須川溢男
主任文化財専門調査員	三浦謙一
文化財専門調査員	佐々木清文

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第111集

広沖遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車関連遺跡発掘調査

印刷　昭和61年10月25日
発行　昭和61年10月30日

発　行　財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020　紫波郡都南村大字下飯岡11－185
電　話　(0196) 38－9001～2
印　刷　株式会社　吉　田　印　刷
〒020 盛岡市名須川町23番27号
電　話　(0196) 25－2323

© (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター　1986